

小泉八雲全集

第八巻

東京

第一書房



小泉八雲（ラフカディオ・ヘルン）

骨董

怪談

天の河縁起そのほか

譯者

戸川明三
大谷正信
田部隆次

小泉八雲全集第八卷目次

骨董

古い物語

怪談

不思議な事の研究と物語

蟲の研究

天の河縁起そのほか

骨董

雑多な蜘蛛の巣のかかつ
た日本の珍奇なものども

サー　エドウイン　アーノルド　へ

親切なる言葉の感謝の記念に

古い物語

つぎの物語九篇は不思議な信仰の說明として、「新著聞集」「百物語」「宇治拾遺物語抄」その他の古い日本の書物から選んだもの。ほんの骨董である。

幽靈瀧の傳說

伯耆の國、黑坂村の近くに、一條の瀧がある。幽靈瀧と云ふその名の由來を私は知らない。瀧の側に瀧大明神と云ふ氏神の小さい社があつて、社の前に小さい賽錢箱がある。その賽錢箱について物語がある。

今より三十五年前、或冬の寒い晩、黑坂の麻取場に使はれて居る娘や女房達が一日の仕

事を終つたあとで爐のまはりに集つて、怪談に興じてゐた。はなしが十餘りも出た頃には大概のものはなんだか薄氣味惡くなつてゐた。その時その氣味惡さの快感を一層高めるつもりで、一人の娘が、『今夜あの幽靈瀧へひとりで行つて見たらどうでせう』と云ひ出した。この思ひつきを聞いて一同は思はずわつと叫んだが、また續いて神經的にどつと笑ひ出した。……そのうちの一人は嘲るやうに、『私は今夜取つた麻をその人に皆上げる』と云つた。『私も上げる』『私も』と云ふ人が續いて出て來た。四番目の人は『皆贊成』と云ひ切つた。……その時安本お勝と云ふ大工の女房が立ち上つた、――この人は二つになる一人息子を暖かさうに包んで、背中に寢かせてゐた。『皆さん、本當に皆さんが今日取つた麻を皆私に下さるなら、私幽靈瀧に行きます』と云つた。その中出は驚きと侮りとを以て迎へられた。しかし、度々くりかへされたので一同本氣になつた。麻取りの人達は、もしお勝が幽靈瀧に行くやうなら其日の分の麻を上げると、銘々くりかへして云つた。『でもお勝さんが本當にそこへ行くかどうか、どうして分ります』と鋭い聲で云つたものがあつた。一人のお婆さんが『さあ、それなら賽錢箱をもつて來て貰ひませう、それが何よりの證據になります』と答へた。お勝は『もつて來ます』と云つた。それから眠つたこどもを背負つたままで戸外へ飛び出した。

その夜は寒かつたが、晴れてゐた。人通りのない往來をお勝は急いだ。身を切るやうな寒さのために往來の戸はかたく閉ざしてあつた。村を離れて、淋しい道を――ピチヤピチヤ――走つた、左右は靜かな一面に氷つた田、道を照らすものは星ばかり。三十分程その道をたどつてから、崖の下へ曲り下つて行く狹い道へ折れた。進むに隨つて路は益々惡く益々暗くなつたが、彼女はよく知つてゐた。やがて瀧の鈍いうなりが聞えて來た。もう少し行くと路は廣い谷になつて、そこで鈍いうなりが急に高い叫びになつて居る、さうして彼女の前の一面の暗黑のうちに、瀧が長く、ぼんやり光つて見える。かすかに社と、それから、賽錢箱が見える。彼女は走り寄つて、――それに手をかけた。……

『おい、お勝』不意に、とどろく水の上で警戒の聲がした。

お勝は恐怖のためにしびれて――立ちすくんだ。

『おい、お勝』再びその聲は響いた、――今度はその音調はもつと威嚇的であつた。

しかしお勝は元來大膽な女であつた。直ちに我にかへつて、賽錢箱を引つさらつて驅け出した。往來へ出るまでは、彼女を恐がらせるものをそれ以上何も見も聞きもしなかつた、そこまで來て足を止めてほつと一息ついた。それから休まず――ピチヤピチヤ――驅け出

して、黒坂村についてて麻取場の戸をはげしくたたいた。
息をきらして、賽銭箱をもつてお勝が入つて來た時、女房や娘達はどんなに叫んだらう。彼等は息をとめて話を聞いた。幽霊瀧から二度まで名を呼んだ何者かの聲の話をした時に彼等は同情の叫びをあげた。……何と云ふ女だらう。剛膽なお勝さん。……麻を皆上げるだけの直打は充分にある。……『でもお勝さん、さぞ赤ちやんは寒かつたでせう』お婆さんは云つた、『もつと火の側へつれて來ませう』
『おなかが空いたらうね』母親は云つた『すぐお乳を上げますよ』……『かはいさうにお勝さん』お婆さんはこどもを包んであるはんてんを解く手傳をしながら云つた――『おや、背中がすつかりぬれてゐますよ』それからこの助手はしやがれ聲で叫んだ『アラッ、いゝ血が』
解いたはんてんの中から床に落ちたものは、血にしみたこどもの着物て、そこから出て居るものは、二本の大層小さな足とそれから二本の大層小さな手――ただそれだけ。
こどもの頭はもぎ取られてゐた。……

讀者はどこか古い塔の階段を上つて、眞黑の中をまつたてに上つて行つて、さてその眞黑の眞中に、蜘蛛の巣のかかつた處が終りで外には何もないことを見出したことがありませんか。或は絕壁に沿うて切り開いてある海ぞひの道をたどつて行つて、結局一つ曲るとすぐごつごつした斷崖になつて居ることを見出したことはありませんか。かういふ經驗の感情的價値は――文學上から見れば――その時起された感覺の强さと、その感覺の記憶の鮮かさによつてきまる。

ところで日本の古い話し本に、今云つた事と殆んど同じ感情的經驗を起させる小說の斷片が、不思議にも殘つて居る。……多分、作者は無精だつたのであらう、或は出版書肆と喧嘩したのであらう、いや事によれば作者はその小さな机から不意に呼ばれて、かへつて來なかつたのであらう、或は又その文章の丁度眞中で死の神が筆を止めさせたのであらう。とにかく何故この話が結末をつけないで、そのままになつて居るのか、誰にも分らない。……私は一つ代表的なのを選ぶ。

＊

天和四年一月一日——即ち今から二百二十年前——中川佐渡守が年始の廻禮に出かけて、江戸本郷、白山の茶店に一行とともに立寄つた。一同休んで居る間に、家來の一人——關内と云ふ若黨が餘りに渇きを覺えたので、自分で大きな茶碗に茶を汲んだ。飲まうとする時、不意にその透明な黄色の茶のうちに、自分のでない顏の映つて居るのを認めた。びつくりしてあたりを見廻したが誰もゐない。茶の中に映じた顏は髮恰好から見ると若い侍の顏らしかつた、不思議にはつきりして、中々の好男子で、女の顏のやうにやさしかつた。それからそれが生きて居る人の顏である證據には眼や唇は動いてゐた。この不思議なものが現れたのに當惑して、關内は茶を捨てて仔細に茶碗を改めて見た。それは何の模樣もない安物の茶碗であつた。關内は別の茶碗を取つてまた茶を汲んだ、また顏が映つた。關内は新しい茶を命じて茶碗に入れると、——今度は嘲りの微笑をたたへて——もう一度、不思議な顏が現れた。しかし關内は驚かなかつた。『何者だか知らないが、もうそんなものに迷はされはしない』とつぶやきながら——彼は顏も何も一呑みに茶を飲んで出かけた。自分ではなんだか幽靈を一つ呑み込んだやうな氣もしないではなかつた。

同じ日の夕方おそく佐渡守の邸内で當番をして居る時、その部屋へ見知らぬ人が、音もさせずに入つて來たので、關内は驚いた。この見知らぬ人は立派な身裝の侍であつたが、關内の眞正面に坐つて、この若黨に輕く一禮をして、云つた。

『式部平内でござる――今日始めてお會ひ申した……貴殿は某を見覺えならぬやうでござるな』

甚だ低いが、鋭い聲で云つた。關内は茶碗の中で見て、呑み込んでしまつた氣味の惡い、美しい顏、――例の妖怪を今眼の前に見て驚いた。あの怪異が微笑した通り、この顏も微笑して居る、しかし微笑して居る唇の上の眼の不動の凝視は挑戰であり、同時に又侮辱でもあつた。

『いや見覺え申さぬ』關内は怒つて、しかし冷やかに答へた、――『それにしても、どうしてこの邸へ御入りになつたかお聞かせを願ひたい』

「封建時代には、諸侯の屋敷は夜晝ともに嚴重にまもられてゐた、それで、警護の武士の方に赦すべからざる怠慢でもない以上、無案内で入る事はできなかつた」

「あゝ、某に見覺えなしと仰せられるのですな」その客は皮肉な調子で、少し近よりな

から、叫んだ。『いや某を見覺えがないとは聞えぬ。今朝某に非道な害を御加へになつてはござらぬか……』

關内は帶の短刀を取つてその男の喉を烈しくついた。しかし少しも手答がない。同時に音もさせずその闖入者は壁の方へ横に飛んで、そこをぬけて行つた。……壁には退出の何の跡をも殘さなかつた。丁度蠟燭の光が行燈の紙を透るやうにそこを通り過ぎた。

關内がこの事件を報告した時、その話は侍達を驚かし、又當惑させた。その時刻には邸内では入つたものも出たものも見られなかつた、それから佐渡守に仕へて居るもので『式部平内』の名を聞いて居るものもなかつた。

その翌晩、關内は非番であつたので、兩親とともに家にゐた。餘程おそくなつてから、暫時の面談をもとめる來客のある事を、取次がれた。刀を取つて玄關に出た、そこには三人の武裝した人々——明かに侍達——が式臺の前に立つてゐた。三人は恭しく關内に敬禮してから、そのうちの一人が云つた。

『某等は松岡文吾、土橋久藏、岡村平六と申す式部平内殿の侍でござる。主人が昨夜御

訪問いたした節、貴殿は刀で主人をお打ちになつた。怪我が重いから疵の養生に湯治に行かねばならぬ。しかし來月十六日にはお歸りになる、その時にはこの恨みを必ず晴らし申す……』

それ以上聞くまでもなく、關內は刀をとつてとび出し、客を目がけて前後左右に斬りまくつた。しかし三人は隣りの建物の壁の方へとび、影のやうにその上へ飛び去つて、それから……

＊

ここで古い物語は切れて居る、話のあとは何人かの頭の中に存在してゐたのだが、それは百年このかた塵に歸して居る。

私は色々それらしい結末を想像することができるが、西洋の讀者の想像に滿足を與へるやうなのは一つもない。魂を飲んだあとの、もつともらしい結果は、自分で考へて見られるままに任せて置く。

常識

昔、京都に近い愛宕山に、默想と讀經に餘念のない高僧があつた。住んでゐた小さい寺は、どの村からも遠く離れてゐた、そんな淋しい處では誰かの世話がなくては日常の生活にも不自由するばかりであつたらうが、信心深い田舍の人々が代る代るきまつて毎月米や野菜を持つて來て、この高僧の生活をささへてくれた。

この善男善女のうちに獵師が一人ゐた、この男はこの山へ獲物をあさりにも度々來た。或日のこと、この獵師がお寺へ一袋の米を持つて來た時、僧は云つた。

『一つお前に話したい事がある。この前會つてから、ここで不思議な事がある。どうして愚僧のやうなものの眼前に、こんな事が現れるのか分らない。しかし、お前の知つての通り、愚僧は年來毎日讀經默想をして居るので、今度授かつた事は、その行ひの功徳かとも思はれるが、それもたしかではない。しかし、たしかに毎晩、普賢菩薩が白象に乘つてこの寺へお見えになる。……今夜愚僧と一緒に、ここにゐて御覽。その佛樣を拜む事ができる』

『そんな尊い佛が拜めるとはどれほど有難いことか分りません。喜んで御一緒に拜みます』と獵師は答へた。

そこで獵師は寺にとどまつた。しかし僧が勤行にいそしんで居る間に、獵師はこれから實現されようと云ふ奇蹟について考へ出した。それからこんな事のあり得べきかどうかについて疑ひ出した。考へるにつれて疑は增すばかりであつた。寺に小僧がゐた、――そこで獵師は小僧に折を見て聞いた。

『聖人のお話では普賢菩薩は每晚この寺へお見えになるさうだが、あなたも拜んだのですか』獵師は云つた。

『はい、もう六度、私は恭しく普賢菩薩を拜みました』小僧は答へた。獵師は小僧の言を少しも疑はなかつたが、この答によつて疑は一層增すばかりであつた。小僧は一體何を見たのであらうか、それも今に分るであらう、かう思ひ直して約束の出現の時を熱心に待つてゐた。

眞夜中少し前に、僧は普賢菩薩の見えさせ給ふ用意の時なる事を知らせた。小さいお寺の戶はあけ放たれた。僧は顏を東の方に向けて入口に跪いた。小僧はその左に跪いた、獵

師は恭しく僧のうしろに席を取つた。

九月二十日の夜であつた、――淋しい、暗い、それから風の烈しい夜であつた、三人は長い間普賢菩薩の出現の時を待つてゐた。やうやくのことで東の方に、星のやうな一點の白い光が見えた、それからこの光は素早く近づいて來た――段々大きくなつて來て、山の斜面を殘らず照した。やがてその光は或姿――六本の牙のある雪白の象に乘つた聖い菩薩の姿となつた。さうして光り輝ける乘手をのせた象は直ぐお寺の前に着いた、月光の山のやうに、――不可思議にも、ものすごくも、――高く聳えてそこに立つた。

その時僧と小僧は平伏して異常の熱心をもつて普賢菩薩への讀經を始めた。ところが不意に獵師は二人の背後に立ち上り、手に弓を取つて滿月の如く引きしぼり、光明の普賢菩薩に向つて長い矢をひゆつと射た、すると矢は菩薩の胸に深く、羽根のところまでもつきささつた。

突然、落雷のやうな音響とともに白い光は消えて、菩薩の姿も見えなくなつた。お寺の前はただ暗い風があるだけであつた。

『情けない男だ』僧は悔恨絶望の涙とともに叫んだ。『何と云ふお前は極惡非道の人だ。お前は何をしたのだ、――何をしてくれたのだ』

しかし獵師は僧の非難を聞いても何等後悔憤怒の色を表はさなかつた。それから甚だ穩かに云つた。――

『聖人樣、どうか落ちついて、私の云ふ事を聞いて下さい。あなたは年來の修業と讀經の功德によつて、普賢菩薩を拜む事ができるのだと御考へになりました。それなら佛樣は私やこの小僧には見えず――聖人樣にだけお見えになる筈だと考へます。私は無學な獵師で、私の職業は殺生です、――ものの生命を取る事は、佛樣はお嫌ひです。それでどうして普賢菩薩が拜めませう。佛樣は四方八方どこにでもおいでになる、ただ凡夫は愚痴蒙昧のために拜む事ができないと聞いて居ります。聖人樣は――淨い生活をして居られる高僧でいらせられるから――佛を拜めるやうなさとりを開かれませう、しかし生計のために生物を殺すやうなものは、どうして佛樣を拜む力など得られませう。それに私もこの小僧も二人とも聖人樣の御覽になつたとほりのものを見ました。それで聖人樣に申し上げますが、御覽になつたものは普賢菩薩ではなくてあなたをだまして――事によれば、あなたを殺さうとする何か化物に相違ありません。どうか夜の明けるまで我慢して下さい。さうしたら私の云ふ事の間違でない證據を御覽に入れませう』

日出とともに獵師と僧は、その姿の立つてゐた處を調べて、うすい血の跡を發見した。

それからその跡をたどつて數百步離れたうつろに着いた、そこで、獵師の矢に貫かれた大きな狸の死體を見た。

博學にして信心深い人であつたが僧は狸に容易にだまされてゐた。しかし獵師は無學無信心ではあつたが、強い常識を生れながらもつてゐた、この生れながらもつてゐた常識だけで直ちに危險な迷を看破し、かつそれを退治する事ができた。

生　靈

昔、江戸靈岸島に喜兵衛と云ふ金持ちの瀨戸物店があつた。喜兵衛は六兵衛と云ふ番頭を長く使つてゐた。六兵衛の力で店は繁昌した、——餘り盛大になつて來たので、番頭獨りでは管理して行かれなくなつた。そこで、經驗のある手代を雇ふ事を願つて許された、それから自分の甥を一人よびよせた——以前大阪で瀨戸物商賣を習つた事のある、二十二ばかりの若者であつた。

この甥は甚だ役に立つ助け役であつた、——商賣にかけては經驗のある叔父よりも怜悧であつた。彼の才發はその家の商賣を益〻盛んにしたので、喜兵衛は大變喜んだ。しかし雇はれてから七月程して、この若者はひどく病氣になつて、助かりさうには思はれなくなつた。江戸中の名醫も幾人か呼んで診て貰つたが、誰にもその病氣の性質は分らない。誰も藥の處方をするものはない、何か人知れぬ悲しみからこの病氣が起つて居るとしか思はれないと云ふのが、一同の意見であつた。

六兵衛は戀の病かとも思つて見た。そこで甥に云つた、

『お前は未だ大層若いのだから、誰か人知れず思つて居る女でもあつて、それでつまらなく思つて、――或は病氣になる程になつて居るのでないかとわしは考へて居るのだが。もしそれが本當ならお前の心配事は皆このわしに云ふのが當り前。ここではお前は兩親から遠く離れて居るから、わしはお前のためには父親同樣、だから何か心配事や悲しい事があれば、わしは何でも父親のしなけりやならないやうな事はお前のためにする覺悟だ。もしお金が要るのならいくらでもわしに云ひなさい、恥かしがる事はない。わしにはお前の世話はできると思ふ、それに喜兵衞さんもきつと、お前を元氣に達者にするためなら、どんな事でも喜んでして下さると、わしは信じて居る』

病人の若者はこんなに親切に云はれて困つたらしかつた、それで暫く默つてゐた。が遂に答へた。――

『こんなに有難いお言葉は、私は決してこの世で忘れる事はできません。しかし私は内內思つて居る女もありません、――どんな女も望んでは居りません。私のこの病氣はお醫者で直る病氣ぢやありません、お金は少しも役に立ちません。實は私はこの家で迫害を受けてゐますので、生きてゐたいとは思はない程です。どこででも――晝でも夜でも、店にゐても、自分の部屋にゐても、獨りの時でも、人中でても、――私はたえず或女のまぼろ

しにつきまとはれて惱まされてゐます。一晩の休息も得られなくなつてから餘程になります。眼を閉ぢるとすぐにその女のまぼろしが私ののどをつかんでしめつけようと致しますから、それて私は少しも眠られません……』

『何故又その事をもつと早くわしに云はなかつたのぢや』六兵衞は尋ねた。

『云つても駄目だと思つたからです』甥は答へた『そのまぼろしは死人の幽靈ぢやございません。生きて居る人——あなたのよく御存じの人——の憎しみからでたものなんです』

『誰だい』六兵衞は非常に驚いてききただした。

『この家の女主人、喜兵衞樣の内儀樣です。……あの人は私を殺してしまひたいのです』

若者はささやいた。

六兵衞はこの告白を聞いて當惑した。彼は甥の云つた事を少しも疑はなかつた、しかしその生靈の起つて來る理由の見當がつかなかつた。生靈は失戀または烈しい憎惡から——その生靈の發生する本人も知らないのに、——起る事もある。この場合に、何かそこに戀愛關係を想像する事は不可能であつた、——喜兵衞の妻は、五十をもう餘程出てゐた。しかし又一方から見て、その若者は憎惡を受けるやうな——生靈を招く程憎惡を受けるやう

な事を何かしたのであらうか。彼は難の打ち處のない程行儀よく、缺點を見出せぬ程禮儀正しく、それから義務に對して熱心忠實であつた。この難問題は六兵衛を困らせた。しかしよくよく考へたあとで一切の事を喜兵衛に打明けて、調べて貰ふ事に決心した。

喜兵衛は肝をつぶした、しかし四十年の間、六兵衛の言葉を疑ふべき理由は少してもあつたためしはなかつた。それで直ぐに妻を呼んで、病人の若者の云つた事を同時に告げ、用心深く妻に尋ねた。初めのうちは青くなつて泣いてゐたが、すこしためらつてから、明らさまに答へた。

『その新しい手代が云つた生靈の事はどうも本當だと思ひます――實は私は言葉や樣子に決して表すまいと、本當に努めてゐますが、私はどうしてもあれを嫌はずには居られません。御存じの通りあれは商賣が大層上手です、――やる事は何でも大層氣が利いてゐます。それであなたはあれに大した權限――丁稚や召使に對する權力をこの家で與へておやりになつてゐます。ところがこの商賣を相續すべき私達のひとり息子は實にお人よしで、すぐに人にだまされます、それてこの利口な新しい手代が息子をごまかして、この財産を皆橫取してしまふかも知れないと長い問考へてゐました。全くあの手代は何時でも、造作なく、又何のぼろも出さないで、この商賣を潰して、息子を破産させる事ができると私は

信じます。さう信じて居るものですから、あの男を恐れ憎まずには居られません。死んでくれればよいと何度も何度も思ひました、自分の力で殺せるものならとさへ思ひました。……それは、そんな風に人を憎むのは惡いとは知りながら、その氣持を押へる事ができませんでした。夜も晝も、あの手代を呪つてゐたのです。それで六兵衛に云つた通りのものが見えたに相違ありません』

『なんと云ふ馬鹿な事だ、そんなに自分で苦しむのは』喜兵衛は叫んだ。『今日まであの手代は惡く思はれるやうな事は、何一つした事はない、それにお前はあの男を殘酷にも苦しめてゐた。……ところで、もし外の町で支店を持たせて叔父と二人やる事にしたら、お前はもつとやさしく考へてやる事ができるだらうね』

『顏を見たり、聲を聞いたりしなければ』妻が答へた、――『もしあなたがあれをこの家から只外へやつてさへ下されば――さうすれば憎しみを押へる事ができませう』

『さうしなさい』喜兵衛は云つた、『これまでのやうに憎んでゐたのでは、あの男はきつと死ぬ。さうするとお前は恩こそあれ何の仇もない人を殺すやうな大罪を犯した事になる。どの點から見てもあの男はこの上もない立派な手代だ』

それから直ちに喜兵衛は外の町に支店を設ける準備をした、それからこの手代と共に六

兵衛をやつて監督させた。その後生霊は若者を惱さなくなつた、若者はやがて健康を回復した。

越前の國の代官、野本彌治衞門の歿した時、その下役の者共相謀つて、その故主人の遺族をだまさうとした、代官の負債の幾分を償却すると云ふ口實の下に、その家の財寶家具全部を押へた。その上、故主人が無法にも自分の資產の價値以上の債務を契約したやうに見える僞りの報告書を整へた。この僞りの報告を彼等は宰相に送つた、そこで宰相は越前の國から野本の妻子の追放命令を出した。その頃、代官の家族は、たとへ當主の死後でも、何かその人に非行があつたときまれば、幾分責任を負はされたものであつた。

しかし、その追放命令が野本の未亡人に正式に交付された時、その家の女中に不思議な事が起つた．何かものに取りつかれたやうにひきつけて、身ぶるひをしだした、ひきつけが終つた時、すつくと立ち上つて宰相の役人達と故主人の下役とに叫び出した。

『さあ、おれの云ふ事をよく承れ。汝等に話して居るのは女でない、おれは彌治衞門――あの世から歸つた野本彌治衞門――だ、おれが淺ましくも信じてゐた者共から招いた悲

しさと腹立しさ、その悲しさと腹立たしさの餘り歸つて來たのだ。……汝等恩知らずの不都合な下役のもの共、どうして汝等はこれまで受けた恩を忘れて、この通りおれの財産をなくし、このおれの名を辱しめるやうな事ができるのだ。さあここでおれの面前で、役所とおれの家の會計の取調べをして見せる。家來を一人日附の處へ帳簿を取りにやれ、その取調べを照し合せて見せる』

女中がこんな言葉を口走つた時、居合せたものは一同驚いてしまつた、彼女の聲や態度は、野本彌治衞門の聲や態度であつたから。疵もつ足の下役共は青くなつた。しかし宰相の代表者は直ちにその女の願は充分かなへさすべき旨を命じた。役所の會計帳簿は直ちに彼女の前に置かれた、――それから日附の帳簿は運ばれた。そこで彼女は計算を始めた。一つの誤算もなく、彼女は凡ての計算をして總計を書いて、誤りの項目を直した。彼女の書體は正しく野本彌治衞門の書體であると見られた。

さて計算の再檢査ができ上つた時、女は正しく野本彌治衞門の聲で云つた。

『さあこれで一切でき上つた、もうこれ以上おれは何もできない。それでおれはおれの來た處へ歸る』

それから横になつてすぐに寢込んだ、死人のやうに二日二晩眠つた。『取りついて居る

魂がぬけると、とりつかれた人に大きな疲勞と深い眠りが來る」再び彼女が起きた時、彼女の聲と態度は若い女の聲と態度であつた、さうしてその時もその後如何なる時も、野本彌治衛門の亡靈にとりつかれてゐた間のでき事を思ひ出す事ができなかつた。

この事件の報告が直ちに宰相に送られた、その結果宰相は追放の命令を取消したばかりでなく、代官の遺族に大きな賜物を與へた。その後種々の死後の名譽が、野本彌治衛門に與へられた、その上、その後長く家は政府の恩顧を受けて甚だ榮えた。しかし下役の者どもは相當の罰を受けた。

おかめのはなし

土佐の國名越の長者權右衞門の娘おかめは、その夫八右衞門を非常に好いてゐた。女は二十二、八右衞門は二十五であつた。餘り夫を愛するので、世間の人は嫉妬の深い女だらうと思つた。しかし男は嫉妬されるやうな原因を作つた事もなかつた。それで二人の間にはいやな言葉一つ交された事もなかつた。

不幸にしておかめは病身であつた。結婚後二年にもならないうちに當時土佐に流行してゐた病氣にかかつて、どんな良醫も匙を投げるやうになつた。この病氣にかかる人は、喰べる事も飲む事もできない、ただ疲れてうとうとして、變な夢に惱まされて居るだけであつた。おかめは不斷の看護を受けながら、毎日次第に弱つて行つて、たうとう自分でも助からぬ事が分つて來た。

そこで彼女は夫を呼んで云つた、

『私のこのいやな病氣中あなたがどんなに親切にして下さつたか口では云へません。こんなによくして下さる方はどこにだつてありません。私、あなたに別れるのが本當につら

い。……考へて下さい、私未だ二十五にもなりません、――その上私の夫ほどよい人はこの世にはありません、――それでも私は死んで行かねばならない。……いゝえ、駄目、駄目、氣休めをおつしやつても駄目ですよ、どんなお醫者だつてどうにもならないのですもの――もう二三ヶ月生きてゐたいと思ひましたが、今朝鏡を見たら、今日のうちに死んで行かねばならぬ事が分りました、――さう、丁度今日です。それてあなたにお願がありますの――私が安心して死んで行けるやうに思つて下さるやうなら、――その願を私にかなへさせて下さい』

『一寸云つて御覽、何だか』八右衞門は答へた、『私の力でできる事なら、どんな事でも喜んでして上げる』

『それが――あなたのちつとも喜ばない事なんです』彼女は答へた、『未だ若いのですもの、こんな事をお願することは、中々――大變――むつかしい事ですわ、でもその願事は私の胸に燃えてる火のやうてす。死ぬ前に云はせて下さい。どうぞ。……ね――あなた、私が死んだら早晩、皆であなたに奥様を持たせるでせう、ね、あの、約束して下さいませんこと、もう二度と結婚はしないと、――おいやですか……』

『何だ、そんな事か』八右衞門は叫んだ。『願事と云ふのはそれだけの事なのか、それ

は何でもない。よし、約束した、お前の代りは決して貰はない』

『あゝ、嬉しい』おかめは床から半分起きて叫んだ。

それからうしろへ倒れた、同時に彼女の息は絶えた。

おかめが死んでから、八右衛門の健康は衰へて來るやうであつた。初めはその様子の變りやうを、人々は人情の悲しみの故と解釋してゐた、それで村人達は『どんなにあの奥樣が氣に入つてゐたのだらうな』とばかり噂してゐた。しかし月が重なるにつれて、段々蒼白くなり弱くなりして、遂には人間ではなく幽靈ではないかと思はれる程痩せやつれて來た。それで人々はそんなに若い人がかう急に衰へるのは悲しみだけでは說明ができないと疑ひ出した。醫者達の說では、八右衛門の病氣は普通のものではない、樣子は何とも解し難いが、何か心の異常のなやみから起つて居るらしいと云ふ事であつた。兩親は色々尋ねて見たが駄目であつた。——彼の云ふ處では、兩親の知つて居る以外には、何等悲歎の原因はないとの事であつた。兩親は再婚をすすめた。しかし死人に對する約束はどうしても破る事はできないと云ひ張つた。

それからあと、八右衛門はやはり日増しに衰へた、家族の人々はその生命を危んだ。ところが或日の事、かねて何か心に隱してゐる事を信じてゐた母が、熱心にその衰弱の理由を云つてくれるやうに烈しく泣いて頼んだ、母の懇願には勝たれなくなつた。

『こんな事はあなたにも到底できますまい。實はおかめはあの世で成佛ができないのです、それからいくら佛事を行ふてやりましても駄目のやうです。私も一緒にその冥土の旅に出てやらないとどうしても成佛ができないやうです。おかめは毎晩歸つて來て、私のわきにねます。葬式の日から毎晩、來ない晩はありません。それで時々本當に死んだのではあるまいと思ふ事があります、様子や行ひは生きてゐた時と全く同じですから、――ただ私に話をする時、小さい聲で物を云ふだけです。それから、いつでも、自分の來る事を誰にも云はないやうにと申します。私にも死んで貰ひたいのでせう。私も自分だけなら生きてゐたくはありません。しかし、全く仰せの通り私のからだは兩親のもので、兩親に先づ第一に孝行しなければなりません。それで、本當の事を皆申し上げるのです。……はい、毎晩丁度眠りかけると參ります、それから明方までゐます。鐘が聞えると出て行きます』

八右衛門の母がこれを聞いてびつくりした。直ちに檀那寺へ急いで寺僧に息子の告白の一切を話して助力を乞うた。高齢で、經驗の積んだ寺僧はその話を聞いて驚く色もなく、彼女に云つた。

『かう云ふ事は時々あるものです、始めてではありません、それで御子息も助けて上げられると思ひます。しかし今大層危い處です。愚僧の見る處では、お顔に死相が現れてゐます、おかめさんがもう一度歸つて來れば、もうそれきりです。それで卽刻やるべき事をやらねばなりません。御子息に默つてゐて下さい、大急ぎで雙方の親戚を集めて、寺へ來るやうに云つて下さい。御子息のためにおかめさんの墓を開けねばなりません。』

そこで、親戚はお寺に集つた、墓を開く事を一同承諾したので、僧は一同を墓地へ案内した。そこで、その指圖に隨つておかめの墓石はわきへやられ、墓は開かれ、棺は上げられた。棺の蓋が取られた時、居合はした人は膽を寒くした。それはおかめは病氣の前と同じく綺麗に、顔に微笑を浮べて一同の前に坐つて、――彼女には何等死のあとはなかつたから。しかし、僧は棺の中から、死人を取り出す事を人々に命じた時、驚きは恐怖となつた、それは長い間正坐[原注一]の形を取つてゐたにも拘らず、その死體は觸はると生きて居るやうに暖かく、しなやかであつたから。

それを葬場へ運んで、僧は筆を取つて額と胸と手足に何か聖い功德のある梵字を書いた。それからその屍をもとの場所へ葬る前に、おかめのために施餓鬼を行うた。

彼女は再び夫の處へ來なかつた、八右衞門は次第に健康と力を回復した。しかし彼はいつまでもその約束を守つたかどうか、それは日本の作者は書いてゐない。

原註一　日本では死體は普通殆んど正方形の棺の中に正座の形に置かれる。

蠅のはなし

二百年許り前に、京都に飾屋九兵衞といふ商人が居た。店は島原道の少し南の、寺町通といふ町にあつた。下女に——若狭の國生れの——玉といふが居た。

玉は九兵衞夫婦に深切に待遇されて居て、誠に二人を好いて居るやうに見えて居た。が、玉は他の女の子のやうに綺麗な著物を著ようとはしないで、休暇を貰ふと、美しい著物を數數貰つて居ながら、いつも仕事著を著て出るのであつた。五年許り九兵衞に奉公してからのこと、或る日九兵衞は、どうして身綺麗にしようと骨を折らぬのかと彼女に訊ねた。

玉はその問ひにこもつて居る非難に顏を赧らめて、恭しくかう答へた。

『私の雙親が死にました時は、私はまだ小さな子供でありました。ところが他に子供がありませんでしたから、二人の爲めに法要を營むことが、私の義務になりました。其時分にはさうする程のお金を拵へることが出來ませんでした。然しそれに入用な金が儲けられたなら、早速二人の位牌を、常樂寺といふお寺へ置いて貰ひ、また法要を營んで貰はうと決心しました。それでその決心を果たすために、お金と著物とを節約しようと力めました。

――自分の身のことを構はぬと、お氣付きになる程てありますから、餘り節儉し過ぎて居るのかも知れません。然し、お話し申し上げました目的の爲めに、銀百匁許りの貯蓄がもう出來ましたから、此後はあなた樣のお前へ身綺麗にして出るやうに致しませう。これまでの懈怠と失禮とを、どうか御免し下さいますやうお願ひ致します』

九兵衞はこの率直な白白に感心したので、その女に深切な言葉をかけて、その後、どんな著物を著ようと、自分の勝手だと思つてよいからと受合ひ、且つまた、その親孝行を賞めてやつた。

二人の此會話があつてから間も無く、下女の玉は、その雙親の位牌を常樂寺に置いて貰ひ、また相當な法要を營んで貰ふことが出來た。貯へた金のうち、斯くして七十匁費やした。そして殘り三十匁を、主人の妻に預つて置いて下さいと賴んだ。

ところが、翌冬の初めに玉は急に病氣になつた。そして暫時、煩つた擧句、元祿十五年(一七〇二年)正月の十一日に死んだ。九兵衞と妻とはその死を大いに悲しんだ。

さて、それから十日許り後、非常に大きな蠅が一匹その家へ入つて來て、九兵衞の頭の

廻りを飛び始めた。どんな蠅も、大寒中には大抵は出て來るものでは無いし、大きい蠅は暖かい季節でなければ滅多に目に當らぬものだから、九兵衞はこれに驚いた。その蠅があまりしつこく九兵衞を惱ますので、わざわざ捉へてそれを戶外へ放り出した、――其間少しもその蠅を痛めぬやうにして。それは九兵衞は佛敎の篤信者であつたからである。直ぐ蠅は戾つて來た。そしてまた捉へられて又投げ出された。が、又入つて來た。九兵衞の妻はこれを奇異な事に思つた。『玉ぢやないか知ら』と言つた。「死んだ者――殊に餓鬼の境涯へ入る者――は時時、蟲の姿になつて戾つて來るから」九兵衞は笑つて答へた。「目印をつけたら分るだらう』そこで、その蠅を捉へて、極く少し許り翅の兩端を鋏で切つて――さうして、家から餘程離れた處へ持つて行つて放した。

翌日歸つて來た。それが歸つて來たことに、何等靈的な意義があるかどうか、九兵衞はなほ疑つて居た。又もそれを捉へて、その翅と軀とに紅(べに)を塗り、前よりもずつと家から遠い處へ持つて行つて放した。ところが二日經つと、全身眞紅の儘で戾つて來た。そこで九兵衞は疑はなくなつた。

『玉だと思ふ』と彼は言つた『何か欲しいものがあるのだ。――何が欲しいのだらう』

その妻が答へて言ふに、

「私は玉の貯蓄の三十匁をまだ有つて居ます。自分の魂の爲めに供養を營むやうに、その金をお寺へ納めて貰ひたいのでせう。玉はいつも後生を氣づかつて居ましたから」

さう話して居るうちに、その蠅が、そのとまつて居た障子から下へ落ちた。九兵衞が拾ひ上げて見たら、死んで居つた。

其處で夫婦は早速、お寺へ行つて、その娘の金を寺僧に納めようと決心した。二人はその蠅の屍骸を小箱に入れて、それも携へて行つた。

お寺の主僧自空上人は、その蠅の話を聞かれると、九兵衞夫妻は正しい取計ひをしたと明言された。それから自空上人は、玉の魂の爲めに施餓鬼を營まれ、蠅の遺骸に對して、妙典八卷を誦された。そして蠅の遺骸の入つて居る箱は、お寺の境內へ埋められて、適當な銘の書いてある卒塔婆が一基、その上へ建てられた。

雉子のはなし

昔、尾州遠山の里に若い農夫とその妻が住んでゐた。家は山の間の淋しい場所にあつた。或夜妻は夢を見た。その夢に數年前になくなつた舅が來て『明日自分は非常に危險な目に遇ふから、できるなら助けてくれ』と云つた。朝になつてこの事を夫に話した。二人とも、死んだ人が何か用があるのだらうとは思つたが、その夢の言葉は何の意味か分らなかつた。

朝飯の後、夫は畠へ行つたが妻は機織のために家に殘つた。やがて外の方で大きな騷ぎが聞えたので驚いて出て見ると、地頭が大勢の伴をつれて狩獵のためにこの邊へ近づいて來た。見て居るうちに一羽の雉子がわきの方から家の中へ飛び込んだ。そこで不圖昨夜の夢を想ひ出した。『事によればこれが舅かも知れない。助けて上げねばなるまい』——彼女は獨りで思案した。それから鳥のあとから急いで家に入つて——その鳥は綺麗な雄鳥であつた——造作なくそれを捕へて、空の米櫃の中に入れて蓋をして置いた。

しばらくして地頭の從者が幾人か入つて來て、雉子を見なかつたかと尋ねた。大膽にも

彼女は否定したが、獵人の一人はその家へ鳥の飛び込むのをたしかに見たと云つた。それから一行は家の中をあちらこちらとさがしたが、米櫃の中には氣付かなかつた。そのあたりくまなく捜索したが結局無駄であつたので、鳥はどこか穴からでも逃げたに相違ないとあきらめて人々は引き上げた。

農夫が家に歸つた時、妻は夫に見せるために米櫃に隱して置いた雉子の話をした。『私が捕へた時すこしも抵抗しなかつたが、米櫃の中でもおとなしくしてゐます。きつと舅樣だと思ひます』と妻は云つた。農夫は米櫃の處へ行つて、蓋を取つて鳥を取出した。鳥は農夫の手に靜にとまつて、そこに居ることに慣れて居るやうに農夫を見てゐた。一方の目が盲目であつた。『父の目は一方盲目であつた』農夫が云つた、『右の眼であつた、この鳥の右の眼が盲目だ。全くこれは父だらう。丁度いつもの父のやうな眼付で、この鳥が見て居る。……父は自分で「おれは今、鳥だから、獵師などにやるのなら一層おれの體は子供に喰はしてやる方がましだ」と考へたに相違ない。……それで、お前の昨夜の夢の譯も分つた』と氣味の惡いうす笑をうかべて妻の方に向つてから云ひ足しながら雉子の頸をねぢた。

この野蠻な行を見て、妻は泣き聲を上げて叫んだ。

『まあ、この極惡非道の鬼。鬼のやうな心の人間でなければ、こんな事のできる筈はない。……こんな男の妻になつて居るより死んだ方が增しだ』

それから草履もはかずに戶外に飛び出した。男は女の飛び出した時に袖をつかんだ、が女は振切つて驅け出した。驅けながら泣いた。はだしで走り續けた。町に着いて、すぐ地頭の屋形へ急いだ。それから淚とともに、獵の前夜の夢の事、雉子を助けたさの餘り隱した事、それから夫が自分を嘲つて、たうとうその雉子を殺した事の一切を地頭に話した。

地頭は女にやさしい言葉をかけた。そしてこの女を勞はつてやるやうに命じた。しかし夫は捕へるやうに部下に命じた。

翌日農夫は取調べを受けた。雉子を殺した事に就いて、事實を白狀させられてから宣告を受けた。地頭は云つた。

『餘程の惡人でなければ、その方の行つたやうな事はやれない、そんな邪惡な人間の居る事は、その土地に取つて不幸である。ここに住んで、ここの掟を守る人々は皆、親孝行の心がけを敬ふ人々である、その方の如きものをその中に置く事まかりならぬ』

そこで農夫は、その土地から追放ときまつて、もし歸つて來たら、死刑に處せられる事になつた。しかし女には、地頭は土地を與へた、それから後になつてよい夫を持たせた。

忠五郎のはなし

昔、江戸小石川に鈴木と云ふ旗本があつて、屋敷は江戸川の岸、中の橋に近い所にあつた。この鈴木の家來に忠五郎と云ふ足輕がゐた。容貌の立派な、大層愛想のいい、怜悧な若者で、同僚の受けも甚だよかつた。

忠五郎は鈴木に仕へてから數年になるが、何等非難の打ち所のない程身持もよかつた。しかし遂に外の足輕は、忠五郎が每夜、庭から拔け出して明方少し前までいつもうちにゐない事を發見した。初めは、この妙な擧動に對して誰も何にも云はなかつた。その外出のために日常の務めに故障を來す事がなかつたのと、又それは何かの戀愛事件であるらしかつたからであつた。しかし暫らくして、彼は蒼白く衰へて來たので、同僚は何か重大な間違でも起らぬやうに、干渉する事にした。そこで或晩忠五郎が丁度家を拔け出さうとする時、一人の年取つた侍が彼をわきへ呼んで云つた、

『忠五郎殿、御身が每晩、出かけて、明方までうちに居られない事は、我々皆知つて居る。それから見たところ顏色もよくない。どうも御身は惡友と交つて健康を害して居るの

てはないか。その行に相當の辯解ができないとこの事を役頭まで屆けて出なければならない。何れにしても我々は御身の同僚で又友人であるから、御身がこの家の掟に反して夜分外出なさる理由を承るのが正當ぢや」

さう云はれて忠五郎は大層當惑し、又驚愕したらしかつた。暫くは默つてゐたが、やがて、彼は庭に出た、同僚もそのあとに續いて出た。二人が外の人に聞かれない所まで來たとき忠五郎は止つて云つた。

『もう一切申します、しかしどうか内密にして置いて下さい。もし私の云ふ事を洩されると、一大不幸が私の身にふりかゝります。

『五ヶ月程前の事です。私がこの戀のために始めて夜外出しましたのは、ことしの春の初めの事でした。或晩私は、兩親を訪れて屋敷へ歸らうとする途中、表門から遠くない川岸に婦人が一人立つて居るのを見ました。みなりは上流の人のやうでした。それで私はそんな立派な裝ひの婦人がこんな時刻に一人そこに立つて居るのが變だと思ひました。しかし私はそんな事をその婦人に尋ねる理由はないと思ひましたので、何も云はずにわきを通らうと致しますと、その婦人は前へ出て私の袖を引きました。見ると大層若い綺麗な人でした。「あの橋まで私と一緒に歩いて下さいませんか、あなたに申上げる事があります」

と女は云ひました。その聲は大層柔かな氣もちのよい聲でした、それから物を云ふ時、につこりしました。そのにつこりには勝てませんでした。そこで私も一緒に橋の方へ歩きました。その途中女は私が屋敷へ出入するのをこれまで度々見てゐて好きになつたと云ひます。「私はあなたを夫に持ちたい、あなたは私が嫌ひでなければお互に幸福になれます」と云ひました。何と答へてよいか分らなかつたが、大層綺麗な女だと思ひました。橋に近づくと女は又私の袖を引いて堤を下りて川の丁度ふちまで連れて行きました。「一緒にいらつしやい」さうささやいて川の方へ私を引きました。御承知の通りあそこは深い所です。それで俄に女がこはくなつて引きかへさうと致しました。女はにつこりして私の手頸を握つて「私と一緒ならこはくはありません」と云ひました。どうしたわけか、その女の手にさはられると私は赤ん坊よりも意氣地なくなりました。夢の中で走らうとしても手も足も動かせない時のやうな氣が致しました。女は深い水の中へ踏み込んで、一緒に私を引き込みました。それから何も見えも聞えも感じもしなかつたが、氣がついて見ると大層明るい大きな御殿らしい所を女とならんで歩いてゐました。濡れてもゐなければ寒くもありません。周圍のものは一切乾いて暖く綺麗でした。私はどこへどうして來たのだか分りません。女は私の手を引きながら案内して部屋から部屋へと通りぬけて行きました。――その部屋

の數の多い事は限りがない程で、それがみな客でした、しかし非常に立派でした。――最後に千疊敷の客間に參りました。向ふの床の間の前に灯がともつてゐて、宴會のやうに座蒲團が並べてあつたが、客は見えない。女は私を床の間の上座に案內して、自分はその前に坐つて云ひました、「これが私の家です、ここで私と幸福に暮らされると思ひませんか」から尋ねながらにつこりしました。私はこのにつこりが全世界の何よりも綺麗だと思ひました。それで心から「えゝ……」と答へました。同時に私は浦島の話を想ひ出してこれは神女かも知れないと思ひましたが、こはくて何も聞かれませんでした。……やがて女中達が入つて來て、酒肴を私共の前に置きました。それから私の前に坐つた女は、「私がおいやではないなら、今晚婚禮の式を擧げませう、これが結婚の御馳走です」と云ひました。七生までの誓をして、宴會の後、用意の部屋へ案內されました。

『私を起してくれたのは朝未だ早い頃でした、その時女は「あなたはもう私の夫です。しかし今私から云はれない、あなたも聞いてはならない理由があつて、この結婚を祕密にして置く事が必要です。夜明まであなたをここに置いては二人ともの生命が危くなりませう。それで御願ですから、御主人の屋敷へあなたを送りかへしても機嫌を惡くしないで下さい。今夜又、それから、これからも每晚、始めてお遇ひしたあの時刻にお出でになつて

下さい。いつでも橋のわきで私を待つてゐて下さい、長くはお待たせしませんから、しかし何よりもよく覺えてゐて下さい、この結婚は祕密ですよ、それからもしこの事を人に話したら、もう永久に別れなければならなくなりますよ」

『私は何事も女の云ふ通りにする約束をしました――浦島の運命を想ひ出しながら、――それから女は誰もゐない綺麗な部屋を澤山通りぬけて、入口まで私を案內しました。そこで私の手頸を取ると、又一切のものが不意に暗くなつて覺えが無くなつたが、氣が付くと中の橋の近くの川岸に獨りで立つてゐました。屋敷へ歸りましたが未だ寺の鐘が鳴り出しませんでした。

『夕方女の云つた時刻に又橋のところへ參りますと女が待つてゐました。前のやうに私を深い水の中へ、それから婚禮の晚をすごした不思議な所へ連れて行きました。それから毎晚、同じ樣にその女と會つては別れました。今晚も必ず私を待つてゐます、女に失望させるよりは一層死にたいのですから私は行かねばなりません。……しかし御願です、私が今申し上げた事は誰にも決して云はないで下さい』

年寄の足輕はこの話を聞いて驚きかつ恐れた。忠五郎は僞のない白狀をして居ると感じ

たが、その白狀は不快な事を色々思はせた。或はこの經驗は迷ひかも知れない、禍心を有せる魔の力が起させる迷かも知れない。しかしもし本當に魅されて居るのなら、この若者は叱るよりむしろ憐むべきものであつた。それで無理に干渉がましき事をすれば却つて害になると老人は思つた。そこで足輕はやさしく答へた。

『誰にも決して云はない、――少くとも君が達者で生きて居るうちは。それでは行つてその女に會ひ給へ、しかし――用心し給へ。君は何か惡いものに魅されてゐはしないかと心配して居るんだ』

忠五郎は老人の忠告を聞いて微笑して、急いで去つた。數時間の後、妙に落膽した樣子をして屋敷へ歸つた。『會つたかね』と老同僚はささやいた。『いゝえ』忠五郎は答へた。『ゐませんでした。始めてそこにゐませんでした。もう再び私には會ひますまい。あなたにお話したのは私の誤りでした、――約束を破つたのはこの上もない愚な事でした……』相手は慰めようとしたが駄目であつた。忠五郎は倒れて、もう物を云はない。惡寒のやうに、彼は頭から足までふるひ出した。

曉を知らせる寺の鐘が鳴り出した時、忠五郎は起き上らうとしたが、生氣もなく倒れた。

らう』

『はて、この人には血がない』とその醫師は丁寧に診察してから云つた。『この人の脈管には水ばかりしかない。これはむつかしい病人だ。……まあ、なんと云ふ因業な事だらう』

たしかに病氣――助からぬ病氣になつた。漢方醫が招かれた。

忠五郎の生命を助けるためにできるだけの事はなされた――しかし駄目であつた。日暮に彼は死んだ。それから彼の老同僚はその初めからの話をした。

『あゝ、私もそれを疑つて見る處であつた』醫者は叫んだ。……『どんな力もそれなら助けることはできない。その女に生命を取られたのはこの人が始めてではない』

『誰ですか、その女は、――それとも何ですか、その女と云ふのは』足輕は尋ねた、――『狐ですか』

『いゝや、昔からこの川に出て居るのです。若い人の血が好きなのです……』

『蛇ですか、――龍ですか』

『いや、いや、君が晝、あの橋の下で見たら實にいやな動物に見えるでせうが』

『と云ふと、どんな動物なんでせう』

『ただの墓さ、――大きな醜い墓さ』

或女の日記

この頃やや珍らしい草稿が私の手に入つた、――細長い十七枚の柔い紙を、絹の紐で綴ぢて、表紙に麗しい文字が書いてあつた。それは或婦人が自分の結婚生活の歴史を自分で書いた日記のやうなものであつた。書いた本人が亡くなつてから、その人の持つてゐた針箱のうちに見出されたのであつた。

この草稿を貸した友人は私に、公けにしてもよいと思ふだけ、如何程でも飜譯してもよいと云ふ許しを與へた。私はこの無類の好機會を利用して、下層社會の婦人の思想感情、喜びと悲みを、――丁度この婦人が、苟も外國人がそのつつましい哀れな日記を讀まうなどとは夢にも思はないで、思ひ切つてあからさまに書き殘した通り、その儘英語に直す事にした。

しかし彼女の優しい靈を尊敬してたとへこの人が生きてゐてこの文を讀む事があつても、少しも迷惑にならないやうに、その草稿を用ふるやうにした。神聖だと思つたので省いた

慮もある、又たとへ註釋を加へても西洋の讀者に分りさうにない習慣や地方的信仰に關する些細な事で省いたものも少しはある。それから勿論姓名は皆變へてある。その他の點ではできるだけ原文通りにして、——直譯では充分に分らない場合の外は一句も變へた所はない。

この日記に述べてあり又暗示してある事實の外に、私は本人の履歷などは知る所殆んどない。この婦人は最下層社會の人であつた。彼女の話で見ると、三十近くまで未婚であつたらしい。妹の方が數年前から結婚してゐた。日記ではこの世間並でない事の理由は分らない。日記と一緒にあつた小さい寫眞で見ると、この人は綺麗とは云へなかつたことが分る。しかし顏付の優しいつつましげな一種人好きのする風に見える。夫はどこか大きな事務所の小使であつた、重に夜勤であつて月給は十圓であつた。家計の助けに女は煙草屋の紙卷煙草を作つた。

日記を見ると、彼女は數年學校に行つた事があるに相違ない事が分る。假名は中々巧みに書けるが漢字は澤山は知らなかつたので、この日記は小學生の少女が書いたもののやう

である。しかし誤りのない慣れた風に書いてある。東京語（市民の通用語）で、癖のある言葉が多いが、下卑な所は少しもない。

日常の生活さへ困難であるのに讀んで貰へさうにもない日記を、御苦勞にも書くなどとは如何なる理由だと、無理ならぬ疑を起す人もあらう。このやうな問を發する人には、昔から日本の敎では悲しい時に歌や詩を作るのは、一番よい藥になつてゐる事を知らせたい。又下層社會に於ても今日でもなほ凡て喜びや悲しみの場合には歌を作ると云ふ事實を知らせたい。この日記の後半は淋しい病氣の時に書かれたのである。淋しさの餘り氣も狂ひさうな時に、重に心を靜める爲めに書いたのであらうと思はれる。死ぬ少し前には元氣も沮喪してゐた、それでこの日記の終りの部分は弱い便りない肉體に對して、精神が最後の奮戰をした事を示して居るやうである。

草稿の表には『昔話』と題してあつた。昔とは數百年前の事實、或一個人の過ぎ去つた昔の事を云ふのである。勿論この場合ではあとの方の意味に使つてある。

明治二十八年九月二十五日の夕方、向ひの家の人が來て問うた。——

『御宅の御總領の事ですが、お片つきになつてもいゝのでせう』

そこで返事はかうであつた。

『出したい事は出したいのですが、何分支度ができてゐませんので』

向ひの人は云つた。——

『しかし、さきでは支度などはいらないと云ふのですから、私の云ふ人におやりになつて下さいませんか。中々堅氣な人だと云ふ評判です。年は三十八歳です。御總領は二十六位だと思ひますから、先方へ云ひ出して見たのですが……』

『いゝえ——二十九ですよ』と答へた。

『あゝ……それなら先方へ今一應話して見なければなりません。先方に話してから御相談に參ります』

さう云つて向ひの人は出て行つた。

翌晩、向ひの人が又來て——今度は岡田氏の細君（うちの知人）と一緒に——それから云つた。

『先方は滿足です——そこであなたも御承諾ならこの緣談は整ひます』

父は答へて、

『二人とも〔七赤金〕[原註一]だから合性です――大丈夫差支ありますまい』

仲人は尋ねた、

『それでは見合は明日致すことに取計つて如何です』

父は答へた。

『全く何事も緣ですから……それでは明晩の今頃岡田さんの宅で會ふ事にして下さい』

こんな風に、約束が雙方でできた。

向ひの人は翌晩岡田の宅へ私を連れて行かうと云つたが、私は何分一度踏み出した以上、のつぴきならぬ事ですから、母と二人だけで參りたいと云つた。

母とその家へ行つた時「こちらへ」と云つて迎へられた。それから始めてお互に挨拶した。しかし何だかきまりが惡くて顏を見る事ができなかつた。

それから岡田氏は並木氏（夫の姓）に向つて『あなたは內で相談する人もないのだし、善は急げと云ふから、早速よいと思つたら、きめなすつては如何ですか』

その返事はかうであつた、

『私の方は充分滿足ですが、先方は如何考へて居なさるか分りません』

『御覽の通りで引取つてもよいと思召すやうなら……[原註一]』と私は云つた。

仲人は云つた。

『それなら婚禮の日はいつがよいでせう』

『明日はうちに居りますが、十月一日の方がいゝでせう』と並木氏は答へた。

しかし岡田氏は直ちに云つた、

『並木氏の留守の間に家の心配もあるから、明日の方がよくはないでせうか――どうでせう』

初めはそれは餘り早過ぎると思はれたが、私は直ぐに翌日は〔大安日〕[原註三]であることを思ひ出した。それで私は承諾して、それから歸宅した。

父に話したら、不機嫌であつた。餘り早過ぎる、せめて三四日位の猶豫がなければならないと云つた。それから方角が宜しくない、外によくない事もあると云つた。

私は云つた、――

『でも、もう約束してしまひました、もう日を變へて下さいと賴む事はできません。實際留守の間に泥棒でも入つたら氣の毒です。方角が惡いと云つて、よしそれで死にましても私不服はございません。夫の家で死ぬのですもの……』それから又云つた。『それで明日は忙しくて後藤（姉婿）へ行く暇がありますまいから、只今行つて參ります』

後藤へ行つた、しかし會つたら、私は云ひに來た事をその儘云ふのがこはくなつた。私はただかう云つてほのめかした。

『私明日よそへ行かねばなりませんの』

後藤は直ぐに尋ねた、——

『御嫁さんにですね』

もぢもぢしながらやうやく云つた、——

『えゝ』

後藤は『どんな人ですか』と尋ねた。

私は答へた、——

『私の考へがきまる程、その人をよく見る事ができるやうな私なら、なにもわざわざ母に一緒に行つて貰ふわけがないぢやないの』

彼は云つた、『それぢや、姉さんは一體何のために見合に行つたんです。……しかし』大分愉快さうに云ひ足した、『おめでたう』

私は云つた、『とにかく、明日の事なんです』

それから私は家へ歸つた。

さて約束の日になつて見ると（九月二十八日）どうしてよいか分らぬ程澤山用意する事があつた。それに幾日も雨降りであつたので道が大層惡く、そのために一層困つた。ただ幸に、その日は雨が

降らなかつた。私は何かこまごましたものを買はねばならなかつたが、母に何でも頼むと云ふわけにも行かなかつた、（頼みたかつたのだが）何分年の故で、母の足は餘程弱くなつてゐたから。そこで私は隨分早起きをして獨りで出かけて、できるだけの事を一所懸命にしたが、それでもまだ充分準備のできないうちに午後二時になつた。

それから髮を結ひに髮結の處に、又風呂にも行かねばならず——それがまたみんな暇が取れた。それから着物を着換へに歸つたが、並木氏からは何の使ひも來てゐなかつた。私はそれが少し心配になつた。丁度、夕飯が濟んだ時、使が來た。一同に一々暇乞を云うて居る暇さへなかつた、それからもう一生歸らない覺悟で出かけた、そして岡田氏の家に母と歩いて行つた。

そこで又母とも分れねばならなかつた。岡田氏の家内は私の世話をして、一緒に船町の並木氏の家へ行つた。

三々九度の盃事も無事にすみ、又御開き[原註四]の時も思ひの外早く來たので御客は皆歸つた。

『あとには二人差向ひとなり、胸打ち騒ぎ、その恥かしさ筆紙につくし難し』[譯註一]

全く、私の感じた事は、始めて兩親のうちを出て花嫁となり、知らぬ家の娘となつた事の覺えのある人にだけ分るであらう。

あとで食事の時、私は大層きまりが悪かつた。……

二三日後に夫の先妻（なくなつた）の父が私を訪ねて來て、云つた、――

『並木氏は本當によい人です――堅い着實な人です。しかし小さい事にもやかましく小言を云ひ勝ちな人だから、氣をつけて、氣に入るやうになさるがよい』

私は初めから夫の樣子を注意して見てゐて、實際中々嚴しい几帳面な人だと思つた。それで萬事氣に逆らはぬやうにしようと決心した。

十月五日が里歸りの日であつた、それで始めて二人で一緒に出かけた。途中後藤を訪れた。後藤の家を出てから、急に天氣が惡くなつて雨が降つて來た。そこで雨傘を借りて相合傘にさした。こんなにして歩いて居るのを以前の近處の人にでも見られはしないかと氣が氣でなかつたが、幸に無事に兩親の家に着いて挨拶をした。幸に雨はまもなく止んだ。

同月九日初めて一緒に芝居へ行つた。赤坂演伎座に行つて山口一座の芝居を見た。

十一月八日淺草寺に參り、それから御酉樣にも參詣した。

その年の十二月に夫と自分の春着をこしらへた。その時始めてかういふ仕事の面白い事が分つて大層嬉しいと思つた。

二十五日東大久保の天神様に参り、そこの御庭を散歩した。

二十九年の一月十一日に岡田を訪れた。

十二日に後藤へ二人で行つて面白かつた。

二月九日『妹背山』を見に二人で三崎座に行つた。途中思ひがけなく後藤氏にあひ、それから一緒に行つた。しかし帰りには折悪しく雨降り出し道がひどくぬかつた。

同月二十二日、天野で二人の寫眞を取つた。

三月二十五日『春木座』に行き『鶯塚』の芝居を見た。

この月のうちに一緒に一同（両親、親戚、友達）打連れて花見に行く約束をしたが、中々都合よく行かなかつた。

四月十日、午前九時、二人で散歩に出た。初めは九段招魂社へ参詣し、それから上野公園まで行き、そこから淺草へ行つて観音様に参詣し、また門跡様にも参詣した。それから淺草奥山の方へ廻

るつもりの處、先づ御飯をと云ふので――そこで或料理屋へ入つた。食事をして居るうち、戸外に大喧嘩があるのかと思はれる程の大騒ぎやら叫び聲やらが聞えた。その騒ぎは見せもの小屋に火事が起つたからであつた。見て居るうちにも火が早く擴がつて、その町の見せもの小屋は大抵燒けた。――私共はすぐ料理屋を出て淺草公園をあちこち、見物しながら歩いた。

（つぎに原稿にはこの婦人が作つた小さい歌がある）

今戸の渡し[譯註五]にて
あひ見た事のなき人に
不思議に三めぐり稲荷
かくも夫婦になるのみか
初めの思ひに引きかへて
いつしか心も隅田川
つがひ離れぬ都鳥
人も羨めば我身もまた
咲きみだれたる土手の花よりも
花にも増したその人と
白鬚やしろになるまでも

添ひとげたしと祈り念じ

……それから、うちの方へと吾妻橋を渡つた。蒸汽で曾我兄弟の御寺の開帳に行つた。そして私共や兄弟姉妹がいつも仲よく樂しくくらせるやうにと祈つた。その晩歸つたのが七時過。

——同月二十五日、私共は『錄物の寄席』に行つた。

※

五月二日つつじを見に二人で大久保に行つた。

同月六日私共は招魂社へ花火を見に出かけた。

——これまで二人の間に何の風波もなかつた。そして私は二人で出かけたり見物に行つたりする時にきまりの惡い事もなくなつた。今ではお互に氣に入るやうにとばかりつとめて居るやうだ。そして、私は二人はどんな事があつても離れる事はないと信じて居る。……私共の關係はいつもこんなに幸であるやうにと祈る。

六月十八日は須賀神社の祭禮なので父の家に招かれた。髮結が間に合ふやうに來てくれないので大變困つた。しかし妹のおとりさんと父の家に出かけた。やがてお幸さん（かたづいて居る妹）も

参り――にぎやかであつた。晩になつて後藤氏（お幸の夫）が見え、最後に私が一心に待つてゐた夫が見えた。それから大へん嬉しかつた事が一つあつた。夫と私が一緒に出かける時、よく私がこしらへた新しい春着を着せうと云ひ出しても、夫はその度毎に古いので澤山だと云つて聞き入れなかつた。それでも今度は――父の招待だから着なければならないと思つて――新しい方を着てくれた。一同折よくこんなに集つたので皆が一層機嫌よくなつた。そして仕舞に別れる時にただ夏の夜の短かさをかこつた。

つぎのはその晩私共の作つた歌である、――

二夫婦そろうて祝ふ氏神の
　祭りも今日はにぎはひにけり　　並　木（夫）

氏神の祭りめでたし二夫婦　　同じく並木

いくとせもにぎやかなりし氏神の
　祭りにそろふ今日の嬉しさ　　妻

祭りとて一家集る樂しみは
　げに氏神の惠みなりけり　妻

二夫婦そろうて今日の樂しみも
　神の惠みぞめでたかりけり　妻

氏神の惠みも深き夫婦づれ　妻

祭りとて對に仕立てし伊豫がすり
　今日樂しみに着ると思へば　妻

思ひきやはからずそろふ二夫婦
　何にたとへん今日の吉日　後藤

祭りとて始めてそろふ二夫婦
　後のかへりぞ今は悲しき　お幸

故郷の祭りにそろふ二夫婦
語らう間さへ夏の短夜　　お幸

七月五日に播摩太夫のかかつた金澤亭に『三十三間堂』をきいた。

八月一日夫の先妻の一周忌につき淺草寺に參詣、それから吾妻橋のそばの鰻屋で中飯。そこに居るうちに丁度、正午の時分に地震があつた。河に近いので家が大へんゆれて、隨分恐ろしかつた。――先に櫻の時分に來た時大火事を見たのを思ひ出してこの地震は心配になつた。今度は雷でも落ちはせぬかと思つた。原註六

二時頃に鰻屋を出て淺草公園に入つた。そこから鐵道馬車で神田に行き、それから神田の涼しい處で暫く休んだ。途中父を訪ねて歸つたのは九時過。

同月十五日八幡神社の祭禮、後藤と妹と、後藤の妹と宅へ來てくれた。私は一同揃つて宮參りをしたいと思つてゐたが、この朝夫が少しお酒を飲み過ぎたので、そこで仕方なく夫を置いて出かけた。參詣してから後藤の宅へ行き、しばらくしてから歸つた。

九月お彼岸の中日にひとりで寺參りをした。

十月十一日おたかさん靜岡より來らる。私は翌日芝居へ案内したかつたが、おたかさんは翌朝早く東京を立たねばならぬ事になつた。それでも夫と私は翌晩柳盛座に赴いて『松岡美談貞忠鑑』を見物した。

＊

六月二十二日父から頼まれた着物を仕立てはじめたが、加減が惡くて充分できなかつた。しかし新年（明治三十年）の元日に仕上げる事ができた。

……今度は子供が生れるので大へん嬉しい。それから私は兩親が初孫をもつてどんなにか得意になつて喜びなさるかと思つた。

＊

五月十日母と鹽釜様（家注七）へ參詣し、それから泉岳寺に參詣に出かけた。そこで四十七士のお墓や色々の寶物を拜觀した。新宿まで汽車で歸つた。鹽町三丁目で母と別れ、うちについたのは六時。

※

六月八日午後四時男子出生。母子共この上もなく健やかに見えた。子供は夫によく似てゐた。大きい黑い眼をしてゐた。……しかし大へん小さい兒であつた。八月に生るべき筈の處六月に生れたのであつた。……同日午後七時藥を飮ます時になつて、ランプの光で見ると大きな眼を開いて、その邊を見廻してゐた。その晩一晩私の母の懷に眠つてゐた。八月子だから餘程暖かくしてやらねばならないと聞いたから夜晝懷に入れて置く事にした。

翌日――六月九日――午後六時半子供は突然死んだ。……

――『嬉しき間は僅かにて、又悲しみと變ず、生るるものはみな必ず死す』とあるは實にこの世のよい戒である。

僅か一日母と呼ばれ、ただ死ぬのを見るために子供を生んだのであつた。――本當に生れて二日位で死ぬのなら生れない方がよかつたのにと思ふ。

十二月から六月まで私は隨分病氣であつた。それからお產をしていくらかよくなつて喜んでゐた。今度の產事につき方々から御祝ひを受けたが、それに子供が死んでしまつた。――本當に私は悲し

さにたへない。

六月十日大久保、泉福寺と云ふ御寺で葬式を行ひ、それから小さいお墓をたてた。

その時の歌――

　　思ひきや身にさへかへぬ撫子に
　　　　別れし袖の露のたもとを

　　さみだれやしめりがちなる袖のたもとを

それから間もなく人が卒塔婆を逆さに立てて置けば、こんな不幸に再びあはないと聞かせてくれた。そんな事をするのは餘程かはいさうに思はれて、色々迷つたが、八月九日遂に卒塔婆[原註八]を逆さに立てた。……

九月九日赤坂の芝居に二人で行つた。

十月十八日本郷春木座へ獨りで行き大久保彦左衛門の芝居を見た。[原註九]そこで下足札をうつかりなくし、皆出てしまふまで殘らねばならなかつた。それから漸く草履を見つけて歸る事ができた。しかし眞暗な夜で途中が大へん淋しかつた。

三十一年正月の節句に塚の伯母と友人内海さんの奥さんと話をして居る最中、急に胸が痛み出したので驚いて簞笥の上にある水天宮樣のお守りを取らうとする途端に氣が遠くなつて倒れた。親切に介抱されて直ぐ正氣づいたが、そののち長い間病氣になつた。

※

四月十日が東京遷都三十年祭なので、父の家に集る事にした。重之助〔多分親戚〕と一緒に先に行つて、夫を待つてゐた。夫はその日朝のうち、一寸役所へ行く筈であつた。八時半頃に夫は父の家に來て、皆と一緒になつた。それから私共三人だけ一緒に出かけて市中の景況を見た。麹町から永田町に行き櫻田門を通つて日比谷見附に出て、それから銀座通から眼鏡橋を通つて上野に出た。そこで色々見物ののち、又眼鏡橋に出た。その時餘程疲れてゐたので私は歸らうと云ひ出したら、夫もやはり疲れてゐたので賛成したが、重之助は『こんなよい時に大名行列を見落してはつまらないから銀座へ行かう』と云つてきかない。そこで重之助と別れて小さい天ぷら屋に入つて天ぷらを喰べた。それから運のよい事には折よくその家から大名行列を見ることができた。その晩歸つたのは六時半。

四月の半ばから妹おとりの事で随分心配した（その事は書いてない）

※

明治三十一年八月三十一日二番目の子供が殆んど何の苦痛もなく出生――女であつた。初と名づけた。

出産の時に世話を受けた人々を七夜に招いた。

――母はそれから二日程ゐてくれたが、妹のお幸の胸がひどく痛むので、せん方なく歸られる事になつた。幸に夫がこの頃きまつた休暇を得たので、できるだけの世話をしてくれた――洗濯や何かの事まで。しかし自分のそばに女がゐないので私は時々大へん困つた。……

夫の休暇がなくなつてから母は時々夫の留守に來てくれた。二十一日もこんなにして過ぎたが母子共健康であつた。

――娘が生れてから百日になるまで時々呼吸が苦しさうに見えるのでたえず心配した。しかしそれも漸くなくなり段々强くなるやうであつた。

それでも一つ不幸な事があつた。それは不具の事で、初は生れた時から片方の手の拇指が二本あつた。手術を受けに病院へ連れて行く氣には長い間なれなかつた。しかしつい近處の婦人が新宿の

大へん上手な外科醫の事を話してくれたのでたうとう行く事にきめた。手術の間、夫が膝に子供をのせてゐた。私は手術を見る事はとてもできなかつた、どうなる事かと思うて、心配と恐ろしさで胸一杯になつてつぎの室で待つてゐた。しかし濟んでから子供は何事もなかつたやうな顔をしてゐた。暫くして、いつものやうに乳を飲んだ。それで案じたよりも好都合に事が濟んだ。

うちに歸つて前の通り續いて乳を飲んだ。そして小さいからだに何事もなかつたやうに見えた。しかし大へんに幼いからあんな手術などを受けて、何か病氣の種でも作りはしなかつたかと心配した。用心のために三週間程毎日病院に通つた。しかし惡い樣子は少しも見えなかつた。

三十二年三月三日の初節句に父と後藤と兩方から内裏雛、その外御祝ひの品々、簞笥鏡臺針箱を貰つた。私共もこの時に子供のために茶棗、御膳、その外の小さい物を色々買つてやつた。後藤と重之助はその日見えて、にぎやかであつた。

四月三日穴八幡（早稻田）に參詣して子供の息災延命を誓つた。……

四月二十九日初は病氣のやうで私は醫者に診て貰ふことにした

醫者がその朝來てくれる約束をしながら、來てくれない、一日中待つてゐたが駄目であつた。翌日も待つてゐたが來てくれない。夕方になつて初は段々惡くなり、胸のところが大へん苦しさうで

あつたので、翌朝早く醫者へつれて行かうと決心した。一晩中心配でならなかつたが、朝になつて少しよくなつたらしい。そこでおんぶして獨りで出かけて赤坂の或醫者へ行つた。診て下さいと頼むと未だ患者を診る時刻でないから待つて居るやうにと云はれた。

待つて居るうちに子供が前より一層ひどく泣き出して乳にも吸付かず、ただ歩いて見たり休んで見たりして、すかすより外に仕方がなく、大へん困つた。やうやくの事で醫者が見えて子供を診て貰つたが、その時子供の泣き聲が段々弱くなつて、唇が段々蒼くなつた事に氣が付いた。そこでそれを見て默つて居られないので『如何な樣子でせうか』と尋ねると『晩までもたない』と云はれた。『何かお藥をやつて下さいませんか』と尋ねると『飲めたらよいがね』と云はれた。

私はすぐ歸つて夫や父のうちへ云つてやりたいと思つたが餘りひどく驚いたので――一時に力がなくなつた。幸に或親切な老婦人が、傘や何かを持つて車に乘る世話をして下さつたので、人力車で歸宅する事ができた。それから人を頼んで夫と父に傳へた。三田の奥さんが世話に來て下さつた。そのお蔭で子供を助けるためにできるだけの事をした。……それでも未だ夫が歸つて來なかつた。しかし心配や世話した事は皆無駄になつた。

それで三十二年五月二日子供は十萬億土の歸らぬ旅へ赴いた。

子供の父と母は未だ生きて居る――よい醫者にかけて診て貰ふ事を怠つてそれで子供を死なして

しまつたやうな父と母とが。さう思へば本當に悲しさにたへない。時々私共はそれを云つて身を責めて居るが歸らぬ事は仕方がない。

しかし子供の死んだ翌日醫者が私共に『あの病氣は初めからどんなに手を盡しても、とても一週間以上生きてはゐなかつたのです。十か十一にもなつてゐたら手術をして或は助かつたかも知れないが、今は餘り幼少だから手術などは思ひもよらないことです』と云つた。それから子供は腎臟炎で死んだのだと聞かせてくれた。

こんなにして、私共の持つてゐた望みや、これまで色々心配して世話した事や、九ケ月間段々生長するのを見て喜んだ事は皆一切無駄になつた。

しかし私共二人はこの子供との緣が前世からうすかつたのに相違ないと思ひあきらめて、漸くいくらか悲しみを慰める事ができた。

退屈な時の淋しさに、私は義太夫本の宮城野しのぶの話の風に歌を作つて、心のうちを云つて見た。

これこのうちへ緣づきしは
思ひ廻せば五とせ前

今度まうけし女の子
可愛ものとて育つるかと
我身のなりは打ち忘れて
育てし事も情けない
かうした事とは露知らず
この初は無事に育つるか
首尾よう成人したならば
やがてむこを取り
楽しませようどうしてと
物見遊山をたしなんで
我兒大事と
夫の事も初の事も
戀しなつかし思ふのを
楽しみくらした效もなく
親子になりしは嬉しいが
先きだつ事を見る母の

心を推してたもいのと

――手を取りかはす夫婦の歎き

なげきを立ち聞くも

貰ひ泣きして表口

障子もぬるゝばかりなり

初の死んだ時分は、葬式に關する規則はよくなつて、大久保で火葬する事も許される事になつた。そこで並木に願つて、もし面倒な規則さへなかつたら並木一族の手つぎの御寺へ遺骸をもつて行く事にして貰つた。そこで葬式は門淨寺で行つた。この寺は眞宗本願寺の淺草派である。遺骨はそこへ納めた。

――妹の幸は初のなくなつた時、大分ひどい風邪で寢てゐた。しかし知らせが着いたあとで間もなく來てくれた。それから又二三日して大分よくなつたから、最早心配して下さるなと云ひに來た。

――私は又私で、何處へも行く事がいやになつて丁度一月、家を出なかつた。しかしいつまでも出ないで居る事も、禮儀上できないから、たうとう出かけた。そこで父の家と妹の家へ義理上の訪問をした。

※

――大分病氣になつたので、母に來て世話をして貰ふつもりの處、お幸も又、病氣になつたので
よし（ここに初めて出て居る妹）と母と始終ついてゐた。それで父の宅からは世話して貰へなかつた。
ただ近處の女の人々が暇のある時、全くの親切から來て世話をしてくれるばかりで、誰も世話して
くれるものもない。漸く堀氏に賴んで、世話してくれるよいお婆さんを一人雇うて貰つた。この人
の介抱でよくなりかけて、八月の初め頃には私も餘程よくなつた。……

九月四日妹お幸は肺病でなくなつた。

――萬一の事があつたら、妹のよしが幸の代りになると始めに約束してあつた。後藤氏も全く獨
りで居るのも不自由故、同月十一日に結婚式があり、それから一通りの祝ひをした。

同月三十日に岡田氏が急になくなつた。

こんな事が重なつて色々費用がかかつたので大分困つた。

――幸が死んでよしが餘り早く行つた事を始めて聞いた時、私は大へん氣もちが惡るかつた。し
かし、私はその心もちを隱して以前の通り後藤にはなしをしてゐた。

十一月に後藤はひとりで札幌に行つた。

明治三十三年二月二日後藤氏は東京にかへり、同月十四日よしを連れて再び北海道に出かけた。

※

二月二十日午前六時三番目の子供（男兒）出生、母子共に無事。

――女のつもりでゐた處生れたのが男であつた。それで夫が勤めから歸つて來て男子である事を見て大へん驚いて喜んだ。

――しかし子供は十分乳を飮む事ができないので哺乳器で育てねばならなかつた。

生れて七日目に少し髮を剃つてやつた。それから晩に七夜の祝を今度はうちだけでした。

――少し前から夫は風を引いてゐたが、つぎの朝、咳がひどく出て出勤ができなかつたので終日うちにゐた。

その朝早く子供はいつもの通りに乳を飮んだ。しかし午前十時頃胸がひどく痛むやうで、それから變にうめき出したから醫者を呼びにやつた。折惡しく迎へにやつた醫者は市外に出てゐて晩までは歸られないとの事、それで直ぐに外の醫者を迎ひにやる方がよいと考へて迎ひにやつた。その醫者は夕方來ると云つた。しかし午後二時頃子供の病氣は急に惡くなつて二月二十七日、三時少し前

に子供は僅かこの世に八日ゐてあへなくなつた。……

——今度又こんな不幸があつて、夫に嫌はれるやうになるまででなくとも、こんなに代る代る子供に別れるのは、前世に何か犯した罪の罰に相違ないと獨りで思つた。さう思へば袖のかわく間もなく涙の雨も止まず、私のためにはこの世で空の晴れる事がないやうに思はれた。

私のために繰りかへしこんな不幸にあふので、夫の心も悪い方に變るまいかと益〻心配になつて來た。私の心にある心配のために、夫の心のうちも思はれて心配した。

それでも夫はただ『天命致し方これなく』と繰りかへしてばかりゐた。

——子供はどこか近い御寺に葬られた方が、參りに行くのによからうと思つたので、大久保泉福寺と云ふ御寺で葬式をし、遺骨はそこへ納めた。

樂しみもさめてはかなし春の夢

……（日附なし）私が色々心配した故か、子供が死んでから二七日間、顔と手足が少しふくれた。——しかし餘り大した事でもなく、直ぐに直つた……今ではもう三七日も過ぎた。……

ここで哀れな母の日記が終つて居る。子供の死後二十一日に關する終りの記事から最後の數行は、三月十三四日に書かれたものだらうと思はれる。彼女は同月二十八日に死んだ。

日本の生活狀態に充分通じない人は、この簡單な歷史を全く理解することができないだらう。しかしここに書かれた生活の實際の狀態を想像する事は困難ではない。――この夫婦は二間（六疊一間三疊一間）の小さい家に住んで居る。夫は一ヶ月漸く十圓をもうける。妻は裁縫、洗濯、料理（勿論戶外で）をする。大寒の時にも火にあたる事がない。自分は、この夫婦は家賃を入れずに、一日平均二十七八錢でくらしてゐたに相違ないと考へる。娛樂と云つても實は餘程安上りであつた。八錢も出せば芝居見物にも義太夫ききにも行かれた。それから見物をするのは徒歩であつた。それでもこんな娛樂はこの人々には贅澤であつた。必要な着物を買ふとか、結婚、出產、死亡の時に親戚に贈物をせねばならないとか云ふ場合の費用は、獻身的經濟によつて始めて出せるのである。實際東京の數千の貧民はこれより一層貧しくくらして居る（一ヶ月十圓よりも、もつと少い收入でくらして居る）――しかし、それでもいつも小綺麗に小ざつぱりとして愉快にくらして居る。こんな境遇

にあつて子供を生んで育てて行く事は、ただ餘程强壯な婦人にして始めて容易にできる。こんな境遇は田舍のもつと苦しいが、しかし、もつと强壯な農民の境遇よりもはるかに危險である。それで多數のうち弱いものは倒れて死ぬ事は想像する事ができる。

この日記を讀む人々はこんなに愼み深くやさしい婦人が、かくの如く不意に、その性質氣分については毫も知らない全くの他人の妻にならうと熱心になつた事を不思議に思ふであらう。實際日本に於ける大多數の結婚はここに書いてある通りの非小說的な方法で、又仲人の力で整へられるのである。しかしこの人の境遇は例外と云ふべき程氣の毒である。その理由は哀れに簡單である。善良なる女子は皆結婚する事にきまつて居る、或時期を過ぎて未だ結婚しないのは本人の恥辱であり又人の指彈を受ける。疑ひもなくこんな擯斥を受くる事がいやさに、この日記の記者は自分の當然の運命を果たす眞先の機會を捉へたのであつた。この人はすでに二十九歲であつた。こんな機會は再び出て來なかつたかも知れない。

自分にとつてはこの哀れな奮鬪と失敗の懺悔記の眞の意味は、なにも稀有な告白があると云ふ點でなく、ただ日本人には靑空や日光のやうにありふれた何物かを示してゐる點に

にある。柔順なる事と義務を立派に仕遂げる事によつて、愛情を得ようとの健氣なるこの婦人の決心、どんな僅かの親切に對しても有する感謝の念、小兒のやうな信仰心、この上もなき無私の念、この世の苦難は皆、前の世に犯した過ちの報いてあると云ふ佛教の解釋、絕望の眞中にも歌を作らうとする努力——凡てこれ等の事は如何にも感動すべき事、如何に感動しても及ばない事である。しかし之は例外のものとは思はれない。ここにあらはれて居る特質は、一例に過ぎない。——下層社會の婦人の德性を代表した一例に過ぎない。恐らくこの婦人と同じく下層社會に生れて、自分の喜びや苦しみを、これ程單純でしかも哀れな日記で表はす事ができるやうな日本婦人は澤山はあるまい。しかし眞面目の信仰の昔し昔しの時代からこの人と同じく人生は義務であるとの心得をうけつぎ、又この人と同じく無私の愛情を注ぐ力をうけついでゐる婦人は、日本には幾百萬人あるか知れない。

原註一　七赤金。父はたしかに「三世相」のやうな占ひの本か、或は專門の占師に相談したのである。

原註二　「御承知になつて居る通り、私はお金も着物もない貧乏な女ですが、それでも貰つてやると云ふ御思召なら、私も喜んで參ります」と云ふ意味。

原註三　吉日、不吉日は日本の暦によれば、このやうな名で表してある。

◐ 先勝、――午前よし、午後わるし。

◓ 友引、――午前よし、午後は始めと終りよく、中わるし。

◑ 先負、――午前わるし、午後よし。

● 佛滅、――全部不吉。

○ 大安、――全部よし。

● 赤口、――正午だけよく、あとは全く不吉。

原註四　日本の婚禮では、不吉な意味のこもつた言葉、或は間接になりとも不幸をほのめかすやうな言葉を避けることになつて居る。

「すむ」「終る」「歸る」などその他澤山の言葉は婚禮では禁句である。それで一同お暇をすることを「お開き」と云ふ言葉に普通改める。

原註五　今戸の渡し船のことを云つて居るやうで、實はこの婚禮を媒妁した仲人のこと。……

原註六　「地震、火事、雷、三十日、飢饉、病のない國へ行きたい」と云ふ佛敎から出た諺による。

原註七　鹽釜神社は婦人が安産をいのるために參詣する神社。……

原註八　卒塔婆は經文を書いて墓の前にたてる細長い木の板である。卒塔婆の詳細なる記事は著者の「異國情趣と懷古のことども」のうち「死者文學」と題する一篇を見られよ。著者はこゝにある珍らしい迷信

の事を叙說、解釋する事はできない、しかし著者の「佛の畠の落穗」に記した不思議な習慣と多分同種類のものであらう。

原註九　この芝居見物を單に遊興と見るのは公平ではあるまい、むしろ苦痛を忘れるため、それから多分夫の命令で行つたものであらう。……

原註十　節句と名のつく祭日は一年に五度ある。この五節句は人日（一月七日）、上巳（三月三日）、端午（五月五日）、七夕（七月七日）、及び重陽（九月九日）である。

譯註一　著者はこの文句を譯して、更に原文はこの通りと、ローマ字で殘して置いた。これに依つて原文の體裁も想像できる。

平家蟹

信仰、思想、習慣、及び藝術が、私共自身のものと何等共通點がないと云ふ理由で、その國の人々が私共に異様に思はれるやうな色々の國々では、土地の性質にも何か、——その植物或は動物にも何か、——それに類する異様な特色のあるものが存する事がある。多分から云ふ地方ではその割合に奇體な異國的自然が、異國的精神と見られる奇異な性質を多少發達させる助けとなつたのであらう。思想や感情の國民的相違も、草木や昆蟲の形と同じく、進化論的に解釋せらるべきものである。それから或人種の精神的進化に於て、環境が人の想像に及ぼす影響をその一要素として數へねばならない。……

長州から蟹——特に私共が日本らしいものと考へるやうになつて居る例の奇怪な種類の蟹の箱を送られたので、こんな事を考へるやうになつた。この蟹の背には不思議に人間の面——歪んだ面——日本の工人が何か藝術的氣まぐれの瞬間に作つたと思はれるやうな浮

彫りの面の形に、不思議に似通つた凸凹がある。



二種類のこんな蟹――よく乾して磨いた蟹は、赤間ヶ關（外國人には下の關としてもつと知られて居る）の店に賣物にしてたえず出してある。それは壇の浦と云ふ海岸の近傍一帶で取れる、そこは七世紀以前平家がその敵源氏と、海上に戰つて全滅になつた處である。日本歴史の讀者は、二位尼がその恐るべき悲劇の眞最中に歌を詠んで、若い安徳天皇を抱いて海に身を投じた事を覺えて居る。

ところで此海岸の奇怪な蟹は平家蟹と云はれて居る。それは平家の溺死戰死した士卒の魂がこんな形になつたと云ふ傳說によるのである、死にもの狂ひの憤怒と苦痛は、蟹の背中の顏に今猶あらはれて居ると云はれる。しかし此傳說の興味を感ずるためには壇の浦の戰の古い繪――物凄い鐵の假面をつけて、大きな恐ろしい眼をした鎧武者の錦繪をよく知つて居らねばならない。

小さい方の蟹はただ「平家蟹」として知られて居る。平家蟹は一つ一つ、普通の侍――

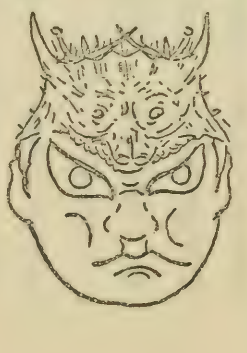
ただの平家の武士の亡魂の生きかへつたものと想像されて居る。しかし大きい方の蟹は又「大將蟹」或は「龍頭」と名がついて居る。大將蟹や龍頭は、西洋の紋章學では分らない怪物や、光り輝く角や、金の龍を兜の上にのせた平家の大將達の亡魂の生きたものと想像されて居る。



私は日本の友人に、ここに出した二つの平家蟹の繪をかいて貰つた。私はその正確なことを保證する。しかし私はその龍頭の繪にも、又蟹の背中の本ものの形にも兜に似たものは何にも見ることができないと云つた。

『君に分りますか』私は尋ねた。

『さあ、分りますね――先づこんな風に』と答へながら、下の略圖をつくつた、――



『なる程、兜の幾分は分る』私は云つた、――『しかし君のかいた略圖は實際通りでは

ない、――それから、その顔はお月樣の顏のやうに氣が拔けて居る。本物の蟹の背中の、その見ると魘(うな)されさうなものを御覽なさい……』

螢

一

自分は日本の螢のことを話したい。が、昆蟲學的にては無い。諸君が然かあるべきであるやうに、此問題の科學的方面に趣味があるならば、目今、東京帝國大學で講義をして居られる生物學の一日本人教授に啓蒙を求めらるべきである。その教授は Mr. S. Watase (S といふ字はその名前の Shōzaburō を表はして居る) と自署されるが、教授は亞米利加で學生をして居られ、又、教授もして居られた人で、その數數の講義が——動物の燐光、動物の電氣、昆蟲及び魚類の發光器官、その他生物學の驚くべき題目に就いての講義が——彼地で出版になつて居る。(注一) 教授は螢の形態、螢の生理、螢の光度測定、その發光物質の化學、その光りの分光器的分析、及びエエテル振動の語辭でのその光りの意義に就いて知られて居る一切のことを語り得る人である。溫度と環境との條件が尋常な場合には、日本の

螢の或る一種が出す光りの脈搏は、平均一分間に二十六であること、此蟲が捕へられて怯えると、俄に其率が上つて一分間に六十三となることを、實驗によつて教授は諸君に示し得られる。それから又教授はもつと小さい或る他の種類の螢は、手で捉へると、其光りの脈搏の數を增して、一分間に二百以上にも上すことを證明し得られる。教授は、此光りは、多くの厭はしい毛蟲や蝶の『警戒色』同樣、此蟲にとつて或る保護的價値のあるものかも知れぬ、螢は味はふと非常に苦いもので、鳥はこれを食へぬものと見て居るらしいからと、かう述べられる。（教授の云つて居られるに、蛙は味のまづいのに頓著はしないもので、蠟燭の炎の光りが瀨戶の壺を透して明るく見えると殆んど同じやうに、光りが腹を通ほして輝くまでに其冷たい腹へ螢を一杯に詰め込む）然し保護的價値があるか無いかは知らぬが、種種な方法に――例へば光線電信として――微小なダイナモが使用されて居るやうに思はれる。他の昆蟲が音響で或は觸感で交話するやうに、螢は其感情を光りの脈搏で發言する。其談話は光りの言語である。……自分は決して純學術的なものでは無い教授の其講義の性質に就いて二三の暗示を諸君に與へようとして居るだけのことてある。そして自分の此非科學的な隨筆の最も好い部分――殊に日本に於ける螢の捕獲並びに販賣に關した部分――は、教授が昨年東京で日本の聽衆に向つてされた面白い講演に負うて居るのである。

二

今日書かれて居る螢（ホタル）といふ日本の名は、表意文字學の方から見ると、蟲といふ記號の上へ、火といふ記號を二つ竝べた字で出來て居る。しかし、この語の眞の起源は疑はしいので、種種な語原說明がこれまで提出されて居る。古代に在つては此稱呼は『火の初見』といふ意味であつたと考へて居る學者がある。一方ではまた、もと『星』といふ意味の綴音と『垂れる』といふ意味の綴音と、二つ合して出來たものだと信じて居る學者がある。かく提出されて居る二つの由來のうち、遺憾ながらより詩的な方が一番尤もらしく無いものと思惟されて居る。だが、ホタルといふ語の最初の意味は何であつたにせよ、今なほ此蟲に與へられて居る、或る民間名稱が浪漫的性質を有つて居ることに就いては、何の疑ひも有り得ない。

廣く日本に分布して居る螢が二種ある。これは一般にゲンジボタル及びヘイケボタル、卽ち『源氏螢』及び『平家螢』と呼ばれ來つて居る。此二種の螢は、古の源氏と平家の武士の幽靈で、蟲の姿形で居ても、かの十二世紀の恐ろしい氏族戰爭を覺えて居て、每年一

度四月二十日の晩、[原註二]宇治川で大合戰をする、から或る傳說は主張する。だから、その晩にはその合戰に加はり得られるやうに、籠の螢は放してやらねばならぬといふ。

源氏螢は日本の螢の中で一番大きなもの——琉球諸島を含めないで、少くとも日本本土での一番大きな種である。九州から奥州に至る日本の殆んど到る處に居る。平家螢はもつと北に亙つて居て、殊に蝦夷に普通であるが、中部幷びに南部諸國にも居る。源氏螢よりも小さくて、あれよりも弱い光りを放つ。東京、大阪、京都その他の都會で蟲商人が普通賣る螢は大きい方の種類である。日本の觀察者は、此兩方ともその光りは『茶色』（チャイロ）だと記載して居る。葉の性質がいい場合には、普通日本で茶を湯に滲ました色は、澄んだ綠がかつた黃である。然し立派な源氏螢が放つ光りは非常に光輝のあるもので、餘程眼の銳い人で無ければ、その綠色は見分けられぬ。一寸見ると、その閃きは木を燃やした火の炎のやうに黃色に見える。次記のホックはその强い光りを讃め過ぎては居ない、——

篝火も螢もひかる源氏かな[原註三]

源氏螢及び平家螢といふ名稱は、今なほ一般に使用されては居るけれども、兩方とも他

の俗名で知られて居る。國國で名を異にして、源氏はオホボタル卽ち『大螢』、ウシボタル卽ち『牛螢』、クマボタル卽ち『熊螢』、それからウヂボタル卽ち『宇治螢』と呼ばれて居る。普通の西洋人には面白味が分るまいと思ふが、コムソウボタルとか、ヤマブキボタルとかいふやうな、繪のやうな名稱は言ふまでも無い。平家螢はまたヒメボタル、卽ち『姫螢』、ネンネボタル卽ち『ねんね螢』、それからユウレイボタル卽ち『幽靈螢』と呼ばれて居る。だが、上記のは手當たりに選んだ見本に過ぎぬ。殆んど日本到る處に、この蟲の特別な俗の名があるのである。

三

螢で有名な處——ただ螢を眺めて樂しむ爲めに夏時、人が行く處——が日本に多い。往古はそんな場處のうち一番有名であつたのは、近江の湖水近くの石山といふ小さい谷であつた。今でもホタルダニ卽ち螢谷と呼ばれて居る。元祿(一六八八——一七〇三)前には、蒸暑の季節のあひだ、此谷での螢の群集は、日本の自然的不思議の一つに數へられて居たものである。螢谷の螢は今でも大きいので有名であるが、古の作者が記述して居るその不

思議な群集は最早、そこで見ることは出來ぬ。現今では螢で一番名高い處は、山城の宇治附近である。宇治は、あの有名な茶處の中心にある小綺麗な町で、宇治川に臨んで居て、その茶に名高いのに劣らずその螢で名高い。毎夏京都及び大阪から宇治へ特別列車が發せられて、螢の見物人を幾千人と運ぶ。だが、その非常な美觀を――ホタルカッセン即ち螢合戰を――目撃し得るのは、町から數哩距つた地點の、川の上である。川の流れは其邊は草木に蔽はれた小山の間をうねりくねつて居て、幾千萬の螢が、兩岸から矢の如く飛び出して、水上で出會つて絡み合ふ。時には非常に群れ集つて、見る眼には光つた雲か、火花の大きな球かと思ふ程のものに成る。其雲は直ぐに散る。或は其球は落ちて流れの表面で碎けて、其落ちた螢は光りながら流れ去る。だが、直ぐと又別な群集が同じ場處で集まる。見物人は終夜、河上に船を浮べて此稀有の光景を眺める。ホタルカッセンが濟むと、宇治川は漂ひ流れる螢のなほ煌煌（きらきら）と光つて居る軀（むくろ）に滿面蔽はれてミルキイエイのやうな、即ち日本人がもつと詩的に言うて居る言葉の天の川のやうな、觀を呈するといふことである。

有名な女詩人加賀の千代が、

川ばかり暗は流れて螢かな

といふ句を作つたのは、多分、そんな光景を見た後のことであつたらう。

四

夏の幾月の間、螢を捕りそれを賣つて、生計を營む人が日本には多い。この商賣は範圍が廣いから當然、一種特別な生業だと思つていい程である。この生業の重もな中心點は、江州の琵琶湖畔の、石山附近一帶の地で、——そこの數多の家が、日本の方方へ、殊に大阪と京都との大都市へ、螢を供給する。その重もなる家では、この忙しい季節中、一軒で六十人から七十人の螢捕りを傭ふ。この職業には訓練が要る。未熟者は一と晩のうちに、百匹捕へるのは容易ならぬ事と思ふかも知れぬが、熟練家は三千匹は捕るといふ。捕獲の法は單純極はまつたものだが、見ては甚だ興味あるものである。

日が暮れると直ぐ、螢捕りは、長い竹竿を肩にかつぎ、鳶色の蚊帳布の長い袋を、帶のやうに、腰のあたりに纏うて出かける。螢がよく往來する木立のところ——普通は川か湖水かの土手の、柳の木の植わつて居るところ——へ行き著くと、立ち止つて、その樹を見守つて居る。もう十分と思ふ程、その樹に光りがちらつき出すと、其網を用意して、一番

よく光る木へ近寄つて行つて、その長い竿で枝を打つ。螢はその打撃で打ち拂はれると、もつと活潑な蟲が同じ事情の下でするやうに、直ぐに飛ぶことはしないで、甲蟲同樣、意氣地無くも地面へ落ちる。そしてその光りが――恐ろしい或は苦しいと感じた瞬間はいつも常よりか鮮かなその光りが――蟲を目だたせる。四五秒も地面にじつと居らして置けば飛び去る。然し螢捕りは、驚くばかりに迅速に、一度に兩手を使用して、拾ひ上げて、手際よく口の中へ投げ込む――一つ一つ袋へ入れるに要る時間が惜しいからである。口にもう入らぬやうになつてからやつと、何の怪我も螢に與へずに、袋の中へ吐き落とす。

かくして螢捕りは螢が樹木を去つて露に濡つた地面をさがす朝の二時頃――昔の日本で幽靈の出る時刻――まで働く。螢は人目に見えずに居るやうに、地面へその尻を埋めるといふことである。だが、今度は螢捕りはその兵略を變更する。竹の箒で、輕くそして速く、芝生の表面を掃く。箒が觸れるかそれに驚くかすると、螢はいつもその提燈を出して見せて、早速、撮み取られて袋へ入れられる。夜明け少し前に螢捕りは町へ歸る。

螢商店では、捕つた螢を――光りの强い程値が高いから――其光りの强弱によつて出來るだけ早く擇り分ける。それから紗張りの箱か籠かへ、其一つ一つに濡らした草を少し入れて、入れる。等級に應じて一つの籠へ百から二百入れる。この籠へ、購客の名――旅館

の持主、料理屋の主人、卸賣りまた小賣りの螢商人、それから特殊の饗宴用に多數の螢を注文する私人、などの名――を書いた小さな木札を附ける。其箱をば――此種の荷物は通運會社へ依賴しては不安心だから――敏速な使者でそれぞれ宛名先へ急送する。

夏期、夜の宴會に、人に見せる爲めに、非常に澤山の螢が注文される。日本の客間の大きなのは通例庭園を見晴らして居る。そして蒸暑い季節に行ふ宴會とか、他の夜の饗應だとかの間、お客がそのきらきら光るのを見て樂しむやうにと、日沒後、庭園へ螢を放すことが慣習になつて居る。料理屋の主人が澤山に買ふ。大阪の有名な道頓堀には、蚊帳布で取り卷いた廣い場處に幾百萬といふ螢を飼うて居る家が一軒あつて、其處の顧客はその圍ひの中へ入つて、一定の數だけ捕つて持ち歸つてもいいことにされて居る。

生きて居る螢の卸し値は、季節と品質に應じて、百について三錢から十三錢を往來する。小賣り商人は籠に入れて賣る。東京では螢入りの籠一つの値が、三錢から幾弗までもある。一番廉い籠で、螢が三匹か四匹しか入つて居ないのは、二吋四方を出ぬ位の大いさだが、高價な籠――竹細工の眞に不思議な品物で、美しい飾りのある の――は鳴禽の籠ほどの大いさである。形の面白い或は風變りな――家屋の模型だとか、帆船だとか、お寺の提燈だ

とかの――螢籠は三十錢乃至一弗の値で買へる。死んで居ても、生きて居ても、螢は金になる。螢は一體弱い蟲で、閉ぢ籠めて置くと暫時しか生きて居らぬ。蟲店で死ぬる數は大したもので、或る有名な蟲屋は一と季節に五升を下らぬ――卽ち一ペック許りの――螢を始末するのださうなが、それは大阪の製造會社へ賣るのである。以前は煉藥や丸藥の製造に、それから又漢方に特有な藥品の調製に、現今よりも、もつと餘計に螢を使用したものである。今日でも螢から或る妙な越幾斯を取る。その一種のホタルノアブラ卽ち螢脂といふのは、竹を曲げて造つた品物を硬ばらせる目的に、指物屋が今でも使用して居る。

古風な文學を學んだ人が書いたなら、螢藥に就いて頗る奇妙な一章が出來るかも知れぬ。此題目での最も奇妙な部分は支那のもので、醫治よりも寧ろ、鬼神學に屬するものである。家へ盜賊が入らぬやうにする、或はどんな毒でもそれを消す、或は『百魔』を追ひ拂ふ力がある、と主張されて居る軟膏を昔は螢で造つたものである。それから、切られても傷を受けないやうにして吳れると信じられて居た丸藥を、螢から取つた物質で昔は造つた。そんな丸藥のうちの一種に、カンショウグワン卽ち『監將丸』といふがあり、また、ブキグワン卽ち『武威丸』といふがある。

五

螢捕りは職業として、比較的近代のものである。が、螢狩りは娯樂として、餘程古くからの習慣である。往古はこれは貴族的な慰みであつて、大貴族は螢を狩る會合を――ホタルガリを――したものである。この多忙な明治の世にあつては、ホタルガリは大人の慰みでは無くて寧ろ子供の慰みである。が、大人も時に餘暇を見出して其遊戲に加はる。日本中何處でも子供は毎夏螢狩りをする。そんな遠出には普通月の無い夜を選ぶ。女の子は紙製の團扇を携へてその狩りに隨行し、男の子は尖端（さき）に新しい笹の把を結びつけた長い輕い竿を持つて行く。螢は、團扇や笹把で打たれると、實地飛んでるのを一度邪魔されてからは翅（はね）を立てるのが遲いから、容易に捉へられる。この光る獲物の心を惹くと想像されて居る短かい歌を子供は狩りながら歌ふ。此歌は地方によつて異ふ。そして、その數は驚く許りに多い。が、此處へ引用して然るべき程の興味のあるものは甚だ少い。例を二つだけ出せば十分であらう。

（長門の國）

ホウタル、來い！　來い！　コイ點もせ！

日本一の孃さんが

提燈ともして、來いといな！

（下ノ關の方言）

ホオチン來い！　ホオチン來い！

關の町の坊んさんが

提燈ともして、來い！　來い！

固よりのこと、首尾よく螢を狩る爲めには、螢の習慣を幾分知つて居る要がある。そして此題目に就いては日本の子供は多分、我が讀者の大多數よりも餘計に知つて居る。次記の記事は、その我が讀者には珍らしい興味を有つて居るかも知れぬ。

螢は水の附近を往來し、又、其上を飛び廻はることを好む。が、或る種類のものは不潔

な水、或は停滯した水を嫌がつて、綺麗な流川か湖水の附近だけに居る。源氏螢は沼や濠や不潔な掘割を避ける。が、平家螢はどんな水にも滿足して居る樣である。總じて螢は木陰の草の生えて居る土手を好んで來めるが、或る木は嫌つて、或る木には惹きつけられる。例へば松の木は避けるし、薔薇へは下りぬ。然し柳の木――殊に枝垂れ柳――には群を爲して集まる。時たま夏の夜、枝垂れ柳が螢で一杯に蔽はれて光つて居て、其枝が『火の芽を吹いて居る』やうに見えるのを見ることがあらう。煌煌たる月の夜には、螢は出來るだけ影へ身を置いて居る。が、追はれるといふと、自分の微かな光りが前よりも見つかりにくい樣に、月光の中へすぐと飛び出る。ランプの光りや人工の强い光りはどんな光りでも、螢はそれを見ると逃げる。が、小さな光りには引寄せられる。例へば小さな炭火の光りや、暗がりで點けて居る小さな煙管火にはおびき寄せられる。然しおびき寄せの一番いいのは、綺麗な硝子の罎かコップの中へ、勢のいい螢をたつた一匹入れて置いて光らせた燈である。

子供は大抵、明白な理由の爲め、仲間を組んでてなければ螢狩りはせぬ。螢に關して氣味の惡るい或る信仰があつたが爲め、古昔は單身で螢狩りをするのは、向う見ずだと思はれて居たのである。そして、日本の或る地方ではその信仰が今なほ行はれて居るのである。

螢火と見えるものが、道行く人を欺く爲めにともして居る、惡意のある幽靈か或は化け物の火か或は狐火かも知れぬ。本當の螢火でも、いつも當てになるものとは限らぬ。螢の一族の氣味惡るさは柳の木を好くのでも察することが出來よう。柳ならぬ他の木には、その特別な、(いいのもあり惡るいのもあるが、)魂があり、木の精か化け物が棲んで居るが、柳は特に死人の木であり、人間の幽靈が好く木である。どんな螢でも、それは或は幽靈かも知れぬ。それは誰れにも分らぬ。その上にまた、まだ生きて居る人間の魂が時に螢の姿になるといふ古くからの信仰がある。つぎに記すのは自分が出雲で聞いた短かい譚である。

或る寒い冬の夜、松江の若い士族が、或る婚禮の宴會から歸宅の途中、自分の住宅の前の堀割の上を螢が一匹飛んで居るのを見て驚いた。雪の季節に外を飛んで居るのは、と怪しみながら立ち停つてそれを眺めて居ると、其光りが不意に士族の方へすいと飛んで來た。杖でそれを打つた。が、其螢はついと外れて、自分の家の鄰りの屋敷の庭へ飛んで行つた。

明けの朝、鄰人や朋友へ夜前の不思議な出來事を物語らうと思つて、其鄰家を訪問した。處がまだ、そのことを口にする折を見つけないうちに、其家の姉娘が、この靑年が訪ねて來て居ることを知らずに偶ま客間へ入つて來て、驚いて叫んでから言つた。『まあ！　吃

驚しました！　あなたがお出になつて居ると誰れも言ひませんでしたから。それに丁度、此部屋へ入る時にあなたのことを考へてゐましたから。昨夜私は實に妙な夢を見ました！私は夢に飛び歩いてゐました——私の家の前の堀割の上を。水の上を飛びあるくのは大變氣持ちが好いやうに思へました。すると、其處を飛んで居るうちに、あなたが土手沿ひに歩いておいでになるのが見えました。そこで、私はあなたの方へ飛んで行つて、私は飛ぶことを覺えましたよと申し上げようとしました。處が、あなたが私をおぶちになつたものですから、怖ろしくて怖ろしくて、今でもそのことを考へると恐はい氣がします。……」

これを聽いてから此客は、この暗合を話せば、自分が許嫁になつて居る此娘の心を驚かすであらうと思つて、暫時、自分が見た事の話はせぬがよからうと思つた。

六

螢は古昔から日本の詩歌に詠まれて居たもので、初期の古典的な散文にも屢〻記載されて居る。例を擧げると、——十世紀の末近くか、十一世紀の初めかに書かれた、——あの有名な小說、源氏物語五十四帖の一つは『螢』といふ題で、それには螢を澤山に捕へて、

それを不意に放すといふ策略を用ひて、或る貴族が暗がりで或る貴女の顔を一瞥し得たといふ話を作者が書いて居る。螢に關しての最初の文學趣味は、支那の詩を研究して起つたのでは無いにしても、その爲めに促されたものであらう。今日でも貧乏の爲めに苦しんで居る折、螢を一杯に入れた紙袋の明かりで勉强したといふ、あの有名な支那の學者を歌つた短かい歌を知らぬ日本の兒童は一人も無い。が、詩人の感激の本源は何であらうとも、日本の詩人はこれまで一千年以上の間、螢の詩を作り來たつて居る。此題での作物は日本の詩歌のあらゆる形式に見出し得ることである。しかし螢の詩の大多數はホツク――あらゆる詩形のうちの一番短かい僅か十七の綴音から成つて居るもの、――である。螢に關した近代の戀歌は無數にある。が、それ等はドドイツといふ二十六綴音の通俗な形式で書いてあるものでその大多數は、此蟲が光りを無言で燃やして居るのを、口には一度も出さぬ身を燒くやうな情熱にたぐへた、古典的な一つの詩想の變體形に過ぎないやうに思はれる。

多分、我が讀者はつぎに掲ぐる螢詩の拔萃に興味を感じられることであらう。

螢取り

迷ひ子の泣く〳〵つかむ螢かな　　流水

暗きより暗き人呼ぶ螢かな　（讀人不知）

言ふ事のきこえてや高く飛ぶほたる　曉臺

追はれては月にかくるゝ螢かな　蓼太

奪ひ合うて踏み潰したる螢かな　巳百

螢の光

螢火やまだ暮れやらぬ橋のうら　柳居

水草[寫註四]の暮るゝと見えて飛ぶほたる　探志

奥の間へ放して見たる螢かな　可廬

夜の更くる程大きなる螢かな　汶村

草刈の袖よりいづる螢かな　卜枝

此處かしこ螢に青し夜の草　鳳助

提燈の消えて尊き螢かな　正秀

窓暗き障子をのぼる螢かな　不交

燃えやすきまた消えやすき螢かな　去來妹千子

一つ來て庭の露けき螢かな　其禮

手のひらを這ふ足見ゆる螢かな　萬乎

恐[頁註五]ろしの手に透き通る螢かな　吐月

さびしさや一尺消えて行くほたる　北枝

行く先のさはるもののなき螢かな　月菓

はゝき木にありとは見えて螢かな　貢雨

袖へ來て夜半のほたるさびしいか　山幸

柳葉の暗吹かへす螢かな　好秋

水底の影をこはがる螢かな　眞久妻

過ぎたるは眼にものすごし飛ぶほたる　雪武

螢火や草におさまる夜明がた　怒風

戀の句

群れよほたる物言ふ顏の見ゆるほど　花讃女

音もせで思にもゆる螢こそ
嗚く蟲よりも哀れなりけれ　源重之

夕されば螢よりきにもゆれども
光見ねばや人のつれなき　紀友則

すいと行く水際すゞし飛ぶ螢　牧童

水へ來て低うなりたる螢かな　東籬

葛の葉の裏打つ雨や飛ぶ螢　普成

雨の夜は下ばかり行く螢かな　（讀人不知）
ゆら〳〵と小雨降る夜の螢かな　楚流
明けぬれば草の葉のみぞ螢籠　應澄
夜が明けて蟲になりたる螢かな　阿音
晝見れば首筋赤き螢かな　芭蕉
螢かうて芝四五枚に風情かな　蝶羅

螢賣りの句

二つ三つ放して見せぬ螢賣　呉竺
三つ四つはあかりに殘せ螢賣　古聲
己が身は闇に歸るや螢賣　千士

然し螢の眞のロォマンスは、日本の民間傳說の不思議な野原にも、また日本詩歌の古雅な庭園にも見出さるべきものでは無くて、科學の洪大な深淵に見出さるべきものである。科學に就いては自分は殆んど或は全く知らぬ。それが天使も踏み込むことを恐れる處へ自分が盲進することを憚らぬ所以である。若し自分が、渡瀨教授が螢に就いて知つて居られることを知つて居るならば、相對的經驗の境域を氣儘に跨ぐ氣にはならぬであらう。が、無遠慮だから自分は敢て學說を立て得るのである。

生理的及び精神的進化の素敵な假說は最早自分には假說とは思へぬ。自分はこれに疑ひを挾むことを夢想だもしない。自分は生きて居ないと云はれて居るものから生が發達して來ること——無機物から有機物が發展し來たること——を怪しまなくなつた。自分の想像力がどうもそれに慣れることの出來ない有機的進化の一つの驚くべき事實は、生の物質が系統的構造の不可解な複雜なものへ出來上つて行く潛在的能力或は傾向を所持して居ると

いふ事實である。其物質が射光を或は電氣を進化さして行く力は、それが色を進化さして行く力より、より以上に不思議なものでは實際無い。夜光蟲或は光る百足蟲或は螢が光りを造り出すことは、植物が青い花や紫色の花を造り出すよりか餘計に不思議だと思ふべき譯は無いのである。だが、此光りが出來て來る機械作用の此特殊な奇蹟をば、此現象の生物學的說明は、依然としてこれまで同樣に、自分を驚歎したなりに殘して居る。『發電裝置』といふ專門的名稱の下に包含せらるる一切の物の顯微鏡的微細な運轉模型が此蟲の體內に納められて居るのを見ることは、實地實際に存在して居るものを發見するほどに驚くべき發見では無いであらう。今現に此處に、その無限小的なるダイナモを以てして、『螢燭の炎に費やさるる勢力の消費の四百分の一で』純粹な冷たい光りを造り出し得る螢が一匹居るのである！……さて、我我の最も偉大な生理學者及び化學者すらまだ其作用を理解し得ない、又、我我の最善の電氣學者すらそれを模倣するの可能なるを思ひ得ないほど、それほどに精緻な有效な發光機械が、何が故にこの小さな動物の尻に開展進化されたものであらうか。蜉蝣の視覺器だとか、電氣鰻の電氣器官だとか、或は螢の發光器官だとかいふやうな、實に人を啞然たらしめるほどに錯雜した、そして美しいものを構成するやうに、生きた組織が何が故にそんな構造に固まつたり出來上つて來たりするのであらうか。……

この事の不可思議を思ふと、神さまが働かれるのだなんかとは、到底、自分には想像されぬ。蜉蝣の眼だとか、螢の尻だとかいふこんな奇怪な物は、ただの神さまなんかがいつまで經つても工夫の出來かねるものである。

生物學はつぎの如く答へるであらう。『こんな構造は、機能が構造に及ぼす效果の累積によつて成つたものと考へられないにしても、好都合な變形の逐次の選擇がこんな者を造り出したものかも知れぬといふことは考へ得られる』と。そしてハアバアト。スペンサアの學說を奉ずる者は誰れもこれ以上遠くへさ迷ひ出ることを實際是認されて居ないのである。が、然し自分は、物質といふものは、盲目的に誤り無しに、記憶するものであるといふ意見、それからまた、あらゆる終局的な分子には悉く、幾億幾十億の消えた宇宙の、破滅することの出來ぬ無窮な經驗が入つて居るといふ、ただ、それだけの理由によつて、生きて居る物質の一一の單位には、無窮の潛勢力が眠つて居るのであるといふ意見、――これを自分は頭から離すことが出來ないのである。

原註一　渡瀨敎授はジョンス・ホプキンス大學の卒業生である。この論文が書かれてから、その螢に關する通俗な日本語講演が美くしい單行本で再出版になつて居る。その色刷の口繪――螢が夜、柳の枝に止つ

て居る處を示したもの――だけでもその書の代價の價値がある

原註二　これは舊暦の四月二十日。新暦に據ると、其合戰は餘程後になる。昨年（千九百一年）は六月の十日であつた

原註三　りゲりビといふ言葉は、よくボンフアイアと譯するが、此處では、或る祭禮の折、田舍町や村の門邊門邊の前で焚く　木を燃やしての小さな火を指す。盆祭りの間には歸つて來る魂を迎へに田舍の方方で燃やされる。

原註四　「クルルトミニテ」の句は、イエエツ氏の「風の人」の第二節の一句を想ひ出させる。

原註五　赤く半透明になることを思はしめることから考へると作者は婦人であらう。

露の一滴

露のいのち。——佛教の諺

書齋の窓の竹格子に、一滴の露が垂れて居る。逆さの影がその小さい球面には、朝の色、——空と野と遠くの樹の色が映つて居る。顯微鏡面ののうちに見える、——それから、戸口に子供の遊んで居る小さい家のさまが、繪のやうに映つて居る。

見える世界以上のものが、その露の一滴にあらはれて居る、見えない世界、不可思議な世界も亦そのうちに再現して居る。その一滴の内にも外にも、たえざる運動——原子と力との永久に不可解な運動、——それから空氣と日光に觸れて複雜な光彩を示すかすかなる戰慄がある。

佛教は魂ひと云はれる今一つの小宇宙の象徴をこの露の一滴に見る。……人間とは正しく

目に見えない究極の元素が、假りに暫く一團となつて、——空氣と土と生命を反映する、——永久に不可思議な戰慄に滿ちた、——それから自分を取りまく靈の力のどの響きにも、どうにかして應ずる——ものでなくて何であらう。……

やがてその小さい光の球は不思議な色や逆さの繪と共に消え失せる事であらう。丁度その通り、私共も——讀者も私も間もなく解けて消え失せねばならない。

露の消えるのと人間の消えるのと、その間に何の差別があらう。言葉の違ひだけ。……

しかしその露の一滴はどうなるだらう。

太陽のために原子は分れて、上つて、さうして散る。雲と土に、河と海に行く、それから陸と川と海から再び引き拔かれて、再び新たに落ちて散る。乳色の霧の中に這ひ込み、——霜、霰、雹、雪のうちに白くなる、——大宇宙の形狀色彩を再び反映する、——未だ生れ出てない赤い心臟の小さい鼓動と共に動く。それぞれの露の一滴は外の滴——露と雨と液との滴、血と汗と涙の滴となるためには、無數の同じ原子と、再び結合せねばならない。……

幾度であらう。この太陽の未だ燃え出ぬ以前、幾十億代の昔、それらの原子は多分外の

滴とともにどこかの宇宙て世界の空の色と大地の色を反映しながら、搖れてゐたてあらう。それからこの現在の宇宙が空間から消失したあとでも、その原子自身は、――それを造つた不可解の力によつて――多分引續き露と結んて、未來の惑星の朝の美を映すであらう。

自己と私共が名づけるその合成物の原子も正しくこれと同様。日月星辰以前に私共の原子はあつた、――さうして生動し、――活動して、――物の外貌を反映した。それから日に見ゆる夜の星が悉く燃えつくしても、その原子は疑もなく心の形成に與かるであらう、――思想、情緒、記憶のうちに――未だ進化せんとする世界に、未だ生きんとする人々の凡ての喜びと悲しみのうちに――再び顫動するであらう。……

私共の個性、――私共の特性はどうなるだらう。私共の觀念、情操、回想、――私共の特別の希望と恐怖と愛憎はどうなるであらう。さて露の萬億毎に原子の戰慄と反映の極少量の差別があるに相違ない。それから生死の大海から引き上げられた靈の蒸氣の無數の粒の一つ一つに同じやうに極少量の特質がある。私共の個性は永遠の眞理から見れば、一滴の戰慄のうちの微分子の特殊な運動と丁度同じ事てある。恐らくどの外の滴に於ても、そ

の戰慄と映象は全く同一である事は決してあるまい。しかし露はいつまでも結びかつ解けよう。さうしていつも搖れ動く繪があらう。……迷のうちの迷は、死を無と解することである。

無ではない――無くなるべき自我はないからである。何であつたとして、私共はそのものであつた、――何であるにしても、私共はそのものである、――何であらうとも、私共はそのものにならねばならない。人格、――個性、――それは夢のうちの夢の幻影に過ぎない。あるものはただ無窮の生命だけ、それからあるらしく見えるものはただ、その生命の顫動に過ぎない、――日、月、星辰、――地、空、及び海、――それから心、人間、及び空間と時間。一切のものは影である。その影は現れて又消える、――影を造るものは永久に造る。

餓鬼

――「那伽犀那尊者よ、この世に夜叉と云ふやうなものは居りますか」

――「居りますとも、王よ」

――「彼等はいつか、その夜叉たるの状態を脱離いたしますか」

――「はい、いたします」

――「しかし、尊者よ、もしさうとすれば、夜叉の遺骸なるものを見たもののないのは……どう云ふ理由ですか」

――「その遺骸はあります、大王よ。……惡き夜叉の遺骸は、蠕蟲、甲蟲、蟻、蛇、蠍、及び百足……の體形となつて現はれてゐます」――

――「彌蘭陀王問經」譯註一

一

これまでただ朧げにのみ知られた眞理――種々なる推理の方法によつて始めて曖昧ながら達せられた信仰――が突然感情上の信念と云ふ明白な性質を帯びて來る時が一生のうち

にある。こんな經驗が先日駿河の海岸て私に起つた。汀を飾る松の樹の下に休んで居る間に　その時刻の輝いた穩かさと生命を與ふる暖さの故て、――風と光の動搖する悦びの故て――甚だ不思議にも、私の古い信仰が蘇つて來た。萬有は一と云ふ信仰である。風のそよぎ、波の走りも、――影のどの閃きも、日光のどの動搖も、――空と海の青色も、――陸の大きな綠の靜寂も、　　自分と同一であると感じた。始りはなかつたらう――終りもなからうと云ふ事を、一種新しい不思議な風に信じて來た。しかしその時感じたこの考は新しいものではない、ただこの經驗の新奇な點は、この考は全く特別の强さをもつて現れて來て、私に、閃き飛ぶ蜻蛉も、長い灰色のこほろぎも、頭上に鳴く蟬も、松の木の根で動く小さい赤い蟹も、悉く皆自分の兄弟姉妹であると感じさせた事であつた。私はこれまでは分らなかつたが、今始めて、自分の魂と云ふ不可思議なものが、過去の種々の體形の生存狀態のうちに生きてゐたに相違ない事、それから今後數百萬年の間無數の未來の生存狀態の眼によつてやはり續いて必ず太陽を見るに相違ない事を悟つたやうに思つた。それから私は長い灰色のこほろぎの長いのろい心、――矢のやうに閃きながら飛ぶ蜻蛉の心、――日に暖まりながら鳴く蟬の心、――松の根の間から鋏を上げるいたづらの小さい蟹の心、――その心になつて見ようと思つた。

やがて私はこんな事を考へると來世に於ける私の魂の細胞の改造に何か影響せぬであらうかと疑つた。數千年間、東洋では、この世での思ひ又行ひは、――何か元子傾向の必然の形成、或は兩極性のために、――私共の體の未來の位置、及び私共の心の未來の狀態を決定すると教へられて居る。この說には成程と思はれる所がある、――しかし如何程考へて見ても、この說を確める事も、反駁する事もできない。他の佛說と同じく、大方何か洪大無邊の眞理を暗示して居るやうである。しかしその文字通りの立論には疑がある。卽ち思ひと云ふ事を強く見てある點は、疑はねばならないからである。私の心も體も、無限の過去全體によつて造られたのである。しかし刹那の念が、どうして永劫の力に反して、私を造り直す事ができよう。……佛教では、その次第を述べて居る。それから、その述べ方には反駁ができない、――しかし私は疑ふ。……

とにかく佛說によれば行ひも思ひも、ものを創造する。見ゆるものは行ひと思ひによつて造られる、――星の宇宙でも形と名のある一切のものでも、それから總ての種類の存在も。私共の思ひも行ひも刹那のものでなく無限の時のものである。世界を造る事、――未來の幸福と苦痛を作る事に向けられる力である。これを記憶すれば、私共は神々の境に向上する事ができる。それを無視すれば再び人間に生れかはる權利をもなくして、地獄に再

生する程の罪はなくとも、動物、昆蟲、或は餓鬼の形體となつて生を受けねばならぬやうになる。

來世に於て昆蟲となるか餓鬼となるかは、全く私共自身の故である、それから佛教の系統では、昆蟲と餓鬼の相違は思つた程よく差別はしてない。靈魂と昆蟲、むしろ靈魂と昆蟲との不可思議なる關係に關する信仰は、東洋では非常に古い信仰で、無數の形式となつて存して居る、――非常に恐ろしいものもあれば又物凄い美しさのこもつたものもある。キラカウチ氏の「白蛾」は小說としては日本の讀者は何とも思ふまい。即ち夜の蛾或は蝶は多くの日本の歌や傳說には死んだ妻の魂として現れて居るからである。夜鳴くこほろぎの細い悲しい啼聲は、或は昔人間であつたもののなげきの聲である、――蟬の頭の上の妙な赤いしるしは戒名の文字である、――蜻蛉やこほろぎは死者の馬である。總てこれ等の昆蟲は愛情に近い憐みをもつて憐まるべきである。しかし有害な危險な昆蟲は別種の業報――怪物魔神を生ずる業報の結果の現れたものである。こんな蟲には物すごい名のついたのがある。例へば「うすばかげろう」を「蟻地獄」と云ふ、蛙や魚を捕へて生きたまま喰べて、河童の恐ろしい傳說を極めて小さく實現する大きな「がむし」を「河童蟲」と云ふ。蠅は又殊に餓鬼と同一視される。蠅の季節になると惱まされる人が「今日の蠅は餓鬼のや

うだ」と云つて居るのをどんなによく聞く事であらう。

二

餓鬼に關する古い日本の、或はもつと正しく云へば、支那の佛典では餓鬼の名は大概梵語になつて居る。中には支那の名しかないものもある。印度の信仰は支那及び朝鮮を經て日本に渡來したものだから途中で特別の着色を受けたらしい。しかし大體に於て餓鬼の日本の分類は餓鬼の印度の分類とよく似て居る。

佛法では餓鬼道はあらゆる存在の最下層なる地獄道からただ一階だけ離れて居る。地獄道の上は餓鬼道、餓鬼道の上は畜生道、その又上は修羅道、その上が人間道になつて居る。そこで地獄へやられた人間が、その業報が盡きると地獄から放たれるが直に人間界へ生れかはる事はなく、その間の凡ての『界』を徐々に經上らねばならない。餓鬼の多數は地獄にゐたものである。

しかし又地獄に墮ちた事のないものもある。或種類、或程度の罪は、この世界でその人が死んでから直ちに、餓鬼となつて再生する原因になる。最大程度の罪だけがその人を直

ちに地獄に墮す。第二の程度のものは餓鬼道に墮す。第三のものは畜生道卽ち動物に再生させる。

日本の佛教は三十六の重なる種類の餓鬼を認める。正法念處經は云ふ、大別して云へば餓鬼に三十六種類ある、しかし總ての異なつた種類を擧げようとすれば、その數は無數である。この三十六種類を二大別する。一は餓鬼世界住を包含する、卽ち餓鬼道そのものに住する餓鬼であるから、人間には決して見えないもの。今一方は人中住と云はれる。この餓鬼はこの世界にいつも住して居るから時として見られる。

懺悔の苛責の性質によつて、もう一つの分類がある。總ての餓鬼は飢渴に苦しむ。しかしこの苦しみにも三つの程度がある。無財餓鬼は第一の程度を表はす。何の榮養をうける事なくして、間斷なく飢渴を覺えねばならない。少財餓鬼はたゞ第二の程度の苦しみを受ける。彼等は時々不潔なものでも喰べる事ができる。有財餓鬼はもつと幸である。彼等は人間の棄てるやうな殘飯殘肴、或は神佛の前や祖先の位牌に捧げられた供物を喰べる事ができる。このあとの二種類の餓鬼は特に面白い。それはこの餓鬼は人間の事にも干渉すると思はれて居るからである。

近代の科學が或種類の病の性質と原因に關する正確なる知識を弘めるまでは、佛敎徒はこんな病の症狀を說明するに餓鬼の臆說によつた。たとへば或種類の間歇性の熱病は餓鬼が榮養と體溫を得ようとして人體に入り込むために起ると云はれた。始め患者が寒氣のために震へるのは餓鬼が寒く、つめたいからである。それから餓鬼が次第に溫まるから、寒氣がなくなつて、燒けるやうな熱になる。最後に飽滿した餓鬼は去る。それで熱はなくなる。しかし又別の口に、それからいつも第一回の攻擊の時刻に相當する時刻に、第二回の瘧て又餓鬼が歸つて來た事が分る。その他の傳染性の病氣は同じく餓鬼の作用として充分に說明ができる。

正法念處經では三十六種類の餓鬼の大多數と腐爛、疾病、死とを結びつけてある。その他は明かに蟲類と同一になつて居る。或特別の種類の餓鬼と或特別の種類の蟲と名は同一であるわけではないが、その餓鬼の說明は蟲の生活狀態を思はせる、それから一般の迷信を知つて居るものには、一層强くさう思はせる。次のやうな餓鬼の說明は或は明瞭でないかも知れない、卽ち食血餓鬼、食唾餓鬼、食糞餓鬼、食毒餓鬼、食風餓鬼、食香烟餓鬼、

食火炭餓鬼（飛んで火に入る蟲の如きものであらう）、疾行餓鬼（屍を喰つて疫病を傳染させる）、燒燃餓鬼（さまよふ火となつて夜あらはれる）、鍼口餓鬼（口は針孔のやうに小さく食を得ても喰べる事ができないので飢渇する）、食身餓鬼（沸騰した鐵瓶のやうに肉身の液をたぎらせる火焔の滿ちた白熱の坩堝のやうだ。 しかし次の抄錄[原注一]の示す所は少しも不明瞭ではない。

食毛餓鬼。この餓鬼は或佛像の飾りとなつて居る髪の毛を食してのみ生きる。……佛寺から貰いものを盗む人の來世の境遇はかうなるのである。

不淨巷陌餓鬼。この餓鬼は往來の不潔物汚物をのみ食し得る。僧、尼、又は施しを行ふべき巡禮に腐敗した或は不衞生な食物を與へた結果は、この狀態である。

塚間住食熱灰土餓鬼。これは火葬の薪の屑や墓石の破片を喰ふもの。……利益のために寺院を掠めたものの魂である。

樹中餓鬼。この魂は樹木の材のうちに生じてその組織の生長と共に苛責を受ける。……この境遇は、木材を賣るために、蔭を與へる樹木を切倒した應報である。墓地や寺院の境内の樹木を切倒した人は殊に樹中餓鬼[原注二]になり勝ちである。

蛾、蠅、甲蟲、毛蟲、蛆、その他の不快な蟲はかくの如く表はしてあるらしい。しかし餓鬼の中には蟲と同一に視られないものがある、――たとへば食法餓鬼と云ふ種類の如きはそれである。これはどこかの寺院で說教を聞いてゐなければ生存ができない。說教を聽いて居る間だけ苛責は和げられるが、外の時には云ふべからざる責苦を受ける。こんな境遇に置かれさうなのは、たゞ利慾の爲めに佛法を說く僧尼の死後である。……それから時に綺麗な人間の姿となつて現れる餓鬼がある。これは欲色餓鬼で――西洋中世時代のインキユバス、サツキユバスと云ふ男女の妖魔に相當して居る。彼等は隨意に男女の性を變へる、それから好きなやうに身體を大きくも、小さくもする事ができる。針の目よりも小さい孔を通る事ができるから、強い魔除けや呪文でなければ如何なる家からも追ひ出す事ができない。若い男を誑すには綺麗な女の姿になる、――よく給仕女や舞妓となつて酒席にも現れる。女を誑すには美少年の形になる。この欲色餓鬼の境遇は何か前世の淫業の結果であるが、彼等の境遇に伴ふ超自然の力は、惡業報でも全く打消す事のできない善い業報の結果である。

しかし欲色餓鬼について見ても、この餓鬼は蟲になれる事が明かに述べてある。人間の姿になるのが普通ではあるが、また動物にでも何にでもなれる。それから自由にどこへ

ても飛べる——或は體を「小さくして人間に見えないやう」にもする事ができる。……蟲は皆、必ずしも餓鬼ではないが、大多數の餓鬼は必要に應じて蟲の形になれる。

三

こんな信仰は今日私共に奇怪に思はれる所、古への東洋の想像が蟲類と惡魔幽靈とを一緒に考へた事は不自然ではない。私共の目に見える世界では蟲類程不可思議な神祕的な動物はゐない。それから或種類の蟲類の實際の歷史は全く神話の夢を實現して居る。原始人間の心に取つては、蟲類の變形は怪しく思はれたに相違ない。枯葉や花や草の附根と同一であるから、どんなに銳敏な人間の眼でも、歩き出したり飛び始めたりして始めてその存在が分る程奇體な生物は妖怪變化の術としか說明できないではないか。今日の昆蟲學者に取つても、蟲類は動物の中で依然として最も不可解のものである。昆蟲學者は、——蟲類は生存競爭では「有機體中、最も成功するもの」と認められねばならない事、——その構造の複雜微妙な事は、顯微鏡時代以前に驚異に値すると思はれた如何なるものよりも優れて居る事、——またその感覺の精巧な點では、私共の方が盲目で聾であると云つてよい程、

私共の感覺と比べて遙かに優れて居る事を教へて居る。それでも昆蟲の世界は、依然として絶望の謎の世界である。無數の複眼を有せる眼の秘密、それと連結せる視神經の秘密を私共に說明のできる人はあらうか。その不可思議な眼は、物質の究極の構造を透視するのであらうか、その視力はレントゲンの光線のやうに、不透明體を貫くのであらうか。（さもなければ、尾長蜂が木目の內部に潛んで居る他の昆蟲の幼蟲に達するやうに、固い木を貫いてその産卵管をつきさす狙ひの手際の確かな事は、どうして說明できよう）それから胸や股や膝や足にある不思議な耳、——人間の聽覺の範圍以上に音聲を聽く耳はどうして說明できよう。それからあの神仙のやうな好音を出すやうに進化して來た音樂的構造の說明は何であらう、流れる水の上を步く不可思議の足の說明は何であらう。私共の電氣科學では眞似もできない冷い綺麗な光となる——あの螢のあかりを點火する化學の說明は何であらう。それからその新しく發見された、比べものがない程、纖細な機關、——最も聰明な人々もその性質を決定する事ができないから、未だ名をつけない機關、——或人が云つて居るやうに、その機關によつて、人間の感覺には分らない事——磁氣が見える事、光の香ひ、音聲の味——が蟲類には分るやうになつて居るのであらうか。……蟲類に關して私共の知る事のできる事は極めて僅かであるが、それだけでも恐怖に近い驚きをもつて

充たされるのである。手である蓍、眼である角、筆である舌、同時に四通りに動く複雑な魔物の如き口、生きた鋏と鋸と孔をうがつポムプと曲り柄の錐、最も纖巧な時計ぜんまいのはがねででも、人間わざではうつしとれない微妙な魔法のやうな武器、――これ等のものを見て、古への迷信は何を想像した事であらう。實際、頭の無いものを夢に見て魘される事も、まぼろしの美を想像して有頂天になる事も、昆蟲學に表れた驚くべき事實と比べては、氣の拔けた空しいものとしか思はれない。しかし昆蟲の美そのものは何か妖怪らしい處、何か氣味の惡い處がある。……

餓鬼は存在するものかどうかは別として、死者は蟲になると云ふ東洋の信仰にはとにかく多少の眞理が漂つて居る。疑もなく私共人間の土塊は、數百萬代の間くりかへしくりかへし無數の不思議な形態の生命を形成する助けをしなければならない。しかし松の樹の下の私の空想したあの問題、――卽ち現在の行ひや思ひがその土塊の未來に於ける分配及び再生に何か影響があるかどうか、――人間の行爲そのものは人間の原子が造り直される形

體を豫め決定する事ができるものかどうか、——この問題については——何の答もできない。私は疑ふ——が分らない。誰にもやはり分らない。

しかし宇宙の秩序は全く佛說の通りであると想像しても、それから私はこの世で何か拙い事をしたために來世には蟲の生活を送らねばならないと、豫め定まつて居ると想像しても、私はその想像で驚き恐れる事はない。平氣では考へられない蟲がある、しかし獨立の高尙な機關の相應な蟲の狀態はそんなに惡いわけはない。私は多少の喜ばしい好奇心をもつて甲蟲、かげろふ、或は蜻蛉の驚くべき複眼によつて世界を見る機會を樂しみにして居る程である。かげろふとなつては、實際私は三種の違つた眼をもつて、今全く想像のできない色を見る力をもつ事ができよう。人間の時間の測定から見れば、私の生命は短いかも知れない、——夏のたゞ一日はその一生の大部分にもあたらう、しかし、かげろふの意識から見れば、二三分は一季節にも見えよう、それから私の羽のある生活の一日は——或は災難もあるだらうが、それを除いて——黄金の空氣中に踊ると云ふ疲勞のない悅びの連續であらう。それから私の羽のある生活狀態では本當の口も胃もないから飢えも渴きも感じないだらう。私は實際に風を食ふものとして生きる事になる。……或はそれ

よりももつと俗な蜻蛉の境遇になつても差支はない。その時には、私は肉食の飢ゑを感じて盛に狩をせねばなるまい、しかし蜻蛉でも烈しい狩の喜びの後に淋しい默想に耽る事ができる。その上私の羽はその時どんなものであらう——それからどんな眼であらう。……私は確に「あめんぼう」(原註三)になつて——子供が私を捕へて、長い綺麗な足をもぎ取るかも知れないが——水の上を走つたり滑つたりできる事をさへ喜んで豫想する事ができる。しかし私はむしろ蟬——風にゆられる樹にとまつて日向ぼつこをして、露ばかり吸つて、曉から日暮まで歌つて居る大きな怠惰な蟬の生涯を樂しみたい。勿論遭遇すべき災難、——鷹や鴉や雀からの危險、——肉食蟲からの危險、——惡童のもち竿の危險、——がある。しかしどの生命の境遇にも危險はある。それにも拘らずアナクレオン(原註四)の蟬の讃、「汝土より生れたるもの——歌を愛する——苦痛のない——肉ありて血のない汝は——殆んど神々と同一である』と云ふ讃辭は事實を過大に云つてゐない。……實際、私は再び人間となつて再生する事をこの上もない恩澤とばかり考へる事ができない。もしかう考へてから書く事が來世の因緣をつくるものなら、それなら私の望みはかうである、——私は杉の樹に上つて日のあたる所で極めて小さいシムバルを震動させたり、——或は紫水晶と黄金の色の翼を音もさせずに飛ばせて、蓮池の貴く靜かなあたりを往來したりする蟬か蜻蛉の生涯にせ

めて生れ變りたい。

原註一　正法念處經より摘錄、餓鬼に關する驚くべき一章の全譯は、讀者の神經をひどく苦めるであらう。

原註二　樹木の精に關するつぎの話は代表的なものである、――

近江國愛知川村の薩摩七左衛門と云ふ武士の家に甚だ古い榎があつた。（榎は普通お化の樹と考へられる）昔から、この家の祖先はこの樹の枝を伐る事や、その葉を除く事を決してしないやうに注意してゐた。しかし剛情な七左衛門は、或日、この樹を伐る事にしたと云ひ出した。その夜七左衛門の母の夢のうちに大きなものが現れて、榎を伐ると、この家の人を一人も生かして置かないと云つた。この警告を七左衛門に話したが、彼はただ笑つて、取合はない、それから人をやつて、その樹を伐らせた。その樹が倒れると同時に七左衛門は烈しく狂ひ出した。幾日間も發狂のままであつたが、時々「樹が、樹が、あの樹が」と叫んだ。樹が枝を手のやうにのばして自分を引き裂くと云つた。こんな狀態のままで死んだ。それから間もなく妻が發狂して、樹が自分を殺しに來たと云つて、恐怖のために叫びながら死んだ。代る代るその家の人々は悉く、下女下男まで殘らず發狂して死んだ。その家は永く住む人がなかつた、庭に入る事をさへ敢てする人はなかつた。最後にこんな事件が未だ起らない頃、この薩摩家の女が一人尼になつて、慈訓と云ふ名で、山城の或寺に居る事が分つて來た。この尼を迎へる事になつた、それから村の人々の願によつて、この尼はそれから死ぬまでその家に住んで、――毎日、樹の中にゐた魂のために勤行讀經を怠らなかつた。その家に尼が住む事になつてから、樹の精は穩かになつた。この話は、尼自身の口からそれを聞いたと云

ふ俊行と云ふ僧から出た確かな話である。

原註三　日本の或地方では禅律の達人になりたいものは「あかんぼう」の肉を食はねばならないと云はれて居る。

譯註一　「彌蘭陀王問經」は一國の大衆を統率する王者と三藏の大導師をもつて任ずる一僧との佛教の教理に關する質問應答を集成したもの。問者ミランダ王（ミリンダ或はメナンダ）はギリシヤよりアフガニスタンに到るギリシヤ種族の大王、答者ナガセナは中印度の名僧、ともに紀元前百四十年頃の人々。この經の邦語譯は國譯大藏經にある。

譯註二　サー・アーサー・キラカウチ（Sir Arthur Quiller-Couch 一八六三――）英國の小説家兼批評家。

譯註三　インキユバス及サツキユバスは、ともに中世時代に夢魔を起すものと考へられた妖怪。

譯註四　アナクレオンは紀元前五六三年頃生れて四七八年頃歿した名高いギリシヤの抒情詩人。

尋常の事

時々私をおとづれる禪宗の老僧、——生花その外古い藝術の名人——がある。色々の古風な信仰に反對の說教をして緣起や夢合などを信じないやうに說き、ただ佛の敎をのみ信ずるやうに勸めて居るが、それでも檀家には評判がよい。禪宗の僧でこんなに懷疑的なのも少い。しかしこの私の友人の懷疑も絕對ではない、先日遇つた時、話は死者の事に及んだが、何だか氣味の惡い事を聞かされた。

『幽靈だの、お化だのと云ふ事は愚僧は信じない』僧は云つた、『時々檀家の人が來て幽靈を見た、不思議な夢を見た、と云つて來る、しかし詳しく尋ねて見るとそれには相應の說明のつく事が分つて來る。

『たゞ、愚僧は一生に一度中々說明のつかない妙な經驗をした事がある。その頃九州にゐて若い沙彌であつた、若い時にはだれもやらねばならぬ托鉢をやつてゐた。或晚山地を

旅して居る間に禪寺のある村に着いた。きまり通りそこへ行つて宿を頼んだが、主僧は何里か離れた村へ葬式に出かけて、一人の老尼だけが留守に殘つてゐた。尼は主僧の留守中、人を入れる事はできない、それから主僧は七日の間は歸るまいと云つた。……その地方では檀家に死人があれば、僧が行つて七日の間、毎日讀經して佛事を行ふ習慣となつてゐた。……愚僧は食物はいらない、たゞ眠る所さへあれば結構と云つた。その上非常に疲勞して居る事を話して頼んだので、尼はたうとう氣の毒がつて、本堂の須彌壇の近くに蒲團を敷いてくれた。横になると愚僧はすぐに眠つてしまつた。夜中に――大層寒い晩であつたが――愚僧の休んで居る近くの所で木魚をたたく音と、誰かが唱へる念佛の聲で眼がさめた。眼を開けたが、寺は眞暗で、――鼻をつままれても分らない程の暗さであつた、それで愚僧は不思議に思つた。こんな暗がりのうちで木魚をたたいたり、讀經をしたりするのは一體誰だらう。しかし響きは初めは餘程近いやうだが、何だかかすかでもあつた、それでこれは自分の思ひちがひに相違ないとも考へて見た、――主僧が歸つて來て寺のどこかでお勤めをして居るのだとも考へて見た。木魚の音と讀經の聲に頓着なく、愚僧は又寢込んで、そのまま朝まで眠りつづけた。それから起きて顏を洗つて着物を整へるとすぐに老尼をさがしに行つた。それから昨晩の御禮を云つたあとで、「昨夜あるじは御歸りになりました

ね」と云つて見た。「歸りません」老尼の答は意地惡さうてあつた。「昨日申しました通り、もう七日間は歸りません」「ところで昨晩誰か、念佛を唱へて木魚をたたくのを聞いたので、それて、あるじが御歸りになつた事と思ひました」と愚僧は云つた。「あゝそれならあるじぢやありません、それは檀家です」と老尼は叫んだ。愚僧は分らなかつたから「誰です」と尋ねた。「勿論死んだ人てす。檀家の人が死ぬといつてもさう云ふ事があります。そのほとけは木魚をたたいて念佛を唱へに來ます」……老尼はそんな事には長い間慣れて來たので、云ふまでもない事と思うて居るやうな口振て云つた」

默想

生れ兒が世の中へ出る時、どんな愛の手がそれを受けようとして待つて居るか知る事ができないで泣くやうに人間は死を恐れると云はれて居る。この比較は確に科學的檢査にはたへない。しかし都合のよい空想としては美しい。そんな空想が何等宗教的の意味をもたらさない人々、――個人の精神は肉體と共に死滅する、それから個性の永遠の連續は永遠の不幸になるばかりと信ずる人々に取つても美しい。思ふにこの空想が美しいのは絶對は母性愛を無限に擴大したものであるといふ事を廣い知識の人々に分らせたいと云ふ希望、それをそんな卑近な方法であらはして居るからである。この想像は西洋風よりもむしろ東洋風である、しかも私共の西洋の多くの信條に漠然と表れて居る情操と一致して居る。絶對を父と見る古い冷い考のうちに、その後次第に注がれて來たのは、無限にやさしい新しい明るい夢であつた、――母としての女の記憶から創造された一切のものを變形し理想化する希望であつた。それて各人種が一段高い方へ進化すればする程その神の觀念は一層女

性的になる。

逆に又この考は、どんな不信者にでも、凡ての人間の經驗の範圍では母性愛程貴いものは外にない、――神聖と云ふ名に相當するものはこの外にない事を思はせる。母性愛のみがこの哀れな小さい星の表面で弱い命の心を育たしめ、生かしめたのであらう、その無上の無私の力によつてのみ、貴い種類の感情が人間の頭腦の内に花咲く力を得たのであらう、――母性愛の助けによつてのみ、靈界に對する高尙なる種類の信任が生れ出づる事を得たのであらう。

しかしこの種類の空想は自然に私共を導いて、何處へ行く及び何處より來れるの神祕に關する情緒的質問に自答させる。進化論者は母性愛を單に物質的親和力――原子と原子の引力の必要なる結果と考へねばならないだらうか。或は東洋の古への思想家とともに、凡ての原子傾向は一つの永久の道德法によつて律せられる事、それから或者は、四つの大きな感情の表現であるから、それ自身神聖である事を進んで主張する事ができようか。……如何なる智慧が私共のために決定を與へてくれるであらう。それから私共の最高の感情は神聖である事を知つた處で――人類そのものが絕滅すべき運命をもつて居る以上、――何

の役に立つか。母性愛が人類のためにその最善をつくした時、その最善が無駄であつた事にならないだらうか。

初めに考へた所では、全くこの避くべからざる絶滅は想像し得る悲劇の中の最も暗黒なるもの、――絶大の悲劇に見えるに相違ない。結局私共の地球は死滅するに相違ない、空氣の碧い靈も消散し、海は涸れ、土さへも全然無くなつて、殘るものは砂と石の廣漠たる荒敗――世界の枯渇した屍――だけになるに相違ない。それでも暫らくはこのミイラが太陽のまはりをまはるであらうが、ただ死んだ月が今日、夜を横切つてまはるやうに――一方は永久に焦げるやうな炎を擧げ、他方は氷のやうな暗黒のままでまはるであらう。そんな風に髑髏のやうに白く、禿げて、まはるであらう、それから髑髏のやうに晒され、ひびが入り、それから崩れて、絶えず、その燃える親なる太陽の方へ、近く引寄せられて、最後にその旋風の如き呼吸の電光のうちに、不意に消滅するであらう。一つ一つ殘りの惑星も同じ跡を追ふであらう。それからその巨大な星、太陽それ自身も衰へて來る、――光の色物すごく變つて動搖し――赤くなつてその死の方へ赴くであらう。それから最後にこの巨大な、裂目のある燃えがらは、どこかの巨大な太陽の燃燒材料の中へまき込まれて、幽

靈の見る夢の中の夢よりももつと稀薄な蒸汽となつて消えるであらう。……

それなら、これまでの一生――際限のない深淵のうちに消失した跡を示すべきしるしさへもなくなつた一生の働きは、何の役に立つてあらう。それなら母性愛に何の價値があらう、犧牲と希望と記憶、――その聖い喜び、さらに一層聖い苦痛、――その微笑と涙と神聖な愛撫、――消失した無數の神々に對するその熱心なる無數の祈り――のあつた人間の愛情の亡びた世界全體に何の價値があらう。

こんな疑や恐れは東洋の思想家を惱ます事はない。西洋の人を惱ます理由は重に誤れる思想の習慣、及びそのために私共がそれ程長く、靈魂と呼んで來たものは本質でなく形體に屬するものなることを承知する事が、盲目的に恐ろしいからである。……形體は永久に連續して現れ又消える、しかし本質だけは眞である。百萬の宇宙は消散しても、眞なるものは失はれない。全き破滅、永久の死、――總てこんな恐怖の言葉は、永久の變化の法則を除いて、外に何等眞なるものに關係する處はない。形體が亡びると云つても、波が去つて碎けると同じ事にすぎない、ひき去るのは新たに又漲るためである、――何物も失はれる事はない。……

雲散霧消した私共のもやのうちに、これまで人生にあつたものの總ての本質、——善なり惡なりをつくる力の遺傳、その親和力、その傾向、幾百萬代の間に蓄積された凡ての勢力、これまで人種の强さをつくつた凡ての精力をもつて、——これまであつたもの及び現在あるもの凡て一つ一つの存在物は生き殘るであらう。——それから數へ切れぬ程、度々これ等のものが、生命と思想を得るやうに形成されるであらう。變形變質も行はれるであらう。親和力の多少、偏向の增減によつて變化も又起るであらう。卽ち私共の塵がその時、數へられない程の他の世界、及びその人類の塵と混淆して居るだらうから。しかし本質そのものは何も失はれてゐない。私は必ず未來の宇宙を造るために——そのうちから新たなる智慧が徐ろに進化して來るその實質に——私共の分を遺すであらう。消散した無數の世界から私共の精神作用の幾分を遺傳したに相違ないと同じく、未來の人類も、私共からばかりでなく、又今日存在して居る數百萬の惑星からも遺傳するであらう。

私共の世界の消滅は、宇宙の消散から見れば、思ひ出消滅した只一つの極めて小さい例を表はすに過ぎない。私共と同じ運命にあふべき人類の棲息せる天體の數は天に見ゆる光よりも多いから。

しかしその無數の太陽の火とそれに伴ふ目に見えない數百萬の生きた惑星は、とにかく

再び現れるに相違ない、再び自ら消滅して自ら生れ出た不可思議な宇宙は、永遠の深淵を超えて恒星としての廻轉を再び續けるであらう。それから死と永久に爭つた愛は再び永遠の戰を新たにするために、苦痛の新しい無窮を通つて起き上るであらう。

母の微笑の光は私共の太陽よりも長く生きるであらう、――母のキスの動悸は星の動悸以上に續くであらう、――母の子守歌のよい音調は、未だ出現しない世界の子守歌までにも殘るであらう、――母の信仰のやさしさは、他の天の神々――現在の時以外の時の神々に對してなすべき祈禱に熱を加へるであらう。それから母の胸の甘い乳汁は決して止まる事はない。その白い流れは私共の夜の天にかかつて居る天の河が、永久に空間から消失して居る頃、私共の人生よりもつと完全な人生の生命をはぐくむために、續いて流れるであらう。

病理上の事

大層私は猫好きである、洋の東西で色々の時、色々の風土で、私が飼つた色々の猫の事を書いて一冊の大きな書物にする事もできようと私は思ふ。しかしこれは猫の本でない、それで私はただ心理上の理由で「玉」の事を書く。玉は私の椅子の側で寢ながら一種特別の聲を發して居るが、それは私の心に特別の感動を與へる。その聲は猫が子猫に對してのみ發する聲で、――柔かなやさしい震へ聲――全く愛撫の音調である。それから横に寢て居るその姿勢は何かをもつて居る、――何か捕へたばかりのものをもつて居る猫の姿勢である。前足は何かつかむやうにのばして眞珠のやうな爪は動いて居る。

玉と呼んで居るのは、綺麗だからではない、（但し綺麗ではある）たゞ玉と云ふ名は普通飼猫につける女性の名であるからである。三毛猫は日本では珍らしいので、――始めて私の處へ重寶な進物として贈られて來た時は、甚だ小さい子猫であつた。日本の或地方で

はこんな猫は縁起のよい猫で、鼠と同様お化をも退治する力があると信じられて居る。玉は今二歳である。脈管に外國の血があると思はれる。一般の日本の猫よりももつと優美でもつとほつそりしてゐて尾は著しく長い。それだけが日本人の眼から見ると缺點である。多分彼女の祖先の一人が家康の時分にオランダかスペインの船で日本へ來たのであらう。しかしどんな祖先から來たにしても玉はその習性では全く日本の猫である。――たとへば玉は米飯をたべる。

始めて子供をもつた時には全く立派な母である事を證明した。子供の世話に精力と智慧のあらん限りをつくしたので、たうとう子供の養育と子供のための骨折とで氣の毒な程、叉をかしい程やせてしまつた。彼女は子供等に、清潔法や、――遊ぶ事、跳ぶ事、相撲を取る事や――狩獵の法を教へた。初めのうちは勿論、ただ自分の長い尾をおもちやにして遊ばせてゐた。しかし、後に外のおもちやを見つけてやつた。野鼠家鼠ばかりでなく、蛙、とかげ、蝙蝠までも持つて來た。それから或日小さな八ッ目鰻をもつて來たが、それは近所の水田で、何とか工夫して捕へて來たものに相違ない。日が暮れてから私はいつも臺所の屋根から狩に出られるやうに、――書齋に通ずる階段の上の小さい窓を、彼女のために

開けて置いた。そこで或晩その窓から、彼女は子猫のおもちやに大きな藁草履を持ち込んで來た。野原で彼女はそれを見つけた。それから一丈の板塀を越えて、家の板壁を上つて、臺所の屋根に上つて、それから小窓の格子をくぐつて、階段へ持ち込んだに相違ない。そこで彼女と子猫は朝までそれをもつて大騒ぎして遊んだ。それから草履は泥だらけであつたので階段をよごした。母としての第一の經驗で玉よりももつと幸運な猫はゐなかつた。

しかしそのつぎは運がよくなかつた。彼女はあぶない程離れた外の町で友達の猫を訪問する習慣がついてゐた。それで或晩そこへ行く途中或野蠻な人間に害を加へられた。ぼんやりして弱つて歸つて來た。それから子猫は死んで生れた。私は彼女も死ぬだらうと思つた。しかし誰にも想像できない程早く回復した、――それでも明かに心はやはり子猫をなくした事で惱まされて居る。

或種類の一時的の經驗に關しては動物の記憶は奇態に薄弱で朦朧として居る。しかし動物の本質的記憶、――數へきれぬ幾千億の生活の間に蓄積された經驗の記憶は超人間的に生々として殆んど誤る事はない。……溺れた子猫の呼吸作用を回復する驚くべき巧妙な手際を思ひ見よ。始めて見た危險な敵、例へば毒蛇に面する時の教へられた事のない技倆を

思ひ見よ。小さい動物とその習慣に關する彼女の廣い知識――彼女の草木に關する藥物學的知識――狩獵の場合又戰鬪の場合に處する彼女の戰略上の能力を思ひ見よ。彼女の知識は全く博い。それから彼女はそれを完全に、若くは殆んど完全に通つて居る。しかしそれは過去の生活の知識である。現在の生活の苦惱に關する彼女の記憶は憐むべく短い。

玉は自分の子猫が死んだ事は明かに覺えてゐない。子猫はある筈だとだけ知つて居る。それで庭に葬られて餘程になつてからもどこでもさがし、どこででもそれを呼んで見た。友達に色々愚痴をこぼした。私にも押入れ、戸棚を悉く――何遍となく――子猫がうちにはゐない事を證明するために、あけさせた。たうとうもうこれ以上さがしても駄目と云ふ事が自分でも分つて來た。しかし彼女は夢のうちに子猫と戲れる。それでやさしい愛撫の聲を出して居る。それから彼等のために、色々小さいまぼろしのものを捕へて來る。――事によれば記憶のどこか朧げな窓から、まぼろしの蝶蟲屋をさへもつて來てやる。……

眞夜中

黑く、寒く、そして靜かで、――あまりに黑く、あまりに靜かなので、私は未だ自分のからだがあるかどうかと思ひながら自分で觸つて見る。それから手さぐりをして、私は未だ地下に――光と音の永久に達しない所へ葬られて――居るのではない事をたしかめる。……時計が三時を打つ。再び日の光が見られよう。

少くとももう一度。或は未だ何千度。しかし決して明けない夜、――決して何の音も破ることのない靜寂がいつかは來るに違ひない。

これは確かである。私が存在すると云ふ事實が確かである程確かである。その他の事はそれ程に確かではない。理性も僞り、感情も僞り、總ての感覺も僞る。しかしその夜が來ると云ふ確かな知識には何等僞はない。

實體の實在、精靈の實在、人間の信仰、神々、を疑へ、――正と邪、友情と愛、美の存在、恐怖の存在、を疑へ、――しかしそこに疑ふ事のできないものがいつでも殘る、――

一つの無限の、盲目の、黑い必然の事。

一切のものにこの同じ暗黑が來る、――動物の眼にも天の眼にも、――一切のものにこの同じ運命が來る、――蟲類にも人類にも、蟻の山にも都會にも、如何なる人種にも、如何なる世界にも、太陽にも天の河にも、避け難き解體、消滅、及び忘却が來る

忘れるやうに、思はないやうにと云ふ人間の努力は一切無駄である、空虚をかくさうとして古い信仰が織つた幕は永久に裂かれた、――さうして墳墓は私共の前に露出して居る、――それで破壞には被ひがない。

私が存在する事を確かに信ずる如く、それ程又確かに、私は死ぬ事を信ぜねばならない。――それが恐ろしい。……しかし

私は實際生きて居ると信ぜねばならないか。……

そんな事を自問自答して居るうちに、暗黑が壁のやうに、私の周圍に立つた。さうして云つた、――

『自分はやがて過ぎ去るただの影、しかし實在は來て過ぎ去る事がない。

『自分はただの影。自分のうちに光、――一億萬の太陽の微光――が潛む。それから自分のうちに聲がある。實在の來ると共に、光も、聲も、起きることも、望みもなくなる。

『しかしお前の遙か上には、今後、數百萬年の間、やはり太陽があり、――暖かさ、若さ、愛と喜び、――無限に碧い空と海――夏の花の香、――草や森に聞ゆるさへづり、すだき、――影のゆらめき光のひらめき、――水の笑と少女の笑――があらう。お前に取つては、あるものは暗黑と沈默、――それから冷い盲目の蠢動』

私は答へた、

『このやうな思想を今私は恐れる。しかしそれは今眠りを破られたからで外に理由はない。私の頭が全く覺めた時には恐れる事はない。この恐れはただ、動物的な恐怖である、――本能生活の幾百萬年以來、遺傳して來た深い朧げな原始的恐怖である。……もうそれがなくなつて來た、私は死を、夢のない眠り、――喜び或は苦しみの感覺のない眠りと考へて見る事ができる』

暗黑がささやいた、――

『感覺とは何ぞ』

しかし私は答へられなかつた、そこで暗黒は重くなつて、私を押へて云つた。
『感覺を知らないのか。それならどうしてお前の塵――お前の體の分子、靈魂の原子にとつて苦痛があるかないか分るか。……原子――それは何か』
再び私は返事ができなかつた。そこで暗黒の重さが一層增した――ピラミッドの重さになつた――そこでささやきが聞えた、――
『原子の斥力、引力とは何か。そのものすごき抱合及び跳躍。……これは何か。……燃えつくした生命の煩惱、――飽く事を知らぬ貪慾の焔、――永久の憎惡の炎、――終る事のない呵責の狂ひ、……お前は知らないと云ふか。しかしお前はもうさきに苦痛はないと云ふ……』
それから、私はこの嘲弄者に對して叫んだ、――
『私はさめて居る――さめて居る――すつかりさめて居る。私は恐れることはなくなつた、――あゝ、思ひ出した。……現在の自分は卽ち過去の自分である。時の始まる以前に私はゐた、――永久の究極のめぐりの未だささまで私は永續する。私は死ぬやうに見えてもただ幾百萬の幾百萬倍の變つた形體となるだけである。形體としては、私はただ波にすぎない、本質としては私は海である。岸のない海である、――疑ひと恐れと苦しみは私の

深い海の面に忽ちに來りて忽ちに去るうす暗い影にすぎない。……眠つて居る時、時のまぼろしを見る、しかしさめてゐるとき私が時に超越して居る事を知つて居る。形も名もない生命をもつて居るもの、それから又始まるものと終るものと同一のもの。——墳墓、及び墳墓をつくるものとも——屍及び屍を喰ふものとも、同一のものである事を知つて居る……』

※

一羽の雀が屋根で囀ると一羽がそれに答へた。ものの形が柔かな灰色のうすあかりのうちにはつきりし出した、——そして暗さが次第に光つて來た。町が眼をさましてつぶやく音が私の耳に達して、次第に大きく次第に增加して來た。それからおぼろなものが赤くなつた。

その時美しい聖い太陽、力強き生命を與ふるもの、力強き腐敗を與ふるもの——その力は私の力でもある、——あの無限の生命の壯大なる象徵である太陽が上つた。……

草雲雀

一寸の蟲にも五分の魂。　日本の諺。

その籠は正しく高さが二寸で幅が一寸五分。軸があつてそれで廻る小さな木戸は自分の小指の尖頭がやつと入る位。だが、彼には此籠の中に十分の餘地が——歩んだり跳ねたり飛んだりする餘地があるのである。といふのは、彼を一瞥せん爲めには、この褐色紗張りの横面を透して、非常に注意して見なければならぬ程、彼は小さいからである。自分は其居場處を見つけるまでには、十分な明かりで、何時もその籠を幾度も廻して見なければならぬ。するといつも上の片隅に——紗張りの己が天井に、身を逆か樣に、抱き付いて——ぢつとして居るのが分る。

自分の身體よりか遙か長い、そして日に透かして見なければ見分けられぬ程に細い、一對の觸角をそなへた、尋常の蚊の大いさ位の蟋蟀を想つて見給へ。クサヒバリ卽ち『草雲雀』といふが彼の日本の名である。そして彼は市場で正に十二錢の値ひを有つて居る。卽

ち、自分の重さの黄金よりか遥かに高價である。こんな蚊のやうな物が十二錢！……毎朝その籠へ差し入れてやらなければならぬ新しい茄子か胡瓜かの薄片に取り付いて居る間を除いて、彼は日のうちは睡るか冥想するかして居る。……綺麗にして、そして食物を十分にして、飼つて置くことは少々面倒である。彼を諸君が見得るなら、こんな可笑しい程小さな動物の爲めに、少しでも骨を折るなど馬鹿馬鹿しいと思ふであらう。

だが、日が暮れるといつも、彼の無限小な靈が眼覺める。すると、言ふに言はれぬ美はしい美妙な靈的な音樂で――非常に小さな電鈴の音のやうな、微かな微かな白銀(しろがね)なすリリリリンと震ふ聲音で――部屋が一杯になり始める。暗黑(やみ)の深くなるに連れて、其音は層一層美はしくなり、――時には家中がその仙樂に振動するかと思へるまで高まり――時には想ひも得及ばぬ微かな極はみの絲の如き聲音に細まる。が、高からうが低からうが、耳を貫く不可思議な音色を續ける。……夜もすがらこの微塵はそんな風に歌つて、寺の鐘が明けの時刻を告げる時やつと啼き止む。

さて、この小さな歌は戀の――見もせず知りもせぬものを戀する漠たる戀の――歌である。彼の此世での生涯の中に、いつか見又は知つた譯は更に無いのである。過去幾代のそ

の祖先すらも、野原での夜の生活も、また、戀に於ける歌の價値も、少しも知り得た譯は無いのである。彼等は蟲商人の店で、土の壺の中で孵つた卵から生れ出たもので、その後籠の中だけに棲んで居たものである。だが、彼は幾萬年の古昔、歌はれた通りに、しかもその歌の一節一節（ふし）の確實な意味を了解してでも居るやうに少しの間違ひも無く、歌ふのである。固よりのこと、歌を歌ふことを學びはしなかつた。それは有機的記憶の――その魂が夜毎小山の露けき草陰から、高音を響かせた時の、幾千萬代の生涯の深い朧氣な記憶の――歌なのである。その時はその歌が戀を――そしてまた死を――もたらした。彼は死に就いては全く忘れてしまつて居る。が、その戀は記憶して居る。だからこそ彼は――決して來ては呉れない新婦を求めて――今、歌ふのである。

だからして、彼の戀慕は無意識的に懷古のものである。彼は過去の塵土に叫んで居るのである――沈默と神とに時の歸り來たらんことを呼ばはつて居るのである。……人の世の戀人も、自分ではそれと知らずに、頗るこれに似たことをして居る。人の世の戀人は其迷ひを理想と呼んで居る。ところが、彼等の理想なるものは、畢竟するに種族經驗のただの影であり、有機的記憶のまぼろしである。生きて居る現在は、それには殆んど無交渉である。……この微塵の小動物もまた理想を有つて居るか、又は少くとも理想の痕跡を有つて

居よう。が然し、兎も角、其小さな願望は、其哀求を徒らに述べざるを得ぬのである。

その答は全く自分だけのものでは無い。この者に配偶を與へると、啼かなくなり、且つ直ぐに死ぬるといふ警戒を、自分は與へられて居たからである。ところが、夜毎夜毎、その應答の無い美しい哀求の聲は、非難の聲のやうに自分の胸を衝いた――しまひには苦痛となり、苦惱となり、良心の呵責となつた。そこで雌を買はうと試みた。季節が遲かつたので賣つて居るクサヒバリは――雄も雌も――もう一匹も無かつた。蟲商人は笑つて「九月の二十日頃には死んだ筈ですが」と言つた。（此時はもう十月の二日であつた）然し蟲商人は自分の書齋には上等の煖爐があつて、いつも溫度を華氏七十五度以上にして居ることを知らなかつたのである。だから、自分の草雲雀は十一月の末にもなほ啼いて居るので、自分は大寒の頃まで生かして置かうと思つて居る。が然し、彼の代の他の者共は、多分、死んで居よう。金づくにも何づくにも自分は、彼に今、配偶を求めることは出來なからう。それからまた、自分で捜せるやうに、放つてやれば、日の中は庭に居るその多勢な自然の敵――蟻や百足蟲や恐ろしい土蜘蛛――の手を幸運にも免がれ了せても、ただの一と夜も明けまで到底も生きて居ることは出來なからう。

昨夜　十一月の二十九日――机に對つて居ると妙な感じが――部屋が空な感じが自分を襲つた。やがて、自分の草雲雀が、いつもと異つて、默つて居ることに氣が付いた。無言なその籠へ行つて見たら、彼は小石のやうに灰色に堅くなつた乾からびた茄子の薄片の横で、死んで居た。確かに三四日の間、食べ物を貰はなかつたのである。だが、ついその死ぬる前の晩、彼は驚く許り歌つて居たのであつた――だから、愚かにも自分は、彼はいつもよりかも滿足して居るものと思つて居た。自分の家の書生の、アキといつて、蟲を好いて居るのがいつも彼に食物を與へてゐた。處が、アキは一週間の休暇を貰つて田舍へ行つたので、草雲雀の世話をする義務は下女のハナに委ねられたのである。同情深い女では無い、下女のハナは。その小さな物のことは忘れはしませんでしたが、もう茄子がありませんでしたと云ふ。そしてその代りに葱か胡瓜の小片を與へることを考へなかつたのである！……自分は下女のハナを叱つた。そして彼女は恭しく悔悟の意を述べた。だが、仙鄕の音樂はやまつてしまつた。寂寞が自分の心を責める。部屋には煖爐があるに拘らず冷たい。

馬鹿な！……　麥粒の大いさの半分も無い蟲の爲めに、善良なる少女を自分は不幸ならしめたのだ！あの無限小な生の消滅がこんなにもあらうと信じ得られなかつた程に、自分の

心を惱ます。……固よりの事、ある動物の――蟋蟀のでも――其欲求について考へるといふただの習慣が、知らず識らず次第に、一種想像的關心を――關係が絶えてから始めて氣の付く一種の愛著の念を――生むのかも知れぬ。その上また、その夜がひつそりして居たので、その微妙な聲の妙味を――その微小の生は、神の惠みに賴るやうに、余の意志に、余の利己的快樂に、賴つて居るのであると語り――その小さな籠の中なる微塵の靈と、余が體內なる微塵の靈とは、實在の大海に在つて永遠に同一不二の物であると語る――その微妙な聲の妙味を特に身に沁みて感じたのであつた。……それからまた、彼の保護神の思想が夢を織り成すことに向けられて居る間、日日、夜夜、食に飢ゑ水に渇して居たその小生物のことを思ふといふと！……嗚呼、それにも拘らず、最後の最後に至るまで――しかも慘憺たる最期であつた、自分の脚を嚙んで居たから――如何に雄雄しく歌ひ續けて居たことか！……神よ、我等凡てを――殊に下女のハナを――赦し給はん事を！

　だが、要するところ、飢餓の爲めに自分で自分の脚を嚙むといふ事は、歌の天稟を有つといふ呪詛を蒙つて居る者に出來し得る最大凶事では無い。世には歌はんが爲めに自分で自分の心臟を食はねばならぬ人間の蟋蟀が居るのである。

夢を食ふもの

「短夜や獏の夢食ふひまもなし」

その動物の名は獏、或は「しろきなかつかみ」、その特別の任務は夢を食ふ事である。それは色々に表はされ又記されても居る。私の所有する古い書物には雄の獏は馬の胴、獅子の顔、象の鼻と牙、犀の前髮、牛の尾、虎の足をもつて居ると書いてある。雌の獏は、雄とは餘程形が違ふと云はれるが、その相違は明瞭には述べてない。

古い漢學の時代に日本の家に獏の繪がかけられる習慣があつた。こんな繪はその動物と同じやうなよい力を揮ふものと解せられた。私の古い書物にはその習慣に關するこんな傳說がのつて居る。

『「松聲錄」に黄帝が東の海岸へ狩獵に出て居る間に、或時動物の體をしてゐて、人語を話す獏に遇つた。黄帝は云つた、「天下泰平の時、何故、吾人はなほ怪物を見るべきであらうか。妖鬼を

退治する爲に、獏が必要なら、それなら獏の繪を人の家の壁にかけて置く方がもつとよからう。そして置けば、たとへ惡鬼の出現する事があつても、何の害をも加ふる事はできなからう」』

それから惡鬼の長い名簿と、その出現の徴候があげてある。

『「鷄が柔かな卵を生む時、その魔物の名は「タイフ」

『「蛇が一緒に相纏ふ時、その魔物の名は「ジンジユー」

『「犬が耳をうしろに向けてあるく時、その魔物の名は「タイヨウ」

『「狐が人間の聲で話す時、その魔物の名は「グアイシユ」

『「人のきものに血の見ゆる時、その魔物の名は「ユウキ」

『「米櫃が人間の聲で話す時、その魔物の名は「カンジヨウ」

『「夜の夢が惡夢である時、その魔物の名は「リンゲツ」……

それから、その書物は更に進んで云ふ、

『「いつでも何かこんな魔がさしたら、獏の名を呼ぶがよい、さうすれば其の惡魔は直ちに地の下へ三尺沈む」』

しかし惡鬼の問題については、私は語る資格がない。それは支那の鬼神學と云ふ未だ人に知られない物すごい世界のもので、日本の獏の問題と事實殆んど關係はない。日本の獏

は夢を食ふものとしてのみ普通知られて居る。それからこの動物の崇拜に關する最も著しい事實は、帝王、諸侯の漆塗の木枕にはいつも、貘と云ふ漢字を金で書いてあつた事である。枕にあるこの字の功德で、眠るものは惡夢になやまないやうに保護されると考へられてゐた。今日こんな枕をさがす事は餘程むつかしい、貘（或は時として白澤とも云はれる）の繪さへ、甚だ珍らしくなつて居る。しかし貘に對する古い願ひの文句、『貘くらへ、貘くらへ』は普通の會話に今も殘つて居る。……讀者が魘されたあとで、或は何か甚だ不幸な夢からさめたあとで、三度早くその願ひの文句をくりかへさねばならない、――さうすると貘はその夢を食ふ、それからその不幸或は恐れを幸運或は喜びにかへてくれる。

*

私が最後に、貘を見たのは、夏の土用中の甚だ蒸しあつい夜であつた。私は悲しんで、眼をさましたところであつた、時は丑の刻、その時貘が窓から入つて來て尋ねた、『何か喰べるものはありますか』

私は有難く思つて答へた。

『あるとも。……貘さん、私のこの夢をきいて下さい、――

『私はどこか大きな白壁の部屋に立つてゐたが、そこにはランプがいくつかともしてあつた。ところが私はその敷物のない床の上に影を投げてゐない、――それからそこの鐵の寢臺の上に私自身の死骸があつた。どうして死んだのか、いつ死んだのか、覺えてはゐない。女達が六七人、寢臺のそばに坐つてゐたが、一人も知つた人はゐない。若くもなく、年寄でもない、皆喪服を着て居る、お通夜の人達だと私は思つた。皆は身動きをしないで默つて居る。その場には何の音もない、それで私は何とはなしに夜が更けたと思つた。

『同時に、私は部屋の雰圍氣に、何だか名狀できないもの、――意志を壓迫する一種の重苦しさ、――見えない麻痺させるやうな威力が徐々に增して來る事に氣がついた。その中に通夜の人達が、そつと互に見張合つて來た、皆が恐ろしくなつて來たのだと私に分つた。音も立てずに一人立つて部屋を出た。又一人續いた。それから又一人續いた。そんな風にして一人づつ影のやうに輕く皆出て行つた。結局、私と私自身の死骸とだけになつた。

『ランプはやはり、明かに輝いてゐたが、空氣の中の例の恐ろしいものは段々、濃くなつて來た。通夜の人達は、それに氣がつくと殆んど同時にそつと逃げ出したのであつた。しかし私は未だ逃げる暇があると思つた、――もう少し後れても大丈夫と思つた。恐ろしいもの見たさの好奇心が私を止めた。私は自分の死骸を見てよくそれを檢査したいと思つ

た。……私はそれに近づいた。それを見た。不思議に思つた、――その死骸が大層長い、
――不自然に長いやうだから。……

「それから一方の瞼が動くのを見たやうに思つた。しかし動くやうに見えたのはランプの焔がゆれた爲めかも知れない。眼が開くかも知れないと恐れたから、靜かに甚だ要心深く、　私は屈んで見た。

「「これは自分だ」私は屈んだ時考へた。――「しかし變だぞ」……その顔は長く延びて行くやうであつた　「これは自分ぢやない」私はもつと低く屈んだ時に、又考へた、――「しかし、外の人である筈はない」それから、私は一層恐ろしく、言葉では云はれない程恐ろしくなつて來た、眼が開くかも知れないと思つて　……

「眼が開いた、　恐ろしくも開いた、　それからそのものが飛びかかつた、　寢臺から私を目がけて飛びついて、　唸り、かみつき、かきむしつて、私を離さなかつた。あゝ、恐ろしさの餘り狂氣になつて、どんなに私はそのものと爭つたであらう　しかしそのものの眼、その呻き、その觸りの、氣味惡さ、餘りの事に精神錯亂して私の全身が今にも破裂しようとしてゐたが、その時、　どうしたわけか　手に一挺の斧のある事に氣がついた　私はその斧で打つた、――私はその呻くものを打ち割つた、たたき潰した　粉

砕した――かくて私の前にあるものはただ、わけの分らない、恐ろしい、血まみれのかたまり、――私自身の氣味の惡い殘骸であつた。……

『獏くらへ、獏くらへ、獏くらへ。あゝ獏さん、この夢を食つて貰ひたい』

『いや、めでたい夢は食ひません』獏は答へた。『そんなめでたい夢――運のよい夢――は外にありません。斧――さうです――妙法の斧をもつて自我の怪物を退治する。……極上の夢です。私は佛の敎を信じます』

それから獏は窓を出て行つた。私は彼のあとを見送つた、――月光に照された數哩の屋上を――屋根から屋根へと、――大きな猫のやうに――驚くべく靜かに跳び移つて、飛んて行くのが見えた。……

怪談

不思議な事の研究と物語

原序

次の怪談の多くは、「夜窓鬼談」、「佛教百科全書」、「古今著聞集」、「玉すだれ」、「百物語」のやうな古い日本の書物から取つたものである。そのうち支那から來たらしいものもある、たとへば甚だ珍らしい「安藝之助の夢」の如きは明かにもとは支那のものである。しかし日本の作者は、いつもその借りたものの形と色とを變へて、それを歸化させて居る。……一つ妙な話、「雪女」は、西多摩郡調布の或農夫が、その土地の傳說として、私に語せてくれたものである。日本の書物に出て居るか、どうか私は知らない、しかしそこに書いてある異常な信仰はたしかに日本の各地に、種々の珍らしい形式で存在してゐたものである。……「力ばか」の事件は實際の經驗である。私は話した人が云つた性だけを變へて、あとはそれを殆んどそのまま書いた。

日本　東京　一九〇四年一月二十日。　　L・H・

七百年以上も昔の事、下ノ關海峽の壇ノ浦で、平家則ち平族と、源氏則ち源族との間の、永い爭ひの最後の戰鬪が戰はれた。此壇ノ浦で平家は、其一族の婦人子供幷びに其幼帝――今日安德天皇として記憶されて居る――と共に、全く滅亡した。さうして其海と濱邊とは七百年間その怨靈に祟られて居た……他の個處で私は其處に居る平家蟹といふ不思議な蟹の事を讀者諸君に語つた事があるが、それは其背中が人間の顏になつて居り、平家の武者の魂であると云はれて居るのである。しかし其海岸一帶には、澤山不思議な事が見聞される。闇夜には幾千となき幽靈火が、水うち際にふはふはさすらふか、若しくは波の上にちらちら飛ぶ――則ち漁夫の呼んで鬼火則ち魔の火と稱する青白い光りである。そして風の立つ時には大きな叫び聲が、戰の叫喚のやうに、海から聞えて來る。

平家の人達は以前は今よりも遙かに焦慮いて居た。夜、漕ぎ行く船のほとりに立ち顯れ、それを沈めようとし、又水泳する人をたえず待ち受けて居ては、それを引きずり込まうと

するのである。これ等の死者を慰めるために建立されたのが、即ち赤間ヶ關の佛教の御寺なる阿彌陀寺であつたが、其墓地も亦、それに接して海岸に設けられた。そして其墓地の内には入水された皇帝と、其歴歷の臣下との名を刻みつけた幾箇かの石碑が立てられ、且つそれ等の人々の靈のために、佛教の法會が其處で整然と行はれて居たのである。この寺が建立され、その墓が出來てから以後、平家の人達は以前よりも禍ひをする事が少くなつた。しかしそれでもなほ引き續いて折折、怪しい事をするのではあつた——彼等が完き平和を得て居なかつた事の證據として。

幾百年か以前の事、この赤間ヶ關に芳一といふ盲人が住んで居たが、この男は吟誦して、琵琶を奏するに妙を得て居るので世に聞えて居た。子供の時から吟誦し、且つ彈奏する訓練を受けて居たのであるが、まだ少年の頃から、師匠達を凌駕して居た。本職の琵琶法師としてこの男は重もに、平家及び源氏の物語を吟誦するので有名になつた、そして壇ノ浦の戰の歌を謠ふと鬼神すらも涙をとどめ得なかつたといふ事である。

芳一はその出世の首途(かどで)の際、甚だ貧しかつたが、しかし助けてくれる深切な友があつた。

則ち阿彌陀寺の住職といふのが、詩歌や音樂が好きであつたので、度度芳一を寺へ招じて彈奏させ又、吟誦さしたのであつた。後になり住職は此少年の驚くべき技術に酷く感心して、芳一に寺をば自分の家とするやうにと云ひ出したのであるが、芳一は感謝して此申し出を受納した。それで芳一は寺院の一室を與へられ、食事と宿泊とに對する返禮として、別に用のない晩には、琵琶を奏して、住職を悦ばすといふ事だけが注文されて居た。

或る夏の夜の事、住職は死んだ檀家の家で、佛教の法會を營むやうに呼ばれたので、芳一だけを寺に殘して納所を連れて出て行つた。それは暑い晩であつたので、盲人芳一は涼まうと思つて、寢間の前の縁側に出て居た。この縁側は阿彌陀寺の裏手の小さな庭を見下して居るのであつた。芳一は住職の歸來を待ち、琵琶を練習しながら自分の孤獨を慰めて居た。夜半も過ぎたが、住職は歸つて來なかつた。しかし空氣はまだ中中暑くて、戶の內ではくつろぐわけには行かない、それで芳一は外に居た。やがて、裏門から近よつて來る跫音が聞えた。誰れかが庭を橫斷して、縁側の處へ進みより、芳一のすぐ前に立ち止つた——が、それは住職ではなかつた。底力のある聲が盲人の名を呼んだ——出し拔けに、無作法に、丁度、侍が下下(しただ)を呼びつけるやうな風に——

『芳一！』

芳一はあまりに吃驚して暫くは返事も出なかつた、すると、その聲は嚴しい命令を下すやうな調子で呼ばはつた――

『芳一！』

『はい！』と威嚇する聲に縮み上つて盲人は返事をした――『私は盲目で御座います！――何誰がお呼びになるのか解りません！』

見知らぬ人は言葉をやはらげて言ひ出した、『何も恐はがる事はない、拙者はこの寺の近處に居るもので、お前の許へ用を傳へるやうに言ひつかつて來たものだ。拙者の今の殿樣と云ふのは、大した高い身分の方で、今、澤山立派な供をつれてこの赤間ヶ關に御滯在なされて居るが、壇ノ浦の戰場を御覽になりたいといふので、今日、其處を御見物になつたのだ。處で、お前がその戰爭の話を語るのが、上手だといふ事をお聞きになり、お前のその演奏をお聞きになりたいとの御所望である、であるから、琵琶をもち卽刻拙者と一緒に尊い方方の待ち受けて居られる家へ來るが宜い』

當時、侍の命令と云へば容易に、反くわけには行かなかつた。で、芳一は草履をはき琵琶をもち、知らぬ人と一緒に出て行つたが、其人は巧者に芳一を案內して行つたけれど

も、芳一は餘程急ぎ足で歩かなければならなかつた。また手引きをしたその手は鐵のやうであつた。武者の足どりのカタカタいふ音はやがて、其人が悉皆甲冑を著けて居る事を示した　定めし何か殿居の衞士ででもあらうか、芳一の最初の驚きは去つて、今や自分の幸運を考へ始めた——何故かといふに、此家來の人の「大した高い身分の人」と云つた事を思ひ出し、自分の吟誦を聞きたいと所望された殿樣は、第一流の大名に外ならぬと考へたからである。やがて侍は立ち止つた。芳一は大きな門口に達したのだと覺つた　處で、自分は町のその邊には、阿彌陀寺の大門を外にしては、別に大きな門があつたとは思はなかつたので不思議に思つた。「開門！」と侍は呼ばはつた——すると門を拔く音がして、二人は這入つて行つた。二人は廣い庭を過ぎ再び或る入口の前で止つた。其處で此武士は大きな聲で「これ誰れか內のもの！　芳一を連れて來た」と叫んだ。すると急いで歩く跫音、襖のあく音、雨戶の開く音、女達の話し聲などが聞えて來た。女達の言葉から察して、芳一はそれが高貴な家の召使である事を知つた。しかしどういふ處へ自分は連れられて來たのか見當が付かなかつた　が、それを兎や角考へて居る間もなかつた。手を引かれて幾箇かの石段を登ると、其一番最後の段の上で、草履をぬげと云はれ、それから女の手に導かれて、拭き込んだ板鋪のはてしのない區域を過ぎ、覺え切れないほど澤山な柱の角を廻

り、驚くべき程廣い疊を敷いた床を通り――大きな部屋の眞中に案内された。其處に大勢の人が集つて居たと芳一は思つた。絹のすれる音は森の木の葉の音のやうであつた。それから又何んだかガヤガヤ云つて居る大勢の聲も聞えた――低音で話して居る。そしてその言葉は宮中の言葉であつた。

芳一は氣樂にして居るやうにと云はれ、座蒲團が自分のために備へられて居るのを知つた。それでその上に座を取つて、琵琶の調子を合はせると、女の聲が――その女を芳一は老女則ち女のする用向きを取り締る女中頭と判じた――芳一に向つてから言ひかけた――

「只今、琵琶に合はせて、平家の物語を語つて戴きたいといふ御所望に御座います」

さてそれを悉皆語るには幾晩もかかる、それ故芳一は進んでかう訊ねた――

「物語の全部は、一寸は語られませぬが、何の條下を語れといふ殿樣の御所望で御座いますか？」

女の聲は答へた――

「壇ノ浦の戰の話をお語りなされ――その一條下が一番哀れの深い處で御座いますから」

芳一は聲を張り上げ、烈しい海戰の歌をうたつた――琵琶を以て、或は橈を引き、船を進める音を出さしたり、はッしと飛ぶ矢の音、人々の叫ぶ聲、足踏みの音、兜にあたる刃

の響き、海に陥る打たれたもの音等を、驚くばかりに出さしたりして。その演奏の途切れ途切れに、芳一は自分の左右に、賞讃の囁く聲を聞いた、――「何といふ巧い琵琶師だらう！」――「自分達の田舎ではこんな琵琶を聽いた事がない！」――「國中に芳一のやうな謠ひ手はまたとあるまい！」すると一層勇氣が出て來て、芳一は益々うまく彈き且つ謠つた。そして驚きのため周圍は森としてしまつた。しかし終りに美人弱者の運命――婦人と子供との哀れな最期――雙腕に幼帝を抱き奉つた二位の尼の入水を語つた時には――聽者は悉く皆一樣に、長い長い戰き慄へる苦悶の聲をあげ、それから後といふもの一同は聲をあげ、取り亂して哭き悲しんだので、芳一は自分の起こさした悲痛の強烈なのに驚かされた位であつた。暫くの間はむせび悲しむ聲が續いた。しかし、徐ろに哀哭の聲は消えて、又それに續いた非常な靜かさの內に、芳一は老女であると考へた女の聲を聞いた。

その女はかう云つた――

『私共は貴方が琵琶の名人であつて、又謠ふ方でも肩を竝べるもののない事は聞き及んて居た事では御座いますが、貴方が今晩御聽かせ下すつたやうなあんなお腕前をお有ちにならうとは思ひも致しませんでした。殿樣には大層御氣に召し、貴方に十分な御禮を下さる御考へてある由を御傳へ申すやうとの事に御座います。が、これから後六日の間每晩一

度づつ殿様の御前で演奏をお聞きに入れるやうとの御意に御座います――その上で殿様には多分御歸りの旅に上られる事と存じます、それ故明晩も同じ時刻に、此處へ御出向きなされませ。今夜、貴方を御案内いたしたあの家來が、また、御迎へに參るて御座いませう……それからも一つ貴方に御傳へするやうに申しつけられた事が御座います。それは殿様がこの赤間ヶ關に御滯在中、貴方がこの御殿に御上りになる事を誰れにも御話しにならぬやうとの御所望に御座います。殿様には御忍びの御旅行ゆゑ、斯樣な事は一切口外致さぬやうとの御上意によりますので。……只今、御自由に御坊に御歸り遊ばせ」

芳一は感謝の意を十分に述べると、女に手を取られてこの家の入口まで來、其處には前に自分を案内してくれた同じ家來が待つて居て、家につれられて行つた。家來は寺の裏の緣側の處まで芳一を連れて來て、其處で別れを告げて行つた。

芳一の戻つたのはやがて夜明けであつたが、その寺をあけた事には、誰れも氣が付かなかつた――住職は餘程遲く歸つて來たので、芳一は寢て居るものと思つたのであつた。晝の中芳一は少し休息する事が出來た。そして其不思議な事件に就いては一言もしなかつた。

翌日の夜中に侍が又芳一を迎へに來て、かの高貴の集りに連れて行つたが、其處で芳一はまた吟誦し、前回の演奏が贏ち得た其同じ成功を博した。然るにこの二度目の伺候中、芳一の寺をあけて居る事が偶然に見つけられた。それで朝戻つてから芳一は住職の前に呼びつけられた。住職は言葉やはらかに叱るやうな調子でかう言つた、――

『芳一、私共はお前の身の上を大變心配して居たのだ。目が見えないのに、一人で、あんなに遲く出かけては險難だ。何故、私共にことわらずに行つたのだ。さうすれば下男に供をさしたものに、それから又何處へ行つて居たのかな』

芳一は言ひ遁れるやうに返事をした――

『和尚樣、御免下さいまし！　少々私用が御座いまして、他の時刻にその事を處置する事が出來ませんでしたので』

住職は芳一が默つて居るので、心配したといふよりも寧ろ驚いた。それが不自然な事であり、何かよくない事でもあるのではなからうかと感じたのであつた。住職は此盲人の少年が或は惡魔につかれたか、或は騙されたのであらうと心配した。で、それ以上何も訊ねなかつたが、密かに寺の下男に旨をふくめて、芳一の行動に氣をつけて居り、暗くなつてから、また寺を出て行くやうな事があつたなら、その後を跟けるやうにと云ひつけた。

すぐその翌晩、芳一の寺を脱け出て行くのを見たので、下男達は直ちに提燈をともし、その後を跟けた。然るにそれが雨の晩で非常に暗かつた爲め、寺男が道路へ出ない內に、芳一の姿は消え失せてしまつた。正しく芳一は非常に早足で步いたのだ——その盲目な事を考へて見るとそれは不思議な事だ、何故かと云ふに道は惡るかつたのであるから。男達は急いで町を通つて行き、芳一がいつも行きつけて居る家へ行き、訊ねて見たが、誰れも芳一の事を知つて居るものはなかつた。しまひに、男達は濱邊の方の道から寺へ歸つて來ると、阿彌陀寺の墓地の中に、盛んに琵琶の彈じられて居る音が聞えるので、一同は吃驚りした。二つ三つの鬼火——暗い晩に通例其處にちらちら見えるやうな——の外、そちらの方は眞暗であつた。しかし、男達はすぐに墓地へと急いで行つた、そして提燈の明かりで、一同は其處に芳一を見つけた——雨の中に、安德天皇の記念の墓の前に獨り坐つて、琵琶をならし、壇ノ浦の合戰の曲を高く誦して。その背後と周圍と、それから到る處澤山の墓の上に死者の靈火が蠟燭のやうに燃えて居た。未だ嘗て人の目にこれほどの鬼火が見えた事はなかつた……

『芳一さん！——芳一さん！』下男達は聲をかけた『貴方は何かに魅されて居るのだ！

……芳一さん！』

しかし盲人には聞えないらしい。力を籠めて芳一は琵琶を錚錚嗄嗄と鳴らして居た――益々烈しく壇ノ浦の合戰の曲を誦した。男達は芳一をつかまへ――耳に口をつけて聲をかけた――

『芳一さん！――芳一さん！――すぐ私達と一緒に家にお歸んなさい！』

叱るやうに芳一は男達に向つて云つた――

『この高貴の方方の前で、そんな風に私の邪魔をするとは容赦はならんぞ』

事柄の無氣味なに拘らず、これには下男達も笑はずには居られなかつた。芳一が何かに魅（ばか）されて居たのは確かなので、一同は芳一を捕（つかま）へ、その身體（からだ）をもち上げて起たせ、力まかせに急いで寺へつれ歸つた――其處で住職の命令で、芳一は濡れた著物を脫ぎ、新しい著物を著せられ、食べものや、飮みものを與へられた。其上で住職は芳一のこの驚くべき行爲を是非十分に說き明かす事を迫つた。

芳一は長い間それを語るに躊躇して居た。しかし、遂に自分の行爲が實際、深切な住職を驚かし且つ怒らした事を知つて、自分の緘默を破らうと決心し、最初、侍の來た時以來、あつた事を一切物語つた。

すると住職は云つた……

『可哀さうな男だ。芳一、お前の身は今大變に危ふいぞ！　もつと前にお前がこの事を悉皆私に話さなかつたのは如何にも不幸な事であつた！　お前の音樂の妙技がまつたく不思議な難儀にお前を引き込んだのだ。お前は決して人の家を訪れて居るのではなくて、墓地の中に平家の墓の間で、夜を過して居たのだといふ事に、今はもう心付かなくてはいけない――今夜、下男達はお前の雨の中に坐つて居るのを見たが、それは安德天皇の記念の墓の前であつた。お前が想像して居た事はみな幻影だ――死んだ人の訪れて來た事の外は。で、一度死んだ人の云ふ事を聽いた上は、身をその爲るがままに任したといふものだ。若しこれまであつた事の上に、またも、その云ふ事を聽いたなら、お前は其人達に八つ裂きにされる事だらう。しかし、何れにしても早晩、お前は殺される……處で、今夜私はお前と一緒に居るわけに行かぬ。私は又一つ法會をするやうに呼ばれて居る。が、行く前にお前の身體を護るために、その身體に經文を書いて行かなければなるまい』

日沒前住職と納所とで芳一を裸にし、筆を以て二人して芳一の、胸、背、頭、顏、頸、手足――身體中何處と云はず、足の裏にさへも――般若心經といふお經の文句を書きつけ

た。それが濟むと、住職は芳一にかう言ひつけた。――

『今夜、私が出て行つたらすぐに、お前は緣側に坐つて、待つて居なさい。すると迎へが來る。が、どんな事があつても、返事をしたり、動いてはならぬ。口を利かず靜かに坐つて居なさい――禪定に入つて居るやうにして。若し動いたり、少しでも聲を立てたりすると、お前は切りさいなまれてしまふ。恐はがらず、助けを呼んだりしようと思つてはいかぬ。――助けを呼んだ處で助かるわけのものではないから。私が云ふ通りに間違ひなくして居れば、危險は通り過ぎて、もう恐はい事はなくなる』

日が暮れてから、住職と納所とは出て行つた、芳一は言ひつけられた通り緣側に座を占めた。自分の傍の板鋪の上に琵琶を置き、入禪の姿勢をとり、じつと靜かにして居た――注意して咳もせかず、聞えるやうには息もせずに。幾時間もかうして待つて居た。

すると道路の方から跫音のやつて來るのが聞えた。跫音は門を通り過ぎ、庭を横斷り、緣側に近寄つて止つた――すぐ芳一の正面に。

『芳一！』と底力のある聲が呼んだ。が盲人は息を凝らして、動かずに坐つて居た。

『芳一！』と再び恐ろしい聲が呼ばはつた。ついて三度――兇猛な聲で――

『芳一』

芳一は石のやうに靜かにして居た――すると苦情を云ふやうな聲で――

『返事がない！――これはいかん！……奴、何處に居るのか見てやらなけれやア』……緣側に上る重もくるしい跫音がした。足はしづしづと近寄つて――芳一の傍に止つた。それから暫くの間――その間、芳一は全身が胸の鼓動するに連れて震へるのを感じた――全く森閑としてしまつた。

遂に自分のすぐ傍であらあらしい聲がかう云ひ出した――『此處に琵琶がある、だが、琵琶師と云つては――只その耳が二つあるばかりだ！……道理で返事をしない筈だ、返事をする口がないのだ――兩耳の外、琵琶師の身體は何も殘つて居ない……よし殿樣へこの耳を持つて行かう――出來る限り殿樣の仰せられた通りにした證據に……』

その瞬時に芳一は鐵のやうな指で兩耳を摑まれ、引きちぎられたのを感じた！ 痛さは非常であつたが、それでも聲はあげなかつた。重もくるしい足踏みは緣側を通つて退いて行き――庭に下り――道路の方へ通つて行き――消えてしまつた。芳一は頭の兩側から濃い溫いものの滴つて來るのを感じた。が、敢て兩手を上げる事もしなかつた……

日の出前に住職は歸つて來た。急いですぐに裏の緣側の處へ行くと、何んだかねばねばしたものを踏みつけて滑り、そして慄然として聲をあげた——それは提燈の光りで、そのねばねばしたものの血であつた事を見たからである。しかし、芳一は入禪の姿勢で其處に坐つて居るのを住職は認めた——傷からはなほ血をだらだら流して。

『可哀さうに芳一！』と驚いた住職は聲を立てた——『これはどうした事か……お前、怪我をしたのか』……

住職の聲を聞いて盲人は安心した。芳一は急に泣き出した。そして、涙ながらにその夜の事件を物語つた。『可哀さうに、可哀さうに芳一！』と住職は叫んだ——『みな私の手落ちだ！——酷い私の手落ちだ！……お前の身體中くまなく經文を書いたに——耳だけが殘つて居た！　其處へ經文を書く事は納所に任したのだ。處で納所が相違なくそれを書いたか、それを確かめて置かなかつたのは、重重私が惡るかつた！……いや、どうもそれはもう致し方のない事だ——出來るだけ早く、その傷を治すより仕方がない……芳一、まア喜べ！——危險は今全く濟んだ。もう二度とあんな來客に煩はされる事はない』

深切な醫者の助けて、芳一の怪我は程なく治つた。この不思議な事件の話は諸方に廣が

り、忽ち芳一は有名になつた。貴い人々が大勢赤間ヶ關に行つて、芳一の吟誦を聞いた。そして芳一は多額の金員を贈り物に貰つた――それで芳一は金持ちになつた……しかし此事件のあつた時から、この男は耳無芳一といふ呼び名ばかりで知られて居た。

をしどり

陸奥の國、田村の郷の住人、村允と云ふ鷹使でありかつ獵師である男がゐた。或日獵に出たが鳥を得ないで空しく歸つた。その途中赤沼と云ふ所でをしどりが一つがひ泳いで居るのを見た。をしどりを殺すのは感心しないが、飢ゑてゐたので、村允はその一つがひを目がけて矢を放つた。矢は雄鳥を貫いた。雌鳥は向うの岸の蘆の中に逃げて見えなくなつた。村允は鳥の屍を家に持ち歸つてそれを料理した。

その晩村允はものすごい夢を見た。美しい女が部屋に入つて來て、枕元に立つて泣き出すやうな夢であつた。餘りはげしく泣くので聽いて居ると胸が裂けるやうであつた。女は叫んだ。『何故あゝ何故夫を殺しました。殺されるやうな、どんな罪を犯しましたか。赤沼で私共は樂しく暮してゐたのです、――それにあなたは夫を殺しました。……あなたに一體、何の害をしたでせうか。自分で何をしたか、あなたは分つてゐますか、――あゝ、どんな殘酷な、どんな惡い事をしたか、分つてゐますか。……あなたは私も殺しました、

――夫がゐないでは私は生きて居る氣はない。……私はただこの事を言ひに來ました』……

…それから又、大聲で泣き出した――餘りはげしく泣いたので、その泣き聲が村允の骨の髓までしみ渡つた、――それからつぎの歌を、泣き泣きよんだ、――

『日暮るれば　さそひしものを、
あかぬまの、
眞菰がくれの　ひとりねぞうき』

この歌の文句を吐き出したあとで、彼女は叫んだ、――

「あゝ、あなたは知らない――何をしたか分る譯はない。しかし明日赤沼へ行けば分ります――分ります……』さう云つて又悲しさうに泣いて歸つた。

朝、目がさめた時、この夢が心にはつきり殘つてゐたので村允は甚だ困つた。

『しかし明日赤沼へ行けば分ります――分ります』と云ふ言葉は、彼にとつて忘れられなかつた。そこで彼は、その夢は、夢以上のものであるか、どうかをたしかめるために、直ちにそこへ行かうと決心した。

　そこで彼は赤沼へ行つた。岸についた時、見ると雌鳥がひとりで泳いでゐた。同時にその鳥が村允を認めた。しかし逃げようとしないで不思議な風に、わき目もふらずに村允を

見つめながら、眞直にその方に向つて泳いで來た。それからくちばして、不意に自分の體をつき破つて村允の目の前で死んだ。……

村允は頭を剃つて、僧となつた。

お貞のはなし

昔、越後國新潟の町に長尾長生と云ふ人があつた。

長尾は醫者の子であつた。それで父の業をつぐべき教育をうけた。小さい時に父の友人の娘お貞と云ふのと婚約ができてゐた。長尾の修行の終り次第婚禮をあげる事に兩家とも一致してゐた。しかしお貞の健康のすぐれない事が分つて來た。それから、十五の年にお貞は、不治の肺病にかかつた。死ぬことが分つた時、彼女は、わかれを告げるために長尾に來て貰つた。

長尾が彼女の床のわきに坐ると、彼女は云つた。

『長尾さま、私達は子供の時からお互にきまつてゐました。そして今年の末に結婚する筈でした。しかし今私は死にかかつてゐます、——これも神佛の思召です。もう何年か生きてゐましたら私は他人の迷惑や心配の種子になるばかりでせうから。こんな弱いからだではよい妻になれるわけはありません。ですからあなたのために生きてゐたいと願ふ事さ

へ餘程我まゝな願でせう。私全くあきらめてゐます。それであなたも悲しまない事を約束して下さい。……それに私達は、又あへると思ひます。それをあなたに云ひたいのです』

……

『本當だ、又あへるとも』長尾は熱心に答へた。『そしてあの淨土では別れると云ふ苦痛はないのだから』

『いゝえ、いゝえ』彼女は靜かに答へた『淨土での事ではありません。明日葬られますけれども―　この世で再びあふ事にきまつて居ると信じてゐます』

長尾は不思議さうに彼女を見た。彼の不思議さうにして居るのを見て、微笑して居る彼女を見た。彼女はおだやかな夢のやうな聲で續けた、――

『さうです。この世のつもりです――あなたのこの今の世でです。長尾さま、……全くあなたもおいやでなければ。……たださうなるために私もう一度子供に生れかはつて女に成人せねばなりません。それまで、あなたは待つてゐて下さるでせう。十五年、十六年、長い事ですね、……しかし私の約束の夫のあなたは今やつと十九です……』

彼女の臨終を慰めようと思ふばかりに、彼はやさしく答へた。

『私の約束の妻、あなたを待つて居る事は義務であり又嬉しい事です。私共は七生の間

お互に誓つてあるのです』

『しかしあなたは疑ひますか』彼女は彼の顔を見つめながら尋ねた。

『他人のからだになつて、他人の名になつて居るあなたが分るかどうか疑はれます、――何か、しるしか證據を私に云つてくれなければ』彼は答へた。

『それはできません』彼女は云つた。『どこでどうしてあふか神佛だけが御存じです。しかしきつと本當にきつと、もしあなたがおいやでなければ私はあなたの處へかへつて來る事ができます。……それだけ覺えてゐて下さい』

彼女はものを云はなくなつた。それから眼を閉ぢた。彼女は死んでゐた。

＊

長尾は心からお貞になついてゐた。それだけに彼の悲しみは深かつた。彼はお貞の俗名を書いた位牌を造らせた。そしてその位牌を佛壇に置いて、毎日その前に供物を捧げた。彼はお貞が丁度死ぬ前に云つた不思議な事について色々考へた。そして彼女の魂を慰めようと思つて、もし彼女が他人の體でかへつてくる事があつたら、彼女と結婚しようと云ふ眞面目な約束を書いた。この書附にした約定に彼の印を捺し、それを封じて佛壇にあるお

貞の位牌のわきに置いた。

しかし長尾は一人息子であつたから、結婚する事が必要であつた。彼は家族の願に餘儀なく從つて、父の選んだ妻を迎へねばならなくなつた。結婚してからも續いて、お貞の位牌の前に供物を捧げた。そしていつも情け深く彼女を覺えてゐた。しかし彼女の姿は、彼の記憶から次第にうすくなつて行つた。――思ひ出し難い夢のやうに、そして歳月はすぎ去つた。

その歳月の間に多くの不幸が彼の身の上に起つた。兩親がなくなつた、――それから彼の妻と一人兒がなくなつた。それで彼はこの世界に只一人となつた。彼は淋しい家を捨てて悲しみを忘れるために長い旅に上つた。

旅の間に、或日、――温泉とその周圍の美しい風景とのために、今も名高い山の村、伊香保についた。彼の泊つた村の宿で、一人の若い女が彼の給仕に出た。彼女の顏を始めて見て、未だかつて覺えない程の胸のとどろきを覺えた。それ程不思議にも彼女はお貞にそ

つくりなので、彼は夢でないかと、自分をつめつて見た程であつた。彼女が火やお膳を運んだり部屋をかたづけたりして、行つたり來たりする時――彼女の立居振舞は彼が若い時の約束の少女の貴き記憶を彼に起させた。彼は彼女に話しかけた。彼女は柔かなはつきりした聲で答へた、その聲の美しさは、ありし日の悲しさで、彼を悲しくさせた。

それで彼は甚だ不思議に思うて、かう彼女に問うた、――

『ねいさん、あなたは昔、私の知つてゐた人にあまりによく似て居るので、あなたがこの部屋へ始めてはひつて來た時、びつくりしましたよ。それで失禮だが、あなたの鄕里と名前をきかして下さい』

直ちに――亡くなつた人の忘れられない聲で――彼女は答へた。

『私の名はお貞です、そしてあなたは私の許嫁の夫、越後の長尾長生さんです。十七年前、私は新潟で死にました。それからあなたは、もし私が女のからだをしてこの世にかへつて來れば、私と結婚すると云ふ約束を書附になさいました、――そしてあなたはその書附に判を捺して封をして、佛壇の私の名のある位牌のわきに納めました。それで私歸つて參りましたの』

彼女はこの最後の言葉を發した時、知覺を失つた。

長尾は彼女と結婚した、そしてその結婚は幸福であつた。しかしその後どんな時にも彼女が伊香保で彼の問に對する答に於て、何を云つたか思ひ出せない。なほ彼女の前世については何も覺えてゐない。その面會の刹那に不思議に燃え上つた——前世の記憶は、再び暗くなつて、そしてそれから後そのままになつた。

姥櫻

三百年前、伊豫國溫泉郡朝美村に德兵衞と云ふ人があつた。この德兵衞は郡第一の長者で村では名主であつた。大槪の事には幸運であつたが四十になつても未だあとを取らすべき子寶がなかつた。それを歎いて彼は妻と共に朝美村西法寺と云ふ名高い寺の不動明王に願をかけた。

遂に願がかなつて、德兵衞の妻は娘を生んだ。綺麗な子であつた。それから名を露とつけた。母の乳が足りないため、お袖と云ふ乳母を雇つた。

お露は生長して大層綺麗になつたが、十五の歲に病氣になつて、醫者の力も及ばなくなつた。その時、實の母同樣に、お露を愛してゐた乳母のお袖は西法寺に詣でて、熱心に娘の病氣平癒を不動樣に祈願した。三七日の間每日參詣して祈つた。その滿願の日にお露は急に全快した。

德兵衛の家では上から下まで大喜び、そのお祝に親戚友人を招いて宴をはつた。しかしその宴會の夜、お袖は突然病氣になつた。それから看護してゐた醫者は、翌朝臨終が迫つて居る事を通知した。

そこで悲歎にくれた家族は訣別のために床の周圍に集まつた。しかし乳母は云つた、

『皆樣が御存じのない事を申上げる時が參りました。私の願が屆きました。私は不動樣に御祈りして、お孃樣の身代りになるやうに願ひました。それが有難くも許されました。それ故皆樣、私の死ぬ事を悲しんで下されてはいけません。……しかし私に一つ御願がございます。私はお孃樣の病氣平癒の際、西法寺の境内に、御禮と記念のために櫻を一株奉納する事を、不動樣にかたく誓ひました。今私は自分でその樹をそこへ植ゑる事ができません。それて私に代つてその誓ひをはたして下さるやう、御賴みいたします。……さやうなら、皆樣どうか覺えてゐて下さい。私はお孃樣のために死ぬ事が嬉しうございます』

お袖の葬式のあとて、この上もなく立派な櫻の若木を、お露の兩親が西法寺の庭に植ゑた。樹は生長して繁茂した、翌年の二月十六日——お袖の命日には、見事に花が咲いた。

それから二百五十四年間——毎年二月二十六日に——續いて花が咲いた、——その花は紅色と白とて、丁度乳で濕つた女の乳房のやうであつた。それて人はそれを乳母櫻と呼んだ。

屋敷の庭で死刑が執行される事にきまつた。その罪人は引き出された。今も讀者が日本庭園で見られるやうな飛石の一列が眞中にある、砂を敷いた廣場へ坐らされた。彼は後ろ手に縛られてゐた。家來は手桶の水と小石の滿ちた俵を運んだ。それから坐つて居る男のまはりに俵をつめた、――動けないやうにくさびどめにして置いた。主人が來て、その準備を見た。滿足らしく、何も云はなかつた。

不意に罪人は彼に呼びかけた、――

『お侍樣、今から御仕置を受ける事になつたが、私の過は、なにも知つて犯したんぢやございません。その過の元は只私が馬鹿だつたからです。何かの因果で愚鈍に生れて來たのでいつも間違をせずには居られない。だがなにも愚鈍に生れついたつて云ふわけで、人を殺すのはそりやひどい。――そんな無法は胸晴しをせずには居られない。どうでも私を殺すと云ふなら、きつと私は復讐する。――あなたが恨みを懷かせるから、復讐になる、

つまり仇に報ゆるに、仇をもつてするんだ……』
人がはげしい恨みを呑みながら殺されると、その人の幽靈は殺した人に恨みを報ゆる事ができる。この事を侍は知つてゐた。彼は甚だ穩かに――殆んど愛撫するやうに答へた。
『お前が死んだあとで、――自分等をおどかすことはお前の勝手だが、お前の云はうと思つて居ることは分りにくい。お前の恨みの何か證據を――首が切れたあとで――自分等に見せてくれないか』
『見せるともきつと』男は答へた。
『宜しい』侍が長い刀をぬいて云つた、――『これからお前の首を切る。丁度前に飛石がある。首が切れたら、一つその飛石をかんで見せないか。お前の怒つた魂がそれをやれるなら、自分等のうちにもこはがるものもあるだらう。……その石をかんで見せないか』
『かまずにおくものか』大變に怒つてその男は叫んだ、『かむとも。かむ』――
刃は閃いた。風を斬る音、首が落ちて、からだの崩れる音がした。縛られたからだは、俵の上へ弓なりになつた、――二つの長い血の噴出しが、切られた首から勢よく迸つて居る。それから首は砂の上にころがつた。飛石の方へ重苦しさうにころがつた。それから不

意に飛び上つて、飛石の上端を齒の間に押へてしばらく、必死となつてかじりつき、それから力弱つてポタリと落ちた。

物を云ふものがない、しかし家來達は恐ろしさうに、主人を見つめてゐた。主人は全く無頓着のやうであつた。彼は只すぐ側に居る家來に刀をさし出した。その家來は柄杓で柄から切先まで水をそそいで、それから丁寧に柔かな數枚の紙で幾度かそのはがねをふいた。

……そしてこの事件の儀式的部分は終つた。

その後數ヶ月間、家來達と下部等はたえず、幽靈の來訪を恐れてゐた。誰もその約束の復讐の來る事を疑ふものがなかつた。そのたえざる恐れのために、ありもしないものを多く、聞いたり見たりするやうになつた。竹の間の風の音をも恐れた、――庭で動く影にも恐れた。遂に相談の結果、その恨みを呑んで居る靈のために、施餓鬼を行ふやうに主人に願ふ事にきめた。

家來の總代が一同の願を云つた時に、『全く無用』と侍が云つた。……『あの男が死ぬ時に復讐を誓つたのが、つまり恐れの原因であらうと思ふ。しかし、この場合恐れる事は

何もない』
その家來は賴むやうに主人を見たが、この驚くべき自信の理由を問ふ事をためらつた。
『あゝ、その理由は極めて簡單だ』その言葉に表はれない疑を推しはかつて侍が云つた。『彼の最後のもくろみだけが、ただ、危險になれたのだ。そして自分が彼にその證據を見せろといどんだ時、復讐の念から彼の心をわきへ向けた。つまり飛石にかじりつきたい一念で死んだのだ。その目的を果す事ができたが、ただ、それつきり。あとはすつかり忘れてしまつたに違ひない。……だからお前達はそんな事にもう、かれこれ心配しないでもいい』
——そして實際、死人は何も祟るところがなかつた。全く何事も起らなかつた。

鏡と鐘

八百年以前、遠江國無間山の僧達は、寺のために大梵鐘を鑄たいと思つた。そこで檀家の女達に梵鐘の地金になる古い唐金の鏡を喜捨してくれるやうに賴んだ。

「今日でも、どこか日本のお寺の中庭に、そんなつもりで喜捨してある古い唐金の鏡が、山のやうに積んであるのを見る事があらう。私の見たこの種類の最も大きな山は、九州博多の淨土宗の或寺の庭にあつた。鏡は、三丈三尺の高さの阿彌陀佛の靑銅の像をつくるために、寄附されたものであつた」

その當時、無間山に住んで居る農夫の若い妻があつた。やはり鐘の地金にするために鏡を寄進したが、あとで鏡が惜しくなつて來た。母がその鏡について話した事を想ひ出した。母ばかりでなく母の母及び母の祖母のものであつた事を想ひ出した。それからその鏡にうつつた色々の樂しい微笑を想ひ出した。勿論鏡の代りに幾分の金額を僧にさし出して賴め

ばその家寶をとりもどす事ができたであらう。しかし、彼女はそれに必要な金をもたなかつた。寺へ行く度毎に、欄干のうしろの中庭に、一緒に積み上げてある數百の鏡の間に、自分の鏡のあるのを見た。母が始めてその鏡を見せた時、子供心に喜んだ、その裏にある浮彫りの松竹梅があるので分つた。彼女は機會を見て鏡を盗んで、――これからいつまでもそれを大事にしまつて置くために――それを隱さうと思つた。しかし、その機會は來なかつた。それて彼女は非常につまらなくなつた、――自分の生命の一部を愚かにも捨てたやうな氣がした。彼女は鏡は女の魂と云ふ古い諺（多くの青銅の鏡の裏に、魂と云ふ漢字で神祕的に表してある諺）を考へた。これまでは思ひもよらなかつたが、今では、それが不可思議にも、本當であるとつくづく思つた。しかし自分の惱みを誰にも云はうとはしなかつた。

さて、無間山の梵鐘のために喜捨された鏡が悉く坩堝へ送られた時、鐘の鑄造方は、一つ溶けない鏡のある事を發見した。幾度もそれを溶かさうとしたが、それは駄目であつた。その鏡を寺に寄附した婦人は、たしかにそれを後悔したに相違ない。全く心からその寄進をしたのではなかつた。そこで鏡に執着のある彼女の利己的な魂が、坩堝の眞中でそれを

かたく冷たくして居るのてあつた。

勿論その事を誰ても聞いてゐた。そして溶けないのは誰の鏡かそれもすぐに分つた。結局、彼女の祕密の缺點が公けに暴露されたので、この不幸な女は甚だ恥ぢ入り、又甚だ怒つた。そしてその恥を忍ぶ事ができないので、つぎのやうな文句の書置を殘して、身を投げた。

『私が死んだら、鏡を溶かして鐘をつくる事はたやすい。しかし鐘をつきこはす人には私の魂の力で福を授ける』

怒つて死ぬ人、或は怒つて自殺をする人の最後の願や約束は超自然的な力があると一般に想像されて居る事を讀者は知つて置かねばならない。この死んだ女の鏡が溶けて、鐘が首尾よく鑄造されたあとて、人々は書置の文句を想ひ出した。この女の魂が鐘をこはすものに福を授けるといふ事を信じた。そこて鐘が寺の庭にかかるや否や、それをつくために人は群をなして集まつた。必死の力て撞木をふるつた。しかし鐘はよい鐘て、勇敢に其攻撃にたへた。しかも、人々は容易に落膽しなかつた。毎日毎日時を擇ばず、盛んに烈しく鐘を撞いて、寺僧の抗議を少しも意に介しなかつた。そこて鐘の音が苦痛になつた。寺僧

はそれに耐へられなくなつた。それで彼等は鐘を山の下の沼の中へころがし落して、やうやく厄拂をした。沼は深いので、それを呑み込んでしまつた——それが梵鐘の最期であつた。ただその傳說だけが殘つて居る。その傳說に、それは無間の鐘と呼ばれて居る。

さて、日本の古い信仰に、「なぞらへる」と云ふ動詞によつて、說明はされないが、暗示される一種の精神作用の不思議な力がある。この言葉だけでも、どの英語にも適當に譯されない、この言葉は多くの信仰上の宗教的行爲や、又多くの種類の擬態の魔術に關して使はれるのである。辭書によれば「なぞらへる」の普通の意味は「まねをする」「比較する」「似せる」である。しかし祕傳による意味は、何かの魔術的奇蹟的結果を得るために、想像の上に或物や或行爲を他のものと置き換へる事である。

たとへば、讀者は佛寺を建立する資力はないが、もし建てるだけの資力がある場合には、直ちにそれを建てないでは居られない程の信仰心と、同じ程度の信仰心で、佛像の前に小石を一つ置く事は容易にできる。その小石を一つ捧げる功德は、一寺を建立する功德と同等もしくは殆んど同等にあたる。……讀者は六千七百七十一卷の佛の經文を讀む事はできない。しかしそれを納めた廻轉書棚をつくつて、卷揚機械のやうにそれを押して、それを

まはす事はできる。もし六千七百七十一卷の經文を讀みたいと云ふ熱心な願をもつてそれを押せば、それを讀んで得たと同じ功德が得られる。……「なぞらへる」の宗教的意味を說明するには、これだけで恐らく充分であらう。

　魔術の意味は種々の變つた例がなければ、說明は全くできさうにない。しかし今の目的にはつぎの例が役に立たう。もし人が、[譯註一]シスターヘレンが蠟の人形をつくつたと同じ理由て、藁人形をつくつて、――そして丑の刻に社の森のどこかの樹に、四寸以上の釘をそれに打つて、――そして、その小さい藁人形で想像上代表された人が、それから恐ろしい苦悶のうちに死ぬとしたら――それが「なぞらへる」の一つの意味の說明にならう。……或は泥棒が夜、人の家に入つて財寶を盜み去つたと假定する。もし庭園にその盜賊の足跡を發見して、それから直ちに大きなもぐさを置いてもやせば、賊の足のうらが燒けて來るので、賊が自分で赦しを乞ふために戾つて來るまでは、落ちついて居られなくなる。それは又「なぞらへる」と云ふ言葉で表はされた擬態の魔術の別の種類である。それから、第三の種類は無間の鐘の種々の傳說で說明される。

　梵鐘が沼澤のうちへころがし込まれたあとで、勿論、それをつきこはすやうにならす方

法はなかつた。しかし、この機會のなくなつた事を殘念がつた人々は、想像上鐘の代りになるものをたたき破る事にした、――かうして、そんな面倒をひき起した鏡の持主の靈を慰めようとした。その人々のうちに、平家の武士梶原景季との關係から日本の傳說で名高い――梅ヶ枝と云ふ女があつた。この二人が一緒に旅をして居る間に、或日梶原は金がなくなつて非常に窮した。そこで、梅ヶ枝は無間の鐘の傳說を想ひ出して、唐金の鉢を取つて、心にそれを鐘に擬して、それをたたいて、――同時に黃金三百兩欲しいと叫びながら――たたき破つた。この二人が泊つてゐた宿の客が、その物音と叫びの理由を聞きただして、その困窮の話を聞いて、正しく梅ヶ枝に黃金三百兩を贈つた。それから梅ヶ枝の唐金の鉢について歌ができた。その歌は今日も唄ひ妓に歌はれて居る。

梅ヶ枝の手水鉢
たたいてお金がでるならば、
皆さん身うけを
そうれ賴みます。

この事があつてから、無間の鐘の評判は大きくなつた。そして梅ヶ枝の例にならつて、

その幸運にあやからうとするものも多かつた。そのうちに、無間山の近く、大井川のほとりに住む放蕩な農夫がゐた。放埒な生活で家産を蕩盡してから、この農夫は自分の庭の泥で無間の鐘の粘土製の模型を造つて、それから大きな富が欲しいと叫びながら、その粘土の鐘をたたき割つた。

その時、彼の前の地面から、長い解いた髪を垂れた白衣の婦人の姿が蓋をした壺をもつて現れた。その婦人は云つた、『その熱心な祈りは聞き屆くべきもの故、ここに現れて、御答へを申す。それ故この壺をもつて行かれよ』さう云つて婦人は壺をその男の手に渡して消えた。

この幸運兒は、妻によい知らせをもつて行くために、自分の家へ走つた。妻の前に蓋のある壺を置いた、――壺は重もかつた、――それから二人であけて見た。二人は丁度ふちまで一杯になつて居る……を見た

しかし、いけない、――何が入つてゐたか、これはどうしても云へない。

譯註一　「シスターヘレン」は中世紀の信仰によつたロセツテイの詩。愛人にうらぎられたヘレンが蠟でつくつた愛人の形を火にとかして、呪ひ殺す話。

食人鬼

昔、禪僧の夢窓國師、美濃の國を獨りで旅行してゐた時、路を教へてくれる人もない或山中で路に迷うた。長い間、たよりなくさまようて、もう、夜の宿を求める事はできないとあきらめかけて居る時、日の最後の光で照らされて居る山の頂きに、淋しい僧のために造つてある例の庵室と云ふ小さい隱者の家が一つ見えた。その家は荒れはてて居るやうであつたが、國師は熱心にそこへ急いで行つて、老僧が一人住んで居ることを見て、一夜の宿を乞うた。老僧は荒々しく斷つたが、それでも夢窓に隣りの谷で宿と食物の得られる村を教へてくれた。

夢窓はその村へ行く道が分つた。それは家が十二三軒まではない農村であつた。そして村の庄屋の家に親切に迎へられた。夢窓の着いた時四五十人の人が重もな座敷に集まつてゐたが、彼は別の小さい部屋へ通されて、そこで直ちに食物や寢床を與へられた。大層疲れてゐたから、早く寢るために横になつた。しかし、眞夜中少し前に、つぎの部屋で大き

な聲で泣いて居る音で眠りをさまされた。やがてふすまは靜かに開いて、提燈を持つた若者が部屋へ入つて、恭しく彼に挨拶をして云つた、

「御出家樣、困つた事でございますが申上げねばなりません。私は今この家の責任ある戸主でございます。昨日私は單に長男でした。しかし、あなたがこちらへ御出でになつた時、御疲れのやうでしたから、御迷惑になるやうな、どんな事があつてもならないと思ひました。それで父がつい二三時間前に死んだ事もお話し致しませんでした。つぎの部屋で御覽になつた人々はこの村の人々です、ほとけに最後の挨拶をしにここへ集まつて居ります。そして、今一里程離れた外の村へ行く處です、――そのわけはこの村では誰か死んだあとで、その晩は一人も、この村に殘つてゐてはならない習慣になつて居るからでございます。私共はそれぞれの供物や祈禱をあげて、――それから死骸を殘して出て行きます。そんな風にして死骸が殘りますと、その家ではいつでも變な事が起ります。それで私共と一緒にお出で下さる方が、おためによからうかと考へます。外の村でよい宿を見つけてさし上げます。尤も、あなたは御出家ですから、或は化物や妖怪を恐れなさらないでせう。それで死骸と一緒に殘る事が恐ろしくなければ、このつまらない家を御使ひ下さいます事は至極結構でございます。しかし申上げねばなりませんが、御出家でなければ、今夜ここ

に殘らうと云ふものは誰もございません』

夢窻は答へた、

『御親切な志しと有難いおもてなしには深く感謝致します。しかし參りました時に御父上樣のなくなつた事を聞かせて下さらなかつたのが殘念です、――と申しますのは少しは疲れてゐましたが、出家としての私の義務をつとめるのが苦しい程には、たしかに疲れて居りませんでした。御話し下さつたら、御出かけ前に讀經を致すところでした。がしかし、御出かけのあとで、讀經を致しませう。そして明朝まで遺骸の側にゐます。獨りでここに居ることがあぶないと色々御話してしたが、私にはその意味が分りません。しかし私は幽靈やお化けは恐れません。それ故どうか私のために御心配はなさらないやうに』

若者はこの斷言を聞いて喜んだやうであつた。それで適當な言葉で感謝の意を表はした。それから家族の外の人々と隣りの部屋に集つた人々は、出家の親切な約束を聞いて、御禮に來た、――それからうちの主人が云つた、

『そこで、御出家樣、あなたを御ひとりにして行くのが大層殘念でございますが、私共は御別れしなければなりません。村のおきてによりまして、十二時すぎには一人もここにゐてはなりません。御願ですから、どうか私共が御側にゐない間、御からだに御注意なさ

れて下さい。それから私共の留守の間に、何か變つた事を御聞きになつたり御覽になつたり、なさる事がございましたら、どうか明朝私共の戻りました節、その事を御聞かせ下さい』

それから出家を除いて一同は家を去つた。出家は死骸の置いてある部屋へ行つた。普通の供物は遺骸の前に置いてあつた。それから小さい燈明は燃えてゐた。出家は經を讀んで供養を濟ました、——そのあとで瞑想に入つた。瞑想しながら靜かな數時間ぢつとしてゐた。無人になつて居る村には音一つしなかつた。ところが、夜の靜けさの最も深くなつた時、音も立てずに朧げな大きなものゝが入つて來た。同時に夢窻は自分が動く力も、物云ふ力もなくなつて居る事に氣がついた。彼はそのものゝが抱き上げるやうに死骸をあげて、猫が鼠を喰べるよりも早く、それを喰べつくすのを見た、——頭から始めて、何もかも、髮の毛も、骨も、それから經かたびらさへも喰べるのを見た。それから、その怪しいものゝがこんなにして死骸を喰べつくしてから、供物の方へ向いて、それも又喰べた。それから來た時と同じく不可思議に出て行つた。

村の人々が翌朝歸つた時、彼等は庄屋の家の入口で、彼等を待つて居る僧を見た。一同は代る代る挨拶した。そして入つて部屋を見廻した時、遺骸や供物のなくなつて居るのを見て驚いたものは一人もなかつた。しかし、うちの主人は夢窓に云つた、――

『御出家樣、あなたは多分夜の間にいやなものを御覽でしたらう。私共は皆あなたの事を心配してゐました。しかし今私共はあなたが生きて御無事でおいでになるのを見て大層嬉しく思ひます。できる事なら私共は喜んで御一緒にゐたかつたのです。しかし昨晩申し上げた通り村の掟で、死人があつたら私共は家を去つて、死骸だけを殘さねばならない事になつてゐます。これまでこの掟を破りますと、何か大きな祟りがありました。掟に從ふと、死骸や供物が留守中になくなります。多分あなたは、その成行きを見屆けになりましたでせう』

そこで夢窓は朧げな恐ろしい形のものが、死人の部屋に入つて來て、死體や供物を喰べつくした事を話した。その話を聞いて驚くものは一人もないやうであつた。それから家の主人は云つた、

『御出家樣、御話はこの事について、昔からある話と一致して居ります』

夢窓はそれから尋ねた、――

『山の上のあのお坊さんが死んだ人のために時々葬式を致しませんか』

『どんなお坊さんですか』

『昨晩、この村へ私を案内したあのお坊さんです』夢窓は答へた。『向うの山の上のそのお坊さんの庵室を訪ねました。私に宿を拒んだが、こちらへ来る道を教へました』

聞いて居る人々は驚いたやうに互に顔を見た。それからしばらく默つたあとで、家の主人は云つた、

『御出家様、山の上にはお坊さんもゐません、庵室もございません』

この事について夢窓はもう何も云はなかつた。親切な人達は、彼が何かお化けにでもだまされて居ると思つた事が明らかであつたから。しかし、その人々に別れを告げて自分の行く路について必要な知識を悉く得たあとで、夢窓は山上の草庵をさがして、自分が實際だまされて居るかどうかを、たしかめようと決心した。彼は造作なく庵室を見出した。そして今度はその庵主は入るやうに誘つた。入ると、庵主は恭しく夢窓の前に頭を下げて叫んだ、『あゝ恥ぢ入ります、――甚だ恥ぢ入ります、――實に恥ぢ入ります』

『私に宿をしてくれなかつたからといつて、別に恥ぢ入るには及びません』夢窓は云つた。『あなたが向うの村を教へてくれたので、そこで親切にもてなされました。それでそ

の御蔭になつた御禮を申します』

『私は誰の宿もできません』庵主は答へた、――『私が恥ぢ入るのは、それを拒んだためではありません。只あなたに私の本當の姿になつた處を見られたから恥ぢ入るのです。――昨夜、あなたの目前で死骸や供物を喰ひつくしたのは私です。……御出家樣、私は食人鬼でございます。私を憐んで下さい、そしてこんな有樣になつた祕密の罪を懺悔さして下さい。

『昔し昔し、私はこの淋しい地方の僧でした。何里四方の間に外に僧はありませんでした。それでその頃は死んだ山の人の死體は、私が引導するためにここに、――時には隨分遠方から、――運ばれたものでした。しかし、私は商賣仕事のやうにのみ勤めをくりかへし、式を行うてゐました。――私はその聖い天職で得られる食物や着物の事ばかり考へました。それでこの利慾の邪念のため、死ぬと直ちに生れ變つて食人鬼となりはてました。それ以來この地方で死ぬ人々の死骸を喰べねばならぬ事になつてゐます。一人も殘らず昨夜御覽になつたやうな風に喰ひつくさねばなりません。……今御願です、御出家樣、私のために施餓鬼を行うて下さい。御賴み致します。あなたの御祈りでこの恐ろしい境遇から逃れられるやうに、私を御助け下さい』

この願を云ふや否や、庵主は消え失せた。それから庵室も又同時に消え失せた。夢窓國師は高草のうちに獨りて、或僧の墓であるらしい五輪の石と云ふ形の古い苔むした墓の側に跪まづいて居る事に氣がついた。

東京の、赤坂への道に紀國坂といふ坂道がある――これは紀伊の國の坂といふ意である。何故それが紀伊の國の坂と呼ばれて居るのか、それは私の知らない事である。この坂の一方の側には昔からの深い極はめて廣い濠があつて、それに添つて高い綠の堤が高く立ち、その上が庭地になつて居る、――道の他の側には皇居の長い宏大な塀が長くつづいて居る。街燈、人力車の時代以前にあつては、その邊は夜暗くなると非常に寂しかつた。ためにおそく通る徒歩者は、日沒後に、ひとりでこの紀國坂を登るよりは、むしろ幾哩も廻り道をしたものである。

これは皆、その邊をよく歩いた貉のためである。

貉を見た最後の人は、約三十年前に死んだ京橋方面の年とつた商人であつた。當人の語つた話といふのはかうである、――

この商人が或る晩おそく紀國坂を急いで登つて行くと、只ひとり濠の縁に踞んで、ひどく泣いて居る女を見た。身を投げるのではないかと心配して、商人は足をとどめ、自分の力に及ぶだけの助力、若しくは慰藉を與へようとした。女は華奢な上品な人らしく、服裝も綺麗であつたし、それから髮は良家の若い娘のそれのやうに結ばれて居た。――『お女中』と商人は女に近寄つて聲をかけた――『お女中、そんなにお泣きなさるな！……何がお困りなのか、私に仰しやい。その上でお助けをする道があれば、喜んでお助け申しませう』（實際、男は自分の云つた通りの事をする積りであつた。何となれば、此人は非常に深切な男であつたから。）　しかし女は泣き續けて居た――その長い一方の袖を以て商人に顏を隱して。『お女中』と出來る限りやさしく商人は再び云つた――『どうぞ、どうぞ、私の言葉を聽いて下さい！……此處は夜若い御婦人などの居るべき場處ではありません！御頼み申すから、お泣きなさるな！――どうしたら少しでも、お助けをする事が出來るのか、それを云つて下さい！』徐ろに女は起ち上つたが、商人には背中を向けて居た。そして共袖のうしろで呻き咽びつづけて居た。商人はその手を輕く女の肩の上に置いて說き立てた――『お女中！――お女中！――お女中！　私の言葉をお聽きなさい。只一寸でいいから！……お女中！――お女中！』……するとそのお女中なるものは向きかへつた。そし

て其袖を下に落し、手で自分の顏を撫でた――見ると目も鼻も口もない――きやッと聲をあげて商人は逃げ出した。

一日散に紀國坂をかけ登つた。自分の前はすべて眞暗で何もない空虛であつた。振り返つて見る勇氣もなくて、ただひた走りに走りつづけた擧句、やうやう遙か遠くに、螢火の光つて居るやうに見える提燈を見つけて、其方に向つて行つた。それは道側に屋臺を下して居た賣り歩く蕎麥屋の提燈に過ぎない事が解つた。しかしどんな明かりでも、どんな人間の仲間でも、以上のやうな事に遇つた後には、結構であつた。商人は蕎麥賣りの足下に身を投げ倒して聲をあげた『あゝ！――あゝ!!――あゝ!!!』……

『これ！ これ！』と蕎麥屋はあらあらしく叫んだ『これ、どうしたんだ？ 誰れかにやられたのか？』

『否、――誰れにもやられたのではない』と相手は息を切らしながら云つた――『ただ……あゝ！――あゝ！』……

『――只おどかされたのか？』と蕎麥賣りはすげなく問うた『盜賊にか？』

『盜賊ではない――盜賊ではない』とおぢけた男は喘ぎながら云つた『私は見たのだ……女を見たのだ――濠の緣で――その女が私に見せたのだ……あゝ！ 何を見せたつて、

そりや云へない』……

『へえ！　その見せたものはこんなものだつたか？』と蕎麥屋は自分の顏を撫でながら云つた――それと共に、蕎麥賣りの顏は卵のやうになつた……そして同時に燈火は消えてしまつた。

ろくろ首

五百年程前に、九州菊池の侍臣に磯貝平太左衛門武連と云ふ人がゐた。この人は代々武勇にすぐれた祖先からの遺傳て、生れながら弓馬の道に精しく非凡の力量をもつてゐた。未だ子供の時から劍道、弓術、槍術ては先生よりもすぐれて、大膽て熟練な勇士の腕前を充分にあらはしてゐた。その後、永享年間（西暦一四二九―一四四一）の亂に武功をあらはして、ほまれを授かつた事度々てあつた。しかし菊池家が滅亡に陷つた時、磯貝は主家を失つた。外の大名に使はれる事も容易にできたのてあつたが、自分一身のために立身出世を求めようとは思はず、又以前の主人に心が殘つてゐたので、彼は浮世を捨てる事にした。そこて剃髮して僧となり――囘龍と名のつて――諸國行脚に出かけた。

しかし僧衣の下には、いつでも囘龍の武士の魂が生きてゐた。昔、危險をものともしなかつたと同じく、今は又難苦を顧みなかつた。それて天氣や季節に頓着なく、外の僧侶達の敢て行かうとしない處へ、聖い佛の道を說くために出かけた。その時代は暴戾亂雜の時

代であつた。それでたとへ僧侶の身でも、一人旅は安全ではなかつた。

始めての長い旅のうちに、回龍は折があつて、甲斐の國を訪れた。或夕方の事、その國の山間を旅して居るうちに、村から數里を離れた、甚だ淋しい處で暗くなつてしまつた。そこで星の下で夜をあかす覺悟をして、路傍の適當な草地を見つけて、そこに臥して眠りにつかうとした。彼はいつも喜んで不自由を忍んだ。それで何も得られない時には、裸の岩は彼にとつてはよい寢床になり、松の根はこの上もない枕となつた。彼の肉體は鐵であつた。露、雨、霜、雪になやんだ事は決してなかつた。

横になるや否や、斧と大きな薪の束を脊負うて道をたどつて來る人があつた。この木こりは横になつて居る回龍を見て立ち止まつて、しばらく眺めてゐたあとで、驚きの調子で云つた。

『こんなところで獨りでねて居られる方は、そもそもどんな方でせうか。……このあたりには變化（へんげ）のものが出ます――澤山に出ます。あなたは魔物を恐れませんか』

回龍は快活に答へた、『わが友、わしはただの雲水ぢや。それ故少しも魔物を恐れない、――たとへ化け狐であれ、化け狸であれ、その外何の化けであれ。淋しい處は、かへつて

好む處、そん處は默想をするのによい。わしは大空のうちに眠る事に慣れて居る、それから、わしのいのちについて心配しないやうに修業を積んで來た』

『こんな處に、お休みになる貴僧は、全く大膽な方に相違ない。ここは評判のよくない——甚だよくない處です。「君子危きに近よらず」と申します。實際こんな處でお休みになる事は甚だ危險です。私の家はひどいあばらやですが、御願です、一緒に來て下さい。喰べるものと云つては、さし上げるやうなものはありません。が、とにかく屋根がありますから安心してねられます』

熱心に云ふので、回龍はこの男の親切な調子が氣に入つて、この謙遜な申出を受けた。きこりは往來から分れて、山の森の間の狹い道を案內して上つて行つた。凸凹の危險な道で、——時々斷崖の緣を通つたり、——時々足の踏み場處としては、滑りやすい木の根のからんだものだけであつたり、——時々尖つた大きな岩の上、又は間をうねりくねつたりして行つた。しかし、やうやく回龍は或山の頂きの平らな場所へ來た。滿月が頭上を照らしてゐた。見ると自分の前に小さな草ふき屋根の小屋があつて、中からは陽氣な光がもれてゐた。きこりは裏口から案內したが、そこへは近處の流れから、竹の筧で水を取つてあつた。それから二人は足を洗つた。小屋の向うは野菜畠につづいて、竹藪と杉の森になつ

てゐた。それからその森の向うに、どこか遙かに高い處から落ちて居る瀧が微かに光つて、長い白い着物のやうに、月光のうちに動いて居るのが見えた。

回龍が案内者と共に小屋に入つた時、四人の男女が爐にもやした小さな火で手を暖めて居るのを見た。僧に向つて丁寧にお辭儀をして、最も恭しき態度で挨拶を云つた。回龍はこんな淋しい處に住んで居るこんな貧しい人々が、上品な挨拶の言葉を知つて居る事を不思議に思つた。『これはよい人々だ』彼は考へた『誰かよく禮儀を知つて居る人から習つたに相違ない』それから外のものが『あるじ』と云つて居るその主人に向つて云つた。

『その親切な言葉や、皆さんから受けた甚だ丁寧なもてなしから、私はあなたを初めからのきこりとは思はれない。多分以前は身分のある方でしたらう』

きこりは微笑しながら答へた。

『はい、その通りでございます。只今は御覽の通りのくらしをしてゐますが、昔は相當の身分でした。私の一代記は、自業自得で零落したものの一代記です。私は或大名に仕へて、重もい役を務めてゐました。しかし餘りに酒色に耽つて、心が狂つたために惡い行をいたしました。自分の我儘から家の破滅を招いて、澤山の生命を亡ぼす原因をつくりまし

た。その罰があたつて、私は長い間この土地に亡命者となつてゐました。今では何か私の罪ほろぼしができて、祖先の家名を再興する事のできるやうにと、祈つてゐます。しかしさう云ふ事もできさうにありません。ただ、眞面目な懺悔をして、できるだけ不幸な人々を助けて、私の惡業の償ひをしたいと思つて居ります』

回龍はこのよい決心の告白をきいて喜んで主人に云つた、

『若い時につまらぬ事をした人が、後になつて非常に熱心に正しい行をするやうになる事を、これまでわしは見てゐます。惡に强い人は、決心の力で、又、善にも强くなる事は御經にも書いてあります。御身は善い心の方である事は疑はない。それでどうかよい運を御身の方へ向はせたい。今夜は御身のために讀經をして、これまでの惡業に打ち勝つ力を得られる事を祈りませう』

から云つてから回龍は主人に『お休みなさい』を云つた。主人は極めて小さな部屋へ案內した。そこには寢床がのべてあつた。それから一同眠りについたが、回龍だけは行燈のあかりのわきで讀經を始めた。おそくまで讀經勤行に餘念はなかつた。それからこの小さな寢室の窻をあけて、床につく前に、最後に風景を眺めようとした。夜は美しかつた。空には雲もなく、風もなかつた。强い月光は樹木のはつきりした黑影を投げて、庭の露の上

に輝いてゐた。きりぎりすや鈴蟲の鳴き聲は、騒がしい音樂となつてゐた。近所の瀧の音は夜のふけるに隨つて深くなつた。回龍は水の音を聽いて居ると、渇きを覺えた。それで家の裏の筧を想ひ出して、眠つて居る家人の邪魔をしないで、そこへ出て水を飲まうとした。襖をそつとあけた。さうして、行燈のあかりで、五人の横臥したからだを見たが、それには何れも頭がなかつた。

直ちに　何か犯罪を想像しながら――　彼はびつくりして立つた。しかし、つぎに彼はそこに血の流れてゐない事と、頭は斬られたやうには見えない事に氣がついた。それから彼は考へた。『これは妖怪に魅されたか、或は自分はろくろ首の家におびきよせられたのだ。……「捜神記」に、もし首のない胴だけのろくろ首を見つけて、その胴を別の處にうつして置けば、首は決して再びもとの胴へは歸らないと書いてある。それから更にその書物に、首が歸つて來て、胴が移してある事をさとれば、その首は毬のやうにはねかへりながら三度地を打つて、――非常に恐れて喘ぎながら、やがて死ぬと書いてある。ところで、もしこれがろくろ首なら、禍をなすもの故、――その書物の敎へ通りにしても差支はなからう』……

彼は主人の足をつかんで、窓まで引いて來て、からだを押し出した。それから裏口に來

て見ると戸が締つてゐた。それで彼は、首は開いてゐた屋根の煙出しから出て行つた事を察した。靜かに戸を開けて庭に出て、向うの森の方へできるだけ用心して進んだ。森の中で話し聲が聞えた、それでよい隱れ場所を見つけるまで影から影へと忍びながら――聲の方向へ行つた。そこで、一本の樹の幹のうしろから首が――五つとも――飛び廻つて、そして飛び廻りながら談笑して居るのを見た。首は地の上や樹の間で見つけた蟲類を喰べてゐた。やがて主人の首が喰べる事を止めて云つた、

『あゝ、今夜來たあの旅の僧、――全身よく肥えて居るぢやないか、あれを皆て喰べたら、さぞ滿腹する事であらう。……あんな事を云つて、つまらない事をした、――だからおれの魂のために、讀經をさせる事になつてしまつた。經をよんで居るうちは近よる事がむつかしい。稱名を唱へて居る間は手を下す事はできない。しかしもう今は朝に近いから、多分眠つたらう。……誰かうちへ行つて、あれが何をして居るか見屆けて來てくれないか』

一つの首――若い女の首――が直ちに立ち上つて蝙蝠のやうに輕く、家の方へ飛んで行つた。數分の後、歸つて來て、しやがれ聲で叫んだ、

『あの旅僧はうちにゐません、――行つてしまひました。それだけではありません。も

つとひどい事には、主人の體を取つて行きました。どこへ置いて行つたか分りません』

この報告を聞いて、主人の首が恐ろしい樣子になつた事は月の光で判然と分つた。眼は大きく開いた、髪は逆立つた、齒は軋つた。それから一つの叫びが唇から破裂した、忿怒の涙を流しながらどなつた、

『からだを動かされた以上、再びもと通りになる事はできない。死なねばならない。……皆これがあの僧の仕業だ。死ぬ前にあの僧に飛びついてやらう、――引き裂いてやらう、――喰ひつくしてやらう。……あゝ、あすこに居る――あの樹のうしろ――あの樹のうしろに隱れて居る。あれ、――あの肥つた臆病者』……

同時に主人の首は他の四つの首を隨へて、囘龍に飛びかかつた。しかし強い僧は手ごろの若木を引きぬいて武器とし、それを打ちふつて首をなぐりつけ、恐ろしい力でなぎたてよせつけなかつた。四つの首は逃げ去つた。しかし、主人の首だけは、如何に亂打されても、必死となつて僧に飛びついて、最後に衣の左の袖に喰ひついた。しかし囘龍の方でも素早くまげをつかんでその首を散々になぐつた。どうしても袖からは離れなかつたが、しかし長い呻きをあげて、それからもがくことを止めた。死んだのであつた。しかしその齒はやはり袖に喰ひついてゐた。そして囘龍のありたけの力をもつてしても、その顎を開

かせる事はできなかつた。

彼はその袖に首をつけたままで、家へ戻つた。そこには、傷だらけ、血だらけの頭が胴に歸つて、四人のろくろ首が坐つて居るのを見た。裏の戸口に僧を認めて一同は『僧が來た、僧が』と叫んで反對の戸口から森の方へ逃げ出した。

東の方が白んで來て夜は明けかかつた。回龍は化物の力も暗い時だけに限られて居る事を知つてゐた。袖について居る首を見た――顏は血と泡と泥とで汚れてゐた。そこで『化物の首とは――何と云ふみやげだらう』と考へて大聲に笑つた。それから僅かの所持品をまとめて、行脚をつづけるために、徐ろに山を下つた。

直ちに旅をつづけて、やがて信州諏訪へ來た。諏訪の大通りを、肘に首をぶら下げたまま、堂々と濶歩してゐた。女は氣絶し、子供は叫んで逃げ出した。餘りに人だかりがして騒ぎになつたので、捕吏（とりて）が來て、僧を捕へて牢へ連れて行つた。その首は殺された人の首で、殺される時、相手の袖に喰ひついたものと考へたからであつた。回龍の方では問はれた時に微笑ばかりして何にも云はなかつた。それから一夜を牢屋ですごしてから、その土地の役人の前に引き出された。それから、どうして僧侶の身分として袖に人の首をつけて居るか、何故衆人の前で厚顔にも自分の罪惡の見せびらかしを敢てするか、說明するやう

に命ぜられた。

回龍はこの問に對して長く大聲で笑つた、それから云つた、

『皆様、愚僧が袖に首をつけたのでなく、首の方から來てそこへついたので――愚僧迷惑至極に存じて居ります。それから愚僧は何の罪をも犯しません。これは人間の首でなく、化物の首でございます、――それから化物が死んだのは、愚僧が自分の安全を計るために必要な用心をしただけのことからで、血を流して殺したのではございません』……それから彼は更に、全部の冒險談を物語つて、五つの首との會戰の話に及んだ時、又一つ大笑ひをした。

しかし、役人達は笑はなかつた。これは剛腹頑固な罪人で、この話は人を侮辱したものと考へた。それでそれ以上詮索しないで、一同は直ちに死刑の處分をする事にきめたが、一人の老人だけは反對した。この老いた役人は審問の間には何も云はなかつたが、同僚の意見を聞いてから、立ち上つて云つた、『先づ首をよく調べませう、これが未だすんでゐないやうだから。もしこの僧の云ふ事が本當なら、首を見れば分る。……首をここへ持つて來い』

回龍の背中からぬき取つた衣にかみついて居る首は、裁判官達の前に置かれた。老人は

それを幾度も廻して、注意深くそれを調べた。そして頸の項にいくつかの妙な赤い記號らしいものを發見した。その點へ同僚の注意を促した。それから頸の一端がどこにも武器で斬られたらしい跡のない事を見せた。かへつて落葉が軸から自然に離れたやうに、その頸の斷面は滑らかであつた。……そこで老人は云つた、

『僧の云つた事は全く本當としか思はれない。これはろくろ首だ。「南方異物志」に、本當のろくろ首の項の上には、いつでも一種の赤い文字が見られると書いてある。そこに文字がある。それはあとで書いたのではない事が分る。その上甲斐の國の山中には餘程昔から、こんな怪物が住んで居る事はよく知られて居る。……しかし』囘龍の方へ向いて、老人は叫んだ――『あなたは何と强勇なお坊さんでせう。たしかにあなたは坊さんには珍らしい勇氣を示しました。あなたは坊さんよりは、武士の風がありますな。多分あなたの前身は武士でせう』

『如何にもお察しの通り』と囘龍は答へた。『剃髪の前は、久しく弓矢取る身分であつたが、その頃は人間も惡魔も恐れませんでした。當時は九州磯貝平太左衞門武連と名のつてゐましたが、その名を御記憶の方も或はございませう』

その名前を名のられて、感嘆のささやきが、その法廷に滿ちた。その名を覺えて居る人

が多數居合せたからであつた。それからこれまでの裁判官達は、忽ち友人となつて、兄弟のやうな親切をつくして感嘆を表はさうとした。恭しく國守の屋敷まで護衛して行つた。そこでさまざまの歡待饗應をうけ、褒賞を賜はつた後、やうやく退出を許された。面目身に餘つた囘龍が諏訪を出た時は、このはかない娑婆世界でこの僧程、幸福な僧はないと思はれた。首はやはり携へて行つた――みやげにすると戲れながら。

さて、首はその後どうなつたか、その話だけ殘つて居る。

諏訪を出て一兩日のあと、囘龍は淋しい處で一人の盜賊に止められて、衣類を脱ぐ事を命ぜられた。囘龍は直ちに衣を脱して盜賊に渡した。盜賊はその時、始めて袖にかかつて居るものに氣がついた。さすがの追剝ぎも驚いて、衣を取り落して、飛び退いた。それから叫んだ、『やあ、こりやとんでもない坊さんだ。おれよりもつと惡黨だね。おれも實際これまで人を殺した事はある、しかし袖に人の首をつけて歩いた事はない。……よし、お坊さん、こりやおれ達は同じ商賣仲間だぜ、どうしてもおれは感心せずには居られない。ところで、その首はおれの役に立ちさうだ。おれはそれで人をおどかすんだね。賣つてくれないか。おれのきものと、この衣と取り替へよう、それから首の方は五兩出す』

回龍は答へた、

『お前が是非と云ふなら、首も衣も上げるが、實はこれは人間の首ぢやない。化物の首だ。それで、これを買つて、そのために困つても、わしのために欺かれたと思つてはいけない』

『面白い坊さんだね』追剝ぎが叫んだ。『人を殺してそれを冗談にして居るのだから、……しかし、おれは全く本氣なんだ。さあ、きものはこゝ、それからお金はこゝにある。――それから首を下さい。……何もふざけなくつてもよからう』

『さあ、受け取るがよい』回龍は云つた。『わしは少しもふざけてゐない。何かをかしい事でも若しあれば、それはお前がお化けの首を、大金で買ふのが馬鹿げてゐてをかしいと云ふ事だけさ』それから回龍は大笑をして去つた。

こんなにして盜賊は首と、衣を手に入れて暫らく、お化の僧となつて追剝ぎをして歩いた。しかし諏訪の近傍に來て、彼は首の本當の話を聞いた。それからろくろ首の亡靈の祟りが恐ろしくなつて來た。そこでもとの場所へ、その首をかへして、體と一緒に葬らうと決心した。彼は甲斐の山中の淋しい小屋へ行く道を見つけたが、そこには誰もゐなかつ

た。體も見つからなかつた。そこで首だけを小屋のうしろの森に埋めた。それからこのろくろ首の亡靈のために施餓鬼を行つた。そしてろくろ首の塚として知られて居る塚は今日もなほ見られる。(とにかく、日本の作者はさう公言する)

葬られたる祕密

むかし丹波の國に稲村屋源助といふ金持ちの商人が住んで居た。此人にお園といふ一人の娘があつた。源助は田舎の先生の教育だけで育てる事を遺憾に思ひ、信用のある從者をつけて娘を京都にやり、都の婦人達の受ける上品な藝事を修業させるやうにした。かうして教育を受けて後、お園は父の一族の知人――ながらやと云ふ商人に嫁けられ、殆んど四年の間その男と樂しく暮した。二人の仲には一人の子――男の子があつた。然るにお園は結婚後四年目に病氣になり死んでしまつた。

その葬式のあつた晩にお園の小さい息子は、お母さんが歸つて來て、二階のお部屋に居たよと云つた。お園は子供を見て微笑んだが、口を利きはしなかつた。それで子供は恐はくなつて逃げて來たと云ふのであつた。其處で、一家の内の誰れ彼れが、お園のであつた二階の部屋に行つて見ると、驚いたことには、その部屋にある位牌の前に點された小さい燈明の光りで、死んだ母なる人の姿が見えたのである。お園は簞笥則ち抽斗になつて居る

箱の前に立つて居るらしく、其箪笥にはまだお園の飾り道具や衣類が入つて居たのである。お園の頭と肩とは極く瞭然見えたが、腰から下は姿がだんだん薄くなつて見えなくなつて居る――恰もそれが本人の、はつきりしない反影のやうに、又、水面に於ける影の如く透き通つて居た。

それで人々は、恐れを抱き部屋を出てしまひ、下で一同集つて相談をした處、お園の夫の母の云ふには『女といふものは、自分の小間物が好きなものだが、お園も自分のものに執著して居た。多分、それを見に戻つたのであらう。死人てそんな事をするものも隨分あります――その品物が檀寺にやられずに居ると。お園の著物や帯もお寺へ納めれば、多分魂も安心するであらう』

で、出來る限り早く、この事を果すといふ事に極められ、翌朝、抽斗を空にし、お園の飾り道具や衣裳はみな寺に運ばれた。しかしお園はつぎの夜も歸つて來て、前の通り箪笥を見て居た。それからそのつぎの晩も、つぎのつぎの晩も、毎晩歸つて來た――爲めにこの家は恐怖の家となつた。

お園の夫の母はそこで檀寺に行き、住職に事の一伍一什を話し、幽靈の件について相談

を求めた。その寺は禪寺であつて、住職は學識のある老人で、大玄和尚として知られて居た人であつた。和尚の言ふに『それはその簞笥の內か、又はその近くに、何か女の氣にかかるものがあるに相違ない』老婦人は答へた――『それでも私共は抽斗を空にいたしましたので、簞笥にはもう何も御座いませんのです』――大玄和尚は言つた『宜しい、では、今夜拙僧が御宅へ上り、その部屋で番をいたし、どうしたらいいか考へて見るて御座らう。どうか、拙僧が呼ばる時の外は、誰れも番を致して居る部屋に、入らぬやう命じて置いて戴き度い』

日沒後、大玄和尚はその家へ行くと、部屋は自分のために用意が出來て居た。和尚は御經を讀みながら、其處にただ獨り坐つて居た。が、子の刻過ぎまでは、何も顯れては來なかつた。しかし、その刻限が過ぎると、お園の姿が不意に簞笥の前に、何時となく輪廓を顯した。その顏は何か氣になると云つた樣子で、兩眼をじつと簞笥に据ゑて居た。

和尚はかかる場合に誦するやうに定められてある經文を口にして、さてその姿に向つて、お園の戒名を呼んで話しかけた『拙僧は貴女のお助けをするために、此處に來たものて御座る。定めしその簞笥の中には、貴女の心配になるのも無理のない何かがあるのであらう。

貴女のために私がそれを探し出して差し上げようか』影は少し頭を動かして、承諾したらしい様子をした。そこで和尙は起ち上り、一番上の抽斗を開けて見た。が、それは空であつた。つづいて和尙は、第二、第三、第四の抽斗を開けた――抽斗の背後や下を氣をつけて探した――箱の內部を氣をつけて調べて見た。が何もない。しかしお園の姿は前と同じやうに、氣にかかると云つたやうにぢつと見つめて居た。『どうして貰ひたいと云ふのかしら？』と和尙は考へた。が、突然かういふ事に氣がついた。抽斗の中を張つてある紙の下に何か隱してあるのかも知れない。と、其處で一番目の抽斗の貼り紙をはがしたが――何もない！　第二、第三の抽斗の貼り紙をはがしたが――それでもまだ何もない。然るに一番下の抽斗の貼り紙の下に何か見つかつた――一通の手紙である。『貴女の心を惱まして居たものはこれかな？』と和尙は訊ねた。女の影は和尙の方に向つた――その力のない凝視は手紙の上に据ゑられて居た。『拙僧がそれを燒き棄てて進ぜようか？』と和尙は訊ねた。お園の姿は和尙の前に頭を下げた。『今朝すぐに寺で燒き棄て、私の外、誰れにもそれを讀ませまい』と和尙は約束した。姿は微笑して消えてしまつた。

和尙が梯子段を降りて來た時、夜は明けかけて居り、一家の人々は心配して下で待つて

居た。『御心配なさるな、もう二度と影は顯れぬから』と和尚は一同に向つて云つた。果してお園の姿は遂に顯れなかつた。

手紙は燒き棄てられた。それはお園が京都で修業して居た時に貰つた艶書であつた。しかしその內に書いてあつた事を知つて居るものは和尚ばかりであつて、祕密は和尚と共に葬られてしまつた。

雪女

武藏の國の或村に茂作、巳之吉と云ふ二人の木こりがゐた。この話のあつた時分には、茂作は老人であつた。そして、彼の年季奉公人であつた巳之吉は、十八の少年であつた。毎日、彼等は村から約二里離れた森へ一緒に出かけた。その森へ行く道に、越さねばならない大きな河がある。そして、渡し船がある。渡しのある處に度々、橋が架けられたが、その橋は洪水のある度毎に流された。河の溢れる時には、普通の橋では、その急流を防ぐ事はできない。

茂作と巳之吉は或大層寒い晩、歸り途で大吹雪に遇つた。渡し場に着いた、渡し守は船を河の向う側に殘したままで、歸つた事が分つた。泳がれるやうな日ではなかつた。それで木こりは渡し守の小屋に避難した――避難處の見つかつた事を僥倖に思ひながら。小屋には火鉢はなかつた。火をたくべき場處もなかつた。窓のない一方口の、二疊敷の小屋で

あつた。茂作と巳之吉は戸をしめて、蓑をきて、休息するために横になつた。初めのうちは左程寒いとも感じなかつた。そして、嵐はぢきに止むと思つた。

老人はぢきに眠りについた。しかし、少年巳之吉は長い間、目をさましてゐて、恐ろしい風や戸にあたる雪のたえない音を聴いてゐた。河はゴウゴウと鳴つてゐた。小屋は海上の和船のやうにゆれて、ミシミシ音がした。恐ろしい大吹雪であつた。空氣は一刻一刻、寒くなつて來た。そして、巳之吉は蓑の下でふるへてゐた。しかし、たうとう寒さにも拘らず、彼も亦寝込んだ。

彼は顔に夕立のやうに雪がかかるので眼がさめた。小屋の戸は無理押しに開かれてゐた。そして雪明かりで、部屋のうちに女、――全く白裝束の女、――を見た。その女は茂作の上に屈んで、彼に彼女の息をふきかけてゐた、――そして彼女の息はあかるい白い煙のやうであつた。殆んど同時に巳之吉の方へ振り向いて、彼の上に屈んだ。彼は叫ばうとしたが何の音も發する事ができなかつた。白衣の女は、彼の上に段々低く屈んで、しまひに彼女の顔は殆んど彼にふれるやうになつた、そして彼は――彼女の眼は恐ろしかつたが――彼女が大層綺麗である事を見た。しばらく彼女は彼を見續けてゐた、――それから彼女は微笑した、そしてささやいた、――『私は今ひとりの人のやうに、あなたをしようかと思

つた。しかし、あなたを氣の毒だと思はずには居られない、――あなたは若いのだから。……あなたは美少年ね、巳之吉さん、もう私はあなたを害しはしません。しかし、もしあなたが今夜見た事を誰かに――あなたの母さんにでも――云つたら、私に分ります、そして私、あなたを殺します。……覺えていらつしやい、私の云ふ事を』

さう云つて、向き直つて、彼女は戸口から出て行つた。その時、彼は自分の動ける事を知つて、飛び起きて、外を見た。しかし、女はどこにも見えなかつた。そして、雪は小屋の中へ烈しく吹きつけてゐた。巳之吉は戸をしめて、それに木の棒をいくつか立てかけてそれを支へた。彼は風が戸を吹きとばしたのかと思つて見た、――彼は只夢を見てゐたかも知れないと思つた。それで入口の雪あかりの閃きを、白い女の形と思ひ違ひしたのかも知れないと思つた。しかしそれもたしかではなかつた。彼は茂作を呼んで見た。そして、老人が返事をしなかつたので驚いた。彼は暗がりへ手をやつて茂作の顔にさはつて見た。そして、それが氷である事が分つた。茂作は固くなつて死んでゐた。……

あけ方になつて吹雪は止んだ。そして日の出の後少ししてから、渡し守がその小屋に戻つて來た時、茂作の凍えた死體の側に、巳之吉が知覺を失うて倒れて居るのを發見した。

巳之吉は直ちに介抱された、そして、すぐに正氣に歸つた、しかし、彼はその恐ろしい夜の寒さの結果、長い間病んでゐた。彼は又老人の死によつてひどく驚かされた。しかし、彼は白衣の女の現れた事については何も云はなかつた。再び、達者になるとすぐに、彼の職業に歸つた、――毎朝、獨りで森へ行き、夕方、木の束をもつて歸つた。彼の母は彼を助けてそれを賣つた。

翌年の冬の或晩、家に歸る途中、偶然同じ途を旅して居る一人の若い女に追ひついた。彼女は背の高い、ほつそりした少女で、大層綺麗であつた。そして巳之吉の挨拶に答へた彼女の聲は歌ふ鳥の聲のやうに、彼の耳に愉快であつた。それから、彼は彼女と竝んで歩いた、そして話をし出した。少女は名は「お雪」であると云つた。それからこの頃兩親共なくなつた事、それから江戸へ行くつもりである事、そこに何軒か貧しい親類のある事、その人達は女中としての地位を見つけてくれるだらうと云ふ事など。巳之吉はすぐにこの知らない少女になつかしさを感じて來た、そして見れば見る程彼女が一層綺麗に見えた。彼は彼女に約束の夫があるかと聞いた、彼女は笑ひながら何の約束もないと答へた。それから、今度は、彼女の方で巳之吉は結婚して居るか、或は約束があるかと尋ねた、彼は彼

女に、養ふべき母が一人あるが、お嫁の問題は、まだ自分が若いから、考へに上つた事はないと答へた。……こんな打明け話のあとで、彼等は長い間ものを云はないで歩いた、しかし諺にある通り『氣があれば眼も口ほどにものを云ひ』であつた。村に着く頃までに、彼等はお互に大層氣に入つてゐた。そして、その時巳之吉は暫く自分の家で休むやうにとお雪に云つた。彼女は暫くはにかんでためらつてゐたが、彼と共にそこへ行つた。そして彼の母は彼女を歡迎して、彼女のために暖かい食事を用意した。お雪の立居振舞は、そんなによかつたので、巳之吉の母は急に好きになつて、彼女に江戸への旅を延ばすやうに勸めた。そして自然の成行きとして、お雪は江戸へは遂に行かなかつた。彼女は「お嫁」としてその家にとどまつた。

お雪は大層よい嫁である事が分つた。巳之吉の母が死ぬやうになつた時――五年ばかりの後――彼女の最後の言葉は、彼女の嫁に對する愛情と賞讚の言葉であつた、――そしてお雪は巳之吉に男女十人の子供を生んだ、――皆綺麗な子供で色が非常に白かつた。

田舍の人々はお雪を、生れつき自分等と違つた不思議な人と考へた。大概の農夫の女は早く年を取る、しかしお雪は十人の子供の母となつたあとでも、始めて村へ來た日と同じ

やうに若くて、みづみづしく見えた。

或晩子供等が寝たあとで、お雪は行燈の光で針仕事をしてゐた。そして巳之吉は彼女を見つめながら云つた、――

『お前がさうして顔にあかりを受けて、針仕事をして居るのを見ると、わしが十八の少年の時遇つた不思議な事が思ひ出される。わしはその時、今のお前のやうに綺麗なそして色白な人を見た。全く、その女はお前にそつくりだつたよ』……

仕事から眼を上げないで、お雪は答へた、――

『その人の話をして頂戴。……どこでおあひになつたの』

そこで巳之吉は渡し守の小屋で過ごした恐ろしい夜の事を彼女に話した、――そして、にこにこしてささやきながら、自分の上に屈んだ白い女の事、――それから、茂作老人の物も云はずに死んだ事。そして彼は云つた、――

『眠つて居る時にでも起きて居る時にでも、お前のやうに綺麗な人を見たのはその時だけだ。勿論それは人間ぢやなかつた。そしてわしはその女が恐ろしかつた、――大變恐ろしかつた、――がその女は大變白かつた。……實際わしが見たのは夢であつたか、それとも雪女であつたか、分らないで居る』……

お雪は縫物を投げ捨てて立ち上つて巳之吉の坐つて居る處で、彼の上に屈んで、彼の顔に向つて叫んだ、――

『それは私、私、私でした。……それは雪でした。そしてその時あなたが、その事を一言でも云つたら、私はあなたを殺すと云ひました。……そこに眠つて居る子供等がゐなかつたら、今すぐあなたを殺すのでした。でも今あなたは子供等を大事に大事になさる方がいゝ、もし子供等があなたに不平を云ふべき理由でもあつたら、私はそれ相當にあなたを扱ふつもりだから』……

彼女が叫んで居る最中、彼女の聲は細くなつて行つた、風の叫びのやうに、――それから彼女は輝いた白い霞となつて屋根の棟木の方へ上つて、それから煙出しの穴を通つてふるへながら出て行つた。……もう再び彼女は見られなかつた。

青柳のはなし

文明年間（西暦一四六九――一四八六）能登の國の大名、畠山義統の家臣に友忠と云ふ若い侍があつた。友忠は越前の生れてあつたが、若い時小姓として、能登の大名の屋敷へ引取られ、大名の監督の下に武藝を職とするやうに教育を受けた。生長するに從つて、文武兩道の達人となつたので、引續き君侯の覺えめでたかつた。快活なる性質と人好きのする應接ぶりと、それから甚だ立派な風采とを生れつきもつてゐたので、彼は武士仲間に甚だ敬愛せられてゐた。

友忠が二十の頃、畠山義統の親戚京都の大大名細川政元へ內密の用向の使にやられた。越前を通つて旅するやうに命ぜられたので、この青年は途中、一人ぐらしの母を訪れる事の許しを願ひ出て、許可を得た。

出かけた時は、その年の最も寒い時であつた。雪は野山を蔽うてゐた。彼は强い馬に乘つてゐたが、進みのおそいことは仕方がなかつた。彼のたどつた道は山ばかりの所で、人

家は少く、且つその間は遠く離れてゐた。彼の旅行の第二日目に、長時間の乘馬にくたびれたあとで、夜おそくまで目的の宿舍に着く事ができなかつたので、彼は當惑した。彼の心配したのも無理はなかつた、——烈しい吹雪が、恐ろしく寒い風を伴うて來て、馬は疲勞の徵しを表はして來たから。しかし、その苦しい時に思ひがけなく、友忠は柳の木のある近い坂の上に茅屋の屋根を認めた。やつとの事で疲れた馬をはげまして、その家に赴いた。それから、風の入らぬやうにしめ切つてある雨戶を烈しくたたいた。一人の老婦人がそれをあけて、その立派な見知らぬ人を見て、氣の毒がつて聲をかけた、「まあ、お氣の毒、——若いお方がこんな天氣に獨りで旅をされて。……さあ、どうぞお入り下され」

友忠は馬から下りた。それから後ろの物置へ馬を連れて行つたあとで、その茅屋の中に入つた。そこには老人と一人の娘が割り竹を焚いてあたつてゐた。彼等は恭しく、火に近づくやうに友忠を誘つた。そして老人達は、お客のために酒を暖め、食物を用意しにかかつた。そして彼の旅行に關して質問もした。そのうちに、若い娘は屛風のうしろにかくれた。友忠は彼女の非常に綺麗である事を見て驚いた、たとへ彼女の身なりはみすぼらしく、又ほどいた長い髮は亂れてゐたけれども。彼はそんな麗しい女が、そんなに貧しい

そして淋しい處に住んで居る事を不思議に思つた。

老人は彼に云つた、

『お客樣、つぎの村は遠うございます、それに雪もひどく降つてゐます。風は身を切るやうで、道は大變惡うございます。だから、今夜これからさきへおいでになることは、先づ先づ危うございませう。このあばら屋はお泊りになれるやうな處ではございませんが、それに私共は御意に召すやうなものを何もさし上げる事はできませんが、それでも今夜はこんな貧しい屋根の下でも御泊りなさる方が、或は安全でございませう。……御馬の方は私共が大切にお世話致します』

友忠はこの謙遜な申し出てを受けた、——內心かうしてもつとこの若い女を見る事の機會が與へられたのを喜んだ。やがて粗末ながらも澤山の食事が、彼の前に置かれた。そして少女は屛風のうしろから酒の給仕に出て來た。彼女はもう粗野ながらさつぱりした手織縞の着物に着かへてゐた。そして長い下げ髮は、綺麗に櫛で撫でつけてあつた。彼女が酒を注ぐために屈んだ時、友忠は彼女がこれまで見たどの女よりも比較にならぬ程綺麗である事を見て驚いた。そして彼女の一擧一動には、彼を驚かすしとやかさがあつた。しかし老人達は彼女のために云ひわけをし始めた、『旦那さま、私共の娘の靑柳はこの山中で、

殆んどひとりで育てられましたので、上品な作法は何も存じません。どうか愚かでものを知らない事を御赦し下さい』友忠はそれをさへぎつて、そんな綺麗な乙女に給仕される事を幸福と思ふと云つた。彼は彼女から眼を脇へ向けることができなかつた、――感心して見つめてゐては、彼女を赤面させるだらうと知つてはゐたけれども、――そして彼は前にある酒や肴に手をふれなかつた。母は云つた、『旦那様どうか少し飲んだり、喰べたりして戴きたうございます、――この斬るやうな風で、冷えなさつたに相違ありませんから、――この百姓の食物はまことにまづいものばかりでございますが』それから老人達の氣に入るやうに、友忠はできるだけ飲んだり、喰べたりした。しかし顔を赧らめて居る少女の愛らしさは益々彼の心を引きつけた。彼は彼女と話した。そして彼女の言葉は彼女の容貌と同じく麗しい事が分つた。山の中で育つたと云ふ事は、或は本當かも知れない――しかしそれなら、彼女の兩親はいつかは高位の人であつたに相違ない。彼女は身分ある人の娘のやうに語り、且つ振舞つたから。突然彼は彼女に歌を詠みかけた――それがやはり問であつた――彼の心の喜びに動かされて、――

尋ねつる花かとてこそ日をくらせ
　明けぬになどかあかねさすらん

一刻のためらひもなく、彼女はこんな歌で答へた。

出づる日のほのめく色をわが袖に
　つつまば明日も君やとまらん

そこで友忠は彼女が自分の賞讃を受けてくれた事を知つた。そしてその歌の文句が表はした保證を喜ぶと共に、彼女の感情を歌に表はす技術にも同じく驚いた。彼は今目の前のこの田舍娘よりも、もつと綺麗な怜悧な少女に遇ふ事はとても望まれない、ましてわがものとする事は一層望まれない事を知つた。そして彼の心のうちの聲は熱心に『神佛が自分に授けたこの幸福を取れ』と叫んで居るやうであつた――要するに、友忠は魅せられてしまつた――何等の前置きもなく老人夫婦に、娘を自分にくれることを願つた程魅せられたのであつた、――同時に彼の名と血統と、能登の大名の家來のうちでの彼の位地とを彼等に告げて。

彼等は有難さの驚きの歎聲を度々あげて、彼の前にお辭儀をした。しかし、しばらく躊躇したやうなやうすのあとで、父は答へた、――

『お客樣、あなたは高い位地のお方でございます。そしてもつと高い位地へお登りになる事と存じます。あなたが私共へ與へて下さる御恩は大きすぎます、――全く、私共のそれに對して有難く思ひますその心の深さは申しつくされません、量る事もできません。しかし私共のこの娘は賤しい生れの、愚かな田舍者でございまして、何のしつけも教育もございませんので、立派なお侍の御家内に致しますのは、不相應でございます。こんな事をお話し致す事さへ貿に以ての外でございます。……しかし、娘がお氣に入りまして、田舍育ちをお赦しになり、又甚だ無作法なのをお見逃し下さると云ふ事であれば、私共は喜んで數ならぬ御側づかへとしてさし上げます。それ故娘の事は思召し通りにお任せ致します』

朝になるまでに、嵐は納まつた、そして日は雲なき東から現れた。たとへ青柳の袖が、彼女の愛人の眼からあかつきの薔薇色をかくしたとしても、彼はもはやとまつては居られなかつた。しかし、又彼は娘と別れる事は耐えられぬ事であつた。そして旅行の準備が一切できた時、彼はかう云つて彼女の兩親に話した、――

『これまでお世話になつた上、更にお願するのは恩知らずのやうですが、お孃さんを下

さるやうに、もう一度お願しなければなりません。今お嬢さんと別れる事は、私には中々できません。それでお嬢さんも私と一緒に行く事はおいやではないのですから、差支なければ、このまま私はおつれして參りたい。お嬢さんを下さつた上は、私はあなた方を私の兩親と思つていつも大切に思ひます。……それはとにかく、あなた方の御親切なもてなしの御禮までに少々ながらこれをお受けになつて下さい』

さう云つて、彼は彼の謙遜な主人の前に黄金の包みを置いた。しかし老人は度々平伏したあとで、その贈りものを押しかへして、云つた、――

『御親切な旦那様、黄金は私共には何の使ひ途もございません。あなたは長い寒い旅の間、多分それが必要でございませう。ここでは私共は何も買ひません。そして私共はたとへ買ひたくとも、私共のためにお金をそんなに費ふ事はできません。……娘の事は、もうあなた様に差上げたものでございますから、――あなたのものでございます。それ故つれて行つて下さるのに、別に私共の許しをお求めになるに及びません。もうすでに娘はあなたのお伴をしたい、そしてお氣に召す間はあなたのはしためとなつてゐたいと私共に申しました。あなたが娘を引き取つて下さると云ふ事を聞いて、私共は喜ぶばかりでございます。どうか私共のために御心を惱まして下さらないやうお願ひ致します。ここでは娘に相

應な身なりを整へてやる事はできません、――支度金はなほさら整へられません。その上、老人のこと故、何れ遠からぬうちに娘と別れねばなりません。それ故今あなたが娘をつれて行つて下さると云ふ事は、大層仕合せでございます」

友忠が老人夫婦に贈りものを受けるやうに説かうとしても駄目であつた。この人々はお金を何とも思つてゐない事が分つた。しかし友忠は老人夫婦が、娘の一生を彼に託する事を實際望んで居る事を知つた。そこで彼女を彼の馬に乘せて、心からの感謝の言葉を幾度か云つて、老人夫婦に當分の別れを告げた。

『お客樣』父は答へた、『感謝すべきは、あなたでなく、私共でございます。あなたが娘にやさしくして下さる事を信じてゐますから、娘のために心配する事はございません』

……

「ここで、日本語の原文では話の自然の進行に妙な故障がある、それで話が變につじつまが合はなくなつて居る。友忠の母や青柳の兩親や、能登の大名についてはこれ以上何にも云つてない。明らかに著者はここで仕事に倦きて來たので、無頓着にその話を進めて、

その驚くべき結末に急いだのである。私はこの省略を充たす事も、構造の缺點を補ふ事もできない。しかし說明になる詳細な點を少し入れて見る。それがなければあとの話がまとまらないから。……友忠は輕率にも青柳を京都へつれて行つて、そしてそこで面倒な事が起つたらしい、しかしその後どこで暮らしてゐたか書いてない」

……さて侍は君侯の承諾がなくては結婚はできないもの。そして友忠は自分の使命が果されないうちはこの許可は得られさうにはなかつた。そんな事情の下に、友忠は青柳の美貌は危險な注意を引きはしないか、又彼女を彼から奪ひ取るための策が講ぜられはしないかを恐れる理由があつた。それ故京都では彼女を物珍らしい目から隱すやうにつとめた。しかし細川侯の家來が或日青柳を見て、彼女と友忠との關係を發見した。そしてその事を大名に報告した。そこで――若い殿樣で、綺麗な顏がすきな――大名はその少女を御殿へつれて來るやうに命じた。彼女はいきなり無理にそこへつれられた。

友忠は非常に悲しんだ、しかし彼は自分が無力である事を知つた。彼は遠國の大名に仕へて居る卑しい使者に過ぎない。そして今はそれよりもつと有力な大名の思ひ通りになつ

て居るのであつた、その人の意志は如何ともする事はできない。その上友忠は自分は拙い事。——武士の法規の禁ずる內緣を結んで自ら不幸を招いた事を知つた。今彼に取つては一縷の望、　絕對絕命の望——しかなかつた。それは青柳が望んで自分と一緒に逃げ出す事ができるかどうかと云ふ事であつた。長い間考へたあとで、彼は彼女に手紙をやつて見る事にきめた。この企ては勿論危險であらう、彼女にやる書きつけは何でも大名の手に落ちさうであつた。そして、御殿の中に居る人に戀文を送る事は赦し難い犯罪であつた。それでも彼はその冒險を敢てしようと決心した。そして、詩の形にして手紙を書いて、彼女に傳へる事を工夫した。詩はただ二十八字であつた。しかし、その二十八字で彼は彼の熱情の深さを悉く表はし、彼の絕望の凡ての苦しみをほのめかす事ができた、——

公子王孫逐二后塵一 譯註一
綠珠垂レ淚滴二羅巾一
侯門一入深如レ海
從レ是蕭郎是路人

この詩の送られたそのつぎの日の夕方、友忠は細川侯の御前に呼び出された。青年は直ちに自分の祕密が裏切られたと疑つた。そして、彼の手紙が大名に見られたのなら嚴罰を逃れる事は覺束ないと思つた。『今度は私に死を命ずるてあらう』友忠は考へた、――『しかし青柳が私にかへらぬ以上生きてゐたくない。その上死刑の宣告が下つたら、私はせめては細川を殺すやうにやつて見る』彼は兩刀を帶にはさんて、御殿へ急いだ。

謁見室に入つて友忠は細川侯が、禮服禮帽をつけた高位の侍にとりまかれて上段の間に坐して居るのを見た。一同は銅像のやうに默つてゐた、友忠が敬禮をして進む間、その寂として居る事は彼には氣味惡く重苦しく思はれた。丁度嵐の前の靜けさのやうに。ところが、突然細川は上段の間から下りて、青年の手をとつて『公子王孫逐后塵、、、』の詩の文句をくりかへし始めた。……そして友忠が見上げると、君侯の眼にやさしい涙が見えた。

それから細川は云つた、――

『互にそれ程愛し合つて居るから、自分は親戚能登守に代つてお前の結婚を許す事にした。それてお前の結婚は今自分の面前て行ふ事にする。お客は集つて居る、引出物も用意

してある』

君侯よりの合圖で、向うの部屋を隱してあるふすまは開けられた。そして友忠は儀式のために集つた殿中の澤山の高位高官の人々、及び花嫁の衣裳を着て、彼を待つて居る靑柳を見た。……かくして彼女は彼にかへされた、――婚禮の儀式はにぎやかに且つ立派であつた、――それから貴重な引出物は君侯及び君侯の一族の人々によつてこの若い夫婦に贈られた。

＊

その結婚の後、五年間友忠と靑柳は樂しく一緒にくらした。しかし或朝靑柳は何か家事向きの事について、夫と話して居る間に不意に苦しみの叫びを發して、それから眞靑になつて動かなくなつた。しばらくして、弱つた聲で彼女は云つた、『こんなに失禮に叫び出した事を赦して下さい――そんなに急に痛み出したのです。……あなた、私共が一緒になつたのは前世の何かの因緣からに違ひありません、その有難い緣でこれからさき何世も、私共は又一緒になれると思ひます。しかし私共のこの今の世ではその緣は今終りました、――私共は別れる事になります。どうか私のために念佛を唱へて下さい、――私はもう死

にかかつてゐますから』

『おい、何を變な妙な事を考へてゐるのだ』驚いた夫は叫んだ、――『お前はただ少し病氣なのだ、ね――……少しお休み、そしたら直る』……

『いゝえ、いゝえ』彼女は答へた――『私は死にます。神經ぢやありません、――私に分つてゐます、……そして今では、あなた、本當の事を隱して置いてももう駄目です、――私人間ぢやありません。木の魂が私の魂です、――木の心が私の心です、――柳の養分は私の生命です。そして今、この意地の惡い時、誰か私の木を伐り倒して居るのです、――それで死なねばならないのです。……泣く事も今では私の力に餘ります……早く早く私のために念佛を唱へて下さい。……早く……あゝ』

もう一度苦しみの叫びをあげて彼女は綺麗な頭をわきへ向けて、袖の下に顏をかくさうとした。しかし殆んど同時に彼女の全身は最も不思議な風に消えて、段々下の方へ下の方へと沈んで行つて――床と同じ高さになつて行くやうであつた。友忠は彼女を支へるために飛び出した。――しかしそこに支へるものは何にもなかつた。疊の上には美しい人のもぬけの着物と髮につけてゐた飾りだけしかなかつた。からだは影もかたちもなくなつてゐ

た。……

友忠は頭を剃つて佛門に入り、雲水の僧になつた。諸國を行脚して、聖地を訪ふ毎に青柳の魂のために祈りをあげた。巡禮の間に越前に着いて彼の愛人の兩親の家をさがした。しかし兩親の家のあつた山の間の淋しい場所に着いた時、その家は旣になくなつて居る事を見出した。家のあつた場處のしるしになるものさへ何にもなかつた。ただ三本の柳の切り株があるだけ――二本の老木と一本の若木と――それが彼の着くずつと以前に伐り倒されたのであつた。

それ等の柳の木の株の側に彼は諸々の經文を彫刻した塚を建てた。そしてそこで青柳及び彼女の兩親の魂のために多くの佛事を行つた。

譯註一　唐の詩人崔郊の名高い詩。崔郊は一旦奪はれた愛人をこの詩によつてとりもどす事ができた。

十六日櫻

伊豫國溫泉郡山越村に『十六日櫻』と云ふ大層名高い櫻の古い樹がある。その名の理由は毎年陰曆の正月十六日――しかもその日にだけ花が咲くからである。それで櫻の元來の性質から云へば、春を待つて花咲くのであるが、――この櫻の開花は大寒の時節である。しかし十六日櫻は自分のものでない――少くとも元來自分のものではなかつた生命で花をつける。その樹には或人の魂が潜んで居る。

その人は伊豫の武士であつた。樹はその人の庭にあつて、時が來れば――卽ち三月の終りか四月の始め頃には、いつも花が咲いた。子供の時にはその樹の下で遊んだ。兩親や祖父母や祖先は、百年以上も引續いて季節每に讃美の歌を書いた短冊を、花の咲いた枝にかけて來た。彼自身も大層老いて――子供達には皆先だたれた、それでこの世に心殘りのものはその樹の外に何にもなかつた。ところで或年の夏、その樹が凋んで枯れた。

この上もなく老人はその樹のために悲しんだ。そこで親切な隣人達は――老人を慰めるために――綺麗な櫻の若木を見つけて、その庭に植ゑた。そこで老人は禮を云つて嬉しさうな顔をした。しかし實際老人の心は痛みに滿ちてゐた、餘りに老樹を愛してゐたので、何物も代つてそれをなくした悲しみを慰める事ができないのであつた。

遂に老人によい思ひつきが浮んだ。枯れかかつて居る樹の助かる方法を思ひ出した。（それは一月十六日であつた）獨りで庭へ出て凋れた樹の前に平伏して、云つた、『どうか御願だからもう一度花を咲かして貰ひたい――自分はお前の身代りになるから』（卽ち神々のなさけによつて、人は外の人、或は動物或は樹木のためにでも、實際生命をすてる事ができる――そして身代りに立つ事ができるものと信じられて居る）それからその樹の下に白布といくつかの敷物を敷いて、その敷物の上で武士の式通りの切腹を行つた。それでこの人の魂はその樹に移つて、その時刻に花を咲かせた。

それで一月十六日、雪の時節に、毎年今もなほ花が咲く。

安藝之助の夢

昔、大和國、遠市と云ふ處に宮田安藝之助と云ふ鄕士がゐた。……「ここで私は、日本の封建時代には兵士兼農夫の特殊階級、英國の鄕士（ヨーメン）の階級に相當するものがあつて、鄕士と呼ばれた事を讀者に告げねばならない」

安藝之助の庭に大きな古い杉の樹があつて、蒸し熱い日には彼はいつもその下で休んでゐた。或大層暖かな午後、彼がこの樹の下に、同じ鄕士の友人二人と酒を飮みながら、雜談に耽つて居るうちに、突然眠りを催した、あまり眠いので、お客の前だが、少しまどろむ事を許して貰ひたいと友人に賴んだ。それから、その樹の根に横になつて、こんな夢を見た、

庭に横になつて居ると、何か立派な大名行列のやうな行列が、すぐそばの坂を下つて來るのを見たので、それを見物しに起き上つたと思つた。大層立派な行列である事が分つた、――これまで見た事のない程いかめしいものであつた。それからそれが彼の家に向つて前

進して來た。その先驅に立派な服裝をした若い人々の一隊があつて、きらきらする青い絹のかかつた御所車を曳いて居るのを見た。家に近く來た時行列がとまつた、それから立派な服裝の人――確かに位の高い人――がその行列から進み出て安藝之助に近づき、鄭重にお辭儀をして、それから云つた、

「わが君さま、御前に參りましたのは常世の國王の家來でございます。主人國王は私に代つて御挨拶を申し上げ、そして御用を何でも私に仰せつけ下さるやうにと申しました。國王は又宮殿へ御出で下さる事をお願致しますと、申上げよと申します。それ故どうかお迎にさし上げましたこの御車にすぐお召し下さいませ」

かう云ふ言葉を聞いて安藝之助は何か適當な返答をしたかつた。しかし彼は言葉の出ない程驚き且つ當惑した、――それと同時に彼の意志は彼からとけて行くやうであつた。それで家來が命じた通りにしかできなかつた。彼は車に乘つた。家來は彼のわきに乘つて、何か合圖をした。曳き手は絹の綱をとつて、南の方へその大きな車を向けた、――それから旅行が始まつた。

驚いた事には、忽ちのうちに、車がこれまで見た事のない支那風の大きな樓門の前で止まつた。ここで家來は下りて云つた、『私は御着を知らせに參ります』――それから見え

なくなつた。しばらく待つたあとて、安藝之助は、紫の絹の着物と、高い位を示す形の、高い帽子を冠つた二人の氣高い人が門から來るのを見た。この人々は恭しく彼に挨拶したあとて、車から下りる手傳をして、大きな門を通つて廣い庭を横ぎつて、宮殿の入口に案内した。その宮殿の表ては東西へ數哩の距離に廣がつて居るやうであつた。安藝之助は、それから非常に大きな立派な應接室へ通された。案内者は彼を上席に導いて、彼等は恭しく離れて坐つた。その間に禮裝した侍女は茶菓を運んだ。茶菓のすんだあとて、二人の紫の着物をきた侍者は安藝之助の前に低くお辭儀をして、つぎの言葉を彼に申し述べた、――宮中の儀式に從つて銘々代る代る述べながら、――

『只今、申上げまする事は、私共の光榮ある義務でございます、……こちらへお招きした理由につきまして。……主人國王は、あなたに御養子になつて戴く事をお願でございます。……そして丁度今日、結婚式をあげる事は王の願、又命令でございます、……王の姫君、内親王と。……私共はすぐに謁見室へ御案内致します。……そこて陛下は丁度お待ち受けてございます。……しかし先づあなたに適當な禮服を……お着せ申す事が必要と存じます』

かう云つて侍者は一緒に立ち上つて、金蒔繪の大きな箪笥の置いてある床の間へ進んだ。

箪笥を開いて、そのうちから立派な品の色々の着物と帯、それから冠をとり出した。それ等のものを安藝之助に着せて內親王の花婿にふさはしくした。それから謁見所へ案內した。そこで安藝之助は常世の國王がいかめしい高い黑の帽子を冠り、黃色の絹の着物を着て玉座の上に坐して居るのを見た。玉座の前にはお寺の佛像の如く、不動の姿勢で華やかに左右に大勢の大官が居ならんでゐた。そして安藝之助は、その眞中へ進んできまりの三拜の最敬禮をした。王は丁寧な言葉で彼に挨拶して、それから云つた、

「わが面前へ呼ばれた理由については、すでに聞かれた通りである。御身をわが獨り娘の婿にするときめたから、――それで婚禮は今行ふ事にする」

王の話が止むと、樂しい音樂の音が聞えた。それから美しい官女の長い行列が幕のうしろから進んで、花嫁の待つて居る部屋へ安藝之助を案內しに來た。

部屋は非常に廣かつた。それでも婚禮を見に集つた大勢の客を入れる事は中々できなかつた。安藝之助が王女に面して、設けてある座蒲團の上に坐つた時――一同が、安藝之助に對して敬禮した。花嫁は天津乙女のやうに見えた、彼女の着物は夏の空のやうに美しかつた。そして婚禮は大歡喜のうちに行はれた。

そのあとで新夫婦は、宮殿の一部分にかねて準備してあつたいくつかの部屋へ導かれた。

そこで彼等は大勢の貴い人々の祝詞と數へきれぬお祝の品々をうけた。

幾日か後に安藝之助は、再び玉座のある部屋へ呼ばれた。今度は以前よりも一層鄭重に迎へられた、それから王は、彼に云つた、

「わが領土の西南に萊州と云ふ島がある。御身を今度その島の知事に任命した。その人民は忠實で柔順である。しかしそこの法律は未だ常世の國の法律と一致してゐない。それからそこの習慣は正しく整理されてゐない。責任を以てできるだけ、そこの社會狀態を改良する事を任せる、それで親切と智慧を以て彼等を治めて貰ひたい。萊州への旅行に必要な準備はもう既にできて居る」

そこで海岸までは貴族や役人の大護衞に伴はれて安藝之助と花嫁は常世の國の宮殿から出かけた。そして王の準備した立派な船に乘つた。それから順風におくられて、安全に萊州に行つた。そしてその島のよい人民が、彼等を歡迎するために岸に集つて居るのを見た。

安藝之助は直ちに、彼の新しい任務にとりかかつた。その任務は別にむつかしいもので

はなかつた。知事となつての初めの三年間は、法律を制定してそれを行ふ事に重に忙しかつた。しかし彼は助けてくれる賢い相談役をもつて居た、そして彼はその仕事を不快と思はなかつた。全く終つた時に、昔の習慣できまつて居る儀式や、禮儀に出席するより外になすべき實際の任務はなかつた。病氣や貧苦のない程に、この國は健康地であり、又肥沃であつた。人民は善良で、法律を破る事はかつてなかつた。安藝之助はそれから萊州に二十年住んで治めた、――合せて二十三年とどまつた。その間に何の悲しみの影も彼の生涯をよぎらなかつた。

しかし彼が知事になつてから二十四年目に一大不幸が彼に來た。七人の子供――五人の男の子と二人の女の子――を生んだ彼の妻は病死した。彼女は壯麗な儀式をもつて範龍口の地方の美しい丘の頂上に葬られた。そして非常に立派な記念碑が墓の上に建てられた。しかし安藝之助は、もはや生きてゐたいと思はない程、彼女の死を悲しんだ。

さて、きまり通りの忌服が終つた時、常世の宮殿から萊州へ使者が來た。使者は安藝之助にくやみの言葉を傳へて、それから彼に云つた、

『私共の主人常世の國の王が、あなたにくりかへして云ふやうにと、命令なさる言葉は

からであります「今御身を御身の人々と御身の國へ送りかへすつもり。七人の子供の事は、王の孫であるから適當に養育する。それ故その子供については心配には及ばない」』

この命令を受けて安藝之助は、おとなしく出發の用意をした。一切の事務が片つき、顧問や信頼した役人達に別れを告げる儀式も終つた時に、彼は港まで恭しく見送られた。そこで彼のために送られた船にのつた。船は碧い空の下を青い海へと乘り出した。そして萊州の島の形までも青くなつた。それから灰色になつた、それから永久に消えた。……そして安藝之助は不意に目をさました――彼自身の庭園の杉の樹の下で。……

しばらく彼はぼんやりして目がくらんだ。しかし二人の友人は未だ彼のそばに坐つて、――酒を飮みながら談笑して居るのを見た。彼は當惑したやうに彼等を見つめて、大きな聲で叫んだ、

『不思議だな――』

『安藝之助殿は夢を見られたに相違ない』一人は笑つて、叫んだ。『何か不思議なものを見ましたか』

それから安藝之助は自分の夢の話、――常世の領土の萊州の島に、二十三年間とどまつ

た夢の話をした、——しかし彼等は實際彼が數分間しか眠らなかつたから驚いた。

一人の郷士は云つた、

『なる程、君は不思議なものを見ました。私共も君が眠つて居る間に妙なものを見た。小さい黃色の蝶が一つ君の顏の上をちよつとの間飛んでゐた。そして私共はそれを見てゐた。それからそれがその樹のそばで、君のわきの地面にとまつた。それからそれがとまると殆んど同時に大きい蟻が穴から出て來て、それを捕へて穴の中へ引きこんだ。丁度君が眼をさます前に、正しくその蝶が又穴から出て來て、前のやうに君の顏の上をヒラヒラ飛んで居るのを見た。がそれが不意に消えた、どこへ行つたのだか分らない』

『多分それは安藝之助殿の魂だ』今一人の郷士が云つた、——『たしかに安藝之助殿の口へ飛び込むのを見たと思つた。……しかしたとひ、その蝶が安藝之助殿の魂であつたとしても、その事はその夢の說明にはなりさうにない』

『蟻が說明するかも知れない』初めの人が云つた。『蟻は不思議なものだ……或はお化けかも知れない。……とにかくあの杉の樹の下に大きな蟻の巢がある』

『見よう』この思ひつきにひどく感心して、安藝之助が叫んだ。それから彼は鍬を取りに行つた。

杉の樹の廻りから下へかけての地面は最も驚くべき風に、蟻の廣大な群によつて掘られてゐた。さらにその上に蟻はその掘つた處へ建築した。そして藁と粘土と蔕(へた)や莖でできた極めて小さい建造物は、奇妙に小さい都會に似てゐた。外のものより著しく大きな建物の眞中に、黄色のやうな羽と、長い、黑い頭をもつた大層大きな蟻の身の廻りに、小さい蟻の驚くべき群がゐた。

『あゝ、私の夢の王が居る』安藝之助が叫んだ、『そして常世の御殿がある。……こりや大變だ。……萊州はそこの、どこか西南にある筈だ――あの大きい根の左の方に、……さうだ、ここにある。……あゝ、不思議だ。今度はきつと範龍口の山と姬君の墓を見つけられる』……

彼はこはれた巢の中をしきりにさがした。そしてたうとう小さい丘を見つけた、その上に佛教の碑に似た形の、水で角のとれた小石が据ゑてあつた。その下に彼は――粘土につつまれた――雌蟻の死體を見つけた。

力ばか

彼の名は力てあつた。しかし、人々は彼を呼んで「力ばか」と云つた――永久の子供に生れついてゐたからであつた。同じ理由て人々は、彼に對して親切であつた、――マッチをもやして蚊帳につけ、家を一軒燒き、その火焔を見て拍手した時にても。十六になつて脊の高い强い少年になつたが、精神は幸福な二歳の年齢にいつも相當してゐた。それで極めて小さい子供と遊び續けた。四つから七つまでの近所の大きい子供は、彼が自分等の歌や遊戯を覺えないから一緒に遊ぶ事を好まなかつた。彼の好きなおもちやは箒であつた。それを木馬にして遊んだ。そして引續き何時間でも、この箒に乘つて私の家の前の坂を、驚くべく高い笑聲を上げて、いつも上つたり下つたりしてゐた。しかし遂にこの騒々しい聲がうるさくなつて來た、それで私はどこか外へ行つて遊ぶやうにと、云はずに居られなくなつた。彼は素直にお辭儀をして、それから――悲しさうに箒を引きずりながら――外へ行つた。いつでも柔和で、火をおもちやにする機會さへ與へなければ、全く無害なので

誰にも小言を云はれるわけは殆んどなかつた。私共の町の日常生活と彼との關係は犬や鷄のそれと殆んど同じであつた。それで、彼が最後に消えてしまつた時も、私は別に不足を感じなかつた。幾月も幾月も經つてから、何かの事で力の事を思ひ出した。

『力はどうなつたらう』私はこの邊へ薪を持つてくる老人の薪屋に尋ねた。力はこの男の薪を運ぶ手傳をよくしたものであつた。

『力ばかですか』老人は答へた。『あゝ、力ばかはかはいさうに死にました。……はい、一年程前に、全く急に死にましたんで、お醫者樣達は何か頭の病氣だと云ひました。ところで、今そのかはいさうな力について妙な話があります。

『力が死んだ時、おふくろが、力の左の手に、その名前の力ばかを書きました、「力」を漢字で「ばか」をかなで書いたのです。それからおふくろは度々、祈願をしたさうで――もつと幸な身分に生れ變つて來るやうにと云ふお祈りなんです。

『ところが、三ヶ月程前に麹町の何某樣のお屋敷に、左の手のひらに、文字のある男の兒が生れました。その文字は「力ばか」と全くはつきり讀めました。

『そこでそのお屋敷の人達は、これは誰かの祈願の結果に相違ないと思ひましたので、方々を詮議致しました。たうとう八百屋が、牛込に力ばかと云ふ子供がゐたこと、それか

ら昨年の夏に死んだ事を知らせて來ました。そこで二人の下男をやつて、力のおふくろを尋ねました。

『下男達は力のおふくろを見つけて、事の次第を話しますと、おふくろは非常に喜びました、――その何某樣の家は大層富んだ名高い家でしたから。しかし下男達は、その御屋敷では赤ちやんの手の「ばか」と云ふ字で大層立腹しておいでになると云ひました。「一體お前さん處の力さんの墓はどこですか」と下男達は尋ねました。「善導寺の墓地でございます」とおふくろは答へました。下男達は「どうか墓石のかけを少し下さい」と賴みました。

『そこで母親は一緒に善導寺に行つて力の墓を見せました。それから下男達は、墓石のかけを少し風呂敷に包んで持つて行きました。……力の母親には金をいくらか――十圓だか、やりました』……

『しかしそんな石のかけをどうするのだらう』私は尋ねた。

『左樣』老人は答へた、『そんな名を手のひらに持つたままで生長するわけには參りませんから。ところでそんな風に子供のからだについて來た文字を除くには、どうも外に仕

方もありません。その前生のからだを葬つてある墓石から取つた土で皮膚をこすらねばないゝかゝゝりませんゝ』……

家のうしろの木立のある丘の上に、ロバートと私は「仙人の輪」[譯注一]をさがしてゐた。ロバートは八歳、みめ美しく、その上大層かしこい、——私は七歳と少し——それで私はロバートを敬つて居る。よく日の照る、すばらしい好い天氣の八月の或日である、暖かい空氣は松脂の强い芳ばしい香で滿ちて居る。

私共には「仙人の輪」は見出せない。しかし、高草の中に非常に澤山の松かさを見つける。……私はロバートに古いウェールスの話、——氣がつかないで「仙人の輪」の中で眠つてしまつて、七年間見えなくなつたが、友達が魔法から救ひ出してから、口も利かない喰べもしなかつたと云ふ人の話をする。

『針のさきしか喰べないのだからね』ロバートは云ふ。

『誰が』私は尋ねる。

『お化けさ』ロバートは答へる。

これを始めて聞いて驚きと恐れて、私は黙つてしまふ。……しかし不意にロバートは叫び出す。……

『竪琴弾きが來た、――うちへ來るのだ』

それから丘を下つて、私共はその竪琴弾きを聴くために走る。……しかし何と云ふ竪琴弾きだらう。繪本にある白髪の樂人とは少しも似てゐない。顔の淺黒な、からだの丈夫さうな髪の蓬々とした浮浪人で、不機嫌な黒い眉の下に黒い、圖々しい眼を光らして居る。伶人よりはむしろ煉瓦屋である、――さうして、着物は勞働者の着る、厚い木綿のうね織である。

『ウェールス語で歌ふのか知らん』ロバートはつぶやく。

私は、何を云ふのもいやになる程失望した。竪琴弾きはその竪琴――大きな樂器――をうちの入口の階段に立てて、汚れた指で絃を悉くかきならして見て、怒つたやうなうなり聲で咳拂ひをして、それから始めた。

Believe me, if all those endearing young charms,
Which I gaze on so fondly to-day……

（本當に、たとへ、今日私が嬉しくながめて居るそのなつかしい若い美しさが皆……）[註四]

口調、態度、聲、悉く云ひ難い反感を起させる――度し難い野卑の、いやな感じを新しく起させる。『お前はその歌をうたふ資格はない』と、大きな聲で叫んでやりたい。實はそれが、私の小さな世界で最もなつかしい、最も麗しい人の唇で歌はれるのをこれまで聽いて居る、――そして、この野卑な下等な男が、それを敢て歌ふなどとは、嘲弄のやうに私を惱ませる――侮辱のやうに私を怒らせる。しかし、ほんの暫くの事。……『to-day』と云ふ文句を歌ひ出すと共に、その深い、物すごい聲が不意に、名狀のできないやさしいふるへ聲になる、――それから不思議に變つて、大きなオルガンの低音のやうな朗かな豐かな調子となつて冴える、――同時に、これまで感じた事のない一種の感情が私の喉をつかむ。……どんな魔法を彼は知つて居るのであらう。どんな祕密を彼は見つけたのであらう、――この不機嫌な顏の浮浪人は。……外にこんなに歌ふ事のできる人は全世界にあるだらうか。……そして歌ふ人の姿が搖らめいてかすむ、――それから家も芝生も、凡て見ゆるものの形が、眼の前にふるへて泳ぐ。それでも本能的に、私はその男を恐れる、――憎む

と云つてよい。そして彼の力で自分をこんなに感動させるので、怒りと恥ぢとで赧くなるのが自分でも分る。……

『君は泣いたね』ロバートは同情して云ふので、私は一層どぎまぎする、――同時に竪琴弾きは六ペンスの銀貨を一つ貰つて禮も云はないで、大跨にあるいて去る。……『しかしあれはきつとヂプシーだね、ヂプシーはいけない人達だよ、――それから皆、魔術使ひだよ。…… 林の方へ行かう』

私共は又松林の方へ丘を上る。そして、そこで日の斑らに當る草の上に坐つて、町と海の方を見る。しかし、私共は前のやうに遊ばない、魔術使ひの魔力は二人の上に强くかかつて居る。……『多分あれはお化けだらう』私は漸く云つて見る、『それとも仙人かね』

『いゝえ、――ただのヂプシーさ』ロバートが云ふ。『しかし、ジプシーでも惡い事は同じぐらゐだ。あれは子供さらひだからね』

『ここへ來たらどうしよう』私は、私共の居るところが淋しいので急に怖氣(おぢけ)がついて、息を切らして云ふ。

『なに、そんな事はやれないさ』ロバートは答へる――『明るい時にはできないよ』

「つい昨日、高田村の近くで、日本人が私共と殆んど同じやうに「日廻り」と呼んで居る花が目にとまつた、――そして四十年の間隔を跳び越えて、その浮浪の竪琴彈きの聲がひびいて來た。

*

As the Sunflower turns on her god, when he sets,
The same look that she turned when he rose.
(日の入る時、日廻りの花がその方へ向ふやうに、
彼の立つ時、同じ眼つきを彼女は向けた)

再び私は遠いウヱールスの丘の上の斑らに日の當る影を見た。そして少女のやうな顏と黄金の卷き毛をしたロバートは一時、再び私のわきに立つた。私共は『仙人の輪』をさがしてゐた。……しかし本當のロバートはずつと前に海の變化をうけて、立派な不思議なものになつた筈である。……『人、その友のためにおのれの生命をすつるは、これより大な

る愛はなし」[譯註六]……」

譯註一　野原などに一種の菌の作用で、一夜のうちに黑い輪のできる事がある。これを「仙人の輪（フエアリ リング）」或は「仙人の圓（フエアリサークル）」或は「仙人の踊（フエアリ ダンス）」と云つて、善或は惡の魔力を有する小さい妖精（フエノリ）が前夜踊つたところと歐州で信ぜられるもの。

譯註二　ロバート　エルウッド、著者の從兄。その母は著者の父チャールス、ヘルンの姉。この家はロバートの富有なる兩親の家。場所はウエールス山中としてあるが、實はアイルランドの西端メイヨ州。著者は幼時大叔母とともに時々ここに滯在した。

譯註三　この瞽人の藝人はダン・フイツパトリックと云ふその地方ではよく知られた男。おはこの歌はこの歌であつたと云ふ。

譯註四　アイルランドの國民詩人、トマス・ムーア（一七七九―一八五二）の歌。ムーアはスコットランドのロバート・バーンス、フランスのベランヂエとともに、十九世紀に於ける流行歌をつくる三大詩人の一人と云はれた人。この歌は『あなたは私が年を取つてもやはり愛しますか』と女から問はれた返事に擬した二節のもので、世界的にひろく知られて居る。

譯註五　著者の伯母、エルウッド夫人のこと。當時はアイルランドでは家庭で客をする時でも、主婦がトマス、ムーアの歌を歌ふ程の事はしたもの、ことにこの夫人は音樂の嗜み深く、ムーアの歌は最も得意であつたと云はれる。

譯註六　「海の變化」はシエーキスピーヤ、「テムペスト」の文句。最後の句は新約全書、「約翰福音書」第十五章十三節の句。このロバートはのち英國海軍に入り、遠洋航海中、支那の沖にて甲板から落ちた友人を救はうとして自分も溺死したため、これ等の句が引用してある。

蓬萊

天とつらなる青海原――明るい靄のうちに入りまざつて居る海と空。日は春、時は朝。

ただ空と海ばかり――一面の大きな淡青。……前面には漣が銀の光りをとらへて、細い泡が漂うて居る。しかし少し向うにはもう何の動くものも見えない、また青色の外には何物もない。水の黄ばんだ青色がはるかに空の青色と融け合つて居る。地平線はない、ただ遠い彼方が高く空となり――無限の凹みが、見る人の前にでき、巨大な弓形が見る人の上にできて――色が高さとともに濃くなつてゐる。しかしはるか中間の青色のうちに月のやうに曲つた、角のある屋根のついた、かすかな、かすかな塔がかかつて居る、――記憶と云ふもののやうに柔らかな日光によつて照された不思議な、そして古い何かの榮華の影である。……私が今こんな風に說明しようとして居るものは掛物である、――即ち私の床の間にかけてある、絹にかいた日本の繪、――その名は蜃氣樓である。しかしこの蜃氣樓の形はまがふべくもない。それは仙境蓬萊の微かに光る門であり、又あれは龍宮の新月狀の

屋根である、——その造りは（現代の日本畫家の筆で描かれたのではあるが）二千百年以前の支那の物の造りそのままである。

その當時の支那の書物にその場所についてこんな事が書いてある、蓬萊には死も苦もない、それから冬がない。そこの花は決して凋まない、果實は決して落ちない。人がこの果實を只一度味へば、決して再び飢渇を覺ゆる事はない。蓬萊には凡ての病氣を直す「さうりんしや」「六合葵」「ばんこんとう」と云ふ魔物のやうな草木がある。それから死者を蘇生させる「ようしんし」と云ふ魔法のやうな草がある。この草は一度飲めば、不老になれる不思議の水で養はれて居る。蓬萊の人々は極めて小さい椀で米飯を喰べる。しかしその椀の中の米飯は——どれ程喰べても——喰べる人の滿腹するまでは少くなる事はない。それから蓬萊の人々は極めて小さい杯から酒を飲む。しかし何人も——どれ程飲んでも——心地よい醉の眠氣を催すまでは、その杯を飲み乾す事ができない。

秦の時代の傳說に、こんな事やもっと澤山の事がある。しかしこの傳說を書いた人が蓬萊を蜃氣樓でなりと見たとは信じられない。事實、一度喰べたら永久に滿腹する仙果や—

―死者の蘇生する魔草や　　不老の泉や――米のなくならない椀や――酒のなくなる事のない杯はないから。悲しみと死が決して蓬萊に入り込まないといふ事は事實でない、――冬のない事もまた事實でない。蓬萊の冬は寒い、――冬の風は骨を嚙むやうである。それから龍王の屋根には驚くほど雪がつもる。

それでもやはり蓬萊には不思議なものがある。そのうちの最も不思議なものについてはどの支那の記者も何も云つてゐない。それは蓬萊の大氣である。この土地に特有の空氣である、そのために蓬萊に於ける日光は、どこの外の日光よりも白い、――乳のやうな光りではあるが、目をまぶしくさせる事はない、――驚くほど澄み渡つて居るが、甚だ柔かである。この大氣は私共人間の時代のものではない、それは非常に古い――どれ程古いか考へようとすると恐ろしくなる程古い、――そしてそれは窒素と酸素の混合物ではない。それは全く空氣でできて居るのではない。それは精靈――幾萬億の幾萬億の靈魂――私共の考へ樣と少しも似てゐない考へ樣で考へる人々の靈魂の本質が、混合して一つの大きな半透明體となつたものである。どんな人間でもその大氣を呼吸する人は、その血液のうちにその靈感を取り入れる、そしてその魂はその人の内部の感覺を變へる――時空の觀念をつくり直す――それでその人は、それ等の魂が見た通りに見、感じた通りに感じ、考へた通

りに考へるやうになる。これ等の感覺の變化は眠りのやうに柔かである。その變化を通じて見た蓬萊は、つぎのやうに說明してよからう、

『――蓬萊では邪念の何たるかを知らないから、人々の心は決して老ゆる事はない。そして心はいつも若いから、蓬萊の人々は生れてから死に到るまで――神々が彼等の間に悲しみを送る時、その時にはこの悲しみのなくなるまで顏は覆はれる、その時の外は――いつも微笑して居る。蓬萊の凡ての人々は一家族の人々のやうに、互に相信じ相愛して居る、――それから婦人の心は鳥の魂のやうに輕いから、言葉は鳥の歌のやうである、――そして戲れに乙女の袖のゆれる時は、柔かな廣い翼のひるがへるやうである。蓬萊では悲哀の外、隱されるものは何にもない、恥づべき理由はないからである、――それから盜みはないから鍵はない、――恐れる理由はないから夜も晝と同じく、どの戶口にも閂(くわんぬき)はさされない。それから人々は――不死ではないが――神仙であるから、蓬萊にある一切のものは龍王の宮殿を除いて、凡て小さくて奇妙で、奇體である、――そしてこの神仙の人々は甚だ小さい椀で米飯を喰べ、甚だ小さい杯で酒を飲む……』

このやうに見ゆるわけは、その靈氣を吸入したためである事も多からうが――しかしそ

れだけてはない。死者が及ぼした魔力は、ひとへに理想の美、古への希望の魔力である、――そしてその希望は多くの人の心に――無私の生涯の素朴な美はしさのうちに――婦人のやさしさのうちに――實現されて居るから。……

――西の國から邪惡の風が蓬萊を吹き荒んで居る、靈妙な大氣は、悲しいかな、薄らいで行く。今はただ日本の山水畫家が描く風景の上の長い雲の帶の如く、切れとなり、帶となつて僅かに漂うて居る。その帶と切れの下にだけ、蓬萊はなほ存して居る。しかし外にはない。蓬萊は觸れる事のできない、まぼろしと云ふ意味の蜃氣樓とも云はれる。そしてこのまぼろしは、ただ繪と歌と夢のうちでなければ、再び現れないやうに、消えかかつて居る。……

蟲の研究

蝶

一

日本文學には廬山[註一]といふ名で知れて居るあの支那の學者の幸運を、自分は希望出來れば
と思ふ！十日毎に訪ねて來ては蝶の話をして吳れた、天人であつた、靈の少女二人に愛せ
られて居たからである。處で、支那には蝶に關した不思議な物語——靈的な物語——があ
るので、自分はそれが知りたいのである。だが、永久自分は支那文を、いや日本文すらも、
讀む事が出來なからう。それで自分が非常な困難をして、どうにかして飜譯しようとする
僅かの日本詩歌にも、支那の蝶物語を引いて居るところが甚だ多いので、自分はタンタラ
スの苦に苦しめられて居るのである。……そして、固よりの事、自分のやうな懷疑的な男
をいつか訪ねて吳れるやうな靈の少女は一人もあるまい。

例を擧げて云へば、その女を蝶が花だと思つて、群を爲して後を追つた——それ程に匂

ひ香んばしく又美はしかつたといふ、あの支那の少女の身の上總てが知りたい。それからまた、蝴蝶[註二]に自分の愛人を選ばせたといふ玄宗皇帝卽ちミン・ヒワン帝の蝶に就いてもつと知りたいものだと思ふ。……帝はその驚くべき庭園でいつも酒宴を催された。それには非常に美しい婦人が侍んべつて居た。そして籠に入れてある蝶をその美人の間へ放たれると、蝶はその中の一番美しい婦人の處へ行つてとまる。するとその一番美しい婦人へ帝の寵は與へられるのであつた。ところが、玄宗皇帝が楊貴妃（支那人はヤン・クエイ・フェイと呼ぶ）を眼にせられてからといふもの、蝶に愛人を選ばせることをさせられなかつた。――それは不幸な事であつた、楊貴妃が帝を非常な困難へ陷らしめたから。……それからまた、日本では莊周といふ名で有名な支那の學者が、自分が蝶になつた夢を見、その夢の裡で蝶が有つあらゆる感じを經驗したといふ、その經驗に就いてもつと知りたいものだと思ふ。この人の精神は實際、蝶の姿になつてさまよひ歩いたのであつた。それで眼が覺めた時、蝴蝶生活の記憶や感情がその心中に餘りに生き生きと殘つて居たので、人間のやうな行爲が出來なかつたといふことである。……最後に自分は種種な蝶をば或る皇帝とその從者との靈魂だと認めた支那の或る公認の原文を知りたいものだと思ふ。

蝴蝶に關する日本文學の大半は、僅かの詩歌を除いて、支那起源のものであるらしい。日本の藝術や歌や習慣にあんなに愉快に表現されて居る此題目に就いてのあの古い國民的審美感情すらも、初めは支那の教への下に啓發されたものかも知れぬ。日本の詩人及び畫工が、そのゲイメイ即ち職業上の稱呼に、テフム（蝶夢）イッテフ（一蝶）といふやうな名をあんなに屢〻選んだのは、支那に先例があつたからだといふので、確かに説明が出來る。そして今日に至るまで、テフハナ（蝶花）テフキチ（蝶吉）テフノスケ（蝶之助）といふやうな源氏名を藝者が好んで用ひて居る。蝴蝶に關係のある源氏名のほかに、そんな種類の實際の名（ヨビナ）――「蝴蝶」といふ意味のコテフ或はテフといふやうな――が今なほ用ひられて居る。そんな名は、概して女だけが有つて居る、――尤も珍らしい例外はあるけれども。……そして此處へ書いてもよからうと思ふが、陸奥の國では、一家の末娘[註三]をテコナと呼ぶ珍奇な古い習慣が今なほ存在して居る。他では廢語になつて居るこの奇妙な語は、陸奥の方言では蝶といふ意味である。古典時代にはこの語はまた、美女といふ意味も有つて居た。……

蝴蝶に關する日本人の奇妙不思議な信仰のうちで、其源を支那に發して居るものがある

といふことは、また有りさうな事である。が、そんな信仰は或は支那そのものよりも古いものかも知れぬ。一番興味ある信仰は生きて居る人間の魂が蝶の姿になつて、さまよひ歩くことがあるといふのだらうと自分は思ふ。この信仰からして面白い空想が發展し來たつて居る。例へば、蝶が客間へ入つて來て、簾戸の裏へとまると、一番好きな人が會ひにやつて來て呉れるといふ考へなどそれである。蝶は誰れかの魂かも知れぬといふ事は、蝶を恐わがる理由にはなつて居らぬ。が然し、蝶でも非常に澤山に出て來て、それで人の恐怖心を惹起し得る時がある。現に日本の歴史にそんな出來事の記錄がある。平ノ將門が、その有名な謀叛を私かに準備して居る時に、京都に莫大な蝶の群が現れたので、時の人は、この出現を凶兆と考へて大いに畏怖した。……多分、その時の蝶は、戰に死ぬる運命を有つて居つて、そして何か不可思議な死の前知らせの爲めに、戰爭のつい前に動搖を感じた、幾千の人の魂であると想はれたのであつた。

が然し、日本人の信仰では、蝶は生きて居る人の魂のこともあるが、死人の魂のこともある。現に、最後に肉體を離れる事實を知らせる爲めには、魂は蝶の姿を採ることになつて居る。それで、その爲めに、どんな蝶でも家の中へ入る蝶は、深切に取り扱つてやるべきものである。

通俗な戯曲の中には、上述の信仰並びにそれに關聯したいろんな奇異な信仰を暗示して居る處が澤山に在る。例を擧げると、「トンデ　デル－コテフ－ノ－カンザシ」即ち『飛んて出る蝴蝶の簪』といふよく人の知つて居る芝居がある。蝴蝶といふ美人があつて、無實の罪を著せられ、殘酷な取扱ひを受けるので自殺する。女の仇を討つてやらうといふ男がその非違の本人を長い間かかつて探すが分らぬ。然し到頭死んだその女の簪が蝶に變じて、その惡漢が隱れて居る場處の上を飛んて仇討ちの手引きをする。

――婚禮の場合に出て來るあの大きな紙製の蝶（雄蝶と雌蝶）は固より何等靈的な意義を有つて居るものと考へてはならぬ。象徴として、睦まじい合體の喜悦と、新婚夫婦が恰も樂しい庭園を輕輕と――或は飛び上り、或は舞ひ下りるが決して遠くは離れずに――翔る番ひの蝶のやうに一緒に、一生を過ごすやうにとの希望とを表すものに過ぎない。

二

蝴蝶に就いてのホックの小蒐集は、この題目の審美的方面の日本人の趣味を說明する役

に立つかも知れぬ。或る物はただ繪てある　十七文字で出來て居る小さな色附けのスケッチである。或る物は一寸面白い思ひ付きか或は優雅な暗示かに他ならぬ。だが、讀者は變化を見出さるることであらう。讀者は或はこの詩句そのものは餘り好かれぬかも知れぬ。エピグラム風な日本の詩に對する趣味は徐徐に得なければならぬ趣味であつて、かかる作品の可能性を立派に評價の出來るのは、根氣づよい硏究の後、次第次第てなければならぬことである。十七文字の詩の爲めに辯護して何等眞面目な要求を爲すなど『途方も無いことだ』と輕卒な批評を下した人がある。然し、それではケエナの結婚饗宴の奇蹟を詠んだクレイショオの有名な句はどうだ。——

おとなしのニムフ神見つ顏染めつ

たつた十四綴音……しかも不朽の文字である。ところが日本の十七文字では、これと全く同じな不思議な事が——いや、もつと不思議な事が——一度や二度では無い、恐らく千度もこれまで爲されて居る。……とは云ふが、つぎに掲ぐるホックには、これは文學的では無い理由で選擇したので、驚歎すべき處は少しも無い。——

脱ぎかくる羽織すがたの蝴蝶かな　乙州

鳥さしの竿の邪魔する蝴蝶かな　（讀人不知）

釣鐘にとまりて眠る蝴蝶かな　蕪村

寝るうちも遊ぶ夢をや草の蝶　護物

起きよ起きよ我が侶にせん寝る蝴蝶　芭蕉

籠の鳥蝶を羨む目付きかな　（讀人不知）

蝶とんで風なき日とも見えざりき　曉臺

落花枝にかへると見れば蝴蝶かな　守武

散る花に輕さ爭ふ蝴蝶かな　春海

蝶々や女の足の後や先　素園

蝶々や花ぬすびとを跟けて行く　丁濤

秋の蝶友なければや人に附く　可都里

追はれてもいそがぬふりの蝴蝶かな　我樂

蝶は皆十七八の姿かな　三津人

蝶とぶやこの世のうらみ無きやうに　（讀人不知）

蝶とぶや此世に望無いやうに　一茶

波の花にとまりかねたる蝴蝶かな　文晁

睦しや生れかはらば野邊の蝶　一茶

撫子に蝶々白し誰の魂　子規

一日の妻と見えけり蝶二つ　蓼太

來ては舞ふ二人靜の蝴蝶かな　月化

蝶を追ふ心もちたしいつまでも　杉長

蝶に關した詩の如上の見本の外に、同じ題目での、日本の散文學の珍らしい實例の提供したいのが一つある。自分はただ、其自由譯を試みたのだが、原文はムシイサメ（蟲諫）といふ珍奇な古本に見出すことが出來るもので、これは蝶に向つて談論をして居る形式を採つたものである。然し實際は、社會の浮沈の道德的意義を暗示した、教訓的譬喩談である。——

『さて、春の日の下に、風は穩かに、花は淡紅ゐに咲き、草は軟かく、人々の心は喜ばしい。蝶は到る處に嘻嘻として翔けり飛ぶ。如何にも多くの人が或は漢詩に、或は和歌に蝶のことを詠む。

『そして今の季節は、嗚呼蝴蝶よ、實にお前の幸福繁榮の季節だ。實に今はお前は美しくて、全世界にお前ほど美はしいものは無い程だ。その爲めに他の蟲が、皆んなお前を賞めて羨む。お前を羨まぬものは一人もありはせぬ。また蟲だけがお前を羨むのでは無い、人間もお前を羨んで賞める。支那の莊周は、夢にお前の姿を採つた。[譯注六]日本の佐國は死んでからお前の姿を執つて、幽靈になつて現れた。お前が起こす羨みの念は、ただ、蟲と人間とが有つて居るだけでは無い。魂の無い物まで、その形をお前の姿に變へる。——[譯注七]大麥を

見よ、蝶に成るては無いか。

『だから、お前は高慢になつてからう思つて居る。「およそ此世に自分に優るものは何も無い」お前の心の中は大抵推察が出來る。お前は自分の身に滿足し過ぎて居る。だからこそ、お前はどんな風にも輕輕と吹かれて飛んで居るのだ。だから、お前は、いつも、いつも、「およそ此世に自分ほど、幸福な者は無い」と考へて――ちつとも、ぢつとしては居ないのだ。

『だが、お前の身の生立ちを少し考へて見たらよからう。懷ひ出して見る價値がある。お前の生立ちには下等な方面があるのだから。どうして下等な方面なんかとお前は云ふだらう。うん、お前が生れてから後隨分と長い間、お前の姿を嬉しがるやうな、そんな理由はちつとも無かつたのだ。其時分はお前はただの菜蟲、毛の生えた地蟲だつた。お前は裸身を蔽ふ一枚の著物さへ有てぬ位に貧乏だつた。そしてお前の姿は實に胸が惡るくなるやうなものだつた。其時分には誰れもお前を見ることをいやがつた。實際自分を恥づかしがるのは尤もだつた。お前は恥づかしさの餘り、其中へ隱れるやうに小枝や屑を集めて、隱れ場を造つて、それを枝へ吊るした。すると皆んなが「蓑蟲だ、蓑蟲だ」とお前を囃し立てたものだ。そして又お前の一生のうちの其時代は、お前の罪は實に深いものだつた。美

しい櫻の木の柔かい青葉の間へお前や、お前の朋輩が集つて來て、何んとも云へぬ醜い樣を見せた。櫻の美しさを讃めに遠方から來た、當てにして居た人達の眼はお前達を見ていやに思つた。それから、これよりももつと惡るい位な罪をお前は犯して居る。お前は知つてゐよう、貧乏な貧乏な男ども女どもが、その畠で大根を栽培して居たことを。その大根の世話をしなければならぬので、皆んなの心は辛い苦しいと思ふ念で一杯になる位、暑い日の下で骨折つて働いて働いて居たことを。だのに、お前は朋輩に勸めてお前と一緒にその大根の葉の上に、それからその貧乏な人達が植ゑた他の野菜の葉の上に集まらせた。そしてお前の貪慾から其葉を荒らし、それを嚙んで色んな醜い形にした——その貧乏人の苦勞を少しも顧みずに。……さうだ、そんな者だつたお前は、そんなことをお前はしたのだ。

『處が、今は美くしい姿をして居るものだから、舊友を、蟲を、お前は輕蔑する。そして偶〻其うちの誰れかに遇ふと、いつもお前は知らぬ顔をする。今はお前は友人に金のある、地位の高い人だけを有たうとする。……噫、お前は古昔を忘れたのだ。え、さうかい。

『尤も、お前の過去を忘れて、今のお前の優しい姿や、白い翅を見て魅せられて、お前のことを詩につくつたり、歌に詠んだりする人が澤山にある。お前の前の姿であつたなら、お前を見ることさへ到底も出來なからうと思へる位の少女が、今は喜んでお前を眺め、自

分の簪にとまつて呉れればいいと思ひ、降りてとまつて呉れるかと、その綺麗な扇子を差し出したりされる。さう云へば想ひ出すが、お前に就いての支那の古い話がある。いい話ではない。

『玄宗皇帝の御世に、宮中には幾百幾千といふ美しい婦人が居られた。餘りに數が多いので、そのうち誰れが一番可愛らしいか、誰れにもそれを極めることが六つかしい位だつた。そこでその美しい人を特んな一と處へ集められた。そしてその中へお前を放して飛ばせられた。お前がその人の簪の上へとまつた少女を帝のお部屋へお召しになることに定められた。その時分、妃は二人あつてはならぬことになつて居た。それは結構な律であつた。ところが、お前の爲めに、玄宗皇帝は其國へ非常な禍ひを加へられた。といふのは、お前の心は輕くて不眞面目だ。そんなに澤山の美しい女の中に、心の淸い人が幾人かあつたに相違ないのに、お前は美しいことだけ見ようとした。そこで、お前は外觀が一番に美しい人の處へ行つた。其爲め近侍の女達の多くは、婦人の履むべき正しい道を考へることは全く止めて、男の眼に美くしく思へるやうにするにはどうしたらと、それはかり考へるやうになつた。そしてその結末は、玄宗皇帝は痛ましい、憫れな死に方をなされることになつた。これ皆お前の輕薄不眞面目な心からのことだ。實際、お前の本當の性質は、他の事

てのお前の行狀から容易く見ることが出來る。例を擧げて云ふと、樹木――常磐の樫とか松とかいふやうな、葉が枯れたり落ちたりしないで、いつも青青として居る樹木がある。こんな木は情のしつかりした木だ。堅固な性質をもつ木だ。ところがお前は、あの木は頑固で四角張つて居ると言ふ。そしてお前はそれを見るのを嫌つて一度も訪ねない。櫻と、海棠と、芍藥と、黄薔薇とだけへ行く。見榮のいい花の咲く木だから、お前はそんな木が好きなので、しかもそれをただ悅ばせようとだけする。そんな行爲は、わしは斷言するが、誠に不都合だ。この木どもは、美しい花を著けるには著けるが、飢ゑを充たして呉れる實は結ばず、贅澤や虛飾の好きな人だけに感謝して居る。お前の羽ばたく翅や花車な姿をその木共が喜ぶのはその爲めだ。お前に對して深切なのは全くその爲めだ。

―ところで、この春の季節に、お前は富者の庭をじやれて踊り歩いたり、花盛りの櫻の美しい小路の中をさまよつたりしながら、かう思つて居る。「この廣い世界に、自分ほどの愉快を有つて居るもの、自分が有つて居るやうな立派な友達を有つて居る者は一人もありはせぬ。そして人が何んと云はうとも、自分は芍藥が一番好きだ、――それから金色の黄薔薇は自分獨りの寵人だ。どんな一寸した命令も皆んな聽いてやらう。あれは自分の自慢もの、自分の好きな奴だから」さうお前は云ふ。だが、花の裕かな美しい季節は極く短か

いものだ。直ぐに枯れて落ちる。すると、夏の若い頃には、青葉だけになる。やがて秋風が吹くと、その葉すらも雨のやうにバラリバラリと落ちる。そしてお前の運命はさうなると、タノムキノモトニアメフルといふ諺の中にある不幸な人間の運命と同じにならう。といふ譯は、お前は舊友を、根を切る蟲を、地蟲を、探して、昔の穴へ歸らせて呉れと賴むだらう。ところが今、お前は翅を生やして居るから、翅のあるが爲めに、穴へ這入ることが出來ぬ。また天地の間、何處へも身を隱すことが出來ぬ。そしてその時分には沼草も皆んな枯れてしまつて居て、お前は脣を潤ほす一滴の露も吸ふことが出來なからう。――するとお前には仆れて死んでしまふほか爲ることが殘つて居らぬことにならう。これ凡てお前の輕薄不眞面目な心の致す處だ。――噫、何んといふ憫れな最期だらう！』……

三

蝶に關した日本の物語の大半は、既に述べたやうに、支那起源のもののやうに思へる。だが、多分土産かと思へるのが一つある。それは極東には『浪漫的な戀』は無いと信じて居る人達の爲めに語る價値があるやうに自分には思へる。

東京の場末の宗參寺といふ寺の墓地の後ろに、高濱といふ老人が住つて居た小さな一軒家があつた。愛想のいい人だつたので、近處の人に好かれて居たが、殆んど誰れもがこの男を少し氣が狂つて居ると思つて居た。僧侶の誓約をしたのならいざ知らず、人は誰れも結婚をするもの、そして一家を作るものと思はれて居る。處が高濱は宗教生活を送つて居る人間ではなかつたのに、いくら勸めても妻を貰はうとはしなかつた。又、どんな女とも戀の關係のあつたことを聞いた者も無かつた。五十年以上全く獨身で暮して居たのである。

或る年の夏、病氣に罹つて、自分は長くは生きて居れぬと知つた。そこで、後家になつて居たその義理の妹とその一人息子——高濱が好いて居た二十歳許りの青年——とを呼びにやつた。二人は直ぐと來て、この老人の末期を慰めに出來る限りのことをした。

或る蒸し暑い午後のこと、其後家さんと息子とが病床で看護して居るうちに、高濱は眠つた。と同時に非常に大きな白い蝶が一匹部屋へ這入つて來て、病人の枕へとまつた。甥は扇子で拂ひのけたが、直ぐ枕へ還つて來る。また逐うても、また歸つて來るばかりであつた。そこで甥は追つかけて庭へ出て、その庭を横斷り、開いて居た門を通り拔け、近處のその寺の墓地へ行つた。ところが、遠くへ追はれるのをいやがるやうに、いつも彼の前

の處を飛び廻つて、いかにもその素振りが變なので、蝶だらうか、それとも魔だらうかと、不審に思ひ出した。またも追つかけて、ずつと墓地の中まで隨いて行くと、とある墓を後ろにして――女の墓を後ろにして――飛んで居るのが見えた。すると不思議にもその姿が見えなくなつた。いくら探しても居ない。それからその石塔を調べて見た。あまり聞き慣れぬ姓と共にアキコといふ名が彫つてあつて、アキコといふは十八の歳に死んだといふことも彫つてあつた。見たところ、確かに五十年許りも前に立てた石塔らしかつた。苔がそれにつき出して居たのであつた。だが、よく世話がしてあつた。前には新しい花が供へてあり、水槽の水は近い頃一杯にしたものであつた。

病人の部屋へ歸つて來ると、その青年は叔父が呼吸をしなくなつたと聽かされて吃驚した。死はこの眠つて居た男に苦痛無しに來たのであつた。死に顏は微笑して居た。

青年は墓地で見たことを、その母に語つた。

『あゝ』と後家さんは叫んだ『それでは、アキコだつたに違ひ無い』……

『アキコつて誰れですか、おつかさん』と甥は訊ねた。

後家さんが答へるには、

『このお前の叔父さんの若い時分に、叔父さんは、近處の人の娘で、可愛いいアキコと

いふ名の娘と許嫁なされた。が、結婚の約束の日のほんの少し前に、アキコは肺病で死んだので、その亭主になる筈のこの叔父さんは大變悲しまれた。アキコを埋めてから一生、妻は貰はぬと叔父さんは誓はれた。そしていつも墓に近く居れるやうに、あの墓地の近くに此小家を建てられたのだ。それは皆んな五十年よりもつと前の事だ。その五十年の毎日毎日——冬も夏も同じやうに——お前の叔父さんは墓地へ行つて、墓を拜んで、石塔を掃除して、その前へお供へ物をしてやられた。だが、人にその事を云はれるのが嫌ひで、一とこともその事を口にはされなかつた、……では、到頭、アキコが迎ひに來たのだ。あの白い蝶はアキコの魂だつたのだ』

四

も少しで書き忘れさうであつたが、古昔、宮廷で演ぜられた、蝴蝶のやうな服裝をした舞人が舞ふ蝴蝶の舞ひといふ古い舞ひが日本にある。今日でも時折、其舞ひが舞はれるかどうか、自分は知らぬ。餘程習ひにくい舞ひだといふ話である。本式に演ずるには舞人が六人要る。特殊な恰好をして——足踏、姿勢、身振、一度一度凡て傳統的な規則に従つて

――手鼓と太鼓、小さな笛と大きな笛、それから西洋のパンの知らぬ形の簫の音に合せて、極はめてゆるやかに互に旋り合うて――動作しなければならぬ。

譯註一　廬山は劉子卿とあるべきもの。稽神錄苑に「劉子卿居廬山、有五綵雙蝶、遊花上、其大如燕、後化二女、來合歡、云云」とあり。

譯註二　開元遺事に「明皇宮中春宴、令妃嬪各插艶花、帝親捉粉蝶放之、隨蝶所止幸之、謂元蝶、幸楊妃、專寵、不復此戲」とあり。

譯註三　倭訓栞に『てふ蝶をよむは音なり。相模下野陸奥にてテフマ津輕にカニベ又テコナ云云』とあり。

譯註四　吾妻鏡に『寛文五年三月十七日庚午、黄蝶飛、已充滿鎌倉中、是兵革兆也、承平則常陸下野天喜、亦陸奥出羽四箇國之間、有其怪、將門貞任等及鬪戰訖、而今此事出來、猶若可有東國兵亂歟之由、古老之所疑也』とあり。

譯註五　新約約翰書第二章參照。

譯註六　發心集に『佐國愛華成蝶事』といふ題にて人の蝶となりし記事あり。

譯註七　搜神記に『朽葉爲螢、麥爲蝴蝶』とあり。

自己防衛の目的で、自分はホワアド博士の『蚊』を讀んで居つた。自分は蚊に容められて居るのである。自分の近處には種種な種類のが居るが、その中のたつた一つだけが――全身に銀色の點點があり、銀色の斑理がある、小さな、針のやうな奴が、容易ならぬ呵責者である。そやつの刺傷は電氣の火傷のやうに猛烈で、其奴のブウンといふ聲にすら、來たるべき痛みの性質を豫言する、刺すやうな音色がある――丁度、或る特殊な臭ひが、或る特殊な味ひを思はせると同じで。此蚊は、ホワアド博士がステゴマイア・フアスシアタ或はキユレックス・フアスシアタスと呼んで居る奴に餘程似て居ると知つた。またその習性がステゴマイアの習性と同一であることをも認めて居る。例へば、夜間のものでは無くて寧ろ晝間のもので、そして午後中が一番に煩はしい。それから自分はこの蚊は自分の庭の後ろのお寺の墓地――非常に古い墓地――からやつて來ることを發見した。

ホワアド博士の書物は、近處に蚊を居なくするには、それが育つ停滯水の中へ少量の石油又はケロシン油を注ぎさへすればいいと言明して居る。油は一週に一度『水面十五呎平方毎に一オンス、それよりも表面が狹ければそれに應じた量、といふ割合て』使はなければならぬさうだ。……だが、自分の近處の情態をまあ一つ考へて貰ひたい。

自分の呵責者はお寺の墓地からやつて來ると云つた。その古い墓地にある殆んどどの墓の前にも水を容れるもの卽ち水溜、日本語でミヅタメといふ物がある。大多數の場合、このミヅタメはその石碑を支へて居る幅の廣い臺石に、彫り込んである楕圓形の窪みに過ぎぬが、金のかかつた墓石で、この臺石の水溜の無い者の前には、一枚石を彫つたもので、一家の紋所や表象的な彫刻で裝飾が施してある、別な大きな水槽が置いてある。極く下等な部類の墓石で、ミヅタメの無いのへは、茶椀や他の容れ物に入れて水が置いてある——人は水を貰はなければならぬからである。死人へは其上にまた花を供へなければならぬのである。だから、どの墓の前にも竹筒か他の花立てかが一對あつて、固よりのことそれには水が入つて居る。墓地には墓への水を供給する井戸がある。死人の親類や友人が墓詣りをする時はいつも水溜や水入れの茶椀へ新しい水を注ぐ。處が、こんなやうな古い墓地には幾千といふミヅタメがあり、幾萬の花立てがあることだから、それ等凡ての水を毎日新

しく取り換へることは出來ぬ。停滯する、そして住む奴の數が多くなる。底の一層深いミヅタメは滅多に乾かぬ。――一年十二箇月のうち九箇月はそんな水溜にいつも少しは、水を溜まらせて置く程に東京は雨が多いのである。

さて、自分の敵が生れるのは此水溜と花立てとの中である。彼等は死者の水からして幾百萬と現れ出るのである。――そして、佛教の教へに從ふといふと、彼等の或る物は、前世の罪に因つてジキケツガキ卽ち食血餓鬼の身に生れる運命を得た、その死者そのものの化身かも知れぬ。……兎に角キユレックス・ファスシアタスの惡意は、或るよこしまな人間の精神が壓縮されて、あのウンウン泣き叫ぶ一點の身體(からだ)になつたのではなからうか、との疑念をさうだと思はせるに足るものがある。……

そこで、ケロシン油の題目へ立ち還へると、どんな地方の蚊でも、そこにある一切の停滯した水の表面を、ケロシンの薄皮で蔽うて絶滅し得るのである。幼蟲は呼吸(いき)をしに上ると死ぬる。成蟲の雌はその卵の集團(かたまり)を下ろしに水に近づくと死ぬる。ホランド博士の書物で讀んだが、人口五萬の或る亞米利加の街から、蚊を全くとつてしまふ實費は、三百弗を

超えない！のださうな。……

若しか東京市廳が――これは攻勢的に學問的で又進歩的だが――突然命令を發して、お寺の墓地の一切の水の表面を規則正しく一定の間を置いて、ケロシン油の薄皮で蔽へと云つたなら、世間の人は何んといふであらうかと自分は怪しむ。如何なる生物でもその生命(いのち)を奪(と)ること――眼に見えぬ生物の生命でも――それを奪(と)ることを禁ずる宗教が、どうしてそんな布達に服從し得るであらうか。孝の念がそんな命令に同意することを夢想だもするであらうか。それにまた、東京の墓場にある幾百萬のミヅタメと幾千萬の竹の花立てとへ、七日目七日目に、ケロシン油を注ぎこむ勞働と時間との費へを考へて見給へ！……不可能なことである！この都市から蚊を取り去るには、古昔からの墓場を破毀しなければならぬことになるであらう。――といふ事は墓場に附隨して居るお寺の破滅といふことになるであらう。――そして、又それは、蓮池があつたり、梵字の記念塔があつたり、反り橋があつたり、神聖な木立があつたり、奇しき微笑を浮べて居る佛像があつたりする、あんなに多くの美しい庭園の消滅といふことになるであらう！だから、キユレックス・ファスシアタスの根絶は祖先傳來の祭祀の詩美の破壞となることであらう――これは確かに餘りに高

價な費用！である。……

それにまた、自分は、自分があの世へ行く時節が來れば――自分の地下の友達が、明治の流行だの、變化だの、崩壞だのを少しも意に介しない、古い人達であるやうに――何處か昔風なお寺の墓場へ埋めて貰ひたいものと思つて居る。自分の庭の後ろの、あの古い墓地が適當な場處かと思ふ。あそこにある物はいづれも皆、異常な驚くばかりの珍奇といふ一種の美を有つて居るので美くしい。一木一石悉く、今生きて居るどんな頭腦にも、最早存在して居ない、或る古い古い理想が造つたもので、物の影さへ今時のもの、この今の太陽のものでは無くして、蒸汽或は電氣或は磁氣或は――ケロシン油！なるものを知らなかつた、今は人の忘れて居る或る世界のものである。それからまた、あの巨大な鐘のボオンと響く音には、自分の身體の十九世紀の部分凡てと、不思議なほど遠く距つて居る感情を――その感情が微かに盲目的に動くといふと自分には恐ろしい――美妙に恐ろしい――その感情を目覺ます一種古雅な音色がある。あの大波のやうな音を耳にするといふと、自分の魂の奈落の底に潛んで居るものが或る努力を試み、或る騷ぎを爲して居ることを――幾百千萬の生死の晦蒙を越えての光明に到達せんと悶えて居る記憶の如き感を――覺えぬこ

とは一度も無い。自分はあの鐘の聞える處にいつまでも居たいと思ふ。……そして、自分は食血餓鬼の境涯に入る運命を或は有つて居るかも知れぬと考へると、自分の孱細い辛辣な歌をうたひながら、自分の知つて居る或る人々を嚙みに、そつと出て行かれるやうに、竹の花筒かミヅタメかの中に再生する機會を有ちたいと思ふ。

蟻

一

今朝の空は、昨夜の嵐の後て、眩しい程眞つ青てある。空氣は――その美妙な空氣！は――强風に吹き折られて散らばつて居る、無數の松の枝が放つ芳ばしい松脂の香に充ちて居る。近くの竹藪には、妙法蓮華の經を讃へる鳥の笛のやうな囀き聲がきこえ、大地は南風の爲めに甚だ靜かである。今や長い間手間取つた夏が實際遣つて來て居る。珍らしい日本色彩の蝶が翔け廻つて居り、蟬がゼイゼイ鳴いて居り、蜂がブンブン唸つて居り、蚊が日の光りに躍つて居り、そして蟻がいためられたその住み家を忙しく修繕して居る。……自分は不圖、或る日本の詩を思ひ出す。

行衞無き蟻の住家や五月雨　　曉臺

だが、自分の庭に居るあの大きな黒蟻は、何等同情を要しさうに思へぬ。大きな樹木が根こぎにされ、家屋が粉な微塵に吹き飛ばされ、道路が水に洗はれて無くなつたりする間に、彼等は想像も及ばぬ許りにその嵐に堪へて來て居る。でも、その颱風前に、その地下の都市の門戸を塞ぐだけで、何等眼に見える用心を彼等はしなかつた。そして今日彼等が意氣揚揚と働いて居る眺めは、蟻の題の隨筆を書くことを自分に强ひる。

出來ればこの自分の論文の前書きに何か昔の日本文學から得來たつたものを――何か感情的な或は哲理的な物を置きたかつたのである。が、此題目に就いて自分の日本の友人達が見つけることの出來たものは――あまり價値の無い僅かの詩を除いて――凡て支那のものであつた。この支那の材料は主としていくつかの妙な物語から成つて居つた。處が、そのうちの一つは引用の價値があるやうに思へる。――他にいいものが無いから。

支那の臺州といふ國に信心深い或る男が居て、數年の間、毎日熱心に或る女神を信心した。或る朝のこと、御祈禱をして居ると、黄色い著物を著けた美しい婦人がその部屋へ入つて來て、その男の前へ立つた。非常に驚いて、何が欲しいのか、どうして案内もされずに入つたのかとその男が訊ねた。その女の答へるには『私は女ではありません。私はあな

たがあんなに長い間あんなに忠實に信心して下さる女神です。あなたの信心が無效では無かつたといふことを、あなたに證明をしに今來たのです。……あなたは蟻の言葉が分りますか』その信心者が答へるに『私は卑しいもので、また無學な人間であります。——學者ではありません。優れた人達の言葉さへ、私はちつとも分りません』その言葉を聞くと女神は微笑して、その懷から香箱のやうな形をした小さな箱を取り出した。其箱を開けて、指をそれに浸して、膏のやうなものをそれから取り出して、それをその男の兩耳に塗つた。『さあ』とその女神がその男に『蟻を見付けなさい。そして見つかつたら、しやがんで、注意して、その談話を聽いて御覽なさい。解るでせうから。そして何かあなたの利益になることを御ききになるでせう……だが、一つよく記憶しておいでなさい、蟻を嚇したり又は困らせたりしてはいけません』かう云つて、その女神は姿を消した。

その男は直ぐと蟻を探しに表へ出た。門口の閾をまたぐが早いか、その家の柱の一本を支へて居る石の上に蟻を二匹見つけた。彼はそれへ身體を屈めて、耳を欹てて聽いた。そして、その談話聲がきこえ、云ふことの意味が解るのに驚いた。『もつと暖かい處を見つけようぢや無いか』と二匹のうちの一匹が提議した。『どうしてもつと暖かい處を』と片方が訊ねた、『此處がどうだと言ふのだ』『下があまり濕つてて冷たい。大層な寶が此處

に埋めてある。それて日が當つてもこのあたりの地面は暖たまらぬ」と初めに口をきいた蟻が云つた。それからその二匹の蟻は連れ立つて他處へ行つたから、その話を聽いた男は鍬を取りに走つて行つた。

その柱のあたりを掘つて見るといふと、やがてのこと、金貨の一杯入つてる大きな壺が幾つも見つかつた。この寶を發見したので、その男は非常な富有者になつた。

その後、何度か蟻の會話を聽かうとして見た。然しもう二度とその談話聲を聞くことが出來なかつた。女神の香塗りは、蟻の不思議な言語にたつた一日の間だけ耳を開けて與れたのであつたから。

二

ところで自分は、この支那の信心者同樣に、甚だ無學な男であり、本來、蟻の會話を聽くことの出來ぬ男だと自白せざるを得ぬ。然し科學の仙女が時折、自分の耳と眼とを其杖て觸つて與れる。すると一寸の間、きこえぬ事がきこえ、見えぬことが見えるのである。

或る非基督教國民が我我西洋人の文明よりも倫理的に優つて居る文明を產み出したことを語ることは、種種な社會に於て、背德だと考へられて居ると同じ理由で、或る種の人達には自分がこれから蟻に就いて云はうとすることが氣に入らぬであらう。然し自分が到底そんなになり得る希望の抱けぬ程に比較を絕して遙か賢明な人で、基督教の祝福とは離れて昆蟲のことを考へ文明のことを考へる人が世には在る。そして自分は新出版の『劍橋大學博物學』に激勵を見出す。この書には、デギッド・シャアプ敎授が、蟻に關して書かれた次記の言葉があるのである。

『この昆蟲の生活に存する非常に顯著な現象が觀察によつて啓示せられた。この昆蟲は、多くの點に於て、我我人間が知つて居るよりか、遙か完全に社會に於ける共同生活の術を會得して居り、且つ彼等は社會生活を大いに容易ならしむる諸產業、諸藝術の習得に於て我我に先んじて居る、といふ結論を實際殆んど避け得ないのである』

見聞の廣い人ならば、修業を積んだ一專門家のこの平明な敍述を兎や角と論諍さるる人は多くあるまいと自分は想ふ。現代の科學者は蟻や蜂に就いて感傷的にならるるやうなこ

とは無くて、社會進化に關しては、この蟲の方が『超人』的に進んで居るやうに思へることを承認するに躊躇されはせぬであらう。ハアバアト・スペンサア氏は――誰れも氏に浪漫的傾向があるとの非難はしなからうと思ふが――氏はシャアプ教授よりも餘程、歩を進めて、蟻は經濟的にと同様に眞の意味に於て倫理的に、人類よりも進んで居る――蟻の生活は全然愛他的目的に獻げられて居るからと我我に示して居られる。實際シャアプ教授は、次記の如き用心深い陳述で以て、その蟻の賞讃をば稍〻不必要にも制限して居る。

『蟻の能力は人間の能力のやうなものでは無い。その能力は個體の繁榮に占用されて居ると云はんよりも寧ろ種の繁榮に占用されて居る。個體は云はばその團體の利益の爲めに犧牲にされ、若しくは分化されて居るのである』

此文に明らかに含まれて居る意味は――即ち、どんな社會的情態でも、其個體の進歩改善が一般共同の繁榮の犧牲となつて居る國家は、餘程まだ不完全なものであるといふことは――現在の人間の見地からは或は正しいであらう。といふのは、人間はまだ不完全にしか進化して居ないので、人間社會は人間がもつと個體化することによつて大いに利益するであらうから。然し社會的な昆蟲に關しては、教授の文に含まれて居る批評は疑問を挾む

べき餘地が十分ある。ハアバアト・スペンサア氏は云うて居る。『個人の改良進步は個人を社會的共力協同に一層よく適合せしむるに在る。そしてこれは社會の繁榮を來たすことになるから、其人種の維持となつて來る』語を換へて云ふと、個人の價値は社會に關係してのみ在り得るのである。そこでこれを許容するといふと、個人を其社會の爲めに犧牲に供するのが善であるか惡であるかは、その社會がそれを形成する個體が一層個體化することによつて何を得するか損するかによつて定まるに相違無い。……然し、やがて分るであらうやうに、最も我我の注意に値ひする蟻社會の狀況は其倫理的狀況である。これはスペンサア氏が道德進化の理想は『利己主義と愛他主義とが彼此の區別無きまでに融和され折衷されて居る國家』だと述べて居られる其理想を實現して居るのだから、人間の批評を絕して居るのである。言ひ換へれば、利己ならざる行爲を爲すの快樂が快樂になつて居る國家である。卽ち、も一度スペンサア氏の文を引用すれば、蟻社會の活動は『個個の安寧を後にして、全く團體全體の安寧を計るの活動であつて、個個の生活はただ社會生活に至當な注意を可能ならしむるに必要なだけの範圍に於て注意されて居るやうに見え……個個は、その體力を維持するに必要なだけの食物と休息とを取つて居るやうに思へる』のである。

三

蟻は園藝や農業を實行して居る事、蟻は茸の培養に熟練である事、蟻は（現今の知識に據ると）五百八十四種の異つた動物を飼ひ馴らして居る事、蟻は堅固な處にトンネルを穿つ事、蟻はその子供等の健康を危からしめるやうな大氣の變化に對應する方法を知つて居る事、又、蟻は昆蟲としては、その壽命は例外的で、そのうち高等な進化を遂げた種類のものは餘程の年數を生きるといふ事、これを讀者は御承知であると思ふ。

だが、それは殊に自分が述べたいと思ふ事柄では無い。自分が話したい事は、蟻の非常な禮節――恐ろしい德義――である。行爲に就いて我我の最も驚くべき理想も、蟻の倫理に比べると――進步の程度を時間で計算すれば――後れること幾百萬年を下らぬ！……此處で『蟻』と自分のいふは、蟻の最高の種類を指すので、もとより蟻科全體を云ふのでは

註　これに關して興味ある事實は、アリの日本語は「蟻」といふ字と、『道德の特正』『禮儀』（義理）を意味する字とを合せて成つた表意文字である事である。だから、漢字では實際に『義の蟲』の意である。

無い。蟻には約二千の種のあることが今までに分つて居る。そしてそのものは、その社會組織に於て、進化の甚だしく異つた度合を示して居る。生物學上最も重要な、そして倫理問題に對しての、その不思議な關係に於てそれに劣らず重要な、或る社會的現象は、最も高等な進化を遂げた蟻社會の生涯に於てのみ、有利に研究し得られるのである。

蟻の長命に於ける相對的經驗の蓋然價値に就いて、近年色々書物に書かれて居ることとであるからして、蟻に個性の存することを、まさか否定される人はあまりあるまいと自分は思ふ。この小動物が全然、新規な困難に遭遇してこれに打勝ち、また、これまで全く經驗したことの無い境遇に適應して行く智慧は、自主的思索の力が餘程多くあることを證明して居るのである。だが、この事だけは少くとも確實である。即ち蟻は純然たる我利的方面に使用され得る個性は少しも有つて居ない事である。此處で自分は『我利的』といふ語をその尋常普通の意義に使用して居る。貪慾な蟻、好色な蟻、七つの重大罪惡のどれ一つでも、否、小さな恕し得べき罪でも、犯し得る蟻、そんなものは思ひも寄らぬものである。同じく思ひも寄らぬものは、云ふまでも無く、浪漫的な蟻、觀念論者的蟻、詩人的蟻、或は哲學的思索に耽らんとする蟻である。どんな人間の心も、蟻の心の絕對的實際性に到達

することは出來なからう。現今の體制を有つて居る人間はどんな人間も、蟻の習慣ほどに缺點無しの實際的な心的習性を養ふことは出來なからう。だが、この最高無上の實際的な心は道德的過失を爲し得ぬのである。蟻には宗教的觀念は全く無いといふことを說明するのは或は困難であらう。しかしそんな觀念は蟻には何等の用を爲さぬといふことは確實である。道德的弱點に陷り得ない者には『精神的指導』の必要は無いのである。

蟻社會の特徵及び蟻道德の性質は、我我はただ、朧氣に想像することが出來る丈である。これを爲すのにすら、我我は人間社會及び人間道德のまだ不可能な或る情態を想像しようと力めなくてはならぬ。そこでつぎに述べるやうな一世界を想像して見よう。其處では絕え間無しにそして猛烈に仕事をして居る者が――その全部は女であるやうに思へるが――充ちて居る世界を。其女の誰れ一人も、その體力を支へるに必要以上の食物を一粒でも取るやうに勸めることも欺くことも出來ぬ。又その女の誰れ一人もその神經系統を立派に働かせて行くに必要以上の睡眠は一秒たりとも爲ない。そして其女が凡て、少しでも不必要な放慢をすれば必ず何か機能の錯亂を來たすといふやうな特殊な體制を有つて居る。

この女勞働者が日日行ふ仕事のうちには道路築造、橋梁架設、木材切斷、種類の無數な

建築物建造、園藝農業、百と種類を異にする家畜の飼養保護、様様な化學的製品の製造、無數な食糧の貯藏保存、竝びにその種族の子孫の世話が含まれて居る。如上の勞働は悉くみな國家の爲めにするので——その國家の市民で、公有物としては考へるが『財產』などいふことを考へることさへ出來るものは一人も無い。そしてこの國家の唯一の目的はその幼者を——その殆んど全部は女の子であるが、それを養育し訓練するに在るのである。幼年の時機は長い。幼兒は長い間、啻に手緣りない計りで無く、不恰好なもので、その上に極く一寸した氣溫の變化にも非常に注意して保護してやらなければならぬほどに虛弱なものである。幸にもその保姆は保健の法則を心得て居る。換氣、消毒、排水、濕氣、それから病菌の——顯微鏡下に我我人間の眼に見えるやうに、その近眼には多分、見えるやうになつて居る病菌の——危險に關して保姆の心得て居なければならぬことは一切完全に銘銘が心得て居る。實際、衞生に關する事柄は實に十分に理解されて居るので、どんな保姆も自分の附近の衞生情態に就いて嘗て何等の過失を爲さぬ程である。

この絕え間無しの勞働にも拘らず、どの勞働者も亂髮で居ることは無い。何れも一日に幾度も化粧をして、入念に身綺麗にして居る。ところが、どの勞働者も非常に美しい櫛と

剛毛とをその手先にくつつけて生れて來て居るから、化粧室で無駄な時間を費やすといふことが無い。それからいつも自分の身を嚴に清潔にして居るほかに、勞働者は其子供等の爲めに、その家屋と庭園とを缺點無しに整頓して置かなければならぬ。地震、噴火、洪水、或は絕體絕命の戰爭以下の事に、塵掃ひ、掃き掃除、摩り磨き及び消毒といふ毎日の課程の妨げをさせぬことにして居る。

四

さて、もつと不思議な事實！がある。

この間斷無き勞苦の世界は、處女世界以上の世界である。尤も時に、雄が其世界に見出されはするけれども、それは特別な時機にだけ現れ、又、勞働者或は勞働と、全然何等の交渉を有つて居らぬのである。そのうちの一匹も敢て勞働者に言葉を挂けようとは――恐らくは、共同の危險の異常な場合を除いて――しない。また勞働者の方で雄に話をしようなどと思ふものは一匹も居らぬ。といふのは、雄は此不思議な世界では、鬪ふことも働くことも等しく出來ない劣等な物で、單に必要な厄介者として、我慢して置いて貰つて居る

物だから。雌のうちの或る特殊の階級が――此種族の母體に選拔されたものが――特別な季節の間、極はめて短かい時機の間、配偶者になつて與れるのである。だが、母體に選拔されたものは働かぬ。そしてそれは夫を受納せざるを得ぬのである。勞働者は雄と交はるなどいふことは夢想だもし得ぬことであらう――それは、そんな交際は最も無駄な時間浪費を意味するからといふ爲め計りで無く、また勞働者は必然的にあらゆる雄を云ふべからざる輕侮の念を以て見て居るからといふ爲め計りで無く、勞働者はしようにも結婚が出來ぬ軀だからである。尤も、勞働者のうちには、單性生殖をすることが出來て、父無し子を生むことが出來る者が居る。だが、一般の規則として、勞働者はその道德的本能だけが眞に女性である。非常な慈悲心と忍耐力と、我我が呼んで『母性的』と云ふ先見とを有つて居るのである。その性は、佛教の傳說に見る龍女同樣、無くなつて居るのである。

　肉食動物卽ち國家の敵を防ぐが爲めに、勞働者は武器を具へて居る。そしてその上また强大な武力に保護せられて居る。その軍人は、始め一寸見た時には同一種族のものとは信ぜられぬほどに（少くとも或る社會では）勞働者よりは遙か身體が大きい。それが守護して居る勞働者よりも百倍も大きな軍人は珍らしく無い。ところがその軍人が凡て女丈夫である、――否、もつと正確に云へば、半女性である。みな頑强に仕事をやつて行くことは

出來る。が、主として戰鬪をするやう、重い物が曳けるやうにと出來上つて居るからして、その用は熟練よりも、力の要求せられる方面に限られて居る。

「何が故に、雄で無くて、雌が進化の上に於て軍人及び勞働者に分化したのだらうかといふことは、思ふほど簡單な問題では無いかも知れぬ。これに答へることは確かに自分は出來ない。だが、自然的經濟が此事件を決定したのかも知れぬ。多くの生物體を見るに、雌の方が個體に於ても精力に於ても、大いに雄に優つて居る。思ふに、此蟻の場合に於て、完全な雌が元もと所有して居た生活力のより大なる貯藏が、或る特殊の戰鬪階級を發達進化せしむるのに、より迅速に且つ有效に利用され得るからであらう。生產力に富んで居る雌に於て、子を產むに費やさるるあらゆる精力が、この蟻の場合、攻擊力或は勞働能力の進化の方へ向けられてあつたやうに察せられる」

正眞の雌――母體に選拔されたもの――は實際甚だ少い。そしてそれ等は女王のやうな待遇を受けて居る。彼等は何んの願望も滅多に云ひ出し得ない程までに絕え間無しに且つ恭しくかしづかれて居る。生存のあらゆる心配を――後裔を生むといふ義務を除いて――

除かれて居る。日も夜もあらんかぎりの世話を受けて居る。彼等だけがあり餘る程に美食の供給を受ける。後裔の爲めに彼等は全く王様のやうに飲食し、また休息せねばならぬのである。そしてその生理的分化は、それに心任せに耽り得られるやうにして居る。滅多に外出をしない。有力な護衛が随行しなければ決して外出しない。不必要な疲勞や危險を招くことを許容されぬからである。多分、外出したい希望も大して無からう。彼等の周圍には種族全體の大活動が目まぐるしい程行はれて居る。そしてその慧智も勞苦も儉約も悉く皆、この母とその子供の安寧に向けられて居るのである。

　ところが、その母の夫が――必要な厄介物が――雄が、これが全種族の最後の最小の地位を有つて居る。既に述べた通り、或る特別な季節だけに現れ、且つ其生涯は甚だ短かい。或るものは、高貴な方に結婚する運命を有つては居るが、尊い家に生れた身だと誇ることさへ出來ない。彼等は高貴な家に生れたものでは無くて――處女から生れ出たもので――單性生殖が造つた子供で、そして殊にその理由で、或る不可思議な隔世遺傳の偶然の所産に過ぎない――劣等なものであるからである。だが、此社會は、どんな種類の雄でも、極く僅少しか――全く母體に選抜されたものの役に立つだけしか――存在を許容せぬ。そしてその少數者は任務を果すと殆んど同時に死滅する。自然の大法の意義は、此異常な世界

に在つては、努力無き生活は罪惡なりといふラスキンの教へと符合して居る。そして雄は勞働者として、或は戰鬪者として役に立たぬのであるから、その生存はただ一時的に肝要なだけのことである。尤も、テスカトリポオカのお祭りの爲め選ばれて、その心臟を裂かれる前二十日の間の新婚旅行を許されるアズテクの犧牲のやうに――犧牲にされるのでは無い。だが、その幸運の不幸さは殆んどそれに劣らぬ。自分共はただの一と晩、王の花婿になるのだ――婚禮後は生きて行く道德上の權利は有たぬのだ――自分共いづれもにとつて、結婚は必然の死を意味するのだ――數代の間自分共よりも生き延びる若い寡婦に歎いて貰ふ希望さへ有てぬのだ、――かういふことを知つて居ながら、育てられる青年を想つても見給へ……!

五

だが、これまで述べたことは凡て眞の『昆蟲世界のロオマンス』への序言に過ぎぬ。

この驚歎すべき文明に關して、取りわけ最も驚くべきは、性の禁止の發見である。蟻生活の或る進歩した種類のものに於ては、その大多數の個個のものに性といふものが全然無

くなつて居る。殆んど凡ての、より高等な蟻生活には、性生活はその種の繼續に絕對に必要な範圍だけに存在して居るやうに思へる。然しその生物學的事實そのものは、その事實が提供する倫理的暗示ほどに驚くべきものでは無い。何んとなれば、性機能の此實際的禁止或は調節は自發的のものであるやうに思へるからである。少くともその種だけのことを云へば自發的である。この不思議な動物は――或る特別な榮養方法で――その幼年者の性を發展せしめる方法、或はその發展を制止する方法を知つて居るといふことを、今は信ぜられて居る。彼等は、本能のうちで最も有力な、そして最も制御し難いものだと普通想像されて居る性的本能を完全に左右することに成功して居るのである。そして種が絕滅しないやうに取り計らふのに必要なだけの範圍內に、性生活をかく嚴正に檢束することは、此種族が成し遂げた多くの生命的經濟の（實に驚くに足るものではあるが）ただ一つに過ぎないのである。利己的な――『利己的』といふ語の普通の意味での――快樂を味ひ得る能力はどの能力も、同樣に生理的變更によつて抑壓されて居る。如何なる自然的食慾に耽ることも、それが直接或は間接に、その種の利益となり得る程度までのことで、それ以外は可能で無いのである。食物及び睡眠といふ必要缺ぐべからざる要求すらも、健全な活動を維持するに必要な限界にだけ滿足を與へられて居るのである。個個のものは社會共同の利

益の爲めにのみ存在し行動し思考し得るのである。そしてその社會は、宇宙の大法の許す限り、愛にも飢餓にも支配されることをば得得として拒絶して居る。

我我人間の多くは、或る種の宗敎的信條――未來の褒美を望み、未來の處罰を恐るる念――無くしては如何なる文明も存在し得ないといふ信仰で育て上げられ來たつて居る。道德觀念に基づける法律が無いならば、又、かかる法律を斷行する有效な警察が無いならば、誰れも彼もが、自己のみの利益を求めて、他の誰れもの不利益を來たすであらうと、かう考へるやうに我我は敎はり來たつて居る。それでは强者は弱者を滅ぼすであらう、憐憫や同情は無くなるであらう、社會の全組織は粉な微塵になるであらうと。……こんな敎へは、人間の性質の現在の不完全さを自白して居るのである。そしてそれは明白なる眞理を含んで居るのである。が、然し幾千幾萬年の往古、其眞理を聲明した者共は、利己といふことが自然的に不可能な社會的生活の一種が在ることを想像しなかつたのである。能動的の善を爲すの愉快が義務の觀念を不必要とする一社會が存在し得るものだ――本能的な道德性があらゆる種類の道德法典を要らぬものにし得る一社會が存在し得るものだ――其處の者は一人殘らず生れながら絕對的に利己心が無く、根氣强く善良で、道德訓練はどんな幼年

の者にでも全く貴重な時間の浪費としかなり得ない様な一社會が存在し得るものだ、といふ積極的な證據を、非宗教的な自然をして我我に提供せしめることが殘つて居たのである。

進化論者には、かかる事實は、我我人間の道徳的理想主義の價値は、ほんの一時的のものであるといふこと、又、その語の現今の人間界での意味の、德といふものよりも善い、深切といふものよりも善い、克己といふものよりも善い或る物が、或る境遇の下に竟には、それ等に取つて替りはせぬだらうかといふこと、を必然的に暗示するのである。進化論者は道徳觀念無き世界が、そんな觀念に行爲を制限せられる世界よりも道徳的により善い世界ではなからうかといふ問題に面と向かはざるを得ないことを見て居るのである。進化論者は、我我人間界に存する宗教的訓誡や道德的法則や倫理的標準は、我我がまだ社會進化の極はめて初歩の階段に居ることを證明しては居ないかとさへ自問せざるを得ぬのである。そしてかかる疑問は當然更なる疑問へと導く。卽ち、人類は、此惑星の上に在つて、そのあらゆる理想を越えて居る或る倫理的情態に――今、我我が惡と呼んで居るもの悉くが萎縮し盡くして存在しなくなつてしまひ、我我が德と呼んで居るもの悉くが變じて本能となつてしまつて居るやうな情態に、――倫理的な概念や法則が、今でもより高等な蟻の社會

に於てさうであらうと同じく、不用になつてしまふやうな利他の有様に、——いつか到達することが出來るであらうかと。

近代思想の巨人達は此問題に幾分の注意を拂つて居る。そしてそのうちの最も巨大なる者が——一部肯定的に——これに答へて居る。ハアバアト・スペンサア氏は、人類は倫理的に蟻の文明と比較し得べき或る文明情態に到達するであらうといふ、その信心を告白して居られる。——かう言つて居られる、

『若し下級な生物のうちに、その本性が素質の上に於て變化を來たして、利他的活動が利己的活動と一つになつてしまつて居る實例があるならば、それと同じな事が、同じ事情の下に、人類間に出來するであらうといふことは、否應無しにそれに含まれて居ることである。ところが社會的な昆蟲は、全く此點に劃切な實例を——他の多くの個人の生活に役立つ上に於て、驚くばかりの程度まで、個人の生命を奪つても宜しいといふことを我我に示す實例を——供給して呉れて居る。……蟻も蜂も、我我がその語に與へる意義での義務といふ念を有つて居るとは想像が出來ぬ。又、その語の尋常普通な意味での犧牲に絶えず逢うて居るとも想像することは出來ぬ。……［これ等の事實は］利他的目的を追求するの

に、他の場合に利己的目的を追求する際に示すのと全く同樣に根氣强く、且つ同樣以上にすら根氣强く、あるやうな本能を造り出すことは、有機組織の可能性のうちに存して居ることを示すのである。――また、かかる場合には、その他の半面から見て利己的な目的を追求して以て、その利他的目的が追求されることを示すのである。その有機組織の必要を滿足せしめる爲めには、他人の安泰を來たすやうな、そんな行動を爲さなければならぬのである。……

……………………………………

あらゆる未來を通じて、自己を思ふ念が、他を思ふ念の爲めに絕えず服從さるべき情態が續かなければならぬといふことは眞理どころか、反對に、他を思ふ念が竟には愉快の大源泉となつて、直接な利己的な滿足よりして生ずる愉快より大きくなるやうなことが出來して來るであらう。……かくして、しまひには、利己と利他とが折衷されて、彼此融合して、一つになる情態がまた出來するであらう

六

固よりのこと前掲の豫言は、昆蟲社會の種種な階級が、それに因つて分化されて居る組織的分化に匹敵する組織的分化が現すであらうやうな、そんな生理的變化を人間の本性がいつか蒙るであらうといふことを含んでは居ない。活動的な大多數者は、不活動な少數者たる選抜された母の爲めに勞苦する半女性の勞働者と女士軍から成る、といふやうな人類の將來は想像の出來ない事である。スペンサア氏はその『將來の人口』の章に於てさへ、――完全に發達した神經系統について、また人間の出産の大減少についての氏の一般的叙述には、かかる道德的進化は頗る多大な生理的變化を意味するものだといふことが暗示されては居るが――道德的に一層高等な種類の産出に避くべからざる生理的變化に就いては何等細目に渉つての叙述を試みて居られぬ。若しも、相互の利益を圖るの愉快が人生の喜びの全部となるやうな、將來の人類の可能を信ずることが合理ならば、昆蟲生物學の事實が證明して進化的可能の範圍内にあると云うて居るやうな、生理的な又道德的な、他の變態を想像することもまた合理ではなからうか。……自分には分らぬ。自分はハアバアト。スペンサア氏を、これまで此世界に出現したうちの最も偉大な哲學者として最も崇拜的に尊敬して居る。だから、氏の教へに反對した事を何か書きつけて、それは綜合哲學が鼓吹した意見だと讀者が想像されるやうなことになるのは、自分の甚だ遺憾とするところであ

る。以下記す考察には、自分だけに責任があるので、若し自分が誤つて居るならば、その罪は自分だけの頭上に下らんことを希ふ。

スペンサア氏が豫言された道德的變態は、生理的變化の助けによつて始めて、しかも非常な犧牲を拂つて始めて、成し遂げ得るものであると自分は想ふ。昆蟲社會が表明して居るあの倫理的情態は、非常に猛烈な慾求に反抗して幾百萬年の間、死に物狂ひに支持し來たつた努力によつて始めて達し得られた譯のものである。人類も亦それと同樣に無殘な欲求に遭遇して、そして竟にそれを支配しなければならぬかも知れない。精一杯最大な人間の苦しみの時代がまだ、これから來るのだといふこと、又、それは精一杯最大な人口增加の壓迫に伴うであらうといふことを、スペンサア氏は示して居られる。その長期の壓迫よりして生ずる數ある結果のうちに、人類の慧智と同情との異常な增加があるであらう。そしてこの慧智の增加は人間の多產を犧牲に供して成し遂げられるものである、と自分は思ふ。然し生殖力のこの衰退は、聞くところに據れば、最高無上の社會情態を保證するに足るものでは無くて、ただ、人間の困苦の大原因たる人口の壓迫を救ふだけのものである。社會が完全に平均を得て居るといふ情態は、

社會的昆蟲が既に解決して居るやうに、性生活を禁止することによつて、經濟問題を解決する何等かの手段が發見されない限り、人類はそれへ近寄ることは出來ようが、十分にそれへ到達することは決して出來ないことであらう。

かかる發見が爲されると假定し、又――今、性生活が要求して居る諸力をば、一層高等な活動力の發展へ移すことを仕果すやうに――自己が産んだ子供の大多數に性の發達することを差し止めることを人類が決心すると假定すると、其結果は蟻の情態同樣に結局は同質異形の情態となるのではなからうか。そして、さうなるといふと、未來の人種は、男性の進化によるよりも寧ろ、女性の進化を經て、そのより高等な部類の者は、大多數の男女何れでも無い者がこれを占めるのではなからうか。

現今でさへ、全く非利己な（宗教的な動機のがあるのは云ふに及ばぬが）動機からして、獨身生活を決心する人の多いことを考へるといふと、今よりもつと高等な進化を來たした人類が、共同の幸福の爲め、殊に其爲め獲得さるる或る利益を思うて、その性生活の大部

分を喜んで犧牲に供するであらう事は、ありさうに無いことには思へぬであらう。その或る利益といふ中で――蟻のやうな自然的方法で性生活を人類が支配し得るものといつも假定して――驚く許りに壽命が延びるといふ事が、その一番小さなものではなからう。性を超越した人類の一層高等な種類のものは、一千年の壽命といふ夢想を實現し得るかも知れぬのである。

我我が今、爲さなければならない仕事をするのに、今の我我の壽命は短か過ぎることを既に我我は知つて居る。それに、發見は絶えず加速度を以て進行するし、休む間無しに知識は增大して行くことであるから、時の進むに連れて、壽命の短かさを悔むべき理由は確かに層一層强うなつて來ることであらう。科學が鍊金術士の希望たりし不老藥をいつか發見するといふことは到底も見込みの無いことである。宇宙の諸力は我我に騙されはせぬ。彼等諸力が我我に讓つて呉れる一一の便益に對して、我我は十分な代價を拂はなければならぬ。無代では何んにも、は永久の大法である。恐らくは長壽といふ代價が、蟻がそれに對して拂うた代價なのであらう。恐らくは、地球よりも年長な或る惑星では、その代價が既に早、拂はれて居て、子孫を產出する力は、我我の想像の出來ない方法で、その種の他の者とは形態學的に分化して居る一階級のものに限られて居るのではなからうか。……

七

然し昆蟲生物學の事實が人類進化の未來の進路に關して、かくも多く暗示を與へると同時に、倫理と宇宙律との關係に就いて、最も重大な或る物をもまた暗示しはせぬか。確かに、人間の道德經驗があらゆる時代に於て非難して居る事柄を爲し得る動物には、最高の進化は許しはされぬのであらう。確かに、あらゆる力の中で、最高の力は無私無慾の力である。殘忍に對し或は淫慾に對して無上の力が與へられるといふことは決して無い事であらう。神といふものは無いものかも知れぬ。然し生物のあらゆる形態を構成したり分解したりする諸力は、神よりも、もつと酷烈無假借なものに思へる。星の振舞ひに『戲曲的傾向』のあることを證明する事は出來さうに無い。が、然しそれにも拘らず、宇宙の過程に、人間の利己といふことに根本的に反對して居る人間の倫理制度悉くの價値を肯定して居るやうに思へるのである。

天の河緣起

そのほか

古昔は云ひぬ、『天河は水の精なり』と。我等は下界の川が時には爲すが如くに一年のうちにその川床を移すを視るなり。

（古代の學者）

天の河縁起

舊日本が行うた幾多の面白いお祭りの中で、一番浪漫的なのはタナバタサマ、即ち天の川の織姫のお祭りであつた。大都會では此祭日は今あまり守らぬ。東京では殆んど忘れられて居る。然し、多くの田舎地方では、そしてこの首府近くの村でも、今なほ少しは行うて居る。七月の（舊暦の）七日に、古風な田舎町若しくは村を偶〻訪れると、伐り立ての竹が幾本も家家の屋根の上に取り附けるか、又は横の地面に樹てるかしてあつて、その竹一本一本に色紙（いろがみ）の細片（ほそきれ）が澤山に著けてあるのに多分氣付くであらう。極く貧しい村ではその紙片が白いか、或はただ一色かであるを見るかも知れぬ。が、一般の規則としては五通り、又は七通りの異つた色でなければならぬことになつて居る。青、綠、赤、黄それに白、これが普通飾る色合である。その紙片には皆タナバタと、その夫ヒコボシとを讃へて作つた短かい歌が書いてある。お祭りが濟むと、その竹は抜き取つて、歌をそれに著けたまま、一番近い流れへ投げ込む。

この古いお祭りの縁起を理解するには、七月の七日に、宮中でも、いつもそれに供物をされたこの星神の傳說を知らなければならぬ。この傳說は支那のものである。それを平易に日本譯にするとかうである。――

天空の大神に太奈八太豆女（たなはたつめ）といふ愛らしい娘が一人あつて、其娘は御父様の著物を織つて、月日を過ごして居た。仕事が好きで、機を織るより面白いことは他に無いと思つてゐた。ところが或る日、その天の住家の門口で、機の前に坐つて居ると、牛を牽いて通る美くしい百姓を見て、それと戀に陥つた。御父様は、娘の心に祕めた願ひを察して、其若者を夫として與へた。ところが一緒になつた戀人は餘りに好き合うて、天帝への二人の義務を怠り、梭の音はもはや聞えず、牛は世話の仕手が無いので天の河原をさまようた。そこて大神は不興がられてその二人を別にされた。二人はその後は、天の川を中にして、別別に暮すやうにと言ひ渡されたが、一年に一度、七月の七日の夜は互に會ふことを許された。その夜は――空が晴れて居れば　天界の鳥がその軀（からだ）と翼とで、その川の上へ橋を架ける。そしてその橋を渡つて二人の戀人は會ふ事が出來るのである。然し雨が降ると天の川の水嵩が増して、橋を架けることが出來ぬほど廣くなる。だから、此夫婦は七月七日だつても、

いつも會ふといふ譯には行かぬ。天氣が惡るい爲めに、續いて三年も四年も會へぬこともある。が、然し二人の戀は依然として不朽に若く永遠に辛抱づよく、二人は――つぎの年の七月の七日の夜には會ふことが出來るといふを樂しみにして――それぞれの勤務(つとめ)を毎日失錯無しに引き續き果して居る。

古代の支那人の想像には、我我の所謂乳色の道は光つて居る川で――天の川で――銀河てあつた。西洋の著作家はタナバタ卽ち織姫は天琴座の一箇の星であり、その愛人たる牽牛は乳色の道の向う側にある鷲座の一箇の星であると述べて居る。然し兩方とも、極東人の想像には、一群の星によつて現されて居ると云ふ方が一層正しからう。或る古い日本の書物はかう明白に書いて居る。――

ケンギウ「牽牛」は天の川の西にあり、一列に竝べる三つ星にして、牛を牽ける人の如くに見ゆ。ショクヂョ「織女」は天の川の東にあり、機を織る女の姿に見ゆるやう三つ星竝べり。……牽牛は農事にかかはる一切のことを司どり、織女は女の仕事にかかはる一切のことを司どる。

雜話集といふ古い書物に、この二人の神はもと、この世界の人であつたと書いてある。嘗て此世界に夫婦が居て、支那に住んで居た。夫は斿子と言ひ、妻は伯陽と言つた。二人は殊にまた最も熱心に月を崇め信じた。晴れた日は每夕、日沒後、その昇るのを熱心に待つて居た。それから地平線近く沈み出すと、その家の近くの小山の頂きへ登つて、少しでも長くその顏を眺めることにして居つた。それから到頭、見えなくなつてしまふと、二人は共に歎き悲しんだ。九十九歲で妻は死んだ。そしてその魂が鵲に乘つて天上して、其處で一つの星に成つた。夫は、その時百三歲であつたが、月を眺めて妻を亡うた悲しみを忘れた。その昇るのを喜んで迎へ、その沈むのを悲しむ時は、恰も妻がなほその橫に居るやうな氣がするのであつた。

或る夏の夜――今は不朽に美くしくまた年若い――伯陽は、夫を訪れに、その鵲に乘つて天界から降りて來た。夫はその訪れを非常に欣んだ。だが、その時からして、星に成つて天の川の彼方で伯陽と一緖になれたら、どんなに幸福であらうと、そればかり考へて他のことは考へることが出來なかつた。到頭、自分も亦、鳥に乘つて天界へ昇つて、其處で一つの星に成つた。だが、望んで居たやうに、すぐには伯陽と一緖になれなかつた。といふのは自分の割り當てられてゐる居場處と伯陽が割り當てられてゐる居場處の間に天の川

が流れて居たからである。それにどちらの星も、天帝がその川水で毎日沐浴をされるので、その流れを渡ることを許されなかつた。が、毎年一日――七月の七日に――互に相會ふことを許された。天帝はその日は、佛の法の說教を聽きに、いつも善法堂へ行かれる。そこでその時は鵲と鴉とが多勢出て、その空を飛んで居る軀と、擴げて居る翼とで天河の上へ橋を架ける。そして伯陽はその橋を渡つて夫に會ひに行く。

タナバタといふ日本の祝祭は、元は支那の機織の女神織女の祝祭と同一であつたといふことは、殆んど疑ひを挾み得ない。また、この日本の祭日は、極くの昔からして、殊に女の祭日であつたものらしく思はれる。そしてタナバタといふ語を書き現す文字は、機を織る少女といふ意味のものである。然し、この星神の二人を、七月の七日に拜んだものであつたから、日本の學者のうちには、その名の普通の解釋に滿足せずして、元はこれはタネ（種）といふ語とハタ（機）といふ語から出來て居たと說いたものがある。その語源說を受け入れる人達は、タナバタサマといふ名稱を單數とせずに複數にして、これを『種の神樣と機の神樣』卽ち農耕を司どる神と機織を司どる神とする。古い日本の繪には此星神は、そのそれぞれの屬性を上述の如く解して――ヒコボシは天の川へ水を飮ませに牛を牽いて行く百姓で、その川のずつと向うにオリヒメ（タナバタ）が機を織つて居るやうに――描

いてある。兩人の服裝は支那風である。そしてこの二神の最初の日本畫は、多分、支那の何かの原畫を模寫したものであらう。

　現存して居る最古の日本歌集——紀元七百六十年の萬葉集——では、男の神は普通これをヒコボシと呼び、女の方はこれをタナバタツメと呼んで居るが、後には兩方ともタナバタと呼んだ。出雲では男神の方をヲタナバタサマ、女神の方をメタナバタサマと通常呼んで居る。兩方共なほ多くの名で知られて居る。男の方はヒコボシと言つたり、ケンギウと言つたりするが、またカイボシとも呼ぶ。そして女の方は[譯注一]アサガホヒメ（『朝貌姫』）、イトオリヒメ（『絲織姫』）、モモコヒメ（『桃子姫』）、タキモノヒメ（『薰物姫』）またササガニヒメ（『蜘蛛姫』）と呼ぶ。この名のうちには説明の困難なのがある、殊にアラクネの希臘傳説を思ひ出させる最後の名は説明が困難である。多分、この希臘神話と、この支那物語とは共通なところは全然何も無からう。が、古い支那の書物に、一縷の關係がありはせぬかと思はせるやうな、妙な事實が記載されてゐる。支那皇帝ミン・ヒワン（日本人はゲンソウと呼ぶ）の御世には、宮中の淑女達は、七月の七日に蜘蛛を捕へて占ひのため、これを香箱に入れ置くが習はしであつた。八日の朝その箱を開く。若し其蜘蛛が夜の中に厚い網を紡いだならば占ひは吉てあつた。が、若し何もせずに居たのであつたら占ひ

は凶であつた。

數年前、美くしい女が一人、出雲の山の中の或る農夫の住家を訪れて、その家の獨り娘に、人の知らぬ機織の技を教へた話がある。或る晩その美くしい他國人は、姿を消した。それて其處の人達は、今まで居たのは天（そら）の織姫樣であつたと知つた。その農夫の娘は、機織が上手だといふので評判者になつた。然し――自分はタナバタサマのお相手をしたのだといふので――一生結婚しようとはしなかつた。

それから自分てはさうと識らずに、天つ御國を訪れた男に就いて――愉快なほど茫漠とした――支那物語がある。その男は毎年、八月中、貴重な木材の浮槎がその住つて居る海岸へ漂うて來るのを觀て、何處にその木が生えるのか知りたいと思つた。そこで二箇年の航海に要する食料を一艘の船に積んで、その浮槎がいつも流れ來る方向に船を走らせた。幾月も幾月も、いつも平穩な海を進んで行つて、到頭、不思議な樹木の生えて居る氣持ちのいい海岸へ到著した。船を繫いで單身その知らぬ陸へと進んで行くと、やがてその水が銀のやうに光つて居る川の岸へ來た。向う岸に亭が一つあつた。そして其亭に美くし

い女が一人機を織つて居つた。其女は月光のやうに白くて、あたりに光りを放つて居つた。やがてのこと眉目美はしい若い百姓が、川の方へ牛を牽いて近寄つて來るのが見えた。そこでかの男はその若い百姓に、この處と此國との名を聞かせて呉れと頼んだ。ところがその若人はその問ひを不快に感じたらしく、激しい語調で、『此處の名が知りたいなら、汝が來た處へ歸つて嚴君平に聞け』と答へた。そこでこの航海者は、恐ろしくなつて、急いで自分の船に乘つて支那へ歸つた。歸つてからその嚴君平といふ賢者を探し尋ねて、その冒險を物語つた。嚴君平は驚いて手を拍つて叫んだ。『それでは汝だつたのか！……七月の七日に自分はじつと空を見て居ると、牽牛と織女とが出會はうとして居るのが見えた。――ところが其間へ、自分は客星だと思つたが、新奇な星が一つ居た。仕合せ者だなあ！汝は天の川へ行つて、織女の顔を見たのだ！……』

牽牛と織女とが會ふのは、眼のいい人にはどんな人にでも視られるといふ。會ふ時はいつも、その二つの星が五通りの異つた色で燃えるからである。タナバタの神へ五色の供物をし、それを賞め讃へての歌を五通り異つた色合の紙に書くのはその爲めである。

が、前にも言つたやうに、二人はいい天氣の時だけ會へるのである。七日の夜、少しで

も雨が降れば、天の川の水嵩が増すので、この戀人はまた全一年待たなければならぬ。だから、七夕の夜降る雨をナミダノアメ卽ち『涙の雨』と呼ぶ。

空が七日の夜晴れて居ると、この戀人は幸福である。その星は嬉しさにピカピカ光つて居るのが見られる。その時、牽牛星が非常に光つて輝くと、その秋、米の收穫が多い。織女星がいつもよりも光つて見えると、機織りやあらゆる女の手業の繁昌する時が來る。

舊日本ではこの二人が會ふのは、人間に取つて幸運だと一般に想はれて居た。今日でも、田舍の方方で、タナバタ祭りの晩に――『天氣になあれ!』といふ――短かい歌をうたふ。伊賀では若い者共が、この戀人二人が會ふ時刻だと思ふ時分に、

七夕や餘り急がば轉ぶべし

といふ巫山戲た歌をまた唄ふ。

然し出雲の國では、此處は雨のよく降る地方だが、これと反對な信仰が行はれて居て、七月の七日に空が晴れると、その後に不幸が起こると考へられて居る。この信仰の地方的

說明は、かの二つの星が出會ふとその合體からして、旱魃や他の禍ひで國を惱ます惡神が多く生れるといふのである。

七夕祭を初めて日本で行つたのは天平勝寶七年（紀元七百五十五年）の七月七日であつた。恐らく七夕の神の起源は支那に在るといふことが、これを公に崇めるといふことを多くの神社で、いつの世にもしなかつたといふ事實を說明する。自分はそれへたつた一つの神社の記錄を見出すことが出來た。それは尾張の國[原註三]星合村といふ村にあつて、七夕森といふ杜に圍まれて居る七夕神社といふのである。が、然し天平勝寶前でも、織姬の傳說はよく知られて居たらしい。といふのは養老八年（紀元七百二十三年）の七月七日の夜に、歌人の山上憶良が、

天漢(アマノカハ)相向立而(アヒムキタチテ)吾戀之(アガコヒシ)君(キミ)來益奈利(キマスナリ)紐解設奈(ヒモトキマケナ)

といふ歌を作つたといふことが、記錄されて居るからである。

七夕祭は日本では千百五十年前に、支那の先例に從つて、ただ、宮中の祭りとして、初めて行はれたもののやうに察しられる。其後貴族と武人階級とが帝室の手本を模し、俗に云ふホシマツリ卽ち『星祭』を行ふ習慣が漸次下に及び、終に七月の七日は、其言葉の十

分の意味に於て、國民的祭日となつた。が、その行ひ方は、時代によつてまた國を異にするに從つて、餘程違つて居つた。

宮中での儀式は極はめて細細した念入りの者であつた。それは具さに公事根源に ―― 說明の繪圖を添へて ―― 載せてある。七月の七日の宵に、宮居のうちの淸涼殿と呼ぶ建物の東の庭に莚を鋪き、その莚の上に星神に捧げる供物を載せる机四脚を立てる。普通の食物の供物のほかに、その机の上に酒、香、花を活けた朱漆りの華盤、箏と笛、五色の絲を貫いた目の五つある針一本を載せる。其饗宴を照す爲め、机の横に黑漆りの燈臺をたてる。庭の他の部分にタナバタの星の光りが映るやうに、水盥が置かれ、宮中の貴女達は、其水に映る星影で針に絲を通すことを試みた。首尾よく通した者は翌年中幸運だとされてゐた。

宮廷に仕へる貴族（クゲ）はこの祭りの日に宮中へ或る供物をしなければならなかつた。其供物の性質と、其奉呈の仕方とは勅令で極まつて居た。かつぎを冠り、禮裝をした位階ある貴女が、盆に載せて宮殿へ運び行くのであつた。其貴女があゆみ行く時、その頭上に、大きな紅い傘を供人がさす。盆の上にはタンザク（歌を書くに用ひる色の美しい紙の縦長い角な切れ）七枚、クズの葉七枚、硯七面、そうめん（一種のヴァミセリ）七すぢ、筆十四管、夜伐つて露が滋く置いて居る芋の葉一束が載せてあるのであつた。式は宮殿の庭で

寅の刻――午前四時――に始つた。先づ星神を讃へる歌を書くのに使ふ墨を用意するに先だつて、其硯を丁寧に洗つて、一面一面葛の葉の上に置く。露が置いて居る芋の葉の一束をそれから一つ一つの硯の上に載せる。水を用ひずに、この露で墨の水をつくるのである。此式は凡て、玄宗皇帝の頃、支那の宮廷で流行つて居たものを模倣したもののやうである。

徳川將軍時代になつて、初めて七夕祭は、眞に國民的な祭日となつた。そしてこの日を祝つて伐りたての竹へ、色變りのタンザクを結び付ける通俗の習慣は、漸く文政（千八百十八年）時代に溯まる。前には短冊は頗る上等な紙でつくつたもので、この古からの貴族的儀式は念入りであつたが、それに劣らずまた金のかかるものであつたのである。が、徳川將軍時代に種種な色の頗る廉價な紙が製造された。それでこの祭日の式は費用をかけずに、どんなに貧しい階級の人達でも、思ふままこれを行ふことが出來るやうになつた。

このお祭りに關する民習は地方によつて異つた。出雲の――出雲では社會のあらゆる階級が、士も平民も、殆んど同じ樣にしてこの祭日を祝つたものであるが――出雲の慣習は昔は殊に興味あるものであつた。それを簡單に記述すれば、封建時代の幸福な生活の模樣が幾分か偲ばれよう。七月の七日の夜、寅の刻には誰れも起きる。そして硯と筆とを洗ふ。

それから家の中の庭で、芋の葉から露を集める。此露をアマノガハノシヅク（『天の川の滴』）と呼んで居た。庭へたてる竹に吊るす歌を書くのに使ふ新しい墨をつくるのに用ひるのである。七夕祭の時に友人同士互に新しい硯を贈るのが常であつた。そして家に新しい硯があれば、新しい墨をそれに使ふのであつた。それから家中の者が銘銘歌を書く。大人は、その能に應じて、星神を讃へる歌を作つた。子供等は云うて貰ふ歌を書きとるか、又は間に合せの歌を作らうとしたりした。餘り年齢が若くて手傳つて貰はなければ筆の使へぬ子供は、親か姉か兄かに手を持つて貰つて、お祭りに關した語一つ又は句一つ――例へば『アマノガハ』とか、『タナバタ』とか、或は『カササギノハシ』（鵲の橋）とか――の文字を短册の上に形だけ書いた。庭へ伐りたての竹を、枝葉をそのまゝに、二本――雄竹（ヲトコダケ）と雌竹（ヲンナダケ）と――たてる。それは六尺許り離して立てるので、その間へ渡した綱へ五色の紙片と、五色の染め絲の總絲を吊るす。その紙片は上衣――キモノ――を現して居るのである。竹の葉と枝とへ、家中の者が歌を書いた短册を結ひ付ける。そしてその二本の竹の間に、若しくはその直ぐ前へ置く机の上へ、星神への色色な供へ物――果物、素麵、酒、それから胡瓜に西瓜といつた様な種種な野菜――を入れた器を置くのであつた。

が、此祭りに關して一番妙な出雲の習慣は、ネムナガシ卽ち『眠流し』式であつた。夜明け前に若い者は、ネムの葉と豆の葉とを奇せて造つた束を携へて流れ川へ行く。その川へ著くと、その葉束を流れへ投げ込んで、

ネムハナガレヨ！
マメノハハトマレ！

といふ短かい歌を唄ふのであつた。その歌は二樣に解釋が出來よう。といふのはネムといふ語はネムリ（睡眠）といふ意にも亦、ネムリギ或はネムノキ卽ち『睡り木』（英語のミモサ）といふ意にも取れるし、一方またマメといふ綴りは、カナで書くと、『豆』を意味しもすればまた『活動』、『力』、『元氣』、『壯健』などを意味しもするからである。が、その式は象徵的のもので、歌の心は、

ねむ氣よ、流れ去れよ！
元氣の葉よ、止りてあれ！

といふのであつた。それを濟ますと、若い者は皆その水の中へ飛び込んで、その翌年は怠

情は全く流し去つて、永く元氣な努力心を保たうといふその決心のしるしに、水を浴びたり泳いだりするのであつた。

が、然し七夕祭が其最も繪畫的な光景を示したのは多分エド（今の東京）でであつたらう。お祭りの續く二日——七月の六日と七日——の間、町は、歌が結び付けられて居る新しい竹が家家の屋根の上にたつので、大竹藪の觀を呈するのであつた。百姓は其日は竹で大儲けが出來たもので、祭日用にと幾百といふ荷車で竹を町へ持ち込んだ。江戸での此祭りの今一つの特色は、歌の結び付けてある竹を手に、町を持ち歩く子供の行列であつた。その竹一本一本にまた、七夕の星の名が漢字で書いてある赤塗りの札が結び付けてあつた。が、徳川の治世中は、殆んど到る處、この七夕祭はあらゆる階級の若い者に愉快な祭日で——日の出前に提燈を出して飾るのに始つて、ずつと翌晩まで續く祭日で——あつたものだ。その日は男の子も女の子も、一等いい著物を著て友人と婦人とへ式の訪問をした。

七月の月はタナバタヅキ即ち『七夕の月』と呼ばれてゐた。この月はまたフミツキ即ち『文の月』とも呼ばれてゐた。それは七月の間は到る處で、天つ空なる戀人をたたへて歌

を作つたからである。

我が讀者諸君は七夕傳說を取扱つて居る、日本の古歌の次記の選擇を見て興味を感ぜらるる筈だと思ふ。これ等は悉く『マンエフシウ』から採つたものである。『マンエフシウ』卽ち『萬の葉の集り』といふは八世紀の半ば前に作られた大歌集である。勅命に依つて編纂されたもので、九世紀の初めに完成された。その中にある歌の數は四千の上にのぼる。『長い歌』(ナガウタ)もあるが、大多數はタンカ卽ち三十一文字に限られて居る作品で、そして作者は廷臣か高官かであつた。つぎに飜譯する初めの十一の短歌は千百年以上も前に筑前の國の守(かみ)であつた山上憶良が作つたものである。その作のうちの少からずが希臘詩選中のより立派な奇警詩(エピグラム)の或る物と比肩するに足るから、氏の歌人としての名聲は頗る當然のものであつた。その幼兒フルビが死んだ折に物した、つぎの歌は例證とするに足るであらう。——

若ければ道行き知らじ賂(まひ)はせむ
下べ(した)の使負ひてとほらせ

それよりも八百年前にサアディイス生れの希臘詩人ディオドォラス・ゾォナスはかう書いて居る、――

この蘆の湖の水の上を、冥土指して死者の船を漕ぐなる汝ケエロンよ、キニラスの子が舷の梯子を登る時、汝が手を伸ばして受け迎へよや。穿てる草履はかの子を滑らしむべく、また岸の砂を肌足にて踏まんことは恐るれば。

然し、ディオドォラスのこの面白い奇警詩は――『キニラスの子』といふはアドニスに他ならぬのだから――ただ、神話に感じて作つたのである。然るに憶良の歌は父が子に對する思慕の情を我我に言ひ現はして居るのである。

七夕の傳説は實に、支那から借りたものではあるが、讀者は次記の作に何等支那らしいところを見出されぬであらう。いづれも外國の感化を受けてゐない昔の古典的な歌のその最も純なるものを代表して居るもので、千二百年前の日本人の生活と思想との情態について、幾多の暗示を我我に提供するものである。如何なる近代の歐洲文學もまだ形を具ふるに至らざる前に、書かれたものであることを想へば、その後の幾世紀の星霜の間に日本の文語がどんなに少ししか變化して居ないか、誰れしも非常に驚く。少しばかりの廢語と發

音の樣樣な一寸とした變化とを差引けば、今日の尋常な日本讀書人は、英國の讀書人がエリザベス朝の詩人を研究するに覺ゆると殆んど同じ位に、餘り困難を感ぜずにその自國の詩神のかういふ初期の作物を味ふことが出來るのである。その上、萬葉集の作品の典雅と簡素の妙趣とは、後の日本歌人は終にこれを凌駕し得ず、しかもこれと竝驅することも滅多に無かつたのである。

自分が飜譯した四十幾つの短歌に就いて云へば、その主たる興味は、思ふに、その作者の人間性を我我に渡す處に在つて存する。タナバタツメは今なほ頭が下る程に愛情の深い日本の人妻を我我に代表して居り、——ヒコボシは我我には神の光りは一向に放たず、支那の倫理的習慣がその拘束を生活竝びに文學に加ふるに至らない前の、六世紀若しくは七世紀の年若い日本の夫のやうに思はれる。それからまた此等の歌は、彼等が自然美に對する早くからの感情を表白して居るので、我我には興味がある。その歌に我等は日本の風景と、四季とが高天の蒼野に移されて居るのを見る。——急流がありまた淺瀨があり、石の多い河床の中に突然湧き上つて淙淙の音を立てたり、秋風に靡く水草が岸に生えたりして居る天の川は鴨川だと言つてもよいぐらゐ、——其岸にたゆたふ霧は嵐山の霧そのものである。木の釘の上で動くたつた一挺の櫂で推し進めるヒコボシの船はまだ廢れては居ない。

多くの田舍の渡船場で、風雨の夜はそれに乘つて渡つて、とタナバタツメが夫に願つたとキフネ――綱で河の上を曳つ張つて渡す幅の廣い淺い船――を今なほ諸君は見得るのである。そして少女と人妻とは、氣持ちのいい秋の日には、タナバタツメがその戀人たる夫の爲めに機を織つた如くに、田舍村のその門口で今なほ坐つて機を織つて居るのである。

　これ等の歌の多くのものに於て、妻の方が夫に會ひに天の川をまめまめしく渡るのでは無くて、夫の方が妻に會ひに川を漕ぎ渡るといふこと、また鳥の橋のことには少しも言ひ及んでないことが觀られるであらう。……自分の飜譯については、日本の詩句を飜譯するの困難を躬ら經驗して知つて居らるる讀者諸君は、最も寛容であらるることと自分は思ふ。

　自分は（アストンが採用した方法に從つて古風な綴音を示す方がよいと考へた一二の場合を除いて）羅馬字綴りを用ひた。そして必要上補充した語なり句なりは、括弧で括つて置いた。

天の川相向き立ちて我が戀ひし
　　君來ますなり紐解きまけな

〔この最後の句は非常に古い日本文學に記載されて居る面白い習慣を指して居る。戀人は、分れる前に、互の内側の帶（ヒモ）を結んで、つぎに會ふ時までその結びに手を觸れずに置くことを約束する習はしであつたのである。この歌は養老七年——紀元七百二十三年——今を去る千百八十二年前に作られたものだといふ〕

久方の天の川瀨に船うけて
今宵か君があがり來まさん

〔ヒサカタノは天（そら）の物に關して古の歌人が用ひた『枕詞』であつて、飜譯するのが困難なことが往往ある。アストン氏はヒサカタの文字通りの意味は——ヒサ（久しい）、カタ（堅い、堅固な）で——長く續くといふ意味での『久堅』に過ぎぬと考へて居る。だから、ヒサカタは『蒼空の』といふ意味になると言ふ。處が日本の註譯者は此言葉はヒ（日）、サス（射す）、カタ（方）の三語で出來て居ると言ふ。——この語源說から見るとヒサカタノを『光りを注ぐ』とか『光りを與へる』とかいふやうな言葉で飜譯することが正しいことになる。枕詞のことについてはアストンの日本文語文典を見られたい〕

風雲は二つの岸に通へども
　わが遠づまのことぞ通はぬ

[illegible]つぶてにも投げ越しつべき天の川
　隔てればかもあまたすべなき

秋風の吹きにし日よりいつしかと
　わが待ちこひし君ぞ來ませる

天の川いと川波は立たねども
　さもらひがたし近きこの瀨を

袖振らば見もかはしつべく近けれど
　渡るすべなし秋にしあらねば

二〇二五
かげろひのほのかに見えて別れなば
　もとなや戀ひん逢ふ時までは

彦星の妻迎舟漕ぎづらし
　天の川原に霧の立てるは

霞立つ天の川原に君待つと
　いかよふほどにものすそ濡れぬ

天の川水の波音騒ぐなり
　わが待つ君のふなですらしも

七夕の袖巻く宵のあかときは
　川瀬のたづは鳴かずともよし

天の川霧立ち渡るけふ〳〵と
　　我が待つ戀ひしふなですらし

天の川安の渡りに船うけて
　　わが立ち待つといも[原注六]につげこそ

おほそらよ通ふわれすらながゆゑに
　　天の川路のなづみてぞこし

八千矛の神の御世よりともしづま
　　人知りにけりつぎてし思へば

〔ヤチホコノカミ、これには他にも名が多くあるが、此神は出雲の大神で、普通にはオホクニヌシノカミ卽ち「大國主神」として知られて居る。地方ではまた結婚の神として崇められて居る――その爲めに此作者はかうこの神の名を持つて來たのであらう。ツマ（ヅマ）といふ語は、古代日本にあつては、妻とも夫とも意味した。だから、この歌は妻の思ひを叙べたものとも、或は夫の思ひを叙べたものとも解してよか

らう」

あめつちと別れし時ゆおのがつま
　　しかぞてにある秋[原注七]待つあれは

わが戀ふるにほのおもは今宵もか
　　あまの河原に石枕まく

天の川みこもりぐさの秋風に
　　なびかふ見れば時來るらし

わがせ[原注八]こにうらこひおれば天の川
　　よふね漕ぎとよむかぢのときこゆ

遠妻とたまくらかはし寢たる夜は

とりがねななき明けばあくとも

〔『玉枕を取り換はす』とは互の手を枕に用ひるといふ意味。この詩的な句は、よく最初の日本文學に用ひられて居る。玉（タマ）といふ語は『貴とい』、『親しい』とかいふ語と同意味に、よく複合詞に用ひられる〕

よろづよにたづさはり居てあひみども
　おもひすぐべき戀ならなくに

我が爲とたなばたつめのその宿に
　織れる白妙ぬいてきんかも

しら雲の五百重かくりて遠けども
　よひさらず見ん妹があたりは

秋されば川霧たてる天の川
　川に向き居て戀ふ夜ぞ多き

ひととせになぬかの夜のみ逢ふ人の
　戀もつきねばさよぞあけにける

年の戀今宵つくして明日よりは
　常のごとくや我が戀居らん

彥星とたなばたつめと今宵あふ
　天の川戸に波立つなゆめ

秋風の吹きただよはすしら雲は
　たなばたつめの天つひれかも

（日本の婦人服裝史に於て、時代を異にして、異つた衣裝品が此名で呼ばれて居た。此歌の場合では、云

ふところのヒレは、頸のまはりに着けて、肩の上から胸へと下して、其處で垂らしたまゝで置くか、又は或る飾り結(むすび)に結んだ白いスカアフであつたらしい。ヒレは、今日同じ目的に手巾を振るやう、それで合圖をするによく用ひた。——で、この歌に叙べてある問ひはかういふ意味らしく思はれる。『あれはタナバタが——自分を呼びに——その襟卷を振つて居るのではあるまいか』極くの昔には普通著る著物は白であつた〕

しばしばも相見ぬ君を天の川
　　船出はやせよ夜の更けぬまに

天の川霧立ち渡り彥星の
　　かぢのときこゆ夜の更け行けば

〔カヂといふ語は今は『舵』で——舳の上に乘せて、同時に舵の役も櫂の役もする一本の櫂(ヲオル)或は七挑(スカル)で、今、ロと呼んで居るもの。註釋家の說に據ると、天の川を橫ぎつて居る霧は星神の櫂の飛沫であるといふ〕

天の川かはとさやけし彦星の
　　はや漕ぐ舟の波の騒か

このゆふべ降り来る雨は彦星の
　　はや漕ぐ舟の櫂のちりかも

あすよりはわがたまどこを打掃ひ
　　君といねずてひとりかも寝ん

風吹きて川波立ちぬ引き舟に
　　渡りも来ませ夜の更けぬまに

天の川波は立つとも我が舟は
　　いざ漕ぎいでん夜の更けぬまに

いにしへに織りてし機をこのゆふべ
ころもにぬひて君待つあれを

天の川瀬を早みかもぬばたまの
夜は更けにつつあはぬ彦星

わたし守船早や渡せひととせに
再びかよふ君ならなくに

秋風の吹きにし日より天の川
川瀬にでたち待つと告げこそ

七夕のふなのりすらしまそかがみ
きよき月夜に雲立ち渡る

〔天平十年（紀元七百三十八年）七月の七日、天の川を眺めながら、かの有名な大友宿禰家持が作つたもの。三句目の枕詞（マソカガミ）は飜譯が出來ぬ〕

しかるに、日本の昔の歌人は星空に何の美をも認め得なかつた！と眞面目に主張され來たつて居る。……

恐らく如上の昔の歌人が了解して居たやうな、七夕傳說は西洋の人の心にはただ微かにしか訴へ得ないであらう。にも拘らず、澄み切つた靜寂の夜、月の昇る前に、この古い物語の妙趣が、熒熒たる空からして——科學の奇怪なる事實を、且つまた空間といふ途轍も無い怖ろしいものを自分に忘れさせに——自分へ下りて來る。すると自分はもはや天の川をば、その幾億萬の太陽も奈落を照す力を有たぬ彼の恐ろしく大きな宇宙の環とは思はずに、ただ、アマノガハそのものとして、——天つ川として眺める。自分にはその光つて居る川のおののきが見え、その川岸にたゆたふ霧が見え、秋風に靡く水草が見える。白い織姬がその星の機に坐つて居るのが見え、向うの岸に草を喰んで居る牛が見える。——そして自分は降る露は牽牛の櫂が散らす飛沫だと思つて居る。そして天が非常に近いものにまた暖かいものにまた人間味のあるものに思はれ、身のまはりの靜寂は——とこしへに戀ひ

慕ふまたとこしへに年の若い、そしてとこしへに神神の父性智に不滿足で居る――變ること無き、不死不滅の、或る戀の夢に充たされて居る。

原註一　アサガホ、文字通りでは「朝の顏」。英語で「モオニング・グロオリ」と呼ぶ美しい攀登植物の日本名。

原註二　これはその支那名を日本風に讀んだもの。

原註三　ところが近代のどんな地名簿にもそんな村の記載がない。

原註四　古書にはツブテはタブテとある。

原註五　カゲロヒはカゲロウの古語、陽炎。

原註六　日本古語ではイモは「妻」と「妹」と兩方を意味してゐた。「いとしの者」といふ語に譯してよからう。

原註七　古の暦では七月の七日は秋季。

原註八　古代の日本語ではセコといふ語は夫か兄を意味した。

化け物の歌

最近、ある古本屋を捜り廻つて居るうちに、化け物の繪が澤山入つて居る、三册本の化け物歌集を自分は見出した。その歌集の表題はキヤウカヒヤクモノガタリ即ち『ヒヤクモノガタリの狂歌』である。ヒヤクモノガタリ即ち『百物語』は幽靈物語の有名な本である。その物語の一つ一つの題に對して時を異にして種種な人が歌を——キヤウカ即ち『狂歌』といふ種類の歌を——作つた。そして自分が幸にしてその所有者となつた、その三册本を造るために、さういふ歌を集めて出版したのである。歌を集めることは工匠甚五郎といつて、テンメイラウジン（天明老人）といふ文學的匿名の下に筆を執つた或る人が爲したのである。工匠は文久元年（千八百六十一年）に、八十といふいい年齡で死んだ。そしてその人が集めたその歌は嘉永六年（千八百五十三年）に出版されたものらしい。挿繪は『涼齋閑人』といふ匿名の下で描いた、正澄といふ畫工がものしたものである。

前置きの短かい文から察すると、工匠甚五郎は、この世紀の半ば前に人が顧みなくなつ

た、嘗ては通俗であつた一種の歌に對する興味を復活せしめん希望を以て、此歌集を出版したものと見える。「キヤウカ」といふ語は「正氣ならぬ」とか「狂へる」とかいふ意味の漢字で書いてあつて、特別な異常な或る一種の滑稽な歌を意味して居る。その形式は三十一文字（五七五七七と列べた）の古典的短歌の形式である。が、題目はいつも古典的の正反對であつて、その藝術的效果は幾多の實例の助けを藉らずには、說明の出來ない言葉の上の手品の業に賴るのである。工匠が出版した歌集は西洋の讀者には、何等の價値も見出し得られないことを澤山に含んで居る。が、然し、その最善なものは、人をして物凄い問題をもてあそぶフッドの不氣味な器用さを思ひ出させる特に怪異な或る性質を有つて居る。その性質と、そしてふざけた事を怖ろしい事と交ぜるあの日本人獨特の手段とは、色色な狂歌の本文を、飜譯と註釋とを添へて、羅馬字で再現して始めて感づかせもまた解釋も出來るのである。

自分が爲した選擇は、それに就いて英語でまだ殆んど、或は全く、書かれて居ない一類の日本の歌を讀者に紹介することになるからばかりで無く、今なほその大部は穿鑿されずに居る一つの超自然界を少しく瞥見せしめるてあらうから、興味あらうと信ずる。極東の迷信と民間說話の知識無くしては、日本の小說或は戲曲、或は詩歌の眞の理解はいつまで

も可能とはなり得まい。

この『キヤウカヒヤクモノガタリ』の三册中には幾百と歌がある。が、幽靈と化け物との數は標題が思はせる一百に足りぬ。丁度九十五ある。自分はこの化け物の全部に我が讀者の興味を呼ぶ期待は有てまいから、自分の選擇は題目の七分の一にも足らぬ。『顏無し赤子』、『長舌少女』、『三ッ目坊主』、『枕動し』、『千頭』、『提燈持ち子僧』、『夜啼石』、『化物鷲』、『化物風』、『龍火』、『山姥』は大して自分を感心させなかつた。西洋人の神經には餘りに氣味の惡るい想像を取り扱つて居る狂歌、例へばオブメドリの狂歌の如きは、また單に地方的な傳說を取り扱つて居るものは、自分は省いた。選んだ題目は、國國の民間傳說よりも寧ろ國民的傳說の――(多くは漢土來のものであるが)嘗て廣く日本中に行はれて、屢〻その通俗文學に引用される古い信仰の――ものである。

一　キツネビ

英語のキル・オ・ザ・キスプをキツネビ(『狐火』)と呼ぶ。化け物狐がそれを造ると以前には想はれて居たからである。古の日本の繪では、暗い處をふらふらうろついて、そし

てそれが滑り行く表面に何の射光も投じない、上の尖つた淡紅い炎に畫いてある。

この題目についての次記の狂歌を了解するには、狐の魔力に就いての或る迷信が民間の奇妙な諺を造り出して居て、そのうちに他國者と結婚することに就いての諺が一つあることを知つて居なければならぬ。前には立派な市民はその地方の人と結婚するもので、その地方外の人とは結婚せぬものとされてゐた。だから、此點に關して敢て、傳統的慣習を無視せんとする者は、その地方的憤怒を鎭め宥めることを困難と思つたものだ。今日でも、長い間生れ故郷を留守にして居た後で、人の知らぬ嫁を連れて歸つて來る村人は、大抵は世間の者が不快なことを――例へば『ワカラナイモノヲヒッパッテキタ！……ドコノウマノホネダカ？』（『一體何んてものをあの男は引つぱつて來たのだ！何處であの古い馬の骨を拾ひ上げたんだか？』）とかいふやうな言葉を――語るを耳にする。ウマノホネ『古い馬の骨』といふ言葉は說明を要する。

化け物狐は色々な姿を採る力を有つて居るが、人間を騙す目的では、普通は美くしい女の形を採る。人の惚れ惚れするやうな、そんな妖怪を造り出さうと思ふと、古い馬の骨か牛の骨を拾ひ上げて、それを口に啣へる。すると軈てその骨が光つて來る。そして女の姿が――賣春婦か歌姫かの姿が――そのあたりに出來て來る。……だから、見も知らぬ妻を

娶る男についての『どんな古い馬の骨をあれは拾ひ上げたのか』といふ村人の質問は實際は、『どんな淫奔女があの男を魅したか』といふことになる。その上に、あの他國者は特殊部落かも知れぬといふ疑念がそれに含まれて居る。或る部類の遊女は、古昔から、主として特殊部落及び其他の非人階級の娘から補給され來たつたものだからである。

灯ともして狐の化けし遊び女は
　　いづこの馬の骨にやあるらん

〔アソビメ、賣淫婦。文字通りでは『遊ぶ女』、特殊部落と他の非人階級とが、そんな女の大部分を供給した。この歌の全體の意味はつぎの如くである。『提燈を持つて居るあの若い淫奔女を見い！見ては美くしい――然し狐も、その鬼火を燃やして娘の姿になると、見ては美くしい。狐の化けた女が古い馬の骨にほかならぬと丁度同じで、その美しさで人を騙して愚かなことをさせるあの若い娼婦も身は卑しい特殊部落のものかも知れぬ』〕

狐火の燃ゆるにつけてわがたまの
　　消ゆるやうなり心ほそ道

（夜遅くなつた旅人が狐火を見て恐れて歌つたものと假定しての作。最後の句は二通りに讀める。ココロホソイは『臆病な』といふ意味。それからホソイミチ（ホソミチ）は『細い道』といふ意味、だから『淋しい道』といふ意味が含まる）

二　リコンビヤウ

リコンビヤウといふ言葉は『亡靈』、『幽靈』、『妖怪』といふ意味のリコンといふ語と、『やまひ』、『病氣』といふ意味のビヤウといふ語から成つて居る。殆んど文字通りに譯すれば『幽靈やまひ』であらう。和英字書にはリコンビヤウの意味は『ヒポコンドリア』であると載せてあるであらう。そしてこの語をこの近代的意義に實際使用して居る。然し古昔の意味は軀の外の魂をつくる心のやまひであつて、この不氣味な病氣についての奇異な文獻がうんとある。支那でも日本でも、戀が起こした烈しい悲哀か熱望かの力によつて、それに惱まされて居る人の靈が、肉體外の魂を造ることがあると想像されて居たものである。だから、リコンビヤウに罹つて居る者は、丁度、同じな身體を二つ有つて居るやうに見えるのである。そしてその二つのうちの一つは家に殘つて居るのに、片方の一つが其家には居ない戀人に會ひに出て行くとされてゐた。多分、離魂や亡魂の原始的信仰は何かの

（自分の『異國情趣と懷古のことども』のうちに、『禪の一問』と題したこの問題を取扱つた典型的な支那物語――倩といふ少女の物語――があるのを讀者は見らるるであらう）

形式で世界到る處に存在するのであらう。然しこの極東の一種は、離魂は戀が起こすもの、その煩ひに罹るものは女だ、と想はれて居るから特別の興味がある。……リコンビヤウといふ言葉は、幽靈を造るとされて居るその心の病にも使用されて居るが、その幽靈にもまた使用されて居るやうである。『靈魂(ゴースト)の病氣(デジイズ)』を意味すると共に『身を離れての魂(ドッペルゲンガア)』を意味するものである。

必須な如上の說明があれば、次記の狂歌の味は了解が出來る。狂歌百物語に載つて居る或る繪には、自分の主人――『離魂病』に罹つて居る女――にお茶を一椀侑めようとして居る下女が描いてある。その下女には自分の前に見えて居る本來の姿と變化(へんげ)の姿との見分けがつかぬ。そこの困却が自分が飜譯した狂歌の初めに暗示されて居る。

こやそれとあやめもわかぬ離魂病
いづれをつまと引きぞわづらふ

二つ無きいのちながらもかけがへの
　からだの見ゆるかげのわづらひ

長旅のをとをしたひて身二つに
　なるは女のさるりこんびやう

見るかげもなきわづらひのりこんびやう
　おもひのほかに二つ見るかげ

（病氣で非常に痩せて居る人のことを日本人はミルカゲモナイ卽ち『その人の人眼に見える影さへ無い』と言ふ。同じ言葉を『見るに堪へぬ』といふ意味に使ふ事實からして、今一つの飜譯も可能である。卽ち『この魂の病を煩つて居るあの人の顏は見るに堪へぬが、（今一人の男を）慕ふその內心の戀慕のために、その女の顏が今二つ見られる』オモヒノホカといふ句は『期待に反して』といふ意味である。然し、心ひそかに思ひ慕ふといふ念をも暗示するやう巧に出來て居る）

離魂病人に隱して奧座敷
おもてへ出さぬかげのわづらひ

（四句目に妙な言葉の戲れがある。「前」といふ意味のオモテといふ語は、讀むをり、オモツテ卽ち思つてとやらに發音が出來る。だからしてこの文句はからもまた反譯してもよからう。『あの女は自分の本當の思ひは家の後ろに隱して置いて、決して家の表では見られぬやうにして居る――（戀の）「影の病」をわづらつて居るのだから』）

身は此處にたまは男に添ひ寢する
こころもしらが母が介抱

（四句目に、言ひ現してあるといふより、ほのめかしてある二重の意味がある。シラガ（『白髮』）はシラヌ（『知らぬ』）をほのめかせて居る）

たまくしげ二つのすがた見せぬるは
合せ鏡のかげのわづらひ

「この歌には飜譯の不可能な複雜な暗示がある。日本の女は化粧する時二つ鏡（アハセカガミ）を使用する。その一つは手鏡で、その姿の後ろの方の恰好を、それを大きい方の坐つて居る鏡に反映させて、見せる役をする。然しこの離魂病の場合では、大きな方の鏡に自分の顏と自分の頭の後ろとよりももつと多くのものを見る。卽ち自分の離れ出て居る魂を見る。この歌は、その二つ鏡の一つが影の病に罹つて二つになつたのかも知れぬといふことを述べて居る。それからまた、鏡とその持主の靈との間に在ると言はれて居る、心靈的關係をもほのめかせて居る」

三　オホガマ

古昔の支那及び日本文學では、蟾蜍は超自然的な能力を――例へば雲を呼ぶ力、雨を降らす力、極はめて美しい幻影を造り出す魔力のある霧を口から吐く力を――有つて居ると信ぜられて居る。心の善い――偉い人の友の――蟾蜍も居る。だから、日本の藝術では、『ガマセンニン』（蟾蜍仙人）といふ有名な仙人は普通は、その肩の上に止まらせたり、或はその横に蹲らせたりして居る一匹の白蟾蜍と一緒に現してある。心の惡るい化け物で、人間を死地に誘ふ爲めにいろんな幻影を造り出す蟾蜍も居る。この種の一匹に就いての典型的な物語が自分の著した『骨董』のうちに、『忠五郎の物語』といふ標題で載つて居る

眼は鏡口は盥の程にあく
　　蝦蟇もけしやうの物とこそ知れ

ハケシヤウといふ日本語が二つある。カナでは同じ字で同じ發音であるが、漢字では非常に異つて居る。カナで書いてあると、ケシヤウノモノといふ言葉は『化粧の物』といふ意味にもなり『化性のもの』『化け物』といふ意味にもなる」

四　シンキロウ

シンキロウといふ言葉は『ミラアジユ』の意味に用ひられて居り、また東洋の物語の神仙郷たる蓬萊の別名として用ひられて居る。日本の神話には蓬萊の蜃氣樓を造り出して、人間を迷はす力があると信じられて居るものが種種ある。古い繪に、蓬萊の幻影をつくる水氣を口から吐かうとして居る處を描いた蟾蜍を見ることがあらうが、特に常にこの幻像をつくる動物はハマグリ――英語でいふクラムによく似て居る日本の軟體動物――である。貝を開いて紫がかつた霧のやうな吐息を空へ送る。するとその霧が形を成して、眞珠貝の色味で、蓬萊と龍王の宮殿との光りある幻影になる

蛤の口あく時や蜃氣樓
世に知られけん龍の宮姫

蜃氣樓龍の都のひながたを
瀾干の沖に見する蛤

「ヒナガタは共に『雛形』、『微小な模型』、『圖を引いた圖案』等を意味する」

五　ロクロクビ

ロクロクビの語義は英語ではどう飜譯しても指示し難い。ロクロといふ言葉は廻轉する多くの物體を――滑車、萬力、絞車、旋盤、陶工の轆轤のやうに同じからぬ物體を――指示してどれにもこれにも、使用せられて居る。ロクロクビを『旋回する頸(ホワアリング　ネツク)』とか『旋轉する頸(ロテエチング　ネツク)』とか譯しては不滿足である。――といふのは、ろくろ頸といふ言葉が、日本人の心に思はせる觀念は、回轉してその上にまたその回轉の方向次第で伸びたり縮んだりする首といふ觀念だからである。……この言葉の妖怪的意味はといふと、ロクロクビは(1)頭がそ

の食べる物を探しに四方八方へうろつけるやうに、眠つて居る間にその頸が素敵に長く伸びる人間か、又は(2)その頸を身體から全く離して、後でその頸を身體へ繋ぐことの出來る人間かである。支那の神話では、頸が全く離れることが出來るやうに出來てる人間は、特殊の部類のものであるが、日本の民間傳説では、その區別がいつも保たれて居るのでは無い。ろくろ頸が有つて居るとされて居る惡るい癖の一つは、夜の燈の油を嘗めるといふ癖である。日本の繪ではろくろ頸は普通は女に描いてある。そして古い書物に、女は自分ではそれと知らずに――丁度、夢遊病者が、その事實を自分には氣付かずに、眠つて居る間に歩き廻るやうに――ろくろ頸になることがあると書いてある。……ろくろ頸についての次記の歌は狂歌百物語の中の二十首の一團から選んだのである。

〔この最後に記載した種類のろくろ頸については、自分の「怪談」の中に日本文から飜譯した珍らしい話がある〕

寢亂れの長き髪をば振分けて
　千尋にのばすろくろ頸かな

あたま無き化物なりとろくろ頸
　　見て驚かん己が姿を

束の間に梁をつたはるろくろ頸
　　けた／＼笑ふ顔のこわさよ

〔此作品中の二重の意味を悉く翻譯することは不可能である。ツカノマは「瞬時に」とか「早く」とかいふ意味である。然しまた「支柱〔ツカ〕の間の場處〔マ〕に」といふことも意味し得るのである。ケタは横梁を意味するが、ケタケタワラフは嘲るやうに盜笑、又は大笑することを意味する。幽靈はケタケタといふ聲音をして笑ふといはれて居る〕

六尺の屏風にのびるろくろ頸
　　見ては五尺の身をちゞめけり

〔大屏風の普通の丈は日本尺六尺である〕

雪女卽ち雪の化け物は種種な姿を採る。然し昔の民間說話の多くのものでは、美くしい變化になつて出て來て居て、それに抱かれると人は死ぬることになつて居る。

〔雪女に就いての頗る珍らしい話を讀者は自分の『怪談』の中に見出すことが出來る〕

ゆきをんなよそほふ櫛も厚氷
さす笄や氷なるらん

本來はくうなるものか雪をんな
よく〳〵見れば一物も無し

夜明ければ消えて行衞は白雪の
をんなと見しも柳なりけり

此處に用ひられて居る、シラユキといふ言葉は日本の詩人がケンヨウゲン（『二重の目的の語』）と呼んで居るものの一例である。直ぐつぎに來る語と結合して『雪と白い女』（シラユキノヲンナ）といふ句

を作る。――直ぐ前の語と一緒になつては『何處へ行つたか分らぬ』（ユクヘハシラ（ズ））と讀めることを思はせる）

雪女見てはやさしく松を折り
生竹（なま）ひしぐ力ありけり

寒けさにぞつとはすれど雪女
雪折の無き柳腰かな

（ゾットは文字通りに譯することの困難な語である。恐らく、これに一番近い英語の同意語は『身おののきのする』であらう。ゾットスルは『人を身戰きさす』或は『衝動を與へる』或は『戰慄さす』といふ意味である。そして非常に美くしい人のことを『ゾットスルホドノビジン』即ち『あの女はただ見ただけでも人をぴくつとさせる程に麗はしい』と云ふ。最後の句のヤナギゴシ（『柳腰』）といふ言葉はほつそりした、たをやかな姿を指すに普通使ふ言葉である。だから讀者は、この言葉の前半は――文脈で、雪の爲め重もく垂れて居る柳の枝の優しさ計りで無く、その上に寒くはあつても立ち停つて歎賞せずには居れぬ、人間の姿の優しさをも暗示して――この歌では巧に二重の役をするやうになつて居ることを見らるるであ

らう」

七　フナユウレイ

溺死した者の靈魂は、手桶叉は柄杓（ヒシヤク）を呉れと云つて、船の後を追ふといふ。手桶叉は柄杓を拒絶するのは危險である。が、然しその要求に應ずる前に、その道具の底を打(たた)きのけねばならず、またさうする處をその幽靈に見せてはならぬのである。壞さない手桶叉は柄杓を幽靈に投げてやると、船に水を充たせて沈めるのにそれを使ふ。かういふ妖怪を普通フナユウレイ（『船幽靈』）と呼ぶ。

平家の侍のうち千百八十五年、壇ノ浦の大海戰で死んだものの幽靈は、フナユウレイのうちでも有名である。平家の大將の一人平知盛は、この氣味惡るい役を演じて著名である。古い繪には、部下のつはものの幽靈を從へて、過ぎ行く船を襲はんと波の上を走つて居る姿が描いてある。或る時、義經の有名な家來、辨慶が乘つて居た船を脅やかした。が、辨慶は數珠を用ひてやつと船を救ふことが出來た。數珠の功力がその妖怪を嚇かして追ひ去つたのである。……

知盛は、船の錨を背に負うて、海の上を歩いて居る樣に屢〻畫かれて居る　彼とその供

の幽靈はその特に管轄して居る領土――下ノ關附近――に無分別にも碇泊する船の錨をいつも拔いて逃げたといふことである。

襟もとへ水かけらるゝ心地せり
　　柄杓借せてふ船の聲音に

幽靈に貸す柄杓よりいち早く
　　おのれが腰も拔けし船長

辨慶の數珠のくりきに知盛の
　　姿も浮む船の幽靈

幽靈は黃なる泉の人ながら
　　靑うなばらになどて出づらん

（死者の下界――ヨミ卽ちクワウセン――を「黃泉」といふ。この名は漢字二つから成つて居て、一つは

『黄な』を意味し一つは『泉』を意味する。太洋といふ極く古い言葉は、これは屢々神道の或る文に見えるが、『青海原』である」

その姿碇を負うてつきまとふ
　　　船のへささや知盛の靈

〔終りの二句には譯の出來ない言葉の戯れがある〕

罪深き海に沈みし幽靈の
　　　浮まんとてや船に縋れる

〔此歌には前記の譯語が思はせるよりも、もつと意味があるのである。四句目のウカマンといふ語は、ウカムといふ動詞が二つあるのだから、『多分浮ぶであらう』とも、また『多分　救濟といふ佛教的意味で）助かるであらう』とも譯すことが出來る。昔の迷信に據ると、溺死したものの靈魂は自分が生者を誘惑して死なせる時までは、いつまでも水中に住つて居なければならぬ。溺死した者の幽靈がうまく誰れかを溺死さすと再生することが出來、永久に海を去ることが出來る。この歌の幽靈の叫びは實際は『今多分誰れかを溺死さすことが出來よう』といふ意味である、　これと餘程似寄つた迷信が、ブレトン海岸に在つた

といふことである」しつこく又、近く人の後へ跟いて來たがる子供や大人のことを、カハデシンダユウレイノヤウニツレヲホシガル（「溺死した人の幽靈のやうに何處へでも跟いて行きたがる」）と普通日本語で言ふ」

浮まんと船を慕へる幽靈は
　　沈みし人のおもひなるらん

（この歌ではその種種な言葉の戲れを譯さうにも譯されぬ。が、オモヒといふ語は説明を要する。それは「思」を意味するが、俗語の使ひ方では、死にかかつて居る人の最後の復讐の願望といふことの婉曲な言ひ方に屢〻用ひられて居る。種種な戲曲でそれを「復讐しようとする魂」といふ意に用ひ來たつて居る。例へば死んだ或る人のことを指して「あれの思が歸つて來た」といふ叫びは、實は「恨んで居るあれの幽靈が見える」といふ意味である」

怨めしき姿は淒き幽靈の
　　かぢを邪魔する船のとももり

（最後の句のトモモリといふ名を用ひて、二重の意味が現してある。トモは船の「艫」の意味、モリは

『漏る』の意味である。だから、此歌は知盛の幽靈は船の舵の邪魔するだけでは無く、船を漏らすといふ意味を仄めかして居る」

落入りてうをの餌食となりにけん
　　船幽靈もなまくさき風

（ナマクサキカゼは『生な惡臭』ノある風といふ意味であるが、餌の臭ひが此歌の二句目で仄めかされて居る。此場合文字通りの飜譯は出來ぬ。此作品の技巧は全然暗示的であるから。

八　ヘイケガニ

讀者は自分の『骨董』のうちに平家蟹といふ、その甲の上に怒りの顏の輪廓に似て居る種種な皺のある蟹についての一文を見ることが出來る。下ノ關ではこの珍らしい動物の乾したのを賣りに出して居る。……平家蟹は壇ノ浦で死んだ平家の侍の怨みの靈の變化であると云はれて居る。

汐干には勢揃して平家蟹
　　浮世の樣を横ににらみつ

〔此歌の初句の三つ目の綴音ヒは「干潮」の意味のヒと、「干て居る濱」の意味のヒカタの役を勤めて居る。セイゾロヒは、羅馬時代の言葉のアキエスの意味での、「合戦整列」を意味する名詞である。……で、セイゾロヒシテは「合戦整列に並んで」の意味〕

西海に沈みぬれども平家蟹
　甲羅の色もやはり赤旗

〔ヘイケ即ち平家の旗は赤かつた。その敵ゲンジ即ち源家の旗は白かつた〕

まけいくさ無念と胸にはさみける
　顔もまつかになる平家蟹

味方みなおしつぶされし平家蟹
　遺恨を胸にはさみもちけり

〔五句目のハサミといふ語の使用は、兼用語の頗るいい見本である。蟹の抓或は鋏刀を意味するハサミといふ名詞があり、際まうとか・抱くとか、懐くとかいふ意味のハサムといふ動詞がある。　イコンナイダ

クは『相手の人に對して遺恨の念を抱く』といふ意味である）此語をその後に來る語とだけつなげて讀むと、ハサミモチケリ卽ち「抓を有つた」といふ句になり、前の語と一緒に讀むと、イコンヲムネニハサミ卽ち『遺恨をその胸に抱く』といふ言ひ現しになる」

九　ヤナリ

ヤナリといふ語の――それは地震中、家屋の震動する音を意味するとだけ我我に語つて――その薄氣味惡るい意義を近時の字書は無視して居る。しかし此語はもと化け物が動かす家の震動の音を意味して居たもので、眼には見えぬ、その震動者も亦ヤナリと呼んで居たのである。判然たる原因無くして或る家が夜中震ひ軋り唸ると、超自然な惡心が外から搖り動かすのだと想像してゐたものである。

床の間に活けし立ち木も倒れけり
やなりに山の動く掛物

（日本の部屋のトコノマといふは裝飾的な、壁の引込（リセス）又は凹み間（アルコウ）といつたやうなもので、其處へ普通には掛物を掛け、花を活けた瓶とか盆栽とかを置く

十　サカサバシラ

サカサバシラといふ（次記の狂歌では唯ゞサカバシラと約めてある）言葉は文字通りては『逆さな柱』を意味する。木の柱は、殊に家の柱は、それを伐つた木の元の位置にして――言ひ換へれば、根に近い方を下にして建てなければならぬのである。家の柱を逆さに立てることは不吉だと考へられて居る。――古昔はそんな失錯は、『逆さ』柱は有害な事をしようとするものであるから、妖異な不快な結果を惹起すものと信じられて居た。夜は唸つたり呻いたりし、その裂け目凡てを口のやうに動かし、その節瘤凡てを眼のやうに開く。その上、その魂は（家の柱は悉く魂を有つて居るから）その木材から、その長い軀を外づして、頭を下にし、顰め面で人を見ながら部屋部屋をうろつきあるく。それだけでは無かつた。サカサバシラは家中の事の凡てを狂はせることを――家庭の爭ひを釀すことを――家の人や召使に不幸をたくらむことを――大工の過失を見付けて直す時までは生きて行くことが殆んど堪へられないやうにすることを――知つて居たのである。

さかばしら建てしは誰ぞや心にも
　　ふしある人のしわざなるらん

飛騨山を伐り來て建てしさかばしら
何んの工みのしわざなるらん

（タクミといふ語は、假名で書くと、『大工』といふ意味にもなり、また『陰謀』、『惡るい策略』、『惡るいたくらみ』といふ意味にもなる。だから、二た通りに讀むことが出來る。一つの讀み方では、柱はうつかり顚倒で逆さに建つたといふこと、も一つの讀み方では、惡意があつてさう建てたといふことである）

うへしたをちがへて建てし柱には
さかさま事のうれへあらなん

（サカサマゴトノウレヘは文字通りでは『逆さま事の憂』で　サカサマゴト卽ち『逆樣事』といふ言葉は不幸、矛盾、災難、當惑を意味して普通に使ふ言葉である）

壁に耳ありて聞けとかさかしまに
建てし柱にやなりする音

（カベニミミアリ（『壁に耳あり』）といふ諺を仄めかして居る。その諺は『他人の事た、內證にでも、言

ふ時言ひ方に氣を付けよ」といふ意味」

貸り家のあるじを訪へば音ありて
　　われめが口をあくさかばしら

(四句目には、自由譯にしても言ひ現せないことを暗示する洒落がある。ワレは場合次第で、「我れ」或は「我の」或は「その有つて居る」を意味するから、ワレ、メ（と別別に書くと）「そのものの限」ともなる。しかしワレメ（一語の）は裂け目、割れ目、或は龜裂を意味する。サカバシラは「逆柱」を意味する計りで無く、その上逆柱の化け物をも意味することを想起しなければならぬ)

思ひきやさかさばしらの柱掛
　　書きにし歌もやまひありとは

(「書札に書いてある歌さへ逆様である」――間違つて居る、といふのである。ハシラカケ（「柱に吊るすもの」）とは美しい材木の薄板で、字が書いてあるか、繪が描いてあるかして、装飾の爲め柱に吊るすものをいふ)

一一、バケヂザウ

子供の亡靈の救主たる地藏菩薩の像(かたち)は、日本佛教の中にあつて最も美しい、また最も人間味のあるものの一つてある。この佛の彫像は殆んど到る處の村落に、また到る處の路傍に見ることが出來る。が、地藏の彫像には――例へば姿を色々に扮して、夜間歩き廻ると云ふやうな――無氣味なことをするのがあると云はれて居る。さういふ地藏の彫像をバケヂザウと呼ぶ。變形をする地藏といふ意味である。傳統的な繪では、小さな男の子が――その立像が動いて徐ろに自分の方へ頭を屈めるとは思ひもかけずに――地藏の石像の前へいつもの餅の御供物を置かうとして居るところが畫いてある。

何氣なき石の地藏の姿さへ
　夜は恐ろしき御影とぞなる

〔花崗岩といふ日本語はミカゲである。そしてまた「御ん相(すがた)」とか「偉い樣子」とか何んとかいふ意味を有つて居て、神や天子に對して用ひる、ミカゲといふ尊稱もある。……文字通りではどう譯しても五句目の、後の方の、雙關の效果を暗示することは出來ぬ。カゲは「影」、「姿」、それから「力」――殊に不可思議な力を意味する。名や神の屬性に附けるミといふ尊稱の接頭語に英語ではオオガストと譯してよから

一二　ウミバウズ

卓の上へ、身を上に脚を下にして大きな章魚を載せて見給へ、——さうすると、ウミバウズが即ち『海の坊主』といふ空想を初めて思ひ付かせた怪異な實物が眼前にあることになる。この姿勢の下の方にぎろつとした眼を有つた、この大きな禿げた軀は坊主の剃髪した頭に歪みなりに似て居り、下に這うて居る脚（或る種類では黒い膜で繋がつて居る）は坊主の衣のひらひらする動搖を想はしめるからである。……海坊主は日本の化け物文學にまた古風な繪本に隨分と出て來る。天氣の惡るい時、餌食を捉へに、深い海から現れ出るのである。

板一重下は地獄にすみぞめの
　ばうずの海に出るぞあやしき

（洒落の説明が出來かねる。……アヤシイは『怪しい』、『驚く可き』、『超自然的』、『面妖な』、『疑はしい』といふ意味である。初めの二句に、フナイタイチマイシタハヂゴク（『船板ただ一枚の下は地獄』）とい

ふ佛教的俚諺が用ひてある。（この諺を引用して居る今一つの歌に就いては自分の『佛の畠の落穗』の第八章を見られたい）

一三　フダヘガシ

〔ヘガシは動詞ヘグ『剝ぐ』の使然形である。フダヘガシといふ言葉は『御札を剝がす化け物』を意味する。讀者は自分の『靈の日本』のうちにフダヘガシの立派な日本物語があるのを見られるであらう〕

家家は聖句や護符で惡靈が入らぬやうに護られて居る。日本のどんな村にも、或は町のどんな横丁にも、夜、戶が締つて居る時、そんな聖句を見ることが出來る。戶はトブクロへ推し入れてしまふから、日中は、それを見ることが出來ぬ。さういふ聖句はオフダ（御札）と呼ばれて居る。白い紙片に漢字で書いてあるもので、飯糊でそれを戶に貼るのである。それには種類が多い。經から――例へば『般若波羅密多心經』か『妙法蓮華經』から――選んだ聖句のもある。陀羅尼――あの魔力のある――からの聖句もある。その家の宗旨を示して居る、祈りの言葉だけのもある。……この外に、種種な小さな聖句や小さな版畫が窓や隙間の上に、或は橫に貼つてあるを見ることが出來る――その或るものは、神道

の神の名であり、或るものは象徵的な印畫だけか、又は佛や菩薩の繪である。凡て皆な神聖な護符――オフダ――である。何れもその家を護つて呉れるもので、かく守護されて居る家へは、その御札を除かなければ、化け物も幽靈も夜中、入ることが出來ぬのである。執念を有つた幽靈は自分では御札を剝がすことが出來ぬ。が、嚇かしたり約束事をしたり、賄賂を使つたりして、誰れか人にそれを取り除かせようとつとめる。で、戶から御札を剝がして貰ひたがる幽靈をフダヘガシと呼ぶのである。

へがさんと六字の札を幽靈も
　なんまいだあと數へてぞ見る

（兩句目はつぎのやう二樣に讀める。
ナンマイダア――『何枚だ？』
ナム（アム）アイダア――『南無阿彌陀！』
南無阿彌陀佛といふ呼びかけの祈願は、眞宗といふ大宗旨の信者が主として唱へるが、他宗の人も、殊に死者に祈りを捧げる時に、これを唱へる。それを唱へる間、祈つて居る人は數珠で祈りの數を數へる。この習慣がカゾヘテ（『數へて』）の語を用ひて仄めかしてある）

ただいちのかみの御札はさすがにも
のりけなくともへがしかねけり

一四　フルツバキ

昔の日本人には、昔の希臘人同樣、花の精があり、樹の精(ハマドライアッド)があつて、それに關した面白い說話がある。また惡意を有つたものが棲つて居る木を——化け物木を——信じて居つた。不氣味な木多くあるが中に、あの美しいツバキ（學名カメリア・ジヤポニカ）は不吉な木だとされて居た。少くとも赤花の種類のは、さうとされてゐた。尤も白花のは評判がよくて珍物として尊重されてゐたものである。その大きな厚ぼつたい深紅の花には、こんな妙な癖がある。色が褪せ始めると、身ごと莖から離れて、どたと耳にきこえる音を立てて落ちる。昔の日本人の想像(こころ)には、この重い赤花が落ちるのは、刀で斬られて、人間の首が落ちるやうに思はれた。そしてその落ちる鈍音は、斬られた首が地を打つ時のどたといふ音のやうだと言はれてゐた。それにも拘らず、椿はそのつやつやした葉が美しいが爲めに、日本の庭には好んで植ゑられたやうであり、またその花は床の飾りに使はれて居た。

然しサムラヒの家では軍の間は決して椿を床花に使はぬが規則であつた。

讀者は次記の狂歌に於て――これは奇怪な點に於ては、集中一番のものゝやう自分には思へるが――化け椿がフルツバキ卽ち「古椿」と呼ばれて居るに氣が付くであらう。若木は化け物癖は無いもの――そんな癖は數年經つて始めて發達するもの――と想はれて居た。他の氣味の惡るい木――例へば柳や榎の如き――もまた年經てから始めて危險になると言はれて居た。それと似た信仰が氣味の惡るい動物――子猫の時には無邪氣であるが、年とると魔物になる猫の如き――について行はれて居たものである。

夜嵐に血しほいただく古椿
　ほたほた落ちる花の生首

〔三句目のフルといふ語は――フル（イ）卽ち「古」といふ形容詞として又フル卽ち「振る」といふ動詞として――二重の勤めを爲せられて居る。ナマクビ（文字通りでは「生な首」）といふ言葉は、斬つたばかりの、血がまだ滲んで居る人間の首を意味する〕

草も木も眠れる頃の小夜風に
　眼鼻のうごく古椿かな

〔二つの日本語がメといふ假名で書ける。一つは『芽』の意味、一つは『眼』の意味である。ハナといふ綴音も同樣に『花』にもなり『鼻』にもなる。奇怪なものとしては、此歌は確かに成功して居る〕

ともしびの影あやしげに見えぬるは
　　油しぼりし古椿かも

〔アヤシゲはアヤシ卽ち『怪しい』、『不思議な』、『超自然的な』、『疑はしい』といふ形容詞から造つた名詞である。カゲといふ語は『光』と『影』と兩方の意味で——此處では二重の暗示に用ひられて居る。古への日本の燈に用ひた植物性の油は、椿の實から採つたものであつた。讀者は『古椿』といふ言葉は——椿は古くなると化け物の木になると想像されて居るから——『化け椿』といふのと同じだと記憶してゐなければならぬ〕

上記の狂歌を詠ましめた說話、及び民間信仰の殆んど凡ては支那から來たもののやうに思はれる。そして木の精の日本物語も大部分は、その根本を支那に有つて居るやうである。東洋の花の精また木の精は、まだ西洋の讀者には少ししか知られてゐないから、次記の支

那物語は或は興味あるものと思はれるかも知れぬ。

日本の書物では唐の武三思と呼ばれて居る　花が好きなので有名な——支那の學者があつた。殊に牡丹が好きで、極はめて巧みに、また根氣よくそれを栽培した。

〔ピオニイは此處では——日本で大いに尊む花の——牡丹をいふ。八世紀の頃、支那から輸入されたといふことで、五百を下らざる變種が今日本の庭園師によつて栽培されて居る〕

或る日のこと眉目頗る美はしい少女が武三思の家へ來て、使つて異れと賴んだ。譯があつて賤しい勤めを求めなければならぬやうになつたのであるが、文學教育を受けた身であるから、出來るなら學者の家に傭はれたいのであると言ふのであつた。武三思はその美くしさに惚れて、それ以上何も問ひ糺しもせずに自分の家へ入れた。使つて見るとただ善良な召使といふだけでは無く、その藝能を思つて見ると、貴紳の邸宅か或はまた王侯の宮殿で育つて來た者ではなからうか、と武三思に思はれる程であつた。禮儀作法は申し分無く知つて居り、位最も高い貴婦人だけが教はるやうな、優雅な藝事を心得て居て、書にも縮にもあらゆる種類の詩歌を作ることにも驚くばかりに巧みであつた。武三思はやがて、その女を戀ひするやうになり、どうしたらその女は喜ぶかと、それぱかり考へた。學問友達

や他のえらい訪問客がその家へ來ると、その客をもてなさせにいつも、この新參の召使を呼ぶのであつたが、その姿を見たものは何れも、皆その溫雅と愛敬とに非常に驚いた。

或る日武三思は有名な道德教師の、狄仁傑といふえらい人の訪問を受けた。ところが、その召使は主人の呼ぶのに應じなかつた。武三思は、狄仁傑に見せて感心させようと思つて、自分で探しに行つた。が、何處にも居なかつた。家中搜しても居なかつたので、武三思は客間へ戻るといふと、廊下をその前を音も無しにするすると通つて行く、その召使の姿が不意に見えた。そこでその名を呼んで後を追うて出た。するとその召使は半ば振り返つて、蜘蛛のやうに壁へ身を平たくつつけた。そして武三思が其處へ行くと、後ろへ壁の中へと沒して行つて、――壁土の上へ描いた繪のやうに平らに――色の附いて居る影のほか、眼に見えるものは何も殘つて居なかつた。だが、その影が脣と眼とを動かして、小聲でかう言つた。

『御召しに從ひませんで誠に申し譯がありません。……私は人間では無いので御座います。――私は牡丹の魂で御座います。あなたが牡丹をあんなにも可愛がつて下さいましたから、それで人間の形になつて、あなたにお仕へ申すことが出來ました。ところが、今あの狄仁傑が參りました――あの人は恐ろしく禮儀正しい人で御座いまして――私はもうこ

の姿をして居ることが出來ません。……私は私の出て來た元の處へ歸らなければなりません』

さう言つて壁の中へ沈み込んで、全く消えてしまつた。その居た處にはありのままの壁土のほか、何も無かつた。そして武三思はその召使の姿を二度と見なかつた。

この話は日本人が『開天遺事』と呼んで居る支那の書物に載つて居る。

究極の問題

ずつと前の或る記憶である。……雲無き眞午(ひる)の光りを浴びて居る御影石の建物の間の、鐵のやうに鏗鏗響く御影石の鋪道を自分は歩いて居る。物の影は短かくて鋭い。その輝かしい暑い空氣はそよとも動かぬ。そしてその街路での物の音は、妙に高い自分の跫音だけである。……不意に或る變な感じが――物すべてが虚妄だといふ感じ、卽ち疑ひが――痿かせる衝動といつたやうな風に、自分を襲ふ。鋪道、巨大な切石、鐵柵、眼に見ゆるもの凡て、夢て！ある。光、色、形、重さ、堅さは――感覺に訴へ得る存在物の凡ては――ただ、實在の幻影である。それに對して人間の國語が何等の語をも有たぬ一つの無限な靈性の表現に過ぎぬ。……

この經驗は、『綜合哲學』――その讀みやうを或る亞米利加の友人が自分に敎へたのであつたが――の第一卷を研究して起きて來たのであつた。自分はあれが容易には讀めなかつた。それは一つには自分が思索が遲いからでもあるが、主として自分の心がこんな方面

に努力を續けて行く、訓練をそれまで蒙つて居なかつたからであつた。『第一原理』を學ぶのに幾月もかかつた。あの叢書のうちの書卷て、これと同じほど骨の折れたのは他に無い。自分は一度に一節――稀に二節――を讀むことにして、前節が確かと解つたと思ふまでは、新規な節を讀むことを敢て爲なかつた。自分の進行は、暗がりにある長く幾つも續いて居る梯子を初めて登る人の進行のやうに、甚だ用心深く又甚だ遲かつた。終に光明に達すると、自分は事物に對する不意な新規な視方を得た――物の表面の虛妄を瞬時看ることが出來た。そして其時からしてこの世界が、自分にはもう二度と、それまでと全く同じものとは見えなくなつた。

二十年以上も前のこの記憶と、その時の異常な身戰きとが、世界最大の思索家が我等に遺した最後の、そして前のに劣らず貴重な一冊の中にある『究極の問題』といふ論文を讀んで最近また自分に復活して來た。生死の謎は一生の知的勞苦の夕暮れに、その巨大な心へ自づと浮かんで來たのであつて、その謎に就いての氏の最後の發言が、其論文に收められて居る。確かに氏の我我に語らんとする處のものの實質は、或はその『綜合哲學』から推知し得たのかも知れぬ。が、あらゆる深い思索家の心を惱ます問題に關する個人的觀念

を著者が述べて居る處に、この最後の論文の特殊の興味が存して居る。恐らくは我我のうちで、氏の純乎として科學的な態度に滿足したままで居れたものは少なからう。『意識といふ形の下に我我に湧き出づる』力と、萬物を形成するあの知り得べからざる力とは同一不二であるとの氏の言明を十分に受け入れて居ながらも、この師の多くの門弟は、直接氏に向つて『だが、人の身は死ぬると分解して無くなるといふ前途を思つて、あなたはどう御感じになりますか』と質問する或る機會を渴望したに相違無い。ところが、この全く感情的な質問に對して氏は、我我の如何なるものが願ひ得た通り、率直に且つ十分に――恐らくは、より以上に率直にすら――答へて居る。氏は辯解的に斯く述べて居る。『年のいつた人達は共通の多くの回想を有つて居るに相違無い。自分が今心に有つて居る一回想は疑ひも無く頗る有りふれたものである。過去幾年間、春、花の蕾が開いて行くのを看て居る時、こんな考へが起こつた、「自分は花の蕾の開くのを二度と、また見るであらうか。自分は未明に鶫の囀りに目覺さるること亦二度と、またあるであらうか」と。最後は長く延期されさうでは無いから、從つて究極の問題を默想する傾向が次第に募つて來る』……それから氏は、『如何にしてかと何が故にかとの、また何處よりしてかと何處へかとの』此究極の問題は、基督教の信條を受け入れることの出來ぬ人達の心には、當時の思想が大

多數の人の心を占めて居るよりも、もつと廣い容積を占めて居る、と、から我我に語つて居る。生の問題は絶大なものであるといふ事は、嚴正科學が提供し得る一切の幇助を思索に與へて、自由に且つ廣く、且つ深く思索してもいいとして居る人達だけに明白になるので、其思索家の知識が大きければ大きいほど、此問題は愈々差し迫つたものに思はれ、恐ろしいものに思はれ、愈々絶望的に解答不可能なものに思へるのである。ハアバアト・スペンサア自らにはこの問題は、尋常人の心が理解出來ないほどの巨大なものであつたに相違無い。そして死期が近づくに從つて、愈々刻薄に氏を壓して氣掛りを大ならしめたのである。氏は――これはその壯大な心理學にも、其大著作の他の書卷にも、明らかに仄めかしてあるが――死後、意識ある個性が繼續するといふ如何なる信仰に對しても、何等合理な證據が存在して居ないといふ確信を避けることが出來なかつた。

　原始的信仰を研究して、そして夢が思はす考へからして、覺めると歸つて來て、死ぬると不定の時間の間去つて行く、漂泊する離魂について野蠻人が得て居る結論のほかには、後生といふ觀念には何等の根源が無いことを發見してからは――頭腦と意識との間に存する、測り得べからざる關係を熟考して、そして頭腦の活動無くして意識の存在する證據はこれを得ることは出來ぬといふことを發見してからは、物質組織が不活動にな

つた後に、なほ、意識が繼續するといふ思想は、我等はこれを放棄せざるを得ざるやうに思はれる。

この整齊たる發言のうちには、希望の語は一つもない。しかし、これを發展せんと欲する人は發展せしめて、一縷の希望の種にされようかと思へる、非常に用心して述べてある疑ひが一つ少くとも氏の發言のうちにある。『放棄せざるを得ざるやうに思はれる』といふ用心した文句は、人智の現在の情態では意識の繼續を信ずべき、何等の理由も無いけれども、未來のより大なる或る知識は、それ程に覺束無くは無い前途の望みを抱かしめて吳れるかも知れぬ、といふことを確かに暗示して居る。が、今の今、我等に見えて居る前途には、さすが思索家中のこの最大思索家も二の足を踏んだ。

……死んで意識が無くなると同時に、生存してゐたといふことを知つて居る、といふことが無くなつてしまふといふことは、奇妙なまた嫌はしい結論のやうに思はれる。自分の末期の一呼吸と共に、誰れもに取つて、自分がこの世に生きて居なかつたのと同じ事になる、といふのだから。

それからまた、その意識そのものは――それが繼續して居る時間中、それは果して何んであるか。そして、終はる時、それはどうなるか。意識といふは、我我の知識をも我

我の想像をも超絶して居る處の、あの無限永久のエネルギイの分化された、そして個個にされた一個の形であるといふ事、そして死ぬると其要素は、其要素が出て來たつた、その無限永久のエネルギイへ逆戻りするといふ事、それを推定し得るのみである。

自分の末期の一呼吸と共に、誰れもに取つて、自分がこの世に生きて居なかつたのと同じ事になる、さうであらうか？恐らくは、その個人にはさうであらう――その個人の勞力によつて一層賢しくなり、一層よくなつた人類には、確かにさうでは無い。……然し、この世界は去つてしまふに相違無い。去つた後でこの世界は宇宙に對して、人類が住つて居なかつたと同じことてあらうか。このことは、惑星相互間の未來の交通の可能如何によるかも知れぬ。……しかし幾多の太陽、幾多の惑星より成るこの宇宙全體も亦、死滅しなければならぬのである。死滅した後で宇宙全體は、理知ある生物が、その無數の世界の上で勞したり、苦しんだりしたことが無かつたと同じことであらうか。我我は少くとも、生のエネルギイは絶滅出來ないものであるといふ確信を抱いて居り、且つまた、そのエネルギイがまだこれからして開展さるべき幾多の宇宙に於て、別な生と別な思想とを構成する役に立つてあらう、といふ鞏固な蓋然信念を抱いて居る。……がしかし、想像の上のあらゆ

る可能を先づあるものとして置いて——過去のあらゆる因果律に由る存在物と未來のあらゆる因果律に由る存在物との間に、或る理解し得べからざる關係がありさうだといふことをも許容して——この幻の如き生の全體が因果律を超越して居るものに對して、何を意味するかといふ、大きな恐ろしい問題が殘つて居る。稻妻の明滅が夜に何等の記錄を殘さぬが如くに、その闇黑に幾十百千萬億の宇宙が來ては去つて、しかも、存在して居たといふ何等の痕跡も殘さぬかも知れぬ。

この問題のあらゆる方面に、ハアバアト・スペンサアは思索を與へたに相違無い。が、現在構成されて居る處の人間の智力は、これに何等の解答を提供することは出來ぬ、と明白に公言して居る。この世界がこれまでに產出したうちで、一番大きな心が——人間のあらゆる知識を組織的に排列した、近代科學に革命を與へた、唯物論を永久に追ひ拂つた、あらゆる生の靈的渾一を我等に示現した、あらゆる倫理を永遠不易な根柢の上に立て直した心が——一蚊蚋の歷史、或は一太陽の歷史を、同じ明快さを以て、しかも、同じ普遍的な法式によつて解釋し得た心が、生の謎の前へ出ては、殆んど子供の心に劣らぬ手緣りないものであることを自白した。

が然し、自分にとつては、氏のこの最後の論文の價値は、多くの不確實と多くの蓋然と

のその悲壯な叙述のうちに、信念の言明に類る類せる或る物を誰れも見分けることが出來るといふ事實に存して居る。我我には、頭腦が死んだ後、意識が持續するといふ如何なる信念をも抱くべき根據は、まだ一つも無いと確信しては居るけれども、意識なるものの究極の性質は、依然として測り知ることは出來ぬ、といふことを記憶せよと命ぜられて居る。意識と得見られぬものとの關係は、我我には推測が出來ないけれども、意識といふものは無限なエネルギイの一表現として考へなければならぬこと、また、その要素は、死によつて分解すると、時間の無い、そして量の無い生の根源へ還るのであらうといふこと、を我等は思はせられる。……今日の科學もまた、如何なる物でも存在して居たものは悉く——いつか動物となり、或は植物となつて動いて居た個個の生は悉く——いつか人間の意識の中で動いて居た感情と思想とは悉く——感覺界を越えて、自己記錄を閃めかせたに相違無いと我我に保證して居る。そして、我我はこれを知ることは出來ぬけれども、かかる記錄の最善のものは、永存性を有つやう運命づけられて居るかも知れぬと、想像せざるを得ぬのである。この後の方の題目に就いては、色々と明白な理由があつて、ハアバアト・スペンサアは長く無言のままで居た。しかし、讀者は『第一原理』の最終の第六版の中の、或る顯著な一節——意識は宇宙エエテルのものかも知れぬといふ假說を論じて居らるる一節

――を深く考察してよからう。この假說は、氏は輕輕にこれを片付けては居ない。そして、その不妥當なることを證明しながらも、まだ、人間の心では理解の出來ぬ或る眞理を、不完全に現して居るのかも知れぬ、と告げて居るやうである。――から書いてある、

意識が本來具へて居るものは、萬有に滲み亘つて居るエエテルであるといふ假定が、矛盾を有たぬ唯一の假定である。この物は――網膜に於ける光線の作用が證明する如く、――運動をして居る物質の分子に影響され得るもので、そして逆にまた分子の運動に影響を與へ得るものであるといふことを、我我は知つて居る。この假定を追うて行くと、空間凡てに滲み亘つて居る計りで無く、物質凡てに滲み亘つて居るこのエエテルは、神經系の或る部分に於て特殊の事情の下に、感情といふものを將來するやうな工合に、神經的變化によつて影響され得るものであつて、且つまた交換的に、さういふ事情の下に神經的變化に影響を與へ得るものである、と假定することが出來よう。然し、若し我我が、この說明を受け入れるならば、感情の潛在勢力は普遍なものであること、また、感情がこのエエテルの中に開展發達して來るといふ事は、或る神經中心に起こる極はめて複雜な事情の下にあつて、始めて出來するものであるといふことを、假定しなければならぬ。が然しこれは、このエエテルは何んであるかを知らぬのであるから、且つ又、最

もよく判斷の出來得る人達の自白によれば、これまで造られた假說のうちで、エエテルが有つて居る力悉くを說明する假說は、一つも無いといふことであるから、說明に似たものといふに過ぎぬ。斯の如き說明は、この現象を性質の知れない記號を以て、記號づけるだけのことで、それ以上のことはしないのだと云つてもいい。(『第一原理』、千九百年の確定版七十一章)

幼稚な空虛からして、徐徐に開展進化し來たつたこの複雜な意識は――他の形に於て、生きて居る物共によつて、廣く表現されて居る意識なるものは　如何なる生物でもその發達發育中、無意識な物質と見えるものから現れ出づる處の、そして、意識なるものは或る初步の形に於て遍在なものではなからうかといふ考へを起こさせる處の、この意識なるものは――實に測り知ることの出來ぬものである。(『自傳』第一卷四百七十頁)

あらゆる近代の思索家の中で、スペンサアは恐らく、有力な證據が支へて居ない假說は、どんな假說もこれに獎勵を與へることを避けるのに、最も用心深い思索家であつた　氏自らの信條の簡單な總額すらも、三つの蓋然の陳述として、至當の差し控へを以てして、漸

く發言して居る。卽ち、無限のエネルギイの分化され、個性化された一つの形が意識であるといふ事、意識は死によつて分解して消える事、意識の要素は死後萬有の根源へ還つて行く事、これである。此無限の神祕に對する我我の心的態度に就いては、氏の助言は平明である。我我はこの永遠の大法に身を任せて、「知られざる或る力が仕出かす、この宇宙の過程は無慈悲ではあるが、しかも、そのうちに何處にも報復といふことは見出されぬ」といふことを記憶してゐて、我我が古昔から承け來たつて居る、迷信的恐怖の遺產を征服するに努めなければならぬ、といふのである。（『事實と註釋』二百〇一頁）

同じその短かい論文のうちに、今一つ殊に興味ある自白がある、――卽ち、空間の恐怖を認知して居る文である。尋常普通の心にすらも、これを理解するのに眞面目な硏究は少しも要らないあの天文學上の驚くべき事實が、我我に思はざるを得ざらしめる處の無限の空間といふ念は、實に人を慄然たらしめるものである。――幾百萬の太陽の赫赫たる光りも、それへ何の光りも何の暖か味も、齎らさぬあの永久の夜といふ茫漠たる觀念である。然しハアバアト・スペンサアの智力には、空間といふ觀念は、比較にならぬほど非常に神祕に、且つ洪大に現れ來たつたのに相違無い。數學家だけが、位置の幾何學並びに空間關係の神祕が論じてある章の――『假令、生の神祕を貫き得ても、更に一層超絶的な神祕が

残るであらう」といふ悸然とするやうな言明の——十分の意義を理解することが出來ることであらう。がしかし、ハアバアト・スペンサアは、そんな幾何學的神祕の概念を離れて、赤裸裸たる空間そのものの問題が、氏の生涯の夕暮れに、氏には魔攻となり、消魂事となつた、と我我に語つて居る。

……創造に或は進化に——どちらと考へてもいいが——それに均しく先立つて居て、そして擴がりに於ても、時間に於ても、均しく兩者を無限に超絶して居る、この普遍な構成素其物といふ考へがつぎに起こつて來る。兩者を超絶してといふのは、苟くも考へるとなれば、兩者は始めがあつたものと考へなければならぬのに、空間には始めといふものが無かつたからである。想像の力の達し得る限り、四方八方を探求すると、想像の力が横ぎつた部分は、それに比べれば全く無限小といふべき程の未探索の地が、その先にある空空漠漠たるこの存在といふ考へは——それに比べれば、我我の測り知り得べからざる恒星系は縮んで、一小點となるやうな空間があるのだといふ考へは——餘りに壓倒的に絶大で、思ひ想ふに堪へぬ考へてある。近年は、根源も原因も無くして無限の空間がいつからとなく存在し來たつて居るので、その空間はいつまでも存在するに相違ないものだといふ意識は、それを考へまい、それを避けたいといふ感じを自分に起こす。

無限の空間といふ觀念が、自分の心とは比較を絶して遙かに強大な心に、どんな風に影響を與へ得るものか、これは自分には分らぬ。また、空間關係の諸法則が幾何學者に提出する、或る種の問題の性質はどんなものか、これは自分は推測が出來ぬ。然し、その觀念が自分の弱い想像力の裡に喚起する、恐怖の原因を決定して見ようとすると、自分にはその感情の種種異つた要素を――科學の啓示が我等に思はしめる（合理なまた不合理な）特殊の觀念に對應する特殊の種種な恐怖を――見分けることが出來る。そのうち一つの感じは――恐らくこれがその恐怖心の主要な要素と思ふが――無限の空間を占めて居る、あの言語に絶した見得べからざるものの中に、永遠永久に閉ぢ籠められて居るといふ考へが起こるのである。

この感じの背後には、永久に取圍まれて居るといふ考へ以上のことが存して居る。――それからまた、名なきものによつて永久に貫かれ、横ぎられ、震はされて居るといふ念がある。――その上また、奥の奥の祕密の我のどんな小さな分子も、それの永久の接觸を避けることは出來なからうといふ確實さがある。――なほ進んで、自分の我が、光線の速さを以て、光線の速さ以上の速さを以て、あらゆる銀河を越え、科學がそれを用ひて以てそ

の量を示し得るどんな符號も知らぬほど絶大な時間の繼續を越えて突進し得ても、そして更に前へ前へ、上へ下へと飛んで行くことが出來ても、――いつまでも、いつまでも、自分のその我は如何なる邊端にも、決して逹し得られない、如何なる中心からも決して、少しも遠のくことが出來ないのだといふ恐ろしい確信がある。といふのは、その無聲境にあつては、大きさと高さと深さと時間と方向とが、悉く呑み込まれて居て、其處では關係といふことは、飛び走つて居る自分の意識のその一小點――原子無しの音響無しの名稱無しの際限無しの潛在勢力の中を獨り脈搏つて居る、恐怖心の一小分子――に對しての外、全く何等の意味も有ち得ないものであるからである。

それから、その潛在勢力といふ考へが別な性質の恐怖を――無限の可能(ポツシビリテイ)といふ恐怖を惹起する。といふのは、恰も物質なるものは、全く無きが如くに物質を通して――誰れもその起伏の流れを感ずることが出來ぬほどに微細にではあるが、しかも、それが一秒の分(ぶん)數(すう)箇に爲す振動の數を數へるのに、一生を費やしても足りぬほどに迅速に――脈搏つこの測り知るべからざるものは、無邊際から我我に戰くからである、――そして無限の力が、その最も輕い震ひにも住んで居り、――永遠の重さが、その最も微かなわななきにも、その後ろに迫つて來て居るからである。その幽遠な感觸には、一花の著色も或は一宇宙の消

滅も等しく造作の無いものであらう。此處ではそれは色彩の妙趣と迷妄とを以て人目を悦ばしめ、其處では一群の巨大な太陽を飛び出させる。人間の心が可能だと考へ得る（しかも、その人間の心なるものは、どの位また物を考へることが出來ないで、永久居なければならぬものか）一切の物が、その底知れぬもののたつた一と振動で如何なる處にも、到る處に、造られ得るのである。……

或る人達が我我に信ぜしめんと欲したやうに、我の消滅といふ恐怖が最上の恐怖であるとは眞であらうか。……といふのは、無限の渦卷の中にあつて、自分といふものが永久に存續するといふ思ひは、口之を述ぶべからざる大恐怖を――完全にそれを意識するには餘りに絶大な或る一種の恐怖の忽如たる數刹那を――迅速な、暗い、瞬時的瞥見に於てのみ堪へられる一種の恐怖を惹起するに足るからである。そして、我我は絶對なものと一つである――それの底無しの淵に在つての朧氣なるおののきの點點である――といふ信念は、意識といふものは頭腦の崩壞と共に無くなると思考せざるを得ぬ人達にのみ、慰安の信念となり得るのである。……自分には、知り得べきものの境界線を突破しようと、新らたなる企てを試みる度每に、人間の智慧を否應無しに後戻りさせる處の、あの偉大な疑惑と恐

怖とを率直に云ふを敢てする人は少い（全く無い）やうに思はれる。若しその境界線がだしぬけに突き下げられたなら——知識が突然に且つ洪大に擴められて、その現時の境界を越えたなら——恐らくは我我はその示現に堪へることが出來ないであらう。……

パアシヷル・ロオエル氏の驚く可き書物『火星』は、地球よりも古くて、また進んで居る或る世界の住民と——理知に於ても道德に於ても、我我よりか遙か高く進化して居て、今なほ我等の科學の裏を搔いて居る幾千の神祕を說明し得る生物の一種と——交通が出來る場合の結果に就いて考へさせる。恐らくは、そんな事があつたなら、我我の全文明よりも幾萬年、或は幾百萬年古い知識の、假令、結果は借り得るとしても、手段は理解することが出來ないであらう。しかし或るよりいい古い惑星からしてよりいい大なる知識が突然到來するといふことは、人類の現在の道德情態の故を以てして、我我にはただ、破滅を齎すに過ぎないことになるのではなからうか。——人種の絕滅といふ結果になりさへもしないであらうか。……

或る國民の大多數が倫理的にこれを受け入れる準備が出來てゐないうちに、危險なよりいい高等な知識を撒布すれば、保守的本能が常に必ず、これを妨げるといふことは、法則であ

るやうに思はれる。そして（個人個人の例外はあるものとして）より高い知識を得る力は、そんな知識によりて利益を蒙り得べき德性が進化開展し來たる時、始めて發達するものと想像すべき理由がある。若し、他の世界と知的通話を爲すの力が萬一、今、我我に役に立ち得るならば、我我は早速これを得べきであると想ふ。然し若し、何か不思議な機會で、——エエテル電信の或る方法と云つたやうなものを發見して——この力を得ることが早過ぎたならば、その使用は十中八九屹度、禁止せられるであらう。……例へて云へば、近くの或る惑星の人間と通信する手段を發見したといふ罪に問はれた人に、中世時代にどんな事が出來したらうか！想つて見るがいい。確かに其發明者と、その裝置とその記錄とは、焚かれたらう。その勞苦の如何なる痕跡も、記憶も、根絶やしされたらう。今日でも、人間の經驗がそれを支へない眞理の突然の發見は、現存して居る確信に全然反對した事實の突然の啓示は、迷信的恐怖の或る狂熱的復活を——科學の呼吸の根を止め、一千年の間、心的闇黑へ世界を再び投げ込むやうな宗教的な或る恐慌を——惹起することであらう。

鏡の少女

足利將軍時代に南伊勢の大河內明神の神社が頹廢したところ、其國の大名北畠公は戰爭や他の事情の爲めに、其建物の修繕を圖ることが出來なかつた。そこて、其社を預つて居た神官の松村兵庫といふが京都へ行つて、將軍に信用されて居ると知られてゐた、大大名の細川公に助力を求めた。細川公は其神官を懇切にもてなし、大河內明神の有樣を將軍に言上しようと約束した。然し、兎に角、社殿修理の許可は相當な取調べをし、又、可也手間を取らねば與へられまいと云つて、事が取極められる間、都に止まつて居るやうにと松村に勸めた。其處で松村は家族の者を京都へ呼び寄せて、昔の京極の處に家を一軒借りた。

この家は、綺麗で廣かつたが、長い間、人が住まずに居たのであつた。不吉な家だと世間で言つて居つた。その東北側に井戸が一つあつた。そして、何んとも原因知れずに、その井戸で溺死した前の借家人が幾人もあつたからである。然し松村は、神官のことだから、惡靈など更に恐れず、直ぐと、この新居で居心地よく暮した。

その年の夏大旱魃があつた。幾月も一滴の雨も五畿内に降らなかつたので、川床は涸れ、井戸は干て、この都にさへ水の沸底を見た。ところが、松村の庭の井戸は相變らず水が殆んど一杯で、その　　非常に冷たく清く、微かに青味を帶びて居た――水は泉が供給するらしく思はれた。暑い季節の間、町の方方から水貰ひに多勢人が來たが、松村は欲しいだけいくらでも人に汲ませた。それでも水の供給は減るやうには見えなかつた。

　ところが、或る朝、近處の家から水汲みに來た、年若い下男の死骸が、其井戸に浮んで居るのが見つかつた。自殺の原因は何一つ想像出來なかつたので、松村は、其井戸に就いての面白からぬ話を數數想ひ出して、何か眼に見えぬ怨恨の業ではないか知らと疑ひ始めた。そこで、其まはりに垣を造らせようと思つて、其井戸を檢べに行つた。すると、獨りで其處に立つて居る間に、水の中で、何か生きて居る物がするやうに、突然、物が動くので驚いた。其動きがやがて歇むと、見た處十九か二十歳ぐらゐの若い女の姿が、其靜かな水面に明らかに映つて居るのが見えた。切りとお化粧をして居るやうで、脣へ紅（べに）をさすのが判然（はつきり）見えた。初めは其顏は横顏だけ見えてゐたが、やがてのこと、その女は松村の方を向いてにこりと笑つた。直ぐに其心臟に異常な衝動を感じ、酒に醉つたやうに眩暈がして、――月の光りの如く白くまた美しく、いつも次第に美しさを增すやう思はれ、また闇黑へ

彼を引き下ろさう、下ろさうとするやう思はれる、そのにこりとした顏だけが殘つて、一切の物が暗くなつた。だが、彼は一所懸命に意志を取り戻して眼を閉ぢた。それから眼を開けて見たら、その顏は消えて居り、世は明かるくなつて居た。そして自分は井桁から下へうつむいて居ることを知つた。あの眩暈がもう一秒續いたなら——あのまぶしい誘惑がもう一秒續いたなら、二度と日の目を見ることは出來なかつたことであらう。……

家へ歸ると、皆の者にどんな事があらうと、その井戸へ近寄らぬやう、どんな人にもその水を汲ませぬやう命じた。そして、その翌日、丈夫な垣をその井戸のまはりに造らせた。

垣が出來てから一週間許りすると、その長の旱天が風と稻光りと雷——金市が、その轟きで地震で顫へるやうに、ふるへたほどの恐ろしい雷——との伴うた大風雨で絕えた。三日三晚その土砂降りと電光と雷鳴とが續き、鴨河は未だ嘗て見ぬほど水嵩が增して、多くの橋を流し去つた。その風雨の三日目の夜、丑の刻に、その神官の家の戶を敲くものがあつて、內へ入れて吳れと賴む女の聲が聞えた。が、松村は井戸での事を思ひ出して、あぶないと思つたから、その哀願に應ずることを召使の者共に禁じた。自分で入口の處へ行つて、から訊ねた。

『誰れだ』

すると女の聲が返事した、

『御免下さい！　私で御座います――あの彌生で御座います！……松村樣に申し上げたい事が――大切な事が御座いまして、何卒、開けて下さいませ！』……

松村は用心して戸を半分開けた。すると井戸から自分を見てにこりと笑つた、あの美しい顔が見えた。しかし今度はにこにこしては居ないで、大變悲しさうな顔をして居つた。

『私の家へは、はいらせぬ』と神官は吶鳴つた。『お前は人間では無い。井戸の者だ。……何故、お前はあんなに意地惡るく人を騙して殺さうとするのだ？』

その井戸の者は珠のちりんちりん、いふやうな調子のいい聲（タマヲコロガスコヱ）で返事した。

『私の申し上げたいと思ひますのは、その事に就いてで御座います。……私は決して人を害ねようとは思つて居りません。が、古昔から毒龍があの井戸に棲んで居りました。それがあの井戸の主で御座いました。それであの井戸には水がいつも一杯にあるので御座います。ずつと前に、私はあの水の中へ落ちまして、それであれに仕へることになつたので御座います。自分がその血を飲むやうにと、私に、人を騙して死なせるやうにさせたので

御座います。が、今後は信州の鳥井ノ池といふ池に棲むやう神様が、今度、御云ひ付けになりまして、神様はあれをこの町へ二度と歸らせてはやらぬと御極めになりました。で、御座いますから今夜、あれが去つてしまつてから、あなた様のお助けを御願ひに、出て來ることが出來たので御座います。その龍が去つてしまひましたから、今、井戸には水が少ししか御座いません。云ひ付けて探させて下されば、私の身體が見つかるで御座いませう。どうか、御願ひて御座います、早く私の身體を井戸から出して下さいませ。屹度、御恩返しは致しますから』……

かう言つてその女は闇へ消えた。

夜明けまでに風雨は過ぎ去つた。日が出た時には澄んだ青空に雲の痕も無かつた。松村は早朝、井戸掃除屋を呼びに遣つて、井戸の中を捜させた。すると誰れもが驚いたことには井戸は殆んど干涸らびてゐた。容易く掃除された。そして其底に頗る古風な髪飾りと妙な恰好の金屬の鏡とが見付かつたが、身體は動物のも人間のも、何んの痕跡も無かつた。だが、松村は此鏡が、その神祕の説明を與へはせぬか知らと想つた。そんな鏡はいづれも己の魂を有つて居る不思議な品物で　鏡の魂は女性だからである　その鏡は餘程古い

ものやうて、錆が厚く著いて居つた。が、神官の命で丁寧に、それを掃除させて見ると、稀なそして高價な細工だといふことが判り、その裏に奇妙な模樣があり、文字も數數あることが知れた。その文字には見分けられなくなつて居るものもあつたが、日附の一部分と、『三月三日』といふ意味の表意文字とは見極めることが出來た。ところで、三月は昔は彌生（いや增すといふ意味）と云つたもので、祭り日となつて居る三月の三日は、今なほ彌生の節句と呼んで居る。あの井戶の著が自分の名を『彌生』と云つたことを想ひ起こして松村は、自分を訪ねた靈の客は、この鏡の魂に他ならぬ、と殆んど確信した。

だから、その鏡は靈に對して拂ふべき顧慮を以て、鄭重に取り扱はうと決心した。丁寧に磨きなほさせ、銀を著けなほさせてから、貴重な木でそれを容れる箱を造らせ、その箱を仕舞つて置く別室を家の中に用意させた。すると、その箱を恭しくその部屋へ置いた、丁度その日の晩に、神官が獨りで書齋に坐つて居ると忽然、その彌生が、その前へ姿を現した。前よりも、もつと美しいぐらゐであつたが、その美はしさの光りは、今度は淸い白雲を透して輝く夏の月の光りの如く軟かいものであつた。頭低く、松村に辭儀をしてから、玉のやうな美くしい聲でかう言つた。

『あなたが、私の獨り住居を救ひ、私の悲しみを除つて下さいましたから、御禮に上り

ました。……私は、實は、御察しの通り、鏡の魂なので御座います。齊明天皇の御世で御座いました。私は百濟から始めてこちらへ連れて來られたので御座いまして、嵯峨天皇の時まで、御屋敷に住まつて居たので御座いますが、天皇は私を皇居の加茂内親王に御與へになつたので御座います。その後、私は藤原家の寶物になりまして、保元時代までさうで

（齊明天皇の治世は六五五年（紀元）から六六二年まで。嵯峨天皇は八一〇年から八四二年まで。百濟は朝鮮の西南部にあつた古の王國で、初期の日本史によくその名が出て居る。内親王は皇室の血統の方。昔の宮廷階級には高貴な婦人に二十五階級あつて、内親王は席次では第七階であつた）

ゐましたが、その時にあの井戸へ落とされたので御座います。あの大戰爭の幾年の間私は

（幾世紀の間、天皇の好配と宮廷の貴女とは藤原家から選まれた。保元時代は一一五六年から一一五九年まで。ここに云ふ戰爭は平家源氏間の、あの有名な戰爭）

其處に置かれたまま人に忘れられて居たので御座います。その井戸の主は、元は此邊一帶

（昔の信仰では溜水や泉にはいづれも眼には見えぬ守護者があつて、時に蛇又は龍の姿を取ると想はれて居た。湖水や池の靈は普通イケノヌシ即ち『池の主』と云つて居た。此處には『主』といふ名を井戸に棲む龍に與へてあるが、本當は井戸の守護者は水神といふ神である）

にあつた大池に棲んでゐた毒龍で御座いました。その大池が、お上の命令で、家を其處へ建てる爲めに、埋められましてから、その龍はあの井戶を我が物にしたので御座います。私はあの井戶へ落ちてから、それへ仕へることになりまして、あれが無理に私に人を多く死なせるやうにしたので御座います。だが、神樣があれを永久に追ひ拂ひになりました。……あの、私に、も一つ御願ひが御座います。私の前の持主と家柄が續いて居りますから、將軍義政公へ私を獻上して下さいませんでせうか、御願ひ致します。最後のこの御深切さへして戴けますれば、私はあなた樣に幸福を持つて參りませう。……が、その上にあなた樣の身に危うい事があることを御知らせ致します。この家には、明日から、おいでになつてはいけません。この家は壞れますから』……

そしてから警戒の言葉を述べると共に、彌生は姿を消した。

松村はこの豫戒によつて利益を享けることが出來た。翌日、自分の家の者共と品物とを別な町へ移した。すると殆んどその直ぐ後に、初めのよりかもつと猛烈なくらゐの暴風が起こつて、その爲めの洪水で、それまで住まつてゐた家は流されてしまつた。

その後暫くして松村は、細川公の厚意によつて將軍義政に謁見するを得て、その不思議

な來歴を紙に書いたものと一緒に、かの鏡を獻上した。そして、その時鏡のゝ魂の豫言が實行された。將軍はこの珍らしい贈り物を大いに喜ばれて、松村へ高價な賜物を與へられたばかりで無く、大河內明神の神殿再建に澤山の寄附金をされたからである。

伊藤則助の話

山城の國宇治町に、六百年許り前に、その祖先は平家の、伊藤帶刀則助といふ若い士が住まつて居た。伊藤は美男子で氣だてがやさしく、中中、學問があつて武藝に長けてゐた。が一家は貧しく、高貴な武人間に、彼に眷顧を與へるものが一人も無かつたから、その前途の望みは乏しかつた。文學の研究に身を委ね、(日本の物語作者の言ふ)『たゞ風月を友と』して、極く質素な生活(くらし)をして居つた。

或る秋の夕暮、琴引山といふ小山の近處をたゞ一人散歩して居ると、たまたま同じ路を辿つて居る少女に追ひ付いた。その子は立派な服裝(なり)をしてゐて、年の頃は十二か十三ぐらゐに思はれた。伊藤はそれに會釋して、『日が直ぐ暮れますよ、お嬢さん、それに此處は少し淋しい處です。道に迷つたのですか』と言つた。その子は晴れやかな笑顔をして見上げて、そんな事はと云つた樣子をして、『いゝえ。私はこの近處に御奉公を致して居りますミヤヅカヒで御座います。もう少し行けばよう御座います』と返事した。

その子がミヤヅカヒといふ言葉を使つたので、伊藤はその女の子は高位な方に奉公して居るに相違ないと知つたが、どんな名家も其附近に住まつて居ることを聞いたことが無いから、その子の云ふことを怪しんだ。だが、ただから云つた、『私は私の家のある宇治へ今歸るところです。此處は大變淋しい處ですから、途中、一緒に行つて上げませう』

その子はその申し出を喜んだらしく、しとやかに御禮を述べた。で、話しながら二人は一緒に歩んで行つた。その子は天氣の事、花の事、蝶蝶の事、鳥の事、一度、宇治へ見物に行つた事、自分が生れた都の名所の事を話した。伊藤には、その子の爽やかなお喋舌を聽いて居ると、時間が愉快に經つて行つた。やがて、その道の或る曲り目で、二人は若木の杜で大變に暗い小村へ入つた。

〔此處で、自分は、此話を中絶して、諸君に話さなければならぬ事がある。日本には、晴れ切つた非常に暑い天氣の折にも、いつまでも暗くて居る田舍村があつて、其暗さは實地にそれを見なければ讀者には想像が出來ぬといふ事である。東京の近處にさへ、そんな村は澤山ある。そんな村から少し離れると家は一軒も無い。常磐木の茂つた杜のほか、何んにも見えぬ。其杜は、普通若い杉と竹とから成つて居るが、暴風の害を蒙らぬやう其村

を被ひ、且つまた種種な目的に材木を供給する用を爲して居る。木は密植してあるから、幹と幹との間を通つて行く餘地が無い。帆柱のやうに眞直ぐに立つて居て、日を遮る屋根をつくるほどに、其頂部を交じへて居る。草葺きの田舍家は何れも皆、植林中の空いた地を占めて居て、其樹木が其まはりに家の高さの倍の垣を造つて居る。其樹木の下は、眞つ晝間でもいつも薄暗がりで、家は朝か夕方かは半ば蔭になつて居る。殆んど不安の念を起こさせるこんな村の第一印象は、それ獨特の一種の薄氣味惡るい妙味を有つて居る、其透明な暗がりでは無くて、其靜けさである。家數は五十も百もあることがあらう。しかし何も見えず何んの音も聞えず、ただ、眼には見えぬ小鳥の囀り、時たまの鷄の啼き聲、蟬の叫びがあるだけである。だが、蟬さへ其杜を餘りに暗いと思ふのか、微かに啼く。日を愛する蟲だから、村の外の樹木を好むのである。自分は云ひ忘れたが、時に眼に見えぬ梭の――チヤカトン、チヤカトンといふ――音を耳にすることがあらう。が、其聞き慣れた音が、この大なる緑の無言のうちに在つては、仙郷のもののやうに思はれる。其靜寂の理由は人が家に居ないといふただそれだけである。大人は、弱い老人少しを除いて、凡て、女は赤ん坊を背に負うて、近處の野畠へ行つて居り、子供の大部分は、多分一哩より少からぬ遠くの一番近い學校に行つて居る。實際、こんな薄暗いひつそりした村に居ると、誰

れしも『世の養ひを享けたる太古の人は、何物も求むるところ無く、世また物澤に、――人は無爲にして萬物化育し、――其靜かなること深淵の如く、國人すべて皆心安らかなりき。』といふ管子の文に書いてある情態の不思議な永存を眼前に視て居るやうな氣がする」

……伊藤がその村へ著いた時は餘程暗かつた。日は早、沈んでしまつて、夕燒けはその樹木の蔭では薄明りも與へて居なかつたからである。その子はその大道に通じて居る狹い小路を指さして「あの、御深切な御旦那樣、私はこちらへ參らなければなりません」と云つた。「それでは家まで送つて行つて上げよう」と伊藤は答へて、行く手を見ながらといふより探りながら、その子と一緒にその小路へ曲つた。ところが、その女の子は頓て、その暗がりにぼんやり見える小さな門の前で――其先に在る住家の光が見える格子作りの門の前で停つた。『私が御奉公致して居ります御邸は此處で御座います。』ここまで遠く寄り道をして下すつたことで御座いますから、入つて少し御休みになつて下さいませんか』と云つた。伊藤はそれを諾した。この手輕な招きを嬉しく感じ、どんな立派な身分の人がこんな淋しい村にわざわざ住まふことにしたものか知りたいと思つた。高位の一家が、政府に不滿を抱くとか、政治上の紛紜があるとかで、時にこんな風に引退することがあると

知つて居たから、自分の眼の前のこの郷に住まつて居る人達の身の上も、さうであらうと想像した。其年若い道伴れが、開けて呉れた門を潜ると、四角な大きな庭があつた。うねうね小川が横ぎつて居る、山水の景を小さく模した、其造りが微かに見分けられた。『ほんの一寸の間、御待ちになつて下さいまし。御出でのことを申しに參りますから』と其子は云つて、家の方へ急いで行つた。廣廣した家ではあつたが、餘程古さうで、それに今とは異つた時代の建て方であつた。引き戸は閉(し)めて無かつたが、光(あかり)のして居る家(うち)の中は、緣の正面に亘つて美くしい簾が挂かつて居るので見えなかつた。其簾のうしろに影がいくつか――女の影がいくつか――動いて居た。――すると、不意に琴の音が夜に波打つて響いて來た。其彈き方が如何にも輕くまた旨いので、伊藤は自分の耳を信ずることが殆んど出來なかつた。耳を欹てて居るうちに、うつとりするやうないい氣持ちが――妙に哀れの籠もつたいい氣持ちがして來た。どんな女でも、どうしてあんなに彈くことが覺えられたらうと怪しんだ――彈き手は女なのか知らと怪しんだ――自分は、この世の音樂を聽いて居るのか知らとさへ怪しんだ。魔力がその音と共に、自分の血の中へ入つたやうに思はれたからである。

そのやさしい音樂は歇んだ。すると、それと殆んど同時にあの小さな宮仕が其横に來て居ることを知つた。『おはひり下さるやうにとのことで御座います』と云ふのであつた。入口へ案內されて行つて、其處で草履を脫ぐと、ラウチョ卽ち其一家の召使頭だと伊藤が思つた年長けた女が、閾際まで迎へに出た。其老女はそれから部屋を幾つか通つて、家の裏側の大きな明かるい部屋へ連れて行つて、何度も恭しく辭儀して、高位の人が坐る上席に就いて吳れと乞ふのであつた。部屋が物物しげなのと、其裝飾の珍らしい、美しさとに驚いた。やがて、女中が幾人か出て茶菓を供へて吳れたが、前へ置かれた茶椀も他の器物も稀れな高價な細工のもので、且つ亦、其持主が高位な人だと知れる模樣で飾りがしてあることに氣付いた。どんな氣高い人がこんな淋しい隱退處を選んだものだらう、どんな事がこんな孤獨を望ませるやうにしたものだらう、と段段怪しんで來た。ところが、老女は

『あなたは宇治の伊藤樣だと――あの伊藤帶刀則助樣だと思ひますが、違ひますか』

と訊ねて突然その回想を妨げた。

伊藤は如何にもと頭を下げた。自分の名をあの小宮仕に云ひはしなかつたのであるし、それにその訊ね方にまたびつくりした

老女は言葉を續けて云つた。『どうか、私の御尋ねを失禮だとは思つて下さいますな。

私のやうな老人はいろんな事を御尋ねしてもいいので御座いませう、不都合な珍らしがりで無くて。あなたが此家に御出になつた時、あなたのお顔に見覺えがあると思ひました。だから、他の事をお話しする前に、疑ひを晴らすだけにお名前を御伺ひ致したので御座います。御話し致したい大切な事が御座います。あなたはよくこの村をお通りになるので、私共の若い姫君樣が或る朝あなたの御通りになるのを不圖、御覽になりまして、その時からといふもの、晝も夜もあなたの事を考へておいでになります。本當に、餘りお思ひになつて病氣におなりで、私共は大變に心配して居ります。其爲めに、あなたのお名前とお住居を見つけるやう取り計らひまして、手紙を差し上げようとして居る處へ――どうで、御座いませう、思ひがけも無い！――あなたがあの召使と一緒に私共の門へ御出で下さいました。まあ、あなたに御會ひしてどんなに嬉しいか到底も口には申し上げられません。あまりに仕合せで本當だとは思へないくらゐて御座います。實際、かうして御會ひ出來たのはエンムスビノカミの――仕合せな緣組みの絲の結びを繫いて下さる、あの出雲の神樣の――惠みの御計らひに違ひないと私は思ひます。そんな仕合せな運が、あなたをこちらへ御連れ申したことて御座いますから、否とは仰せになりは致しますまい――そんな緣組みの――姫君樣のお心をお喜ばせ申す――邪魔が何も無いのなら』

その當座、伊藤には、どう返答していいか分らなかつた。その老女が若し本當のことを云つたのなら、異常な機會が、其身に捧げられて居るのであつた。非常な熱情あればこそ、高家の息女が、自分と求めて、富も無ければ、何んの前途の望みも無い、主人無しの名も無い士の愛を求めなされるのである。だが一方また、女の弱味に附け込んで、己が利を増さうとするのは男の面目とすべきことでは無い。それにまた、事情が氣掛りな程不思議である。だが、かう思ひ掛けない申し出をどう斷わつていいか少からず心を惱ました。暫く無言で居てから返事した。

「私には妻はありませんし、許嫁はありませんし、どんな女とも何んの關係もありませんから、邪魔は少しも無い譯であります。今まで私は兩親と暮して來て居りますが、緣談の事は兩親は一度も話したことはありません。知つて置いて戴かねばなりませんが、私は貧乏士で、高位の方方の間に私を庇護して下さる方がありませんし、身の境遇のよくなる機會が見つかるまでは、妻を娶らうとは思つて居ませんでした。御申し出の事は、私に取つて光榮至極ではありますが、私はまだ高貴な姫君に思つていただくに足らぬ身だと思うて居ります、とかう申し上げるほかはありません」

老女はその言葉を聞いて滿足に思つたらしく微笑して、かう返事した。

『姫君樣に御會ひになるまで、御極めにならぬがおよろしいで御座いませう。御會ひになつたなら多分、御躊躇(ためらひ)にはなりますまい。どうか、私と一緒にお出になつて下さいませんか、姫君樣へ御引き合せ致しますから』

前のよりも大きな別な客間へ案内されたが、行つて見ると御馳走の支度が出來てゐて、上座へ就かせられてから一寸の間、獨り其處へ待たされた。老女は姫君樣を連れて歸つて來た。その若い女主人を始めて一目見た時、伊藤は庭に居て琴の音を聽いた時覺えた、あの不思議な驚きと悦びとの身戰ひを再び感じた。こんな美しい人は一度も夢にも見たことが無かつたのである。綿雲を透して見る月の光りの如く、光りがその身から出て、その衣裳を通して輝いて居るやうであり、その解けて、垂れて居る髮の毛は身動きにつれて搖れて、春のそよ風に動く枝垂れ柳の枝のやうであり、その唇は朝露を帶びた桃の花のやうであつた。伊藤はその姿を眺め見て恍惚とした。正(しやう)のアマノカハラノオリヒメの姿を――輝く天の川の傍に住む織女の姿を見て居るのでは無いかと思つた。

にこにこしてその老母は、その美しい姫の方へ向いたが、姫は眼を伏せ、頰を赧くして默つたままで居るので、姫に向つてから云ふのであつた。

『どうで御座いませう、あなた！こんな事があらうとは少しも望みも出來ない折に、あ

なたが會ひたいと仰しやるその當のお方が、自分から、お越しになつたので御座いますよ。こんな運のいいことは全く、神樣の御心からでなければ、出來る筈は御座いません。それを思ふと嬉しくて、泣きたくなります』

老女は聲に出して咽び泣いた。そして、袖で涙を拭ひながら、言葉を續けて、

『それで、これからあなた方お二人のなさることはただ　どちらもおいやだ、といふことはありますまいが、おいやで無いのなら　互に約束をして、そして、一緒に婚禮のお祝ひをなさることで御座います』

と言つた。

伊藤は無言で答へた。自分の前に坐つて居る、その比類無しの眼に見える物が、その意志を痺らせ、その舌を縛つてしまつたのである。召使の女達が器物や酒を携へて入つて來た。婚禮の膳部が二人の前に竝べられ、固めの盃が取り交はされた。それでも伊藤は元のやうに失神したやうになつてゐた。此珍事の不思議さと、新婦の麗はしさの驚きとがまだ、その頭を混亂させてゐた。未だ嘗て覺えたことの無い一種の嬉しさが――大なる靜寂の如くに――その胸に一杯になつた。が、段段と、そのいつもの落著きを回復して、それから

は困らずに話をすることが出來るやうになつた。酒を遠慮無くお相伴して、今までその心を抑へて居た疑惑と恐怖を、卑下してではあつたが陽氣に、思ひ切つて話した。その間その新婦はもとの如く月の光りのやうに靜かにしてゐて、眼は決して上げず、物を言ひかけられると赤面か、微笑かして、それに應へるだけであつた。

伊藤は老女に向つてから言つた。

『幾度も獨りで散歩をして、この村を通つたことがありますが、この御屋敷の在ることは知りませんでした。それでこちらへ入つてからといふもの、御宅樣がどうしてこんな淋しい住居場をお選びになつたのだらうかと、不思議に思つて居りました。……あなたの姫君樣と、私と互に約束を取り交はしたのに、私が御一家のお名を、まだ知らぬとは可笑しな事に思はれます』

から云ふと、一抹の影が老女の情け深い顔を横ぎつた。そして新婦は、それまで殆んど口をきかなかつたが、眞靑になつて非常に心を傷めて居る樣子であつた。暫く無言の後に老女はから答へた。

『私共の祕密を長く隱して置くことは六つかしいことで御座いませうし、それにあなたは、私共の家の一人におなりになつて居ることで御座いますから、どんなことがあらうと、

本當のことをお知らせ致さなければならないと思ひます。では、伊藤樣、申し上げます、あなたの花嫁は、あの不仕合せな三位中將重衡卿の娘なので御座います」

此言葉を――『三位中將重衡卿』といふ言葉を――聞いて此若士は、身體中の血管に氷の寒氣を感じた。平家の將軍であり、政治家であつた重衡卿は、死んで塵土に歸してから三世紀を經て居る。そこで伊藤は突然、身の廻りの物凡ては――部屋も燈火も宴席も――過去の一場の夢である、己が前の姿は人間で無くて、死んだ人間の影である事を知つた。

が、つぎの瞬間に其氷の如き寒氣は去つてしまつた。蠱惑が歸つて來て、身の廻りに深くなつて行くやうであつた。少しも恐れを感じなかつた。その新婦はヨミから――死の黃泉の場處から――彼へ遣つて來たのであつたのに、彼の心は全く奪はれてしまつて居たのであつた。幽靈と結婚するものは、幽靈にならなければならぬ。――しかし、己が前のその美しい幻の額に、心痛の影でも齎らすやうな考へを、言葉なり顏色なりで、洩らすよりか死ぬる方が、一度で無く、幾度でも死ぬる方が、優しだといふ氣になつて居ることを知つた。その捧ぐる愛情には、少しの疑ひも有たなかつた。優しからぬ目的があつての事ならば、騙して爲した方がよかつたらうにと考へると、其愛情が眞實なことがうなづかれるのであつた。が、そんな考へや思ひは瞬時に消えてしまつて、今、身の前に現れ來たつて

居る、その不思議な地位をそのまま受け入れて、壽永の昔、重衡の息女が自分を婿と選んだなら、自分が爲したであらう通りに振舞はうと決心した。

『噫、あれは本當に殘念なことで御座いました。重衡卿樣の無慙な御最期の事は聞いて居ります』

と叫んだ

老女は啜り泣きしながら、答へて言つた。

「えゝ、本當に無慙な御最期で御座いました。御承知のとほり、乘つておいでになつた馬が矢に當たつて死んで、御主人の上へ倒れました。聲を上げて助けをお求めになりましたが、それまで御恩に暮して居た者共は、危急の際であるのに見棄てて逃げてしまひました。それから俘囚になつて、鎌倉へ送られになりましたが、鎌倉では誠に人を侮つた取扱ひをして、そして到頭、世に亡い人にしてしまひました。奥方と御子――此處に居られます此娘子――とは其時、身を隱して居られました。到る處、平家の者を探して殺したからで御座います。重衡樣のお歿れの音信が著きますと、母人には心の痛みに堪へかね、其爲めこの御子さんが、――血緣の方方はいづれもお歿れになるか、姿をお隱しになるかしまして、――私のほか誰れ一人御世話申し上げる人も無く、御殘りになつたので御座いま

す。その時はやつと五歳になられてゐました。來る年も來る年も、此處から其處へと、巡禮姿で旅してさまよひました……が、そんな悲しい話は今は折を得ませぬ』

と涙を押し拭ひながら、その乳母は叫んだ。

『昔が忘れられない年寄り女の愚かな心を御許し下さいませ。御覽なさいませ、私がお育て申した、その小さな娘子が本當に、今は姫君樣におなりになりました。――高倉天皇の結構な御世に暮して居ますれば、この方にどんな身の運命が除けて置いてあることで御座いませう！では御座いますが、自分の好きな夫をお持ちになりました。それが一番のお仕合せで御座います。……が、時刻が更けました。合巹のお床の用意は出來て居ります。朝までは身のお世話を御二人御互に御任せ申し上げなければなりません』

老女は起ち上つて、客間と次の部屋とを分かつ襖を推し開け、二人を共寢間へ案内した。それから幾度も喜びと祝ひの言葉を述べてさがつたので、伊藤は新婦と二人きりになつた。

一緒に臥せりながら、伊藤はかう云つた。

『あなたが私を夫に有たうと始めてお思ひになつたのは、何時のことで御座いますか』

（萬事が如何にも、眞實らしく見えるので、自分の身の廻りに編まれて居る、この幻のことを殆んど、考へなくなつたからである

女は鳩の啼くやうな聲で答へた。

『我が君樣、私が始めてあなた樣に、御目にかかりましたのは、私の乳母と一緒に參りました、石山寺てで御座いました。あなた樣に御目にかかつたばつかりに、その時その折からこの世が、私には全く變つてしまひました。が、あなたは御覺えになつて居りません。二人が出會つたのはこの世、あなた樣の今の世ではなかつたので御座いますから。ずつとずつと昔のことで御座いました。その時からあなた樣は、幾度も死んだり、生れたりなされて、幾度も美くしい身をお有ちになりました。が、私はいつも、今、私を御覽のままで居りました。あなた樣を夫にとの强い願ひを挂けたばつかりに、別な身體に生れることも、別な境涯の者に生れ變はることも出來なかつたので御座います。我が君樣、私は人間の世の幾代を、あなた樣をお待ち致して居たので御座います』

ところが、この花婿はこんな不思議な言葉を聞いても、少しも恐ろしくは思はずに、一生涯、來たらん幾生涯凡てに、その女の腕を自分の身の廻りに感じ、その女の愛撫の聲を耳にすることより他の事は何も欲しなかつた。

しかし、寺の鐘の響きが夜の明けたことを報じた。鳥が囀り始め、朝の微風が木木を囁

かせた。突然、かの年寄りの乳母が、寝間の襖を明け放つて大聲で、

『お別れになる時刻で御座います。日の目に會うて一緒に御出になつてはなりません、一刻も。お身の破滅で御座います！互に暇乞ひをなさらなければなりません』

一言も云はずに伊藤は、直ぐにも歸らうとした。今、聽いた警戒の意味を朧氣ながら悟つて、身を全く運命に任せた。自分の意志はもはや、自分のものでは無かつた。ただ、その影の如き新婦の心を悦ばせようと望むばかりであつた。

新婦は珍らしい彫刻のある、小さな硯を則助の手に置いてから云つた。

『あなた樣は學者でゐらせられますから、この小さな贈り物も、お蔑みはなさるまいと思ひます。これは高倉天皇の御意によつて、私の父が拜領致しましたお品で、古う御座いますから、妙な恰好を致して居ります。父が拜領したものといふだけの理由で、私は大切に致して居りました』

伊藤はその返しに、自分の刀の笄を記念として受け取るやうに乞うた。その笄は、梅に鶯の模樣を、金銀の象眼で飾つてあつた。

それから例の小さな宮仕が、庭の外へ案内にやつて來て、新婦とその乳母とは、家の入口まで一緒に來た。

階段の下で振り返つて別れの辭儀をしようとすると、その老女はかう言つた。

「このつぎの亥の年に、あなたが此處へおいでになつたと、同じ月の同じ日の同じ時刻にまた、お會ひ致しませう。今年は寅の年でありますから、あなたは十年、お待ちにならなければなりません。が、申し上げられない色々の理由がありまして、此處では又、御目にかかることは出來ません。私共は京都の近處の、高倉天皇樣や私共の祖先や、私共に仕へてゐるものが、多勢住まつて居る處へ行かうと思つて居ります。平家の者は皆、あなたがお越しになると悅びませう。御約束致しました其日に、籠をお迎ひに差し上げます」

伊藤が門を出た時には、村の上に星が輝いて居た。が、往還へ達すると、森閑とした幾哩の野の向うに、黎明の容が明かるくなりつつあるのが見えた。懷に新婦の贈り物を納れて居た。その聲の魅惑が、耳に殘つて居た――そしてそれにも拘らず、不審の手指で觸はつて見て居る、その形見の品が無かつたなら、夜前の思ひ出は眠りの思ひ出である、自分の生命はまだ、自分のものである、と信ずることが出來たであらう。

だが、自分の身を確かに運命づけたのだといふ確信は、少しも遺憾の念を起こさなかつた。ただ、別れの苦しみと、その幻が、自分に再び繰返さるるまでに過ごさなければなら

ぬ春秋の思ひとに心を惱ますだけであつた。十年！——その十年の毎日毎日が、どんなに長く思へることであらう！その手間取りの神祕は、これを解くことを望み得なかつた。死者の祕密な慣習はたゞ、神だけが知つておいてになるのである。

幾度も幾度も、その獨りの散歩の折、伊藤は、過去を今一目見たいものと、朧氣の希望を抱いて、琴引山のその村を訪ねた。だが、二度と、夜も晝も、その暗い小徑にあつた田舍風な門を見つけることは出來なかつた。また、夕燒けに獨り歩いて居る、あの小さな宮仕の姿を二度と見ることは出來なかつた。

村の人達は、在りもせぬ家のことを、丁寧に訊ねるものだから、誑されて居るのだと思つた。高位の方で、この村に今まで住まつて居られた方は一人も無い、と言ふのであつた。その近處に彼が話すやうな、そんな庭は一つもそれまであつたことは無いと言ふ。が、その云ふ場處の近くに、大きな寺が一宇あつたことがある。その墓地の石碑で、今でも見ることの出來るのが少し殘つて居ると言ふ。伊藤は茂つた藪の中に、村人のいふ墓碑を發見した。古風な支那型のもので、苔や地衣に蔽はれて居た。それに刻んである文字は、もはや判讀することが出來なかつた。

自分が遭遇したかの不思議な事件に就いては、伊藤は何人にも語らなかつた。が、その友人や近親は、その容貌も樣子も非常に變つたことを直ぐに認めた。醫者は身體には何の病氣も無いと明言したけれども、日一日と靑くなり、また瘠せて來るやうで、顏附は幽靈のやう、起ち居振舞ひは影のやうであつた。もともと、いつも物を考へ込んで、獨りで居たのであるが、この頃は以前に彼が面白がつた事のどれにも——それて名を成さうと希望することの出來た、あの文學の研究にも冷淡になつたやうに思はれた。その母に——結婚させたなら、その前の野心を鼓舞するかも知れぬ。その人生の興味を復活するかも知れぬ、と母は考へたから——自分は生きて居る女には結婚しないといふ約束をしたと話した。かくして歲月は足を引き摺るやうに經つて行つた。

到頭、亥の年が來、秋の季節が來た。が、伊藤にはその好きな獨りでの散步が最早出來なかつた。床から起きることさへ出來なかつた。誰れもその原因を推測することは出來なかつたけれども、その生命の潮は次第に引いて行つて、その眠りを屢〻死と間違へるほど、それ程深くまた長く眠つた。

そんな眠りから、或る晴れやかな夕暮れ、子供の聲に目覺まされた。すると今は消えて

無いあの庭の門へ、十年前に、案内して呉れた、あの小さな宮仕が床の横に居るのが見えた。その子は辭儀をして、にこりと笑つて、そしてから言つた。『京都近くの大原へ、其處に今度のお家がありますが、それへ今夜あなた樣を御迎ひ致しますといふこと、御籠がお迎ひに來て居りますといふこと、それをあなた樣に申し上げるやうにと云ひ付かりました』そして、その子は姿を消した。

伊藤は、自分が日の光りの見えぬ處へ招かれるのであることを知つた。しかし、その傳言が餘りに嬉しかつたので、起き上つてその母を傍へ呼ぶほどの元氣が出た。母へ其時始めて自分の新婦の話を聞かせて、貰つた硯を見せた。自分の棺の中へ納めて下さいと頼んで――そして、やがて死んだ。

その硯は彼と共に埋められた。が、葬式前にこの道の人が檢べて見て、それは承安年間（紀元一一七一――一一七五）に造られたもので、それには高倉天皇の時代に居た、或る工人の刻印があると言つた。

原註一重衡は――當時タイラ（即ちヘイケ）方がしてゐた――都の防禦に勇しく戰つた後、ミナモトの軍

勢の將、義經に襲はれて敗れた。家長といふ、弓に熟練な士が重衡の馬を射倒して重衡は、悶へもがくその馬の下敷きになつた。或る供の者に換へ馬を連れ來るやう叫んだが、その男は逃げて行つた。それから重衡は家長に捕へられ、しまひに頼朝のところへ送られた。頼朝といふは源家の首長で、重衡を籠で鎌倉へ送らせたのである。鎌倉では色色屈辱を受けてから、——詩を詠んで殘酷な頼朝の心すら感動せしめ得て——一時は斟酌した待遇を蒙つた。然しその翌年、嘗て清盛の命によつて、南都の僧と戰つたことがあるので、その南都の僧の乞ひによつて處刑された。

本當の西印度日和であつた。私は友人の公證人と二人で島を横斷してゐた。その道は熱帶の森林から雲まで屈曲して上り、それから再び篠、竹、甘蔗などのある、黄金色に綠の変つた斜面や、紫、青、灰色の峰のある勝れた風景の地を環なりに下つて、貿易風の盛んに吹く海岸へ出る驚くべき道である。午前中は全部上りであつた、——勇ましい小さい騾馬のために、大概は馬車のあとから步いた、——それから、海は私共の背後に上つて來て、最後に、たえず高くなつて來る地平線の下に、青い、菫のやうに青い、大きな海の壁のやうに見えて來た。暑さは蒸氣浴の暑さのやうであつた。しかし空氣は、その熱帶の香があるので、呼吸するのは愉快であつた、——その香は不思議な樹液の香、土から發する妙な芳ばしい香、香氣あるものの腐敗から起る蒸發、——などからできる香であつた。その上眺望は天國を覗くやうであつた。それからヘゴや竹の蔭になつた峽谷を騷がしく下つて行く激流を見るのも面白かつた。

紅白の鱗のやうな花の咲きみだれた生垣に沿うてできて居る門の前に、友人は馬車を止めた。『ここへ立ち寄らねばならないのだが』彼は云つた、――『一緒に來ませんか』二人は馬車から下りた。友人は鞭の太い方で門をたたいた。門内には、樹蔭のある庭の一方に、母屋の玄關が見える。向うに椰子の並樹と、黄ばんだ甘蔗の幾分が見える。やがて帆木綿のずぼんと大きな麥稈帽の外、何もつけてゐない黑人が、びつこを引きながら門をあけに來た、――そのあとへピヨピヨ鳴く雛のむれ、驚くべきむれがついて來た。その大きな麥稈帽の下にある黑人の顏は見えなかつた。しかし、私は彼の手足や體が妙にしなびて、――干からびて、恰も骨のやうに見える事に氣がついた。私は、こんな氣味の惡い人間を見た事はない。それから雛のついて來る事も不思議であつた。

『やあ、お前の雛はいつも元氣だね』公證人が叫んだ、『……フローラン夫人にお目にかかりたい』

『はい、かしこまりました』その怪物は西印度の土語で、嗄れ聲の返事をした。それから、私共の前をびつこを引いて行つた。その干からびた踵のあとから、雛が悉く跳んだりピヨピヨ鳴いたりしてつづいた。

『あいつは』私の友人は云つた、『八九年前に、毒蛇にかまれたんです。不思議に直つ

て、いや、先づ、半分直つてから、ずつとやせて骸骨のやうになつて居るのです。あのびつこを引くところを見給へ』

その骸骨は家のうしろへ見えなくなつた。それから私共は、表玄關に暫く待つてゐた。それから蜂の色の頭巾を卷いて、あやめの色のきものをきた、見るからに立派な混血の女が、夫人は家があついから、庭で休んで下さるやうにと云はれましたと云ひに來た。そこで椅子と小さい卓が、蔭のある處へ置かれた。それから混血の女がレモンや、砂糖シロップや、林檎液のやうな香のする透明な地作りのラム酒や、厚い赤い粘土製の素燒の壺に入れた氷のやうな冷水などを持つて來た。私の友人は、その飲料の世話をした。それから、女主人は挨拶に來て一緒に坐つた、――造幣局から出たばかりの銀貨のやうな色の髮をした、よい老婦人であつた。私共を歡迎してくれた時の、この微笑のやうな、やさしい微笑を私はこれまでに見た事はない。さうして、私は彼女の昔の西印度の少女時代の方が、果して今の彼女――やさしい皺、白い髮、それから正直な黑い輝いた眼をした彼女――よりもつと綺麗であり得たかを訝る。……

それからさきの會話は、何かの用件に關する事ばかりであつたので、私は加はる事がで

きなかつた。公證人はやがて整ふべき事は整へて、それから、その上品な婦人から別れのやさしい言葉を云はれたあとで、私共は出發した。再びみいらのやうな黑人が――小さい彌次馬のやうな雛(ひよこ)を悉く引きつれて――門をあけに私共の前をぴつこを引いて行つた。私共が馬車に落着いてからも、その案山子のやうな老物のあとを追ふ雛のピヨピヨが未だ聞えてゐた。

『あれはアフリカの魔術てすかね』私は尋ねた。……『どうして、あの雛をだますのだらう』

『妙――だね』公證人は、私共の車が走り出した時答へた。『あの黑人は、もう今では少くとも八十になる筈だ。しかしまだもう二十年は生きさうだ、――畜生』

私の友人のこの言葉『畜生』――を云つた調子に、餘程驚いたが、それは、この人ほど親切な同情のある、それから不思議に偏見と云ふもののない人はない事を、私は知つてゐたからであつた。これには何か話があるだらうと思つて、默つて待つてゐた。

『君』暫くして、その農場を全く離れてから、公證人は云つた。『君の云ふあの老人の魔術使ひ、あれはあの土地て生れた生れながらの奴隷てす。あの土地は、私共の訪問した夫人の夫のフローラン氏の財産てした。夫人はその人の從妹て、愛し合つて結婚したもの

です。結婚して二年程たつた時分に、一揆が起つた（幸に子供がなかつた）――一千八百四十八年の黒人の一揆です、農場の主人が多數殺されたが、フローラン氏は眞先に殺された人の一人でした。それで今日遇つたあの黒人、――君の謂はれたあの老魔術使ひ、――あれが畠を捨てて、一揆に加はつたのです。いゝですか』

『なる程』私は云つた、『しかし暴民を恐れて、さうしたのかも知れない』

『さうとも、外のものも皆同じ事をしたんだから。しかしフローラン氏を殺したのはあの男で、――何も理由がないのに、――彎刀で斬り殺したのです。襲はれた時は、フローラン氏が、――畠から一哩程下つた處を、馬で家へ歸る途中でした。……白面ではフローラン氏に向ふ事などはとてもできない。それで奴は無論醉つて、――氣違ひのやうに醉ぱらつてやつたのです。大概の黒人は、勇氣をつけると云つて、地蜂を中へ入れて、ラム酒を飲んだものです』

『しかし』私はさへぎつた。『その奴が未だフローラン家の農場に居るといふのはどうしたのかね』

『待ち給へ。……軍隊で暴民の取締ができた時、フローラン氏の殺害者をさがしたが、見つからない。奴は甘蔗畠の中に、――フローラン氏の甘蔗畠に、――野鼠のやうに、蛇

のやうに　隠れてゐたのだ。或朝、憲兵が未だ彼をさがして居る間に、家に驅け込んで、夫人の前に倒れて、泣いたり叫んだりして「あい、やい、やい、やい、――私は殺しました、――私は殺しました、――あい、やい」丁度此通りの文句を云つたのです。それからお慈悲を願つた。何故フローラン氏を殺したかと尋ねられた時、そんな事をさせたのは、惡魔の故だと云つたのです……處で、夫人は彼を赦してやつた」

「どうして、そんなことができたものですかね」私は尋ねた

「何しろ、夫人は始めから非常に信心深い、――眞面目に信心深い人でした。『今私がお前を赦して上げるやうに、神様も私を赦して下さい』と云つただけで、召使達にその男を隱させたり、食物を運ばせたりして、たうとうその騷ぎの終るまで隱し通した。それから元通り仕事に出して、それ以來ずつとあの農場で働いて居るのです。勿論、今では年を取つたから畠では何の役にも立たない、――ただ雛の世話をするだけですが」

「しかし、どうして」私は頑張つた、「親類の人達が、夫人にあれを赦させたのですかね」

「それは、夫人が主張したところでは、あの男は精神的には責任がない、――自分のやつて居る事は何だか分らずに人殺しをした氣の毒な馬鹿者に過ぎない、と云ふのです。そ

れから自分でさへ赦す以上、外の人々はもつと容易に赦せるわけだと主張したのです。それて相談の結果、親類達は夫人の好きなやうに、この事件を處分する事にきめたのです』

『しかし何故でせう』

『あの惡者を赦してやると云ふ事に夫人が一種の宗敎的慰安――一種の宗敎的快樂――を見出して居る事を、皆が知つてゐたからですね。夫人は赦してやるばかりでなく、世話をしてやるのが、キリスト敎徒としての義務だと想像したのです。僕等はその考は間違だと思ふが――しかし、その考はよく分つた。……まあ、宗敎と云ふものは、どんな事を人にさせるものかと云ふ、一例になりますな』……

新しい事實に不意に出合ふ事や、前に想像もしなかつた事を何か不意に知覺する事は、心ならざる微笑を起させる事がある。友人が未だ話をして居る間に私は思はず微笑した。すると、善良なる公證人の顏はくもつた。

『おや、君は笑ふね』彼は叫んだ、――『君はをかしいと思ふのですね。それはいけない、――それは間違つて居る。……しかし、君は信じない。君は、本當の宗敎、――本當のキリスト敎と云ふものはどんなものか分らないのです』

『失敬、君の話は一言一句疑はない。もし、知らずに笑つたとすれば、それは驚かざるを得ないものがあつたからですよ』……

『何をさ』彼は眞面目になつて尋ねた。

『その黑人の驚くべき本能に對してです』

『あゝ、成程』彼は是認するやうに答へた。『さうです、さうです。動物の猾智、――野獸の本能でした。……廣い世界で、彼を救ふことのできる人は夫人だけであつた』

『ところで、彼はそれを知つてゐた』私は附け加へて見た。

『否――否――否』私の友は斷然反對した。――『それを知つてゐたわけはない。たゞ感じたのです。……そんな本能は、知識も思想も理解も不可能な頭腦、人間の心ではなく動物の頭腦にあるのです』

日本からの手紙

東京、千九百四年、八月、一日。

緑の平和を破るものは、ただ、遊んで居る子供等の聲と、蟬の鋭い啼き聲だけの、この閑靜な町外づれの此處に居ては、總計五十萬人以上の軍隊の間に、近代の最もすさまじい戰爭の一つが、三四百哩離れた處で、今、進行中であること、或は、彼我兩土の間なる海上で一百の戰艦が戰つたといふことを想像するのは困難である。西洋列國中、その最も強大なものと、今なほ精力旺盛な人の多くが懷ひ出せる頃に、やつと西洋の科學を研究し始めた一國民との間のこの爭鬪は、少くとも一方にとつては、國家の存亡にかかはる爭鬪である。已むを得ぬものであつた、此爭鬪は、或は延期は出來たかも知れぬが、確かに避けることの出來ぬものであつた。東洋と西洋との兩文明を同時に脅やかし得る帝國に――力強くこれを阻まなければスカンディナギアを併呑し、支那を左右する將來を有つて居るやうに思へる、中世建設の一強國に――日本は大膽にも挑戰した。あらゆる工業的文明に對

して、この爭鬪は非常に重大なものである。　日本にとつては、恐らくは、その國民的生命の無上の危機である。ところが、日本の艦隊、日本の陸軍が何をして居るか、これは世界は十分に報道に接して居るが、その國民が内に在つて何をして居るかに就いては、筆に上つて居るものは甚だ少い。

經驗に乏しい人の觀察には、日本人は何時もと異つたことは、何一つして居らぬやうに見えるであらう。ところが、この不思議な平穩は記錄に値ひするのである。對敵行爲の開始に當つて、非戰鬪員は凡て平常通りその職業に從事するやう、また外部の事件には出來得る限り心を勞しないやうにとの勅語が發せられた。そしてこの命令は一語もそむかれずに遵奉されて居る。或はかく想像する人があらう。此戰爭の犧牲と悲劇と不確實とが、殊に首府の生活にその陰影を投じたのである、と。かく想像するのは當然ではあるが、心配或は意氣沮喪の情態を示すものとては實際に全く何一つ無いのである。それどころか、國民一般の自信が喜ばしげな調子なのを見、また幾度の捷報に接しても、國民の自負心が戚心なほど制御されて居るのを見て誰れしも驚く。西からの海流が、日本人の屍體を其海岸に撒き散らしたことがある。鐵條網の防備のある陣地を襲擊して幾聯隊の兵士が絶滅したことがある。幾艘の戰鬪艦が沈沒したことがある。だが、如何な瞬間に於ても、國民的興

奮は微塵だもこれまでに見ない。人々は正しく戰前どほりに、日日のその職業に從事して居る。物事の樂しさうな樣子は、正しく戰前と同じである。芝居や花の展覽は戰前に劣らず、贔屓を有つて居る。市外の生活は何の影響も蒙らず、他の年の夏同樣に、花は咲き、蝶は舞うて居るが、外見では、東京の生活はそれと同樣に、殆んど戰爭の事件の影響を蒙つて居ない。或る大勝利の報道に接した時――その時は花火を揚げ、提燈行列をして祝ふが――その時を除いては、國民的感情の何んの形跡も無い。そして、鈴をリンリン鳴らして走る男が、屢〻新聞號外を配つてあるくことが無ければ、この戰爭の話は凡て惡夢だと思ひ込むことが出來る位である。

それでも莫大な苦痛が、必然、あつた、――日本の宗敎たる社會的愛國的義務といふその念が抑制して居る眼に見えず、聲にきこえぬ苦痛があつた。最近の或る十七字詩が語つて居るやうに、勝利の報道は一度一度歡喜と共に苦痛を齎らすに相違無いのである。

號外の度敵味方後家が殖え

この大靜肅と嬉嬉たる淚無さは、この人種のスパルタ以上の鍛錬を證明して居るのである。古昔、この國民は、その情緖を隱す計りでは無く、精神的苦痛の如何なる壓迫の下に在つても、樂しさうな聲で物を云ひ、愉快さうな顏を人に見せるやうに訓練されたのであ

つた。そして彼等は今日もその教訓を守つて居る。陛下の爲め、祖國の爲めに死ぬる者共を亡くした個人的悲哀を現すのは、今なほ、恥辱と考へられて居るのである。一般公衆は、恰も人氣のある芝居の舞臺面を看るやうに、戰爭の事件を觀て居るやうに思へる。興奮はせずして興味を感じて居る。到る處劇場は戰爭芝居（實際の事實に基いた）を興行して居り、新聞雜誌は戰爭物語、戰爭小說を載せて居り、活動寫眞は近代の戰爭の驚くべき仕方を見せ、また無數の工藝は、日本の勝利を記念する意匠の藝術品、或は實用品を製造して居る。特に示されて居る。そして、彼等の異常な自制心は「遊戲衝動」の種種な表現に

然し現時の心理的情態は——國民的感情の樂しげに見え、面白がつて居るやうにすら見える調子は——どんな一般的叙述によるよりか、尋常普通な事實の記述——自分の日記に書き留めてある日常の事柄の記述——によつてよく示すことが出來る。

寫眞屋が今度ほど多忙なことは、これまで一度も無かつた。受けた注文の半分も應ずることが出來なかつたといふはなしてある。戰場へと送り出される幾百千の人は、寫眞を家族の者へ殘して置かう、また、親や子や愛して居る他の人達の寫眞を携へて行かうと思つたのである。過去六箇月の間、國民全體が寫眞を撮りつつあつたのである。

社會學的に見て興味のある事は、寫眞といふ事が家庭の信仰の詩美に新しき、或る物を加へたといふことである。それが始めて輸入されたときから、寫眞は日本では流行になつた。文明の日本に劣る人種には、寫眞機に恐慌の念を抱かせる迷信が多くあるが、そんな迷信のどんなものも、一新工藝の迅速な發達に何等の障害を提供しなかつた。尤も寫眞に就いて二三の奇妙な民衆信仰があるにはある、――寫眞と寫眞に寫つた人との間に、不可思議な關係があるといふ思想があるにはある。一例を云へば、多人數が一團となつて寫した寫眞の中で、一人が不明瞭にまたは、ぼんやりと撮れて居ると、それは病氣に罹るか、死ぬるかする前兆だと考へられて居る。だが、この迷信は、工藝上の價値を有つて居る。といふのは、寫眞屋をして是非とも、その仕事に注意せざるを得ざらしむるからで――特にこの戰爭の場合、寫眞帖に保存して置くといふ目的とは異つた或る目的に、寫眞が必要になるかも知れぬので、誰れも彼もはつきりした立派な寫眞を有ちたいと思ふ場合、殊にさうである。

過去二十年の間に、死んだ親や兄弟や夫や子供の寫眞を、佛壇の中にある位牌の横へ立てて置くといふ習慣が次第に出來て來た。それでこの理由の爲めにも、出て行く軍人は、自分の立派な寫眞を殘して置きたいと思ふのである。

古いさむらひの家庭に在つて、一家の者共の情愛を現す儀式は、死者に奉仕することに限られて居るのではない。或る場合には、家に居ない親や兄弟や夫や許嫁の寫眞を客間の床の上へ置いて、その前へ御馳走を供へる。かかる場合には、寫眞は小さな臺の上に据ゑて置く。そして、その人が現に、其處に居るかのやうにして、その御馳走をささげる。不在者に食事を供へるといふこの美はしい習慣は多分、肖像を描くどんな藝術よりか古いものであらう。が、この近代の寫眞は、この儀式の人間的詩味を增して居る。封建時代には、不在なその人が出て行つた方角へ向けて——北とか南とか東とか西とかへ向けて——食事を供へるが規則であつた。供へてから間少し置いて、料理した食物の入つて居る器の蓋を揚げて檢べて見る。漆塗りの內側に湯氣の露が濃く附いて居れば、誠に以て結構である。が、若しかその表面が乾いて居ると、それは、その人が死んだ兆、肉體を離れた靈が供へ物の精氣を吸ひに歸つて來た印であると思はれて居た。

恐らく世界の他の何處に見るよりか、『遊戲衝動』が一層強い國にあつて、誰れしもこれを期待したらん如くに、時代精神が其年の花の展覧に發露された。自分の家の附近は、園藝師の居住區であるが、其處の花の陳列を自分は見物に行つた。この區域はその躑躅で

有名で、毎春その躑躅園は幾千といふ人の足を惹きつける。その時其處で陳列する灌木の、隙き間の無い花の塊（かたまり）と見ゆるものの（それも雪と白いものからして、あらゆる濃淡の度を異にした淡紅色を經て、焔と燃ゆる紫に至るまでの）驚くべき展覽をするからばかりでは無く、人形の陳列が――生きた葉と花とで巧妙に造りなした幾群れの人物の陳列が――あるからである。實物大のこの人形は普通は歴史、或は戲曲の中の有名な事實を象（かた）つたものである。多くの場合――全體では無いが――人形の身體と衣裳は、或る骨組みのあたりに育ち茂るやうに造り仕立てた枝葉と花とから成つて居る。そして、顔と手足とは何か肉色の造り物で表してあるのである。

　ところが今年は見世物の大多數は、戰爭の場面を象つたものであつた。日本の歩兵と馬上のコサック兵士との戰闘とか、水雷艇の夜襲とか、戰闘艦の沈沒とか。此最後に述べた見世物では、露西亞の水兵が荒海の中で一所懸命に泳いで居る處が見せてあつて、板紙づくりの波と泳いで居る人物とは、一本の綱を引張つて上がつたり、下がつたりするやうにしてあり、速射砲のパチパチいふ音は亞鉛の板で、工夫した機械仕掛けで眞似をして居た。

　聞くところに據ると、東郷提督は、その職責の爲めに、櫻や梅の花をその季節に見る機會がないので、鉢植ゑの花木を幾つか東京へ注文されたさうで、園藝師は義侠すぎる程こ

れに應じたさうである。

對敵行動の始つた殆んど直ぐ後に、幾千といふ『戰爭畫』――大抵は廉い石版畫――が出版された。圖も着色も支那との戰爭の折に發行されたのよりよかつたが、細かしい處は餘程想像的なもので――露西亞の艦隊の樣子なんか全く想像的なものであつた。露西亞の艦隊との交戰の圖は、恐ろしく詩歌的なものであつたが、感銘的なものであつた。最も驚くべき物は、一度も戰鬪をしない前に出來た露西亞軍の朝鮮での敗北の多くの繪で、これは畫家が『熱し過ぎて場面を見越して』書いたものであつた。そんな繪には、露軍がその士官を――甚だ立派な顏をして居る士官を――戰場に死んだままに遺棄して、大潰亂を爲して敗走して居る處が描いてあつて、一方、日本の步兵はと見ると、恐ろしく思ひ込んだ顏附きをして、速步で追つて居る。こんな風に繪で以て勝利を豫言するの當不當、また賢不賢は疑ひを容れ得ることであらう。だが、聞けばかくする習慣は舊い習慣で、誰れもが共同に抱いて居る希望を、かく想像的に實現するのは目出度い事と思はれて居るのであると。兎に角、こんな繪に別に人を欺かうといふ計畫があるのでは無いので、繪はただ、人民一般の勇氣を支へる役に立つので、神も快よく見そなはせ給ふ譯のものなのである。

初めのほど出た繪のうちで、それが今や氣味の惡るい位、實現せられて居るのがある。支那での幾多の戰勝も同樣に豫表されたのであつた。その戰勝は繪師の信念を十分に是認した。……今日戰爭繪は引き續いて增加して居るが、特性は變つて居る。寫眞の假借無き眞實と戰爭通信員のスケッチとが事實の鮮かさ、烈しさを齎らして藝術家の想像力を助けて居る。見越して書いた繪にはあどけ無い、そして、芝居じみた處があつたが、刻下の繪には非常に悲劇的な現實が――一日一日、層一層、悲慘となりつつある現實が――現されて居る。今、この文を書いて居るまでに、日本はただの一度の戰役にも敗北をして居らぬ。が、その戰勝のうち高價な犧牲を拂つて得られたものが少からぬのである。

戰爭が鼓吹した意匠の裝飾を有つた種種樣樣な品物――櫛、衿止、扇、胸針、名刺入、財布といつたやうな品物――これをその十が一を數へ立てるのに一卷の書物が要るであらう。鮨包菓子や砂糖菓子にも海軍か陸軍かの模樣が捺してあり、商店の硝子窓又は紙貼り窓には――看板は云ふに及ばずで――日本の勝利の繪がそれに描いてある。夜になると商店の提燈が、その艦隊と陸軍とに對する國民の自負心を聲明する。そして、透し繪や玩具提燈の新奇な模樣に就いて書けば一章全體を容易に充たすことが出來よう。その燈籠自らの炎が生ずる氣流で廻はる、新しい廻り燈籠が大變に流行つて來た。その廻り燈籠には露

軍の防禦陣地を、日本の歩兵隊が襲撃して居る處が描いてあつて、燈籠の透し繪が廻はる時に絶えず鮮かな閃きをさすやうに、その色紙に開けてある穴が、砲丸の炸裂と機關銃の一齊射撃とを思はせる。

戰爭が鼓吹した藝術衝動が、西洋人の經驗には全然馴染みの無い方面に、――例を擧ぐれば、婦人の髪飾や衣服の材料の製造に　少々示現されて居る。戰爭畫の裝飾のある反物は實際流行になつて居るのである、　殊に下著にする縮緬と、羽織や袖用の紋模様の絹の裏地がさうである。それよりももつと注目すべきは新奇な髪留めである。髪留めと私のいふのは、屈り易い金屬で造つた、日本でカンザシと云うて居る二叉の長い飾り物で、これにはそれを頭にする人の年齢に應じて多少飾りがしてあるのである。（若い娘が著ける簪は非常に裝飾的なもので、年老けた女の著けるのは無裝飾か、又は裝飾があつても珊瑚か寶石の珠一つだけてある）其新奇な簪は記念用のものだと謂つてもよからう。交叉した日英國旗がその飾りとなつて居るのは日英同盟を祝したものである。もう一つは士官の帽と劍とが飾りになつて居る。一番いいのは戰鬪艦の小さな小さな金屬の模型が上に載つてゐるものである。此戰鬪艦簪は單に、風變りな品といふのでは無い。實際に美しい！

豫想されたであらうやうに、今年の手拭の模様の中で、陸海軍に關した題目が主要な位

置を占めて居る。海軍の勝利を祝した手拭模様は特に上出來であつた。模樣は大抵紺地に白てか、白地に黒てかてある。一番いいものの一つは――これは紺と白とのであるが――沈沒した鋼鐵艦の檣頭を飛び廻つて居る、一群の海鷗が現してあるだけで、遙か遠くに水平線に沈まんとして居る日本の軍艦の横面の輪廓が見せてある。……この圖案て、また他の多くの圖案て、殊に自分が感心したことは、日本の藝術家が、近代の戰艦の特徴を――その恰好の力强い意地惡るげな線を――甲蟲か蟹かの特殊な性質を我我の爲めに捉へたてあらうと同樣に、巧に捉へて居る其斬新な方法てあつた。かかる鐵の怪物の容貌が與へる眞の印象を――尋常普通な描寫手段では現すに甚だ困難な、大いさと力と威嚇との漠たる印象を――一瞥して傳へるだけの誇張が、その線には爲されて居るのである。

この種の藝術的素畫て飾られて居る手拭のほかに、滑稽な戰爭繪――見てをかしくはあるが惡意は無いポンチ畫或は諷刺畫――のあるいろんな種類の手拭が賣り物とされて居る。旅順口の艦隊を始めて攻擊した時に、露軍の士官が幾人か、日本がその先手の攻擊を敢てしようとは夢にも思はずに、大連の芝居を見に行つて居たが、これは世人は記憶して居るてあらう。この事件が手拭の圖案の題目とされて居る。手拭の一方の端には、舞曲の踊子のクルクル舞を愉快さうに見入つて居る露西亞人數名の顏の滑稽な素畫がある。他の一端

には、港へ歸つて來て、自分達の戰艦の帆柱だけが、水面に見えて居るのを見て居るその司令官共の顏の素畫があるのである。もう一つの手拭を見ると、——外科醫者の家の前で——銘銘の喉に刺さつて居る種種な銃劍や、軍刀や、ピストルや、小銃を取つて貰はうといふので順番を待つて居る——魚の行列が描いてある。今一つの手拭の繪は、魚形水雷が與へた、沈沒してゐる巡洋艦の船腹の大穴を、素敵に大きな蟲眼鏡で檢べて居る露西亞の潛水夫を現して居る。こんな繪の横には、滑稽な歌か物語かが、簡潔な文句で、刷つてあるのである。

あの三井大商店は、こんな圖案の一番いいのを市場へ出したが、その上またフクサといふ、戰爭の美しい記念品を製造した。（フクサといふは或る特別な祝ひ事の折に友人へ送る贈り物へ掛ける裝飾的な絹の蔽ひ物、若しくは包み物で、受けた人はその贈り物だけ受取つてこれは返却するのである）これは最も重い最も高價な絹で出來て居て、適切な裝飾のある包みの中に收められて居る。或る袱紗には全速力を出して居る、日進、春日兩巡洋艦の著色畫がある。それから、もう一つの袱紗には、美しい漢字で、宣戰の詔勅の全文が刷つてある。

だが此方面の製品のうちで見た一番奇妙な物は女の赤ん坊用の絹著物であつた。紋模樣

が織り出してある品物で、少し離れて眺めると、種種な色合が、また同じ色でも濃淡の度を異にした種種な色合が、巧妙に竝置されて居るが爲めに、何んとも言へぬほどに綺麗てある。それをよく近寄つて眺めて見るといふと、この巧妙な圖案は全部戰爭畫を組み合せて造り爲してあることが判るのである。否、むしろ、繪の斷片を交ぜ合せて一つの驚歎すべき合成物を爲して居るといつた方がよからう。即ち海戰とか、燃えて居る戰艦とか、爆發して居る敷設水雷とか、攻擊に向ふ水雷艇とか、日本步兵隊に擊退せられるコサック兵の襲擊とか、陣地に突入する砲兵隊とか、要塞の強襲とか、霧の中を進軍する兵隊の長い行列とかがあるのである。卽ち血の色、焰の色もあれば、朝靄の色合、夕燒けの色合もあり、眞晝の空の青もあれば、星のきらめく夜の紫もあり、海の灰色と、野畠の綠とがあり――實に驚歎すべき！物である。……陸海軍士官の子供なら、こんな著物を著せたとても、さして不都合なことはあるまいと想ふ。でも――何とも云ひやうの無い、物の哀れさ！を感ずることである。

戰爭の玩具は無數てある。他に比して一層注目すべきもの三四だけ自分は記載を企て得られよう。

日本の子供は種種な骨牌遊びをする。古いのもあり、餘程新しいのもある。例を擧ぐれば、歌の骨牌遊びがある。これは牌一枚一枚に、一つの歌の本文または一つの歌の一部分が、書いてある一組の骨牌でする遊戲で、遊戲者は其一組の歌のどんな引用句でも、その作者の名前を記憶して居ることが出來なければならぬ。それから地理に關した骨牌の競技がある。牌一枚一枚に、有名な古跡や町やお寺の名前が、或はまたそんな處の一寸した繪が、書いてあるが、遊戲者はそれに書いてある場處が何處の縣、何處の國にあるか記憶して居ることが出來なければならぬ。此方面での最近の斬新な品は、露西亞の戰艦の繪のある一組の骨牌で、遊戲者は、書いてある名前の軍艦一艘一艘に就いて、それがどうなったか――沈沒したか、戰鬪力を失つたか、或は旅順口に閉ぢこめられて居るか――言ふことが出來なければならぬ。

も一つ別な骨牌遊戲で、その骨牌に日露兩國の戰鬪艦、巡洋艦及び水雷艇が書き現してあるのがある。この勝負に勝つた方は、自分の方へ取つた骨牌を引き裂いて、その『捕獲艦』を破壞してしまふ。然し店にはあらゆる種類の軍艦を幾包みも仕入れて有つて居る。それで一方の國の水雷、驅逐艦或は巡洋艦が悉く戰鬪力を失つた場合には、敗けた方は新艦を外國から買ひ求めることが出來るのである。水雷艇一艘約四分の一ペニイ。一ペニイ

なら五艘買へる。

玩具店は戰鬪艦の模型――木で造つたの、土で造つたの、陶器の、鉛の、錫の――色んな大いさの、色んな値段の――で一杯である。ゼンマイ仕掛けで動く大きいのの中に、敷島だの、富士だの、三笠だのと、日本の戰鬪艦の名の附いたのがある。日本の水雷艇が露西亞の軍艦を沈沒させるやうに出來て居る機械仕掛けの玩具がある。此種類の玩具の廉價なもののうちに、海軍の戰爭を現すに使ふ色砂入りの箱がある。子供は波に似るやうにその砂を敷きならべる。そして砂箱一つ每に鉛で造つた小さな船での二艦隊を貰つて吳れる。日本の船は白で、露西亞の船は黑である。水雷の爆發は、小さく切つた朱色の紙片を、その砂の中へたてて象どることにしてある。

非常に貧乏な階級の子供等は手製で玩具を造る。子供に與ふべき玩具の値段と性質とを極めたあの古昔の封建時代の法律（キグモア教授の飜譯がある）が、今此子供等が現すその小器用さを發達せしめるに、與つて力があつたのではなからうかと、自分は怪しんで居る次第である。つい此間自分の近處で、一群れの子供が、木切れと古釘とで卽製した艦隊でもつて、旅順口の包圍の眞似遊びをして居るのを見た。水のはつてある盥が旅順口にな

つて居るのであつた。戰闘艦は、帆柱のつもりに箸が突きたててあり、煙突のつもりに紙を卷いたものがたててある、板切れで象どつてあつた。適當に色で染めてある小さな旗が糊てその帆柱にくつつけてあつた。幾つかの小さな細い木片、その一一に短かい太い釘をたてて煙突と見せてあるのが、水雷艇と想像されて居た。定置の敷設水雷は、各〻長い釘が差し込んである、小さな四角な木切れで現してあつて、この小さな物を、釘の頭を下にして水の中へ落すと、長い間妙なピョコピョコした運動を續けるのである。他の四角な木で、短かい釘がかたまつて突きさしてあるのが、浮游水雷になつて居つて、模擬の小さな幾艘かの戰闘艦が、絲で、浮游水雷を捜索するやうになつて居つた。日本の新聞の挿繪が、戰爭の事件を可なり正確に、子供に想像させるのに役立つたのであるといふことは疑ふべくも無い。

　子供の海軍帽は固よりのこと、戰前よりか餘計に流行つて來た。光つた金屬の漢字で、戰闘艦の名や、或はニッポンテイコク（日本帝國）といふ語を——水兵の帽に附いてゐる文字のやうに列べて——著けてある帽もある。處が、或る帽子には、船の名が英字で出て居る——YASHIMA とか、FUJI とかいつた風に。

殆んど云ひ忘れさうであつたが、戰線へ召し寄せられる兵卒の大部分は、生きて歸る期待は抱いて居ないのであるが、その兵卒も亦遊戲衝動を有つて居るのである。彼等の願ふのは陛下の爲め、國家の爲めに死ぬる者は凡て、其處へ寄り集まるものと信ぜられて居る、セウコンシヤ（招魂社）で記憶せられること、ただそれだけである。戰場への途中、此處の町外づれへ臨時滯在して居た兵士どもは、近處の子供達と戰爭ごつこをする閑があつた。（どんな時でも日本の兵卒は子供に甚だ深切で、この邊の子供は、兵卒と一緒に行進をし、一緒に軍歌を歌ひ、そしてどんな眞面目な士官でも子供の敬禮に應ずるものと確信して正式に敬禮する）滯在して居た最終の聯隊が出て行く時に、お別れの喝采を停車場でしに集つた子供等へ玩具を兵隊が分配して吳れた。女の子へは、飾りに陸軍の徽號の附いて居る簪を、男の子へは木造の步兵や錫製の砲兵を吳れた。一番奇妙な贈り物は、『歸つて來れば本當のを持つて來て上げませう』といふ、冗談半分の約束をして吳れた、土細工の小さな、露西亞兵の首であつた。頭の頂きに絲金（いとがね）の小さな輪があつて、それへ護謨の絲をくつつけることの出來るものである。日清戰爭の時分には、非常に長い辮髮のある土細工の小さな、支那人の頭の模型が流行のおもちやであつた。

今度の戰爭はまた、トコニハといふあの美妙な品物の種種樣樣な新意匠を思ひつかせた。我が讀者のうちには、トコニハ卽ち「床庭」とはどんなものか知つて居らるる人は多くはない。これは庭園を極はめて縮小したもので――二尺平方以內位のもので――瀨戶物又は他の材料の裝飾的な淺い鉢の中にしつらへ、裝飾のつもりで客間の床の上に置くものである。それには小さな池があり、支那型の、背の曲つた橋の架かつた小流があり、森を爲して神社の模型を覆ひかげらして居る、一寸法師的な木が植わつて居り、土燒きの石燈籠の模造があり、草葺き田舍屋の小村の觀すらもあらう。床庭が餘りに小さくない場合には、その池に本當の魚が泳いで居たり、築山の間を手飼ひの龜が這つて居たりするのを見ることも出來よう。時に、その床庭が蓬萊と龍宮とを現して居ることがある。

今、流行つて來て居る新奇な種類が二つある。一つはその港と要塞とを示した旅順口の模型で、それを見せるのに使ふ材料と一緒に、閉ぢこめられて居る艦隊と、封鎖して居る艦隊とを現す小さな小さな軍艦を、どういふ風に置いたらいいか、その小さな圖面を賣つて吳れるのである。も一つの床庭は、山脈や川や森のある朝鮮か支那かの風景で、澤山の玩具の兵卒――騎兵だの、步兵だの、砲兵だの――あらゆる攻擊防禦の姿勢の兵卒で、戰爭をして居るといふ風に見えるやうに造つてある。小さな留針ほどの大いさの大砲が密に

置かれて居る土燒きの微小な要塞が高みの陣地を占めて居る。適當に排列すると、見る眼にはパノラマの觀を呈する。前景の兵卒は長さ一寸位、少し遠くのはその半分位の長さ、山の上のは蠅より大きくは無い。

だが、これまで造られた此種のもので目立つて最も斬新なのは、銀座の或る有名な店で近頃陳列した一種のトコニハである。カイテイノイッケン（海底の一見）といふ題の書いてある貼り札で十分其意匠は判つた。此展覽物のはいつて居るスイボン卽ち『水盆』は海底に似るやうに半ば岩と砂とで充たされて居つて、前景に小さな魚が泳いで居るやうに見せてあつた。少し後ろの方に、高みの上に、龍王の娘の乙姫が多勢の御供の少女に取り圍まれて、海軍の軍服を著て互に握手して居る二人の男――戰爭で死んだ二人の勇士――マカロフ提督と廣瀨中佐――を、幽かな微笑を顏に浮かべて、じつと見て居るのであつた。……此兩人は生前互に尊敬し合つて居たのであるから、靈界での二人の會合をかく現すといふのは面白い思ひ付きであつたのである。

海軍中佐廣瀨武夫といふ名は、恐らく英米の讀者には馴染みが無からうが、氏は日本の國民的勇士の一人に當然になつて居る。三月の二十七日、旅順港口第二回閉塞企畫の際、

同僚を――以前に氏の死を救つたことのある同僚を――助けんとして居る間に殺された。廣瀨は五年間公使館附海軍武官としてセント・ピイタアスブルグに居て、露西亞の陸海軍社會に幾多の友人を作つて居たのであつた。子供の時分からして其生涯は勉强と義務とに委ねられてあつて、氏の性質には一點利己的な處が無かつたと一般に云はれて居る。その同僚士官の多數の人と違つて、いつ何ん時國家の爲めに生命を棄てよ、と云はれるかも知れぬ者は結婚する道德的權利が無い、といふ意見を持して結婚せずに居た。それに就つたとして知られて居る唯一の娛樂は身體の鍊磨で、日本中で一番上手な柔術家の一人と認められて居つた。氏の靈に對して人の拂ふ尊敬は、三十六歲で遂げたその勇壯な死の爲めといふよりも、寧ろその一生の勇壯な克己の爲めであつたのである。

今や氏の肖像畫は幾千の家庭に揭げられ、その名は如何なる田舍村でも口にせられて居る。その名はまた萬千といふ數で賣られ行く樣樣な記念品の製造で披露されて居る。例を擧ぐれば、キネンボタン卽ち『記念釦』といふカウス・ボタンに新奇流行のがある。其ボタンは兩方とも、シチシヤウハウコク（七生報國）といふ銘と共に、中佐の微小の肖像畫がついて居るのである。廣瀨は、義務に對するその禁慾的な獻身を非議した友人に向つて、後醍醐帝の爲めに生命を棄てる前に、七たび生れ代つて君公の爲めに死にたいと述べた楠

正成のあの有名な言葉を毎度引用したと記されて居る。

　然し廣瀬の靈に對して拂はれて居る最高の榮譽は、嘗ては西洋でも、希臘或は羅馬の愛國的勇士がその國人一般の愛を受けて不朽の地位へ高められ得た時は、有り得たが、今では東洋に於てのみ可能なる榮譽である。……氏の肖像が飾りになつて居る瀬戸物の盃が出來て居て、その肖像の下に金の表意文字で、グンシンヒロセチユウサといふ記名がしてある。グンといふ字は戰といふ意味、シンといふ字は――場合によつて『デイヴス』といふ意にも『デウス』といふ意にも用ひられるが――神（ゴッド）といふ意味である。この漢字の句を日本風に讀むと、イクサノカミである。勇敢な精神は絶滅はせぬ、立派に費やした生涯は無駄にはすたらぬ、勇壯な行爲は空にはならぬ、かう信じて居る幾千萬の人達に、中佐の此嚴正勇壯な靈が眞に神と拜まれて居るかどうか、これは私は分らぬ。然し、兎も角も、人間の愛情と感恩とはこれ以上に進むことは出來ぬので、舊日本は、その爲めに死ぬる甲斐のある榮譽をば、今もなほ與へ得るのであると承認しなければならぬのである。

　子供の學校はどの學校でも、其處の男女兒童は、行進曲になつて居る廣瀬中佐の歌を今歌つて居る。歌の文句と譜とは小さな本で出版になつて居て、その本の表紙にこの死んだ中佐の肖像畫が載つて居る。到る處で、そしてその日のうちのどんな時刻にも、其歌を人が歌

つて居るのがきこえる。

一言一行潔よく、日本帝國軍人の、鑑を人に示したる、廣瀨中佐は死したるか？
死すとも死せぬ魂は、七たび此世に生れ來て、國の恩に報いんと、歌ひし中佐は死したるか？
我等は神州男兒なり、汚れし露兵の彈丸に、あたるものかと壯語せし、ますら武夫は死したるか？
名譽の戰死、不朽の名、赤心とどめて千歳に、軍の神と仰がるる、廣瀨中佐はなほ死せず。

西洋の最も强大な一國を相手として、自國の存亡に關する戰爭をしながら、この不思議な人民の嬉嬉たる自信を見――その指導者の智とその軍隊の勇とに對するその至上の信賴を見――敵の過失を嘲弄するに當つての、その上機嫌な諷刺を見――刻下の世界震盪的なる事件のうちにあつて、歌舞を見て感ずると同一樣な樂しみを感じ得る、その不思議な度量を見ると――誰れしもかう訊ねたくなる。「國民的敗北をしたなら、その精神上の結果

はどうてあらう」と。……思ふに、それは事情如何によることとてあらう。クロバトキンが日本に侵入するといふ、その輕卒な威嚇を實行し得るなら、日本國民は恐らく擧つて起つてあらう。然しさうで無いなら、どんな大不幸を知つても雄雄しく堪へ忍ぶてあらう。いつからと知れぬ太古からして、日本は異變の頻繁な國であつた。一瞬時にして幾多の都市を破壞する地震があり、海岸地方の人口悉くを一掃し去る長さ二百哩の海嘯があり、立派に耕作された田畠の幾百里を浸す洪水があり、幾州を埋沒する噴火があつた。こんな災害が此人種を鍛錬して甘從と忍耐とを養ひ來たつて居る。そしてまた戰爭のあらゆる不幸を勇ましく堪へ忍ぶ訓練も亦十分に爲し來たつて居る。これまで日本と最も近く接觸し來たつて居る外國國民にすらも、日本の度量は推量されないままで居た。攻擊を耐へ忍ぶその力は、攻擊に反抗するその力よりも或は遙か勝さつて居るのかも知れぬ。

あとがき

である。

『骨董』も『怪談』も原著者ヘルンが命名して、その漢字も同時にのせた原名そのままである。

『骨董』は明治三十四年、書肆マクミランからロンドンとニューヨークとで同時に出版された。マクミランの方でヘルンが送つた墓地の寫眞と「獏」の繪の外に、當時在英の日本畫家伊藤氏、片岡氏などの繪を多く入れたので、ヘルンは甚だ喜ばなかつたと云はれる。

この集中には以前雜誌に掲載されたものは一篇もなく、何れも始めてこの單行本に於て發表されたものばかりである。

「古い物語」中、出所の今分つて居るものでは、「幽靈瀧」と「忠五郎のはなし」は、「文藝くらぶ」第七卷中の諸國奇談のうち。「茶碗の中」「生靈」「蠅のはなし」(大谷氏譯)は「新著聞集」、「常識」は「宇治拾遺物語」、「おかめのはなし」は「新選百物語」から取つてある。材料はこれによつたと云ふだけで、その實殆んど全くこれを改造して居る事は云ふまでもない。

「茶碗の中」の如きも原文は一ページにも足らぬ筋書のやうだが、纒まつた話であるのを、ヘルンはあの通り、作り直した。「おかめのはなし」の女主人公も原文によれば、妹

妬深い怒り易い、生前より死後に到るまで、夫を苦しめ通した悪女の標本のやうな女て、原作者はひどくこれを憎んて居る。その題も「嫉妬にまさる梵字の功力」と云ふ佛教經文の有難さの宣傳めいて居るが、ヘルンの英譯の讀者は、この若くして死んだ不幸なおかめに同情をこそすれ、どうして憎めよう。

「或女の日記」は、その記者であつた不幸な婦人の亡くなつたあとへ行つた後妻が、以前小泉家の奉公人であつたため、先妻の針箱で發見したこの日記を小泉夫人に示したのであつた。のちヘルンは夫人と共にこの人の墓に詣でた。もとより原日本文のたどたどしいものである事は、所々にある文章、歌、發句で分るが、ヘルンに取つてこの日記が興味のあるものであつたと同じく、西洋の讀者にも深い感動を與へて、本當の「ヒユマン・ドキユメント」と云はれたものであつた。原英文には脚註非常に多く、「三々九度」「相合傘」等の說明まで詳しく出て居るが、日本の讀者に必要でないものは多く省略した。

「露の一滴」は佛教の世界觀、「默想」は母性愛に關する考察、「眞夜中」は死に關する考察。「餓鬼」「草雲雀」（大谷氏譯）「病理上の事」の諸篇はヘルンの哲學に深い根底を有せるヘルン獨歩の小品、世界の何人もこの人の塁を摩するものはない

「尋常の事」に出て居る老僧は、當時牛込區富久町八番地臨濟宗妙心寺派道林寺の住職

てあつた丹羽雙明師の話によつたものである。この人當時七十歳前後、その閲歴は小說のやうであつた。卽ち文久三年二月師が京都等持院の僧であつた時、浪士、伊豫の人三輪田綱一郎（女子敎育家三輪田眞佐子の夫）、江戸の人師岡節齋、會津の人大庭恭平等、平田篤胤の多くの門人と共に數十人相謀つて、その寺院に押入り、そこに安置してあつた足利尊氏、義詮、義滿の木像の首を斬つて三條大橋に梟け、同時に勤王の宣言を出すと云ふ事件が起つた。そのためかどうか、師は等持院を去り還俗して裁判官となつた。東京で「高橋お傳」の裁判をもした。その後又僧籍に戻つて、終に道林寺の住職となつたが、師の前に中原南天棒師が、この寺の住職であつた。雙明師は學者であり、又詩人であつた。詩は淡窓門下の第一人であつたと云はれる。大正元年八月八日、八十三歳で遷化した。この雙明師から材料を得たと思はれるもの、ヘルンの富久町時代の作の所々に散見する。

「夢を食ふもの」の記事は、夫人が上野帝室博物館で、偶然「獏」と云ふ字のある三代將軍家光の枕と云ふものを見て歸つて、獏の夢を食ふ話、こはい夢を見たら獏に食はせる事、或は出雲の傳說によつて南天に喰べて貰ふ話などをしたのが發端であつた。しかしこの篇の初めにある魔の記事は夫人の記憶によれば、當時何かと材料を提供してくれた出雲の人、折戸德三郎（今は故人）と云ふ遞信省の官吏など務めた人から得たものであつた。

『怪談』は明治三十六年四月、米國では書肆ハウトン・ミフリン、英國では書肆キーガン・パウル・トレンチ、兩方で出版になつたもの。そのうちの二篇「耳無芳一の話」及び「安藝之助の夢」は少し以前雜誌「大西洋評論」に掲載された。

「耳無芳一の話」(戸川氏譯)は「臥遊奇談」卷二「琵琶の祕曲、幽靈を泣かしむ」と題するものによつた。この種の話は「骨董」のうちの「おかめのはなし」と同じく佛教殊に經文の功德を宣傳したもので、日本では時々見られる物語の一つであるが、ヘルンの靈筆によつて非常に鮮やかなものになつて居る

「貉」(戸川氏譯)は「百物語」第三十三席御山苔松と云ふ人の話によつたもの。原文では貉でなく、河獺になつて居る。その他の點でも違つた處はある。

「葬られたる祕密」(戸川氏譯)は「新選百物語」によつたもの、原文ではその題に「紫雲たなびく密夫の玉章」とある通り、數十通の密書をかくしてあつた事になつて居るが、英譯では只一通になつて居る。

「姥櫻」「十六日櫻」共に「文藝くらぶ」第七卷諸國奇談から取つたもの。「お貞のはなし」「鏡と鐘」は「夜窻鬼談」から取つてあるが、前者は、二三の點を除けば殆んど別

のものとなつて居る。たとへば、原漢文では杏生と阿貞の關係は、初めは客と妓であり、後には旦那と思ひものであるが、ヘルンの英譯では、長生とお貞の關係ははるかに美しいものとなつて居る。

「食人鬼」は「佛教百科全書」、「ろくろ首」は「怪物輿論」、「青柳のはなし」は「玉すだれ」より取つてある。「雪女」はヘルンの序文にある通り、小泉家へ出入した東京府西多摩郡調布村の農夫から聞いたものであつた。

私はここにヘルンが、これ等の材料を如何に改造し「換骨奪胎」して居るかの一例として「古今著聞集」にある「をしどり」の原文を轉載して讀者の參考に資したい。

> 陸奥に田村の郷の住人、馬允なにがしとかや云ふ男鷹を使ひけるが、鳥を得ずして空しく歸りけるに、赤沼と云ふ所にをしどり一つがひゐたりけるを、くるりをもちて射たりければ過たず雄鳥に中りてけり。そのをしどりをやがてそこにてとりかひて、ゑがらをはゑぶくろに入れて家に歸りぬ。その次の夜の夢にいとなまめきたる女の小さやかなる、枕に來てさめざめと泣きゐたり。あやしくて何人のかくは泣くぞと問ひければ、昨日赤沼にて、させるあやまりも侍らぬに年比の男を殺し給へる、悲しびに堪へずして參りて憂へ申すなり　この思ひによりて我身もながらへ侍るまじきなりとて、一首の歌をとなへて泣く泣く去りにけり。

目くるればさそひしものをあ、ぬたのよこもかくれのひたりねぞうき

あはれに不思議に思ふ程に中一日ありて後ゑがらを見ければ、ゑぶくろにをしの雌鳥の腹をおのがはしにて貫きて死にてありけり。これを見てこの馬允やがて髻を切りて出家してけり。この所は前刑部大輔仲能朝臣が領になん侍るなる。

随筆のうち、「力ばかり」はその頃、富久町にその名の白痴の少年がゐたが、その死後、小泉家へ出入の女髪結が来て話した通りを、薪屋の老人の話に擬して書いたもの。生れかはりと云ふ考は色々の形式となつて、日本人のうちに生きて居る事は事實である。

「日廻り」はヘルンの傳記者に取つて有難い參考になる。

「蓬萊」は、谷中の美術院の展覽會で買つた蓬萊と題する掛物を眺めながらなした述懐である。

『天の河縁起そのほか』中の「小說よりも奇」は、ヘルンの草稿には、A Forgiveness（罪を赦す）とあるが、後改めたものらしく察せられる。佛領西印度マルティニーク島追懐の記事の一つ。サンピエールを發して島を横斷したのであつた。フローラン夫人の話はヘルンが夫人にも話した事のある事實談。

最後に、ヘルンの最初の作『異文學遺聞』より最後の作『天の河緣起そのほか』に到るまで、到る所に散在せるが、殊に『骨董』『怪談』に到つて、その絕頂に達して居る怪談について一言したい。

これ等の怪談の或者は、單に超自然的であり、不思議であると云ふ理由で、（たとへば「ろくろ首」の如き）、或者は輪廻の說から來て居るので、（「雉子のはなし」の如き）、又、或者は人間の魂が蝶になつたり、樹木の魂が人間になつたりして（「安藝之助の夢」「靑柳のはなし」の如き）ヘルンの所謂萬有は一と云ふ思想を表はしてゐるので、それぞれヘルンの興味をそそつた。しかし、日本の怪談に最も多いから、ヘルンが最も多く取つたものは、執念、念力、殊に最後の一念から起つた怪談である。ヘルンはこれ等の怪談を以て滿足せず、更にそれを說明するために、「術數」の一篇を書いて居る。ヘルンに隨へば、「異常の念力をもつて死ぬ人、殊にその念力をもちながら自殺をする人の魂は、超自然的な力を有する」事になると云ふのが日本人の考方である。卑近な例を見ても、或病にかかつて死んだ人は、その病氣を直す力のある神になる事がある。その理由は、その人の最後の一念はその病を直す事であつたからである。

その外これ等の怪談に表はれて居る民間信仰や俗説に對してヘルンは何と考へたであらうか。ヘルンの言を借りて云へば「凡て迷信であれ何であれ、宗教信仰と云ふ一般思想には愚かな、をかしい分子などは少しもなく、何れも凡て人間が絶對無限の方へ進まうとする眞面目な熱心な向上心を表はしたもの」である。それでヘルンは敬虔なる態度を以て、これを取扱つて、その背後にある美はしい思想、不思議な精神を認めて居る。

それからヘルンは「小説に於ける超自然の價値」と云ふ題の講義のうちにかう云つて居る。「……凡て大傑作にはそのうちに何か幽靈的な分子がある。……詩人や小説家にして時々讀者に多少怪談的興味を與ふる事のできない人は、決して眞に偉大なる作者でも偉大なる思想家でもない。……」

*

なほ「怪談」が出版になつた時、つぎの序文が添へてあつた。ハウトン書肆の顧問文士ヴァインスレット氏のものかと思はれるが署名はない。

ラフカディオ・ヘルンのいみじき日本研究の新しい二の書物が、偶然に世界が日本戦爭最近行動の消息を、緊張せる期待をもつて待つて居る丁度その月に出版されたことは、まはどい不思議な廻り合せである。ロシヤと日本の現在の戦爭の結果はどうなつても、西洋の武器で武装し、西洋の兵法で訓練をした東洋の一國民が、西洋の一大強國に對して戦場に争つて居ると云ふ事實に意味があらう。こんな戦爭が世界の文明に及ぼす結果を預言する事は、如何に聡明な人にもできない。たゞ補をできる事は、目下の戦爭に關係ある複雑なる諸問題の單なる政治的及び統計的の研究によらないで、むしろこの兩國民の心理を基として、そこに望みと恐れを置いて、できるだけ聡明に、この戦爭に從事せる兩國民の國民性を考察する事だけである。ロシヤ人は數十年に亙りて、歐洲の藝術を心醉させた文學上の代辯者をもつてゐた。これに反して日本人はツルゲニエフやトルストイのやうな、そんな國民的な、そして世界的に認められた人物をもつてゐない。

東洋の如何なる作家のうちにも、ラフカディオ・ヘルンが自家の言葉に日本を翻譯する際に用ゐたよりも、もつと完全な天賦の洞察と同情をもつた、代辯を有した國民がいつかあつたとは思はれない。ヘルンが日本に於ける長い滯在、鋭敏性に富んだ心、詩的想像力、及び驚くべく透明な文體は、文學的事業のうちの最も困難に注意を要するものに彼を適任ならしめる。彼は驚くべきものを目を見て居る、それを驚くべき文體で語つて居る。現代日本の生活の如何なる點でも、ロシヤとの現下の戦爭に關係ある戦爭上、政治上及び軍事上の問題のどの分子と雖も、彼がアメリカの讀者を滿はせた著書のうちのどの書物かに同感にしてないものは一つもない。

ヘルンは「怪談」の特色を「不思議な事の研究と物語」として居る。この書物から想起される事は非常に多い。しかしその大多數はこの不思議と云ふ事實で始まり、又終るものであらう。目次で題名を讀んだだけでも、どこか遠く離れた處でつかれた梵鐘を聞くやうである。物語の或ものは餘程古いものであるが、それでも目下日本の巡洋艦の甲板に群がつて居る小さい人々の魂と心そのものを照らして居るやうである。しかし物語の多數は、婦人小兒に關して居る、――それは世界で最も良いお伽話が織出されたやさしい材料である。この日本の乙女と妻と、鋭い眼の黑い髮の少女と少年、これ等も亦々不思議である。彼等は私共と似て居ると共に、又似てゐない、それから空も丘も花も皆私共のと違つて居る。それでも私共に取つては實在でない世界をやさしく透明に象徴的に描寫する事に於て、現代作者のうちの殆んど唯一人であるヘルン氏の魔法のやうな文體によつて、精神的實在と云ふ忘れられない感じを與へられる。

一九〇三年二月「大西洋評論」にパウル・エルマ・モーア寄稿の洞察のある美しき論文に於て、ヘルン氏の魔術の祕訣は、彼の技術に『三種の相集まれるもの』があると云ふ事實によると云つてある。『印度の宗教的本能――特に佛教――それを歷史が日本の美感に植ゑつけたが、それに對するにヘルンは西洋の科學の解釋精神を以てして居る。それでこの三つのあり來りのものは、彼の心の特別の同情によつて融合されて、一つの豐富な珍奇なもの――以前に知られない一種の心理的感情を文學の方面に紹介した事になる程、それ程稀れなものになつて居る』モーア氏の論文はヘルン氏に認められ、又感謝されて、甚だ高い賞讚を受けた。それでもしここにそれを轉載

する事ができるものなら、これ等古い日本の新しい物語の最も啓發的な總論になる事であらう。
それ等の物語の正味はモーア氏の云ふ處によれば『印度の物すごき夢と日本の微妙な美と歐洲の假借しない科學とを甚だ不思議に混交したもの』ものである。

大正十五年六月

田部隆次

「天の河緣起そのほか」は千九百五年原著者歿後、米國では書肆ハウトン・ミフリン、英國では書肆コンスタブルから出版されたもので、「天の河緣起」外五篇、そして「日本からの手紙」といふ一文が附錄となつて居る。そのうち「化け物の歌」と「鏡の少女」を除いてあとは全部、以前「大西洋評論」に掲載された。

書名をそれに採り、また卷頭にそれを置いたほどあつて「天の河緣起」がその主要な文たることは言ふまでも無い。これは夫人の談話と、そして天の河の傳說詩歌に關して出來得る限り廣く諸方から蒐めた材料とを、基として書いたものである。文中引用の和歌は原著では歌詞を五行に羅馬字で發音どほりに掲げ、次にその散文譯を載せてあるのであるが、その散文譯をそのまゝ日本語に逐字譯するのは無意義であるから、歌詞だけ、普通に見るやう二行にして書いて置いた。だが原著者が歌に對して加へて居る脚註は、そのまゝ譯してその個處に置いて置いた。殊にその個處に置かずともと思つたもので、書物の體裁上文末へ掲げることにしたのが五六あることを諒知せられたい。

「化け物の歌」は讀んで知られるとほり「狂歌百物語」に據つたものである。引用の歌詞に對しては前文同樣に取扱つた。

「鏡の少女」と「伊藤則助」は、前者は都賀庭鐘著「庭上奇觀垣根草」の第一卷にある「伊藤帶刀中將重衡の姫と冥婚の事」に據つたもの、後者はその第五卷にある「松村兵庫古井の妖鏡を得たる事」に據つたのである。

「日本からの手紙」は千九百四年八月一日東京發信となつて居るが、申すまでも無く、手紙に擬した文で、事實さる人に郵送したものでは無い。

『骨董』のうちの「蠅のはなし」は新著聞集卷五、執心篇第十一のうちにある「亡魂蠅となる」に據つたものである。英文は固よりその逐字譯では無い。

同じく『骨董』のうちの「螢」の文中引用してある和歌俳句には、原文には作者の名が記るして無いのであるが、讀者の知識に資するところがあらうと思つて、譯文にはそれを附記して置いた。

『怪談』のうち、「蝶」の文中に引用してある俳句は、英文では三行に羅馬字で發音どほりに掲げ、次に散文譯を載せ、脚註も加へてあるのであるが、日本の讀者には原句だけで足りると考へたから、譯文では原句だけ、普通するやうに一行にして、掲げることにした。また原文では作者の名が掲げて無いが、自分の調査の屆くかぎり原作家の名を添へて記ることにした。そして譯文の終に原文に對して譯者としての註解を三四序でに添へて

置いた。

尙ほ斷わつて置きたい事は、本書「天の河緣起そのほか」が單行本として初めて、世に現はれた時には、フエリス・グリインスレット氏の序文が添へてあつたのであるが、それは言ふまでも無く、この全集の本文中に加ふべきものでは無いから、省いたことである。だが讀者の參考に資する處もあらうと思ふから左に逐字譯して揭げて置く。

日本では小泉八雲として知られて居るラフカディオ・ヘルンは、千八百五十年六月二十七日にアイオニア群島の一つのリウカディアで生れた。父は英國陸軍に勤めて居た愛蘭土生れの軍醫で、母は希臘人であつた。兩親ともヘルンがまだ子供の時分に死んだので、ヘルンは大叔母に養はれて、僧侶にするつもりの教育を受けた。氏の羅甸の學識と、そして疑も無く氏の微妙な理解力の或物とは、その訓練に負うて居るのである。が然し、僧侶として一生を送るといふ前途は、その官能的な心と熱烈な氣質とは全く背馳したものであることが直ちに發見して、十九の歳に己が運命を開拓すべく亞米利加へ行つた。一時校正係として働いた後、シンシナティで新聞通信員として職を得た。間もなく立身して主筆となり、四五年して『タイムス・デモクラット』の編輯局員に加はるべくニユウオルレアンスに赴いた。此處で千八百八十七年まで暮して、その新聞に奇想的な文や亞

刺比亞風の怪異な文を掲げ、種々な雜誌へ論文やスケッチを寄稿し、小さな珍らしい書物を幾つも出版した。そのうちに『異文學遺聞』とゴォチェの飜譯も含まれてゐる。千八百八十七年の冬、一友に書き送つたやうに、『靈感の蜂蜜を探す小さな文學蜂』なのだから、異國情趣に富んだ國への巡遊を始めた。二ケ年を主として佛領西印度で送り、紐育で或る時期を文學著作に費してから、千八百九十年に或る雜誌へ一聯の文章を送るが爲めに日本に赴いた。その國のその驚くべき人民と、自分の氣分が非常に似て居る爲めに、竟に郷里に在るが如き氣安い氣持を突然感じたらしく思はれる。氏は日本婦人と結婚し、その財産を確實にその家族に讓與し得らるゝやうにと、日本市民權を得、東京帝國大學の教師となつた。そして引續き顯著な書物を幾册も世に出して、西洋世界への、日本の生活と藝術との眞精神の紹介者となつた。そして千九百四年九月の二十六日に心臟痲痺で死んだ。

目今蒐集中の多數の私信を除いては、この書は、雜誌のうちに、もしくは出版しても宜い程に圓熟して居る原稿のうちに、まだ自分で集めずに置いたヘルンの書き物の全部を含んで居る。が然し、『究極の問題』と題した文章は、無瑕なものであり、隨筆として完全なものではあるけれども、原著者は之を未完成だと思つて居た。だから原著者が生きて居たなら、その或る部分は訂正も敷衍もしたことであらう。

がこの一卷がその排列と修正に於て、他に比類を見ざる事、著者の精妙なタッチを缺いで居るに

しても、それにも拘はらず、その最も特徴的な氣質の全部を見せて居り、また、文體に關しても實質に關しても、恐らくはその諸著作のうち最も完成したまた最も有意義なものであらう。

作者としての初年には、ヘルンはその藝術の理想をば非望的なものであるが如くに、特異なものと思つて居たのであつた。八十年代の始に早や、氏はニユウオルレアンスからワシントンの僧エイランド・ボオルに送つた手紙（未發表の）に『古代の愛らしさを愛する者共が、長く胸に抱いて居た夢の——外國の大家を模範とし、北歐語の特徴たるあの力の要素を加へて一層力強くして、或る羅典の文體を英語で實現するといふ多年の夢の——未來の可能を自分に證明して居る。それは如何なる人と雖も完成する希望は抱けないが、一飜譯者と雖も言語の一新建築の大石工へ、自己の石を運ぶことは出來る』と述べて居る。この理想を實現するのにヘルンは間斷なしの骨折をした。氏はフロオベルとかゴオチエとかいふやうな、文體の妙手の著作に對して微細な解剖的な研究を與へ、またその雜多な讀書にも一種特別の注意を拂つて選擇した。前述の友に更に再び書いて居る、『想像力に對して強い印象を與ふることをしない書物は決して一册も讀まぬ。が、斬新な、奇妙な、有力な譬喩を含んで居るものならば、題目の如何に拘はらず、どんな書物でも讀む。空想の土壤が無數の落葉に依つて實際に豐饒にさるゝ時は、言語の花は自づと咲き出る』斯う言つて居る。最後にテクニックの困難にまた、絕大な然し分別のある讀書に加ふるに、創作の長い思惟思案の時間を以てした。その日本の友人の雨森信成に、嘗に文學的作文についてだけでは無く、廣く一般の藝術についての深い說が、それに含まれて居る文句を書き送つた。斯う言つて居る、——

『さて君が書いたスケッチ、若しくは物語について、君がそれに全く不滿足を感ずるのなら、それは恐らくは君が想うて居るものに――表現の不完全に――基くのでは無くて、潛在して居る或る思想或ひは情緒なりが君の心の中で、充分にきつかりと、まだ形を成して居らぬといふ事實に基くのであらうと自分は思ふ。君は或るものを感じて居て、その感情を表現することが出來ないのである――その出來ないといふのは、それが何であるかをまだ十分に君が知つて居ないからのことで、他の原因は無いのである。我々は感じて居るとは知らずに物を感ずるもので、また我々の最も力强い情緒は最も漠とした言ひ述べ難いものである。それはさうしなければならぬ理由のもので、さういふ情緒は感情の祖先傳來の集積であり、その多種多樣は、――一つの上へまた他の一つが重なつて――それをぼやかし、その力は異常に增大させながらも、それを朧にするからである。……無意識な頭腦作業がそんな潛在的感情或ひは思想を開展するに一番好い作業である。ゆつくり構へて幾度も〱その文を書いて居ると、その感情或ひは思想がその過程中に自づと――無意識に――開展することを自分は見て居る。それから又、漠然たるまゝで居るその感情を解剖しようと力めることが時に屢々價値ある事業である。我々の心を動かすものは何であるか、それを正しく理解しようとする努力は時に成功を齎らす。……君が若し何かの感情を――何んでも構はぬ――心の中に强く潛んで居る（一寸入つて來た或る悲しみでも、理由の分らぬ喜びでもいゝ）何かの感情を有つて居るなら、それは表現が出來るものだと確信して宜い。固より、或る種の感情はそれを開展するのは困難である。近日、君と相會ふの日、その思想が明白に頭へ來るまでに數月間自分がそれを書いた一頁

を君に見せよう。……最上の結果が出て來ると、君はそれに驚くに相違無い。我々の最上の作品は無意識から出來て來るからである』

こんな研究と讀書と長時の思索とに依つて、ラフカディオ・ヘルンの散文は、終焉の日まで着々と圓熟して行つた。手際だけを言つても、この一卷はその最も欽賞すべき作品の一であつて、『天の河緣起』の最後の一節の如き、調の高まつた文句の處では、その豐麗な陰鬱な音樂、その深甚な暗示は、最も偉大な英國散文のほか、容易に之に匹敵するものを見出し得ぬものである。

實質に於てもこの一卷は同じく意義に富んだものである。千八百八十四年、氏はその親友の一人へ手紙を書いて、ハアバアト・スペンサアのものを讀んだが爲めに、一切のイズムが心から消え去り、偉大なる疑の漠たる然し萬能な慰藉を得て、理智的に自分の地歩を遂に發見し得たと、言つて居る。だから本書中の『究極の問題』――これは言はゞ、本書の圓和絃を打つて居るものであるが――の一文に於て我々は、スペンサアの哲學と心理學との氏への意味の殆んど抒情詩的な表現を有つて居るのである。それには、英國と佛國との心理學と、佛教と神道との思想との氏獨自の混和があり、氏の著作では、氏自らその書翰の一つに言うて居るやうに、『單に旨く混合して居るのでは無くして、化學元素の如くに絕對的に結合して、或る衝動を以て突進し合うて居る』音調がある。そしてこれに於て氏はその最も深い音を出して居るのである。途方も無く大きな科學界を包んで居る恐怖についての氏の堅實な熟視に於て、古い神話と迷信とを喚び起し復活し、その魔力に依つてあの底知れずの暗黑の上へ、消え失せた幾多の太陽の一點の微光を投ずる氏の力に於て、氏は近代

作家のうち最もリュウクレシャ風な作家であつた。

外貌では、人としてのヘルンは何等人好きのする男では無かつた。氏の日本人友達の一人が千九百五年十月のアトランティック誌に描いた、輪廓のきつかりした氏の肖像では、『晩年には稍や肥滿してゐて、丈が低く、せいぜい五呎、歩く時少々屈み氣味。顏色は少し褐色を帶び、どちらかと云へば毛深い皮膚、細い、尖つた鷲鼻、大きな飛び出た眼、それもその左は盲目で、右は非常な近眼』であつた。

さう書き送つた雨森信成は、人としてのヘルンで無く、天才としてのヘルンの憶ひ出を書いて居る。氏の最後の著作への此の序言を、それで結ぶのは當を得て居るかと思ふ。『初めて氏の宅で一と晩泊つた時に見た生き〳〵とした憶ひ出は、自分は永久に失はぬであらう。自分も亦遲くまで起きて居る習慣なので、その晩床へ入つて本を讀んだ。時計は朝の一時を打つた。が、ヘルンの書齋に明りがして居る。低い、嗄れた咳聲がきこえる。自分は我が友が病氣ではないかと氣遣つた。そこで自分は部屋から出て、友の書齋へ行つた。が然し、若し仕事をして居るなら、邪魔をしたくなかつたから、用心してほんの一寸戸を開けて、覗いて見た。友はその高い机に向つて、鼻を紙に觸れぬ許りにして、切りと書いて居るのが見えた。一枚〳〵と書いて行く。暫くして友は頭を上げた。その時自分は何を眼にしたか！　それは自分が能う知つて居たヘルンでは無く、別なヘルンであつた。その顏は不思議なほど白く、その大きな眼は光つて居つた。まるで何か此世ならぬものに接して居る者の如くであつた。

その平凡らしい顔した男の裡に、精神の火の如き純潔な或る物が燃えて居たのであり、そしてその炎の中に、塵土の裡から生と詩とを呼び出し、人間の思想の最高な題目を捉へる心が住まつて居たのである」

大正十五年六月

大谷正信

第八巻要目索引

Kotto 骨董

Being Japanese Curios, with Sundry Cobwebs. — 雑多な蜘蛛の巣のかかつた日本の珍奇なものども

1) Dedication 獻詞

To Sir Edwin Arnold
in grateful remembrance
of kind words

親切なる言葉の
感謝の記念に
サー・エドウイン・アーノルドへ

2) Contents 本文

Old Stories — 古い物語

I. The Legend of Yurei-Daki. — I. 幽靈瀧の傳說
II. In a Cup of Tea. — II. 茶碗の中
III. Comon Sense. — III. 常識
IV. Ikiryo. — IV. 生靈

V. Shiryo.	V. 死靈
VI. The Story of O-Kamé	VI. おかめのはなし
VI.I Story of a Fly.	VII. 蠅のはなし
VIII. Story of a Pheasant.	VIII. 雉子のはなし
IX. The Story of Chugoro.	IV. 忠五郎のはなし
A Woman's Diary.	或る女の日記
Heiké-Gani.	平家蟹
Fireflies.	螢
A Drop of Dew.	露の一滴
Gaki	餓鬼
A Matter of Custom.	尋常の事
Revery.	默想
Pathological.	病理上の事
In the Dead of the Night.	眞夜中
Kusa-Hibari.	草雲雀
The Eater of Dreams.	夢を食ふもの

Kwaidan 怪談

Stories and Studies of Strange Things.	不思議なことの研究と物語

1) **Prefatory Note　原　序**

2) **Contents　本　文**

Kwaidan　怪　談

The Romance of the Milky Way and other Studies and Stories. 天の河縁起 そのほか

Contents 本文

骨董

大谷正信　蠅のはなし。螢。草雲雀。

田部隆次　幽靈瀧の傳說。茶碗の中。常識。生靈。死靈。おかめのはなし。
雉子のはなし。忠五郞のはなし。或女の日記。平家蟹。露の一滴。
餓鬼。尋常の事。默想。病理上の事。眞夜中。夢を食ふもの。

怪談

戶川明三　耳無芳一の話。貉。葬られたる祕密。

大谷正信　蝶。蚊。蟻。

田部隆次　をしどり。お貞のはなし。姥櫻。術數。鏡と鐘。食人鬼。
ろくろ首。雪女。青柳のはなし。十六日櫻。安藝之助の夢。
力ばか。日廻り。蓬萊。

天の河緣起そのほか

大谷正信　天の河緣起。化け物の歌。『究極の問題』。鏡の少女。
伊藤則助の話。日本からの手紙。

田部隆次　小說よりも奇。

第二回配本

小泉八雲全集第八卷

第一回豫約菊判背革裝 大正十五年八月配本開始 昭和三年一月配本完了

第二回豫約菊判總布裝 昭和四年六月配本開始 昭和五年十一月配本完了

第三回豫約學生版 昭和五年十月配本開始 昭和七年三月配本完了



最初申込金五十錢（これは最後の會費に充當）

豫約者に限り每月一圓五十錢

家庭版（第四回豫約）

昭和十二年一月十一日印刷

昭和十二年一月十五日發行

著作者 小泉八雲全集刊行會代表 田部隆次

刊行者 東京市麴町區三番町一 長谷川巳之吉

刊行所 東京市麴町區三番町一 第一書房 振替東京六四二二三 電話九段二三三四

印刷者 牛込區山吹町一九八 荻原芳雄

（家庭版）小泉八雲全集 全十二卷 內容

第一卷
異文學遺聞。
支那怪談。
チタ。ユーマ。

第二卷
佛領西印度の二年間

第三卷〔上〕
知られぬ日本の面影

第四卷〔下〕
知られぬ日本の面影

第五卷
東の國から。
心。

第六卷
佛の畠の落穗。
異國情趣と囘顧。
日本お伽噺。

第七卷
靈の日本。
影。
日本雜錄。

第八卷
骨董。
怪談。
天の河緣起。

第九卷
神國日本。

第十卷
文學論。

第十一卷
きまぐれ。
クリーオール小品。
神戸クロニクル社說
隨筆八種。

別冊
小泉八雲。